

博 士 論 文

直心影流に関する研究

平成 25 年度

筑波大学大学院人間総合科学研究科体育科学専攻

軽米 克尊

目次

序章.....	6
一、研究の目的	7
二、研究対象と時代設定	9
三、先行研究	13
四、研究方法	25
五、用語について	30
六、文献史料	37
 第一章 直心影流の成立過程と分派	40
第一節 直心影流の伝系と伝承	41
第一項 直心影流の伝系	41
第二項 直心影流の伝書にみられる伝承	42
1. 流派の起源としての神話	42
2. 松本備前守	44
3. 上泉伊勢守～小笠原源信斎	51
4. 神谷伝心斎～長沼四郎左衛門国郷	54
第二節 直心影流の伝系・伝承における問題点	60
第一項 流名と流祖の改変	60
1. 伝系の各流派における流名の変遷	60
2. 各流派の伝書における流祖の相違	64
第二項 後世における神話の付加	66
1. 奥書「鹿島神伝」	63
2. タケミカヅチについての記述	68
第三節 新陰流から真新陰流までの系譜	73
第一項 形の名称からみる流派の系譜	74

1. 新陰流における形の名称	74
2. 真新陰流との比較	77
第二項 新陰流の創始からみる成立過程	79
第四節 直心流から直心影流の成立までの系譜	85
第一項 神谷伝心斎による直心流の創始	86
1. 直心流成立の経緯	86
2. 神谷伝心斎の他流批判	87
第二項 直心正統流から直心影流の成立	95
1. 直心正統流の成立	95
2. 直心影流の成立	99
第五節 分派の発生と伝播	105
第一項 長沼四郎左衛門国郷以降の伝系	105
第二項 長沼派	106
1. 長沼派の発生	106
2. 長沼派の伝播と主な人物	108
第三項 藤川派	111
1. 藤川派の発生	111
2. 藤川派の伝播と主な人物	112
第四項 男谷派	115
1. 男谷派の発生	115
2. 男谷派の伝播と主な人物	118
結節	121
第二章 法定とその修練過程	127
第一節 法定の特徴	128
第一項 法定について	128

1. 法定の成立と構成	128
2. 法定の名称	130
3. 法定修行の用具	132
第二項 形としての法定の特徴	133
1. 呼吸と気.....	133
2. 上半円と下半円.....	143
3. 諸腕	146
第二節 法定の修行過程.....	150
第一項 流派における修行過程の全容.....	150
第二項 法定の修行段階.....	153
第三節 初学の修行	156
第一項 太刀筋の矯正.....	156
1. 竪一文字・横一文字	156
2. 法定の動作に見る太刀筋	158
第二項 身体の矯正	160
第四節 中学の修行	164
第一項 非切	164
1. 非切について	164
2. 法定にみる非切.....	166
第二項 仕懸	167
1. 仕懸について	167
2. 法定における仕懸.....	168
結節.....	170
第三章 十之形としない打ち込み稽古.....	174
第一節 十之形.....	175
第一項 十之形について.....	175

1. 十之形の名称.....	175
2. 十之形の用具.....	177
第二項 十之形の特徴.....	179
1. 十之形の構成.....	179
2. 「曲尺」にみる十之形の特徴.....	187
3. 「圓連 <small>刀連体連</small> 」にみる十之形の特徴.....	188
第二節 直心影流におけるしない打ち込み稽古の導入と特徴.....	192
第一項 直心影流の伝系におけるしない打ち込み稽古の導入.....	192
1. 伝系における道具の導入.....	192
2. 『兵法雑記』にみるしない打ち込み稽古.....	193
第二項 他流からみた直心影流の特徴.....	195
1. 『神道無念流剣術心得書』からみた直心影流.....	195
2. 千葉周作『剣法秘訣』からみた直心影流.....	198
第三節 直心影流の他流試合.....	202
第一項 『大禾一件』にみる鏡新明智流との試合.....	202
1. 大禾伴山・桃井春蔵親子と鏡新明智流.....	202
2. 長沼正兵衛一門 対 大禾・桃井親子の試合.....	204
第二項 藤川弥司郎右衛門近義の試合.....	210
1. 鈴木弥藤次について.....	210
2. 藤川弥司郎右衛門近義 対 鈴木弥藤次の試合.....	211
第三項 『加藤田平八郎東遊日記抄』にみる男谷派の試合.....	213
1. 加藤田平八郎とその廻国修行.....	213
2. 男谷精一郎一門 対 加藤田平八郎一門の試合.....	214
結節.....	220
第四章 分派による修練形態の分化と対立.....	223
第一節 長沼派.....	224

第一項 長沼派のしない打ち込み稽古	225
第二項 長沼派の形稽古	227
1. 長沼派の形	227
2. 長沼派の形の特徴	228
第三項 長沼派の剣術観	238
第二節 藤川派	243
第一項 藤川派のしない打ち込み稽古	243
第二項 藤川派の形稽古	244
1. 藤川派の形	244
2. 藤川派の形の独自性	245
第三項 藤川派の剣術観	251
第三節 男谷派	255
第一項 男谷派のしない打ち込み稽古	255
第二項 男谷派の形稽古	256
第三項 男谷派の剣術観	258
結節	263
結章	267
一、 各章における結果の要点	268
二、 直心影流の成立過程について	270
三、 直心影流の修練実態について	272
参考引用文献	278

序 章

一、研究の動機及び目的

本研究はわが国独自の身体運動文化である武道の中でも、剣道に着目するものである。

現在、剣道は世界中で幅広い年代の人々によって行われており、その実践の動機は、競技、昇段、健康、社交、日本文化の学習など、各人によって実に多様である。このことは、剣道が老若男女多くの人々を惹きつける様々な魅力を持つ身体運動文化であることをあらわしており、近年では特に日本の伝統文化として注目が向けられている¹。剣道は今後も多様な価値を有する運動文化として受け継がれていくであろうが、今後の伝承の在り方を考えるにあたり、今日までいかに伝承されてきたのかを把握しておく必要がある。

剣道はその前身である「剣術」の時代から周囲の様々な文化の影響を受け²、独自の文化を形成してきた。元来、剣術は日本刀を用いた戦闘技術であり、その勝敗が直接自身の生死に関わっていたため、武士たちはその技術の習得に執心したと考えられるが、この戦技を本来の形態である真剣による斬り合いによって学ぶことは不可能であった。そこで、「かた」の文化が取り入れられ、殺傷性を排除し、安全性が確保された稽古方法である「形稽古」が確立された³。この「かた」は能楽や茶道などの芸道において用いられてきた稽古の方法であり、この文化の導入により、「武術」は「武芸」へ、つまり芸道の一つへと変容を遂げ、日本文化の範疇に組み込まれたといえる⁴。もちろん、これら芸道と剣術の本来的な目的は異なっているが、各々の「かた」が「守・破・離」と呼ばれる長い修練を経て形成・継承されていくという過程において両者は同一の構造を持っているという⁵。この「かた」の文化により、芸を師から弟子へ伝授するという芸道の稽古が支えられ、その文化が今日まで伝承されてきたといえる。

しかし、剣術においては、近世中期頃、実戦性・実用性（体力強化や精神の活性化）の面において、「かた」の効用が認められなくなってしまう。この状況を打開するために、身を守る道具を装着し、しなを用いて相手と実際に打ち合う「しな打ち込み稽古」が誕

¹ たとえば、平成 24 年度から中学校保健体育科教育において武道が必修となったことが挙げられ、剣道もその一端を担っている。現行の『中学校学習指導要領解説 保健体育編』によれば、武道はわが国固有の文化であるとされ、その学習によって、武道の特性や成り立ち、伝統的な考え方などを理解することなどが求められている（『中学校学習指導要領解説 保健体育編』東山書房, pp.99－106, 2008.）。

² 湯浅泰雄『気・修行・身体』平河出版社, p.54, 1986, 参照。

³ 前林清和『近世日本武芸思想の研究』人文書院, p.134, 2006, 参照。

⁴ 全日本剣道連盟編『剣道の歴史』財団法人全日本剣道連盟, p.10, 2003, 参照。

⁵ 源了圓『型と日本文化』創文社, p.9, 1992, 参照。

生し⁶、形稽古と併行して修練されるようになった。従来通り、形稽古のみを行う方式を保ち、しない打ち込み稽古を導入しなかった流派もあったようではあるが、以降、剣術界において形稽古としない打ち込み稽古という二つの稽古方法を兼修する方式が主流となり、この方式が現代剣道にまで継承されていく。「かた」の文化を取り入れ、武士の嗜みである武芸として伝承されてきた剣術の稽古は、近世中期に行き詰まりを迎えるも、「かた」の文化を捨てることなく、さらに「しない打ち込み稽古」という稽古法を加え、この二つの稽古方法によって伝承されていったということであり、この点こそが芸道の伝承という観点から見た剣術の独自性であるといえよう。近世中期以降の剣術における「かた」と「しない打ち込み稽古」の兼修という修練実態をみていくことは、芸道という日本文化における剣術の独自性を究明することにつながり、日本文化論として意義を有すると考える。

以上のことから、本論ではこの二つの稽古方法の兼修という点に焦点を当て論じていくが、そのために直心影流という一剣術流派に着目する。

直心影流は近世中期に興った剣術流派であり、その最大の功績は、しない打ち込み稽古を自流の修練に導入し、これを剣術界に流行させたことである。その立役者が当流の代表的な人物である長沼四郎左衛門国郷である。国郷は、父・山田平左衛門光徳とともに、道具を工夫・改良し、面・小手・胴・垂を完成させたとされている⁷。このことから直心影流がしない打ち込み稽古の発展に大きく貢献したことは間違いない。

さらに近世後期の直心影流からは剣術界全体をリードする人物が多く生まれる。その代表例が男谷精一郎信友である。男谷は、国防のための武備の充実を目的とし、幕府が安政3年（1857）に創設した講武所の頭取ならびに剣術師範を務めた。男谷は講武所での剣術の稽古において試合稽古を流派に関係なく行わせ、さらにこの試合稽古に用いるしないの長さを3尺8寸に定めたとされており、これが現代剣道の竹刀の長さの基準になったともいわれている⁸。また、男谷の弟子である榊原鍵吉は男谷とともに講武所において剣術指導を行っただけでなく、明治維新後に撃剣興行を行い、廃藩置県や秩禄処分によって生活が困窮していた士族を救済した。この撃剣興行により剣術の命脈が保たれたともいわれている⁹。

このように、現代剣道に様々な点で多大な影響を与えたといえる直心影流であるが、その功績もあってか、従来、しない打ち込み稽古に注目が傾倒しており、形稽古については、断片的な知見が学会に提出されているのみである。つまり、直心影流が形稽

⁶ 全日本剣道連盟編『剣道の歴史』財団法人全日本剣道連盟,p.11,2003,参照.

⁷ 中村民雄『剣道事典—技術と文化の歴史—』島津書房, p.111,1994,参照.

⁸ 富永堅吾『剣道五百年史』（復刻新版）島津書房,p.295,1996,参照.

⁹ 中村民雄『剣道事典—技術と文化の歴史—』島津書房,p.155,1994,参照.

古としない打ち込み稽古を兼修していたという事実は明らかになっているものの、その修練実態の解明については部分的に留まっているということである。このような研究状況にある直心影流のしない打ち込み稽古と形稽古をともに考察することで、剣術という文化の伝承の一事例を明らかにすることができるといえよう。

以上を鑑み、本研究においては直心影流という一剣術流派の伝承の様相を明らかにしていくことを目的とする。

二、研究対象と時代設定

前述の通り、本研究においては、直心影流という剣術流派を研究対象とする。まずは、この直心影流について説明をしておきたい。

直心影流は近世中期に山田平左衛門光徳が直心正統流の高橋弾正左衛門重治から流儀を継承し、流名を改め、興した流派であるといわれている。直心影流の伝書に記された伝承によると、流祖は松本備前守であり、備前守が鹿島神宮に祈願することで鹿島の神であるタケミカヅチから流儀を授かったとされている。その後、神陰流（松本備前守）―新陰流（上泉伊勢守）―神影流（奥山休賀斎）―真新陰流（小笠原源信斎）―直心流（神谷伝心斎）―直心正統流（高橋弾正左衛門重治）―直心影流（山田平左衛門光徳）という流れを経て成立に至るという¹⁰。この伝系の中では、直心正統流より、しない打ち込み稽古が導入されており¹¹、この頃から形稽古との兼修が行われていたようである。そして、この兼修の方式が直心影流に継承されたといえる。また、近世後期に至ると当流は複数の派に分化しており、これらの分派については、各派が独立し修練を行っていたという¹²。

次に、本研究においては直心影流の伝承の様相について考察するが、この「伝承」について述べておきたい。

剣術は武芸十八般¹³のうちの一つに含まれているように武芸の一種であり、また、前述したように「かた」の文化をもつ芸道の一つでもある。剣術の伝承を日本文化として考察するにあたり、この芸道という視点は重要であると考え。したがって、はじめに芸道文化

¹⁰ 岩佐勝『鹿島神伝直心影流』武道振興會, pp.18―21, 2005, 参照。

¹¹ 中村民雄『剣道事典―技術と文化の歴史―』島津書房, p.111, 1996。

¹² 山田次朗吉『日本剣道史』一橋剣友会, p.327, 1925, 参照。

¹³ 「武芸十八般」とは、『広辞苑』によると、「一八種目の武芸。日本と中国、または時代によって異なるが、日本では普通には、弓術・馬術・槍術・剣術・水泳術・抜刀術・短刀術・十手術・銃^{しゅうりけん}術・含針術・薙刀術・砲術・捕手術・柔術・棒術・鎖鎌術・鋌^{もじり}術・隱形^{しのび}術」である（新村出『広辞苑』岩波書店 p.2444, 2008.）。

の伝承について西山松之助氏の論をいくつかみておきたい。西山松之助氏は「芸道」を次のように定義している。

芸道というのは、芸を実践する道である。芸とは、肉体を用いて、踊ったり、演じたり、画いたり、嗅いだり、味わったり、話したり、弾いたり、等々、体の全体または一部をはたらかすことによって、文化価値を創りだすとか、または再創造するとかする、そのはたらきをいう。こういうはたらきで創りだされるものは、芸術作品であるが、それが作品として完結してしまったものとか、客体化してしまった芸術品には、芸道は無関係である。もちろん、芸道には芸術作品として客体化しないようなものが多い。いわゆる無形文化といわれるものが多いからである。このようなはたらきをするときの、はたらきかた、その方法、さらにいえば、演技方とか、弾き方とか、それぞれの文化領域における具体的な実践法、それが道である。歌・弓・馬・箏・槍・落語等々、さまざまなジャンルにあって、それを演じる演技方、それが芸道である¹⁴

以上の記述から、「芸道」とは、身体をはたらかせることによって文化的な価値を生み出す、または再創造を行うはたらきをするもの、ということができる。また、ここで特に述べておきたいのは、武芸が「無形文化」に該当するということである。無形文化とは、上の記述にみられるように、客体化しない文化のことである。

このような芸道の伝承は、師から伝授された芸を次の継承者にまた伝えていく、というように、人から人へと伝授されていった¹⁵。この伝授は、「完全相伝」という形式で行われたという。この形式は、芸が熟達し、その蘊奥を極めた者が、師からその芸の印可¹⁶証明として、教授権・免許状の発行権・伝授権など、芸に関わるすべての権利を完全に与えられ、認められるというものであり、古代以来、日本の文化伝承のほとんどはこの完全相伝の形式によって行われてきたという¹⁷。江戸時代中期頃になると、「家元制度¹⁸」と呼ばれる完全

¹⁴ 西山松之助『芸道と伝統』吉川弘文館,p.142,1984.

¹⁵ 西山氏は例として『古今和歌集』の伝承法であった古今伝授を挙げており、人から人へ伝えられていくということを述べている（西山松之助『芸の世界—その秘事伝授—』講談社,p.152,1980,参照.）。

¹⁶ 「印可」とは、「印信許可」の略であり、①仏が弟子の理解を承認すること。また、師僧が弟子の悟りを証明すること。允許。②武道・芸道の許し。免許、などの意味を有する（新村出『広辞苑第六版』岩波書店,p.216,2008,参照.）。

¹⁷ 西山松之助『芸の世界—その秘事伝授—』講談社,p.152,1980,参照.

¹⁸ ここで、家元制度について簡単に説明しておきたい。

西山氏によると、日本には、古代以来、雅楽の家、和琴の家、神楽の家、弓馬術の家な

相伝でない文化の伝承形態が成立し、茶道や能楽・華道などの芸道においては、この家元制度に倣い、文化継承がなされていったようであるが、武芸においては、ひき続き完全相伝の形式をとっていたようである¹⁹。この完全相伝形式の継続が条件の一つとなり、武芸流派は極めて多く分化したという²⁰。

また、芸道が伝承されていくということは、継承者がその芸自体を身に付けることが前提となる。西山氏は芸の修得ということについて、次のように述べている。

芸の修得ということは、単に師匠から伝承してそれを学びとるということだけでは、
びっこであって、その芸を学びとったものを再び実演し、それをさらに発展させて、
新しい世界を開拓し、創造活動をさかんに展開していくことがなければ、ほんとうの
芸の修得にはならないという意味をもっているのであって、そういう意味では、伝統
というものは絶えず伝承して受け継いでいくことだけではなく、新しい世界を切り開
いていくという意味を担っているものこそ本当の芸の伝統であり、それを修得したと
いう意味になるのである。

芸の修得にはこのように、学びとるという修行の面と、その学びとったものをいかに再創造していくか、まったく新しい芸をつくりだしていくかという、この二つの命題を実践していかなければならないという意味をもっているのである²¹

どが早くから確立されており、これらが、「家元」にあたるということである。しかし、このような芸の家を家元と呼ぶようになったのは、江戸中期以後であり、家元という言葉自体も古い時代にはなかったと述べている（西山松之助『芸の世界—その秘事伝授—』講談社、pp.150-151,1980,参照）。この制度は、すべての免許状の発行権・伝授権を家元のみが有するという形式であり、家元の高弟たちに与えられたのは教授権のみであった。したがって、高弟たちは弟子をとって芸の指導をすることはできたが、免許状の発行・伝授は許されなかった（西山松之助『芸の世界—その秘事伝授—』講談社、pp.152-154,1980,参照.）。

¹⁹ 西山松之助『芸の世界—その秘事伝授—』講談社、p.156,1980,参照。

²⁰ 西山氏は、武芸流派が分化した諸条件として、①幕藩体制の確立により、多くの大名、その他の役職者たちが整理され、莫大な浪人が放出されたこと、②寛永末から正保頃に恒久的な治世到来の見通しができ、諸大名の家臣団に整理変質の必要が生じたため、家臣たちはそれぞれの位置を確保するための危機にさらされたこと、③武芸が実力を優先するという性格をもつために、相伝法が完全相伝形式によらざるを得なかったこと、④幕藩体制化における各藩は、他藩に対し対立的な封鎖社会を構成し、特に武力は藩の秘密事とされていたこと、⑤他の芸能においては、藩を越えて、全国の同好者を家元が集約し、家元制度が確立されたのに対し、武芸では、それを集約統一することが不可能であったこと、⑥治世になったため、実力ある流派であることを証明するための対決が行われず、前掲の諸条件が打破されなかったこと、の六つを挙げている（西山松之助『家元の研究』吉川弘文館、pp.272-273,1982,参照.）。

²¹ 西山松之助『芸の世界—その秘事伝授—』講談社、p.170,1980。

芸を修得するということは単に師匠の芸を継承し、学びとるだけでは不完全であり、継承した芸を自身で工夫し、さらに発展させていくことが求められるという。つまり、師の芸がそのままの形で伝承されていくのではなく、再創造、または新しい芸の追加といった変化を伴いながら継承されていくということである。

以上の点を踏まえ、本研究では、次の二点を考察することで、直心影流の伝承について明らかにしていく。

(1) 成立過程

まず、直心影流がどのような人物を経て成立に至ったのか、いわば師弟関係の系譜を明らかにする。直心影流の成立過程については、先にも述べた通り、当流成立以降の伝書において語られているが、流祖・松本備前守の流儀を継承したとされる上泉伊勢守は、愛洲移香という人物が興した陰流の影響を多分に受け、新陰流という流派を創始した、と多くの先学で指摘されている。直心影流の伝書のように、上泉伊勢守の師を松本備前守とする史料は他にみられず、直心影流の成立過程が後世の直心影流の伝書にみられる伝承と異なっている可能性がある。したがって、上記の伝系にみられる流派のみならず、伝系に記されていない流派も直心影流の成立に関わっている可能性が考えられる。本論では、愛洲移香の興した陰流がこれに該当するため、陰流も考察の対象に含める。主な考察範囲としては、上記の伝系において流祖とされる松本備前守から、直心影流が分派する前の長沼四郎左衛門国郷までとし、これに陰流の愛洲移香を加える。

この成立過程を考察するための時代については考察対象となる人物の生没年から設定したい。流祖とされる松本備前守の生没年は文正 2 年（1467）—大永 4 年（1524）、陰流の愛洲移香の生没年は享徳元年（1452）—天文 7 年（1538）とされており²²、愛洲移香の方が若干早く生まれているようである。したがって、愛洲移香の生年とされる享徳元年（1452）を始点とする。終点は、長沼四郎左衛門国郷の没した明和 4 年（1767）とする²³。

(2) 修練実態

次に芸の修得という観点から、直心影流において芸の修得がいかに行われていたか、修練の実態について考察を行う。具体的には、形稽古としない打ち込み稽古がいかに行われていたのかを考察する。また、これらが伝承されていくに伴い、いかに変化していったかという点にも注目し、論じていくこととしたい。考察の範囲としては形稽古としない打ち込み稽古の兼修が開始された直心正統流から、近世後期における直心影流の三つの分派ま

²² 富永堅吾『剣道五百年史』（復刻新版）島津書房、pp.34—40,1996,参照。

²³ 中村民雄「幕末関東剣術流派伝播形態の研究（2）」（『福島大学教育学部論集 社会科学部門』第 66 号所収）福島大学教育学部、p.60,1999,参照。

でとする。

考察する時代としては、直心正統流の創始年以降の近世期とするが、高橋弾正左衛門が直心正統流を興した正確な年は不明である。ただし、弾正左衛門は天和 3 年（1683）、山田平左衛門光徳に『直心正統流免許状』を授けている。光徳が弾正左衛門に入門したのは、この 14 年前である寛文 9 年（1669）であり²⁴、このときにはすでに直心正統流が成立していたといえるため、ここでは考察の起点を寛文 9 年とする。終点は、基本的には徳川幕府が終焉する慶応 3 年（1867）とするが、この辺りの考察に用いる史料は明治以降の近代に著されたものが多い。したがって、場合により、近代の考察が入ることを予め断っておく。

三、先行研究

（1）剣術流派に関する先行研究

まず、本研究は直心影流という一剣術流派を考察の対象とするため、これまでの剣術流派に関する主な先行研究をみておきたい。なお、ここでは「かた（形、型）」「しない（竹刀）打ち込み稽古」などの語については先行研究で記されている通りの表記を用いることをここで断っておく。

①加藤純一『柳生新陰流の研究』（文理,2003.）

加藤氏は近世初期における徳川将軍家の兵法師範役であった柳生宗矩の著した『兵法家伝書』と、柳生新陰流（新陰柳生流）の型を主な考察の対象とし、事・理不可分に捉えられる心法と技法の相即の下に兵法理論が確立されており、さらにそれが一つの武道思想として体系化されていたことを論証している。はじめに、加藤氏は本稿において「事理は不可分的に把握されていること」「心法・技法は相即し、統一されること」「『兵法家伝書』は一つの思想体系を有していること」「武芸の型の継承形態は家元的拘束をみないこと」という四つの全体仮説を提示した上で、下位仮説として「『兵法家伝書』における武芸思想の習は事・理の二元論的把握はされず、実践による事理一致がなされている」「相手の心身の動き、働きを読むために、己の身心の一致を前提としている」「実戦において、己が主導権を握ることができる事理一致の境地が存在する」「柳生新陰流の型は家において連続せず、他流派同様、『非連続の連続』の呈を示している」という四点を設定している²⁵。そして以下の点を述べ、設定した仮説の証明をしている。

²⁴山田平左衛門光徳は 32 歳の時に直心正統流の稽古を見て入門、その後 46 歳の時に免許を受けたとされる（富永堅吾『剣道五百年史』（復刻新版）島津書房,pp.34-40,1996,参照.）。

²⁵ 加藤純一『柳生新陰流の研究』文理,pp.12-16,2003,参照。

『兵法家伝書』においては一貫として心が拘束されることが否定され、いずれの機会や如何なる場面においても日常と変わらぬ技が発露されるために、揺るぎのない心である「平常心」「常の心」が必要とされている。そのため、『兵法家伝書』には心法論を中心とした習が展開されているという。これらの習の中に包摂される事的側面と理的側面は個々が独立して存在しながらも、相待的、かつ相即的に把握され、階梯を踏まえることで自ずと一致し、ついには未分の状態になるという。また、習についてはそれ自体が独立しているのではなく、型という実践の場によって体得することが可能であること、また、型の習得は同時に内在している習の修得でもあり、型の形かたちのみを追求すると習不在の形骸化を招く恐れがあること、習に包摂される理合、理念は、型という実践に裏付けられているものであることを述べている²⁶。

『兵法家伝書』の下巻「活人剣 下」では、主に相手の機を把握する論理が展開されており、ここに実戦の場という特殊空間における心法と技法の相即を見ることができるという。また、実戦の場において対人的に働く自己の心も、囚われない、執着しない、常なる心の状態であることが必要とされ、「殺人刀 上」で展開される心の境地と一致するという²⁷。

型については、太刀の名称が継承者ないし被伝授者によって改変されるという点を明らかにし、截り方、載り掛けの部位、構え方、身体の捌き方等に、時代・場所を越えて異なった遣い方が存在し、変容していることを論じている。また、この理由として、武芸の場合、他の芸道とは異なり、対人的な要素が加味され、動作が実戦を想定していること、時代の変遷に伴い、実戦の意義が薄れ形骸化していったこと、さらには他の芸道のような家元制度が確立しづらかったこと、他流試合が行われず他流との交流が図られなかったことなどを挙げている²⁸。

②長尾進「熊本における雲弘流に関する研究」(『武道学研究』第21巻第3号所収, 日本武道学会, 1989.)

長尾氏は、熊本における雲弘流の伝承の実態について、伝系・伝書・形・竹刀打込稽古という四つの観点から詳細に考察をしている。

まず、伝系については、井鳥巨雲という人物が弘流と無住心剣流を合せて雲弘流を創始したこと、巨雲の子である井鳥五郎右衛門景雲が藩校・時習館の武芸所における剣術師範役になったことから、熊本における雲弘流の伝播が始まったことを述べている。

²⁶ 加藤純一『柳生新陰流の研究』文理, pp.154-159, 2003, 参照.

²⁷ 加藤純一『柳生新陰流の研究』文理, pp.257-260, 2003, 参照.

²⁸ 加藤純一『柳生新陰流の研究』文理, pp.398-400, 2003, 参照.

伝書については、初伝の『随順抄』と後伝（中伝）の『三教録』、皆伝（奥伝、一子相伝）の『雲弘破想両流之伝』の存在を指摘し、初伝の『随順抄』、後伝の『三教録』は元来弘流の伝書であったものを転用し、雲弘流成立後に無住心剣流の要素を取り入れながら加筆したものであり、奥伝の書である『雲弘破想両流之伝』は無住心剣流の伝書『夕雲流剣術書』の雲弘流における書名であることを述べている。

形については長剣の形「組方」が12本、短剣の形「六葉剣」が6本存在することを指摘しているが、技名は長剣の「組方」のみが明らかであり、さらにこれらの具体的内容については不明であるという。

竹刀打込稽古については、構えは八相のみで、互いに走りかかって相手への正面打ちのみを繰り返し修練するという極めて単純で激しい稽古方法であったことを指摘し、この稽古方法は雲弘流独自というよりも無住心剣流から受け継いだものであり、加えて無住心剣流における勝負観や修行心得もそのまま取り入れられていると論じている。また、形の修行が一通り済むと、道具を付けての稽古に移るという修行段階であったことを述べ、短刀の稽古は余程上達した者でなければ許されなかったという²⁹。

③和田哲也「片山流剣術伝書に関する研究—片山家文書における伝書類について—」（『日本武道学研究 渡邊一郎教授退官記念論集』所収、渡邊一郎教授退官記念会、1988.）

和田氏は、片山流宗家に所蔵されていた伝書の内容を検討し、そこにみられる片山流の技法やその特徴について論じている。まず、技法内容に関する伝書類から、技の構成について述べ、居合と剣術を一体不離のものとする片山流の特徴がよくあらわれていることを述べている。また柔術的な技法もみられることを指摘し、これらは竹内流柔術と関係があると述べている。また技法の原型は流祖である片山伯耆守久安の時にある程度原型が整っており、二代久隆の代に技法体系がほとんど整えられ、目録類などの形式も確立されていたと論じている。思想的な点が記された伝書類については、神道的思想や易学思想を取り入れた独特な思想が展開されており、このような思想は流祖の頃からあったと考えられると述べている³⁰。

④太田順康「鳥取藩における雖井蛙流に関する研究」（『日本武道学研究 渡邊一郎教授退官記念論集』所収、渡邊一郎教授退官記念会、1988.）

太田氏は、江戸中期から幕末期における鳥取藩の剣術界の様相、及び雖井蛙流兵法の技

²⁹ 長尾進「熊本における雲弘流に関する研究」『武道学研究』第21巻第3号所収、日本武道学会、pp.10-21,1989.参照.

³⁰ 和田哲也「片山流剣術伝書に関する研究—片山家文書における伝書類について—」（『日本武道学研究 渡邊一郎教授退官記念論集』所収、渡邊一郎教授退官記念会、pp.229-255,1988.参照.

術内容、教習体系等について明らかにしている。この当時の鳥取藩における剣術は地方流派である雖井蛙流・水野流・岩流が多く、全国的に有名な一刀流・新陰流は少なかったという。藩校においては鳥取独自の流派である雖井蛙流と、雖井蛙流から派生した兌山流が指定されていたという。氏はこの雖井蛙流の特徴として、打太刀の技が諸流派の技を利用したものであることを挙げている。この理由として流祖である深尾角馬が諸剣術流派を学び創り上げた点から他流派と深いつながりがあったと述べ、特に丹石流、足田新陰流との関連が深いことを指摘している。また、稽古方法として 17 世紀中頃にはしあいが行われていたこと、六角の太い 3 尺 6 寸ほどの木刀を用い真向から打ち合い、手の内を鍛えるという独自の稽古法の存在を指摘している³¹。

⑤数馬広二「幕末関東における不二心流についての研究—その特徴と社会的役割—」(『武道学研究』第 21 巻第 3 号所収, 日本武道学会,1989.)

数馬氏は不二心流の門人分布、分布地域の社会状況、流祖・中村一心斎と門人の関係について考察するとともに、不二心流の理念が表現されている伝書『治国安民之巻』から、不二心流の独自性について考察をしている。不二心流は主に房総に分布していた剣術流派であり、その門人は農村の指導者的立場にある有力農民であったと氏は述べる。この理由として、天明の大飢饉などで荒廃した農村社会から離脱した無宿者が浪人となり、社会的な不安が募っていたため、村の上層農民は自衛のために武術を身に付ける必要があったことを指摘している。そして不二心流が当時の民間宗教であった不二道の思想を関連付けて練丹術を取り上げ、戦闘の為でなく農民を含めた万民の長生と幸福を希求する兵法観を確立させていたことを論じている³²。

⑥数馬広二「八王子千人同心における甲源一刀流」(『武道文化の研究』所収, 渡邊一郎先生古稀記念論集刊行会,1995.)

数馬氏は甲源一刀流門人・比留間半蔵の弘化年間以降における八王子千人同心への普及について調査し、その形態を考察している。八王子千人同心において甲源一刀流を指導した比留間半蔵は弘化 2 年(1845)に八王子千人同心株を得たことによって士籍を獲得し、これを契機に弘化 4 年(1847)に江戸城内において見分を受けたという。この名声によって甲源一刀流が幕末に至るまで八王子周辺に広まり、比留間家が指導を受け継いでいったという。また氏は、これらの門人が千人頭家・千人同心組頭家・平同心家・関守家・本陣・

³¹ 太田順康「鳥取藩における雖井蛙流に関する研究」『日本武道学研究 渡邊一郎教授退官記念論集』所収, 渡邊一郎教授退官記念会, pp.292-317, 1988. 参照.

³² 数馬広二「幕末関東における不二心流についての研究—その特徴と社会的役割—」(『武道学研究』第 21 巻第 3 号所収, 日本武道学会, pp.22-31, 1989, 参照.

宿屋経営者などの階層であったことを指摘している。また、稽古の様子や他流派との交流の様子などが記されていることについても言及している。甲源一刀流は幕末の八王子を舞台として、比留間家の人物が関守、佐藤家と千人町道場を拠点とし、「半農半士」としての甲州口からの江戸防衛を行うという任務を受けた八王子千人同心の生活時間や生活習慣に対応した稽古を行っていたと述べている³³。

⑦数馬広二「武州における禅心無形流と相州大山信仰についての一研究」(『武道学研究』第28巻第3号所収, 日本武道学会, 1996.)

数馬氏は埼玉県入間郡越生町で興った剣術流派である禅心無形流について江戸中期以降に流行した民間信仰の一つである相模大山信仰との関連から論じている。禅心無形流は、田嶋七郎左衛門源武郷が甲源一刀流の逸見太四郎義年に剣術を学び、寛政12年(1800)に創始した剣術流派であり、流派の体裁を整えて存立したのは20年程度で、一代で閉じたと述べている。この当時、甲源一刀流内は初代逸見太四郎義年から二代嫡子逸見彦九郎義苗への継承期にあったため、甲源一刀流の勢力が停滞していた時期の分派活動として禅心無形流が成立したと論じている。また、甲源一刀流から改流した越生地区の門人には大山信仰を普及する大山御師が多く、禅心無形流の成立に多大な貢献をしていたことを指摘している。禅心無形流は大山御師が相州大山信仰を拡大する意図と、田嶋武郷の何らかの意図が合致し、埼玉県入間郡越生町という限定された地域で田嶋七郎左衛門源武郷一代のみに出現した特異な剣術流派であったと論じている³⁴。

⑧須加野征博「水戸藩における一刀流についての研究—水府流剣術への合併との関係から—」(『武道文化の研究』渡邊一郎先生古稀記念論集刊行会, 1995.)

須加野氏は水戸藩に分布していた、一刀流、新陰流、真陰流の三流派を合併した流派である水府流の成立について明らかにするために、本稿において一刀流に焦点を当て、水府流剣術が成立した近世後期の水戸藩における一刀流の伝承経緯と普及状況、一刀流の政治的地位、水府流剣術の格式に取り入れられた一刀流の太刀筋について考察を行っている。徳川斉昭によって水府流に合併された一刀流は小野派一刀流であり、小野派一刀流の祖・小野次郎右衛門忠明の甥にあたる伊藤孫兵衛忠一によって水戸藩にもたらされたと述べている。また、指南の人数、武芸上覧の状況、流派関係者の政治的地位から、合併された三流派の中で一刀流は最も高い地位にあったことを指摘している。このため、合併の際の技

³³ 数馬広二「八王子千人同心における甲源一刀流」『武道文化の研究』所収, 渡邊一郎先生古稀記念論集刊行会, pp.148-173, 1995, 参照。

³⁴ 数馬広二「武州における禅心無形流と相州大山信仰についての一研究」『武道学研究』第28巻第3号所収, 日本武道学会, pp.23-39, 1996, 参照。

術的なものは一刀流を中心に取り入れようとしていたことを論じている³⁵。

⑨須加野征博「近世後期における水戸藩の剣術に関する研究—水府流剣術の成立とその展開を中心に—」（平成5年度筑波大学大学院修士課程体育研究科体育方法学専攻修士論文）

須加野氏は水戸藩弘道館で行われていた剣術流派であり、九代藩主徳川斉昭を流祖とする水府流の成立背景を明らかにしている。水府流剣術は北辰一刀流や神道無念流と同様にしないによる打ち込み稽古を主としており、一刀流の「切落」・新陰流の「転論」・真陰流の「徹底」というその流派の中で最も重要とされている太刀や極意を用いていることから、各流派から長所を取り入れ合併していると述べている。これについては、水戸学の合理的思想が影響していることが考えられるとし、これは水戸学の実践者といわれていた斉昭の影響であると論じている。また、水府流の格式三十本のうち十五本が一刀流から取りいれられており、また、格式のはじめに示されている「十等の太刀」五本は一刀流の太刀筋であるという。この理由としては水戸藩における流派の政治的地位が考えられ、一刀流の関係者が他の二流派に比べ役職が比較的高く、禄高も高かったこと、歴代藩主が学ぶ御家流儀であったことを挙げている。また、真陰流が吸収された理由としては、同流から分派した流派をまとめる斉昭の流派合併政策を挙げている。新陰流と真陰流はともに上泉伊勢守から派生した流派であり、技に対する捉え方にも大きな違いがないことから新陰流と一緒に合併されたという。新陰流合併の要因としては技に対する捉え方が一刀流より具体的であったことを挙げ、斉昭が一刀流の技により実証性を持たせるために取りいれたという³⁶。

⑩前村幸芳「天流に関する史的研究—その成立と伝播及び変容を中心に—」（平成6年度筑波大学大学院修士課程体育研究科体育方法学専攻修士論文）

前村氏は斎藤伝輝房によって創始された天流を取り上げ、その成立に関する諸事項について考察し、さらに天流がどのように各地に伝播し、どのような変容を遂げたのか、そしてその変容の背景についても考察している。

まず、氏は、天流が鹿島・香取の神道（新当）流の流れを汲み、影響を受けていたものの、『天流諸目録』の大部分が伝輝房の独創によるものであると述べている。また、成立当時は剣術、槍術、薙刀、小具足、取手といった面をもつ総合武術であり、特に小太刀が秘術とされていたことを指摘している。

天流諸流派の伝播については、天流から派生した三つの流派（一ト天流、天道流、亘理

³⁵ 須加野征博「水戸藩における一刀流についての研究—水府流剣術への合併との関係から—」『武道文化の研究』渡邊一郎先生古稀記念論集刊行会, pp.107-133, 1995, 参照。

³⁶ 須加野征博「近世後期における水戸藩の剣術に関する研究—水府流剣術の成立—」平成5年度筑波大学大学院修士課程体育研究科体育方法学専攻修士論文, 参照。

天流)を取り上げ、これら三流派は独自の過程を経て発達・変容し、共通した事柄がほとんどみられないと論じている。

一ト天流については小具足を中心とした流派であり、伝輝房以来伝承していた事柄を割合変容することなく伝承していたとし、捕縛術が最も発達していたことが特徴的であると述べている。この要因としては、この流派が伝輝房以来常陸国で継続し、土地に強く根付いた流派であったこと、常陸国の農村において、中世武士の血をひく帰農した人々によっても行われていたことを挙げている。

天道流については、天流の嫡流とされながらも成立当初の天流の内容が最も少なかったことを指摘し、この理由として、天道流は亀山藩に落ち着くまで、各地を転々としていたこと、さらに家ではなく高弟に伝承されており、的伝者が他流と交流の機会に恵まれ、的伝者自身の創意・工夫が活発に行われたと考えられると論じている。

亘理天流は最も多く『天流諸目録』の項目を伝承しており、成立当時の天流の変容の度が少ない流派であるとしている。この理由として、この流派が伝輝房の門弟荒川秋秀以降、継続して荒川家に伝わっていたことを挙げている³⁷。

①加藤氏による柳生新陰流（新陰柳生流）の研究については、『兵法家伝書』と「かた」の考察から、技法と心法ならびに習の事と理の側面が相即しており、習は「かた」を学ぶことによって習得されることを証明している。また、氏は「かた」について、継承されるにしたがい、改変されていくことを明らかにしている。流派の修練について考察し、また、そこに内在する技法と心法および習にまで言及している点は大いに参考になる。しかし、柳生新陰流はしない打ち込み稽古が発生する前に興った剣術流派であり、近世中期以降も、しない打ち込み稽古を自流の修練に導入することはなかったようである。したがって、しない打ち込み稽古については考察されていない。

②長尾氏の雲弘流についての研究、③和田氏の片山流についての研究、④太田氏の雖井蛙流についての研究は成立、伝書の内容、修練の内容・思想などについて言及しているが、特に修練について不明な点が多く、これらの流派における修練の全容は明らかになっていない。

⑤⑥⑦の数馬氏の不二心流、甲源一刀流、禅心無形流についての研究は、主に成立過程や伝播、および分布について述べられており、流派の技術や修練形態については特に詳細に述べられていない。

³⁷ 前村幸芳「天流に関する史的研究—その成立と伝播及び変容を中心に—」平成6年度筑波大学大学院修士課程体育研究科体育方法学専攻修士論文,参照.

⑧⑨須賀野氏の水府流についての研究、⑩前村氏の天流についての研究は流派の成立や変容に特化した研究であるといえる。須賀野氏は水府流に取り込まれた流派の考察およびその背景について明らかにし、水府流の「かた」についても考察を加えているが、水府流がしないによる打ち込み稽古を主としていることを指摘しながらも、しない打ち込み稽古の考察には及んでいない。前村氏は天流の成立時の特徴および天流から派生した三流派の特徴、そしてその特徴を形成するに至った要因について特に考察をし、「かた」や習についても言及しているが、その考察の多くが目録からそれらの名称を比較するに留まっている。

以上の先行研究においては、考察対象である流派の成立過程自体やその伝播及び変容については相当に述べられているといえる。一つの剣術流派を考察対象にするにあたり、どのような流れを経て成立に至ったのか、そしてどのように後世に継承されていったのかを把握することは剣術流派を考察の対象とする上で不可欠であると考ええる。

しかし、流派の修練については、「かた」の種類や、しない打ち込み稽古の存在などについて指摘されているものの、その多くが断片的なものであり、「かた」の技術的特徴や修練の様相などについては、明らかにされていない部分が多いといえる。

こういった研究状況になっている要因としては、伝書による限界があるためであると考えられる。武芸流派は徹底した秘密主義をしいていたため、伝承は口伝によるものが多く³⁸、継承される史料としては、「かた」や「習」の名称のみを列記したような目録が多かったようである。そのため、「かた」に表現されている、流派の独自の技術や習について詳しく考察されてこなかったと考えられる。しかし、師弟関係を基盤とし、その技術の教習を行うことによって後世に受け継がれていく剣術流派の研究を行うにあたり、その技術体系や修練の様相について明らかにすることは必要不可欠であると考えられ、十分に研究されなければならない点である。

直心影流は全国的に分派していたこともあってか、史料が比較的多く現存しており、目録だけではなく、形や習を詳細に解説した伝書や他流試合の様子が記された史料を確認することができる。したがって、直心影流を考察対象とする本研究においては直心影流の形に内在される技術や習、また修練の様相を詳細に考察することが可能である。

先にも述べた通り、本研究では、直心影流の成立過程と修練実態、大きく分けて二つの点について考察を行う。これまでに考察対象となる流派がいかに成立したのか、またその修練の特徴や様相はいかなるものであったか、これら二点について体系的に言及している

³⁸ 酒井利信『日本精神史としての刀剣観』第一書房 p.338,2006. 参照.

研究はみられない。この辺りに本研究の流派研究としての独自性があるといえ、武道学研究において意義を有すると考える。

（２）直心影流に関する先行研究

次に、直心影流について述べた先行研究の中で特に主要なものを項目別にまとめておきたい。

○直心影流の成立過程に関する先行研究

直心影流の成立過程に関する研究で特に重要な知見を述べているものとしては、下川潮『剣道の発達』（大日本武徳会,1925.）と堀正平『大日本剣道史』（剣道書刊行会,1934.）が挙げられる。

下川氏は直心影流について直接的には述べていないものの、上泉伊勢守の項において「上泉伊勢守自身にも新影流と書くべきを真影流と記せし実例あり、従つて後世に至りても本朝武芸小伝、武術系譜略、武術流祖録などの諸書の如き多く神陰流の文字を使用し、其他神陰・新影・新陰・真陰を混同するもの少からず。然るに元禄前後に起りし直心影流の伝書の如き^(ママ)を神陰と云ふ文字に附会して流名の由来を説くに此流祖を杉本備前守政元とし、神より秘術秘伝を授けられて一流を開きしものなれば全く神の御陰によるものなりと云ふ処より神影又は神陰流と名付けたりと云ふに至れり³⁹⁾」（下線部筆者）と言及している。つまり、上泉伊勢守の流名である新陰流について、後世、様々な漢字の表記が用いられるようになったことを契機に、直心影流の伝書では、その中の「神陰」という字にこじつけて、流祖を松本備前守（本文では杉本備前守）として、神から流儀を授かったという伝承を無理につなぎ合わせていると下川氏は指摘している。

堀氏は直心影流について、伝系において流祖とされる松本備前守ではなく、山田平左衛門光徳を祖としている。この理由について、「新影流は上泉信綱が祖で、上泉は影流を愛洲に学んだのである事は流名に依つても明かであるが、之を政策的に鹿島神伝として松本備前守の系統にして仕舞つた。鹿島系では塚原卜伝に学んだが、松本系であるとは直心影流以外の人には通用し難い⁴⁰⁾」と述べている。つまり、直心影流の伝系が意図的に松本備前守の系統に改変されたものであることを指摘している。

上記二書の指摘は、直心影流の伝系において、松本備前守を流祖とすることが意図的な改変であり、後世における伝承と実際の成立過程に相違点があることを示唆しているが、両書ともに論拠となる史料を提示しておらず、この点は史料の記述を基に論証をしていく

³⁹⁾ 下川潮『剣道の発達』大日本武徳会,p.166,1925.

⁴⁰⁾ 堀正平『大日本剣道史』剣道書刊行会,p.425,1934.

ことが必要である。

○直心影流の修練に関する研究

次に直心影流の修練に関する研究としては、大きく分けて形稽古に関するものと、しない打ち込み稽古に関するものに分類される。

形稽古に関する先行研究は、管見する限り、前林清和『近世日本武芸思想の研究』（人文書院，2006.）のみである。前林氏は山田次朗吉『鹿島神伝直心影流』を取扱い、剣術の型修行において動的瞑想の性格を如実に表している直心影流の型である「法定」と「丸橋」について取りあげ、論じている。「法定」は呼吸法を重視し、その呼吸と身体の動きを一致させ、また体内の気を運用するという特徴があり、「丸橋」はまさに動的瞑想状態による型であると、述べている⁴¹。しかし、氏は山田次朗吉『鹿島神伝直心影流』（一橋剣友会，1927.）という極めて新しい史料のみを取扱い、論じているため、直心影流成立初期の形の修練実態については述べられていないといえる。また、直心影流には法定・丸橋だけでなく、十之形、小太刀、古流など多くの形が存在しており、これらについても研究がなされていないといえる。

しない打ち込み稽古については、その用具等について述べたものと、技術的特徴について言及している研究の二種類がある。用具については、富永堅吾『剣道五百年史』（百泉書房，1972.）や中村民雄『剣道事典—技術と文化の歴史—』（島津書房，1994.）に詳しい。富永氏は直心影流について山田平左衛門光徳から近世後期まで人物ごとに述べているが、その中でも特筆すべきは、長沼四郎左衛門国郷がこれまでなかった道具を初めて拵えてこれを使用したと捉えるのは誤りであるとしている点であり、直心影流の前身である直心正統流のときにはすでに不完全ながら道具の使用がみられると指摘している⁴²。中村氏は、道具の発生について、直心影流を例に出し、言及している。直心正統流・高橋弾正左衛門の流儀を継承した山田平左衛門光徳は 18 歳のとき木刀による試合でけがをし、その後剣術を中断していたが、32 歳のとき弾正左衛門の流派が道具を用いて稽古をしているのを見て入門し、免許を得たとされていると述べる。また、山田平左衛門光徳の弟子である長沼四郎左衛門国郷の墓碑の記述から、面・小手・胴・垂が出揃ったのがこの頃であると論じている⁴³。

しない打ち込み稽古の技術的特徴については、長尾進「試合剣術の発展過程に関する研究—『神道無念流剣術心得書』の分析—」（『武道学研究』第 29 巻第 1 号所収，日本武道学

⁴¹ 前林清和『近世日本武芸思想の研究』人文書院，pp.176—179，2006，参照。

⁴² 富永堅吾『剣道五百年史』（復刻新版），島津書房，p.325，1972，参照。

⁴³ 中村民雄『剣道事典—技術と文化の歴史—』島津書房，p.111，1994，参照。

会,1996.) や全日本剣道連盟編『剣道の歴史』(財団法人全日本剣道連盟,2003.) にみられる中村民雄氏の言及に詳しい。長尾氏は『神道無念流剣術心得書』という史料を取扱い、この史料に記されている直心影流についての記述を分析・考察している。氏は、本書にみられる直心影流の特徴として、上段の構え、浮き足という敏捷性に富んだ足遣いが記されていることを指摘し、これらが千葉周作の述べる直心影流の特徴と一致することを論じている。しかし、流派間交流の増大、技術・用具の統一化の流れの中で、次第にその特徴を薄めていったと述べている⁴⁴。中村民雄氏は直心影流を名乗ったとされる人物である山田平左衛門光徳の著した『兵法雑記』に道具を着用したしない打ち込み稽古のことが記されていることを指摘し、この記録について、正徳年間のものであると推定している。また、『直心影流兵法目録註解』には今日行われている「切り返し」と同じような動作のことが記されていると指摘している。さらに、直心影流の剣士がもともと上段からの技を得意としていたことにも言及している⁴⁵。

しない打ち込み稽古については道具の導入について特に詳しく述べられているといえ、また、中村氏、長尾氏が直心影流のしない打ち込み稽古における技術的な特徴について述べている。しかし、しない打ち込み稽古の基本の形とされる十之形、直心影流の他流試合については考察されておらず、この辺りについても言及する必要がある。

○後世の直心影流に関する研究

後世の直心影流に関する主な研究としては、以下のものが挙げられる。

- ・山田次朗吉『日本剣道史』(一橋剣友会,1925.)
- ・榎本鐘司「幕末剣術の変質過程に関する研究—とくに窪田清音・男谷信友関係史料および一刀流剣術伝書類にみられる剣術の一変質傾向について—」(『武道学研究』第13巻第一号所収, 日本武道学会, 1980.)
- ・佐藤泰彦・酒井一也「新発田藩における直心影流について」(『新発田郷土史』第37号所収, 新発田郷土研究会, 2009.)

山田次朗吉氏は自身が直心影流の剣士であるということもあり、本書の中で多くの直心影流に関する知見を述べている。その中でも特に注目に値するものとしては、以下の近世後期の藤川派の動向と直心影流の分派についての知見が挙げられる。

天保年間、九州柳川藩の剣術・槍術師範であった大石進は武者修行のために江戸を訪れ、長竹刀による片手突きを駆使し、江戸の高名な剣士たちを次々と破った。その結果、世論

⁴⁴ 長尾進「試合剣術の発展過程に関する研究—『神道無念流剣術心得書』の分析—」(『武道学研究』第29巻第1号所収) 日本武道学会, pp.17-25, 1996.

⁴⁵ 全日本剣道連盟編『剣道の歴史』財団法人全日本剣道連盟, pp.256-257, 2003.

は従来の短いしなないよりも長い竹刀で突きを打つほうが有利であるという見解になり、長竹刀が大流行したという。しかし、直心影流藤川派の藤川整斎は一向に竹刀の寸法を改めなかったと氏は述べている。その理由として、氏は、整斎が剣術について、勝敗を争う道具ではなく、精神の修養のためにあると考えていたことを述べている⁴⁶。また、男谷精一郎が竹刀の長さを3尺8寸に定めたことにより、藤川派と衝突し、当流が分離する原因になったことを指摘している⁴⁷。そして、「直心影流が長沼派、藤川派、男谷派と三派鼎足の形となつたは是からである⁴⁸」と、この分離が長沼派を含む三派で起こっていたことを述べている。本書で述べられていることは非常に示唆に富んでいるが、論拠となる史料を提示しておらず、論証する必要がある。

榎本氏は男谷精一郎の著作『武術雑話』を取扱い、修行の実態、剣術観について論じている。氏は、男谷が当時流行の長竹刀を用いた剣術について批判し、その非実用性を指摘する一方で、「力量さえあればどれほどの長寸を用いてもよい」「長短軽重を使い分けることが肝要」などと述べ、合理的にしない長短論について結論づけていると指摘する⁴⁹。また、男谷派では長寸のしなないを用いるより、短寸のしなないで稽古する方が効果的であるとし、真剣と同寸の竹刀を使用する稽古の方がより実用・実戦的だとして総長3尺2寸前後のしなないによる試合稽古のみの剣術を行っていたことに言及している。そして男谷が規定した3尺8寸という長さは真剣操作法としての実戦的剣術から遊離しない条件と鍛練的效果のある実用剣術の実践という二つの条件を考慮に入れてのことであったと指摘する⁵⁰。

佐藤・酒井両氏は新発田藩における直心影流二派の動向について考察している。長沼派（主に上段に構えることから「上段派」と称される）については、剣術師範の嶋村外也が古法を墨守して時流に乗った打ち込み稽古や他流試合に応じなかったこと⁵¹、男谷派（主に精眼に構えていたことから「精眼派」と呼ばれる）については、積極的に打ち込み稽古や他流試合を行ったため、次第に繁栄していったことを指摘している。また、新発田藩は講武所の動向を意識しており、打ち込み稽古を奨励するよう両派に通達したが、嶋村は一向

⁴⁶ 山田次朗吉『日本剣道史』一橋剣友会, pp.322-324,1925,参照.

⁴⁷ 山田次朗吉『日本剣道史』一橋剣友会, pp.324-327,1925,参照.

⁴⁸ 山田次朗吉『日本剣道史』一橋剣友会, p. 327,1925.

⁴⁹ 榎本鐘司「幕末剣術の変質過程に関する研究—とくに窪田清音・男谷信友関係資料および一刀流剣術伝書類にみられる剣術の一変質傾向について—」(『武道学研究』第13巻第一号所収), 日本武道学会, pp.44-53,1980,参照.

⁵⁰ 榎本鐘司「幕末剣術の変質過程に関する研究—とくに窪田清音・男谷信友関係史料および一刀流剣術伝書類にみられる剣術の一変質傾向について—」(『武道学研究』第13巻第1号所収), 日本武道学会, pp.44-53,1980,参照.

⁵¹ 佐藤泰彦・酒井一也「新発田藩における直心影流について」(『新発田郷土史』第37号所収)新発田郷土研究会, pp.9-11,2009,参照.

に藩の意向に従おうとしなかったという。藩は安政 5 年（1859）に嶋村を剣術師範から外し、上段派の門弟にも上段方式の稽古を見合わせ、精眼を専らとするように命じたが、上段派はこれに応じなかった。結果、慶応 2 年（1866）に藩は嶋村を復職させ、上段と精眼はそれぞれの器量で学ぶようにとの通達を出したということである⁵²。

近世後期における直心影流については、とくに分派という観点からの知見が述べられており、山田氏は藤川派と男谷派、佐藤・酒井両氏は長沼派と男谷派の対立の様相についてそれぞれ言及している。また、山田氏は藤川派と男谷派の分離の原因について、しないの長さについての見解の相違を挙げており、各派の剣術観が修練に影響を与えていることが示唆される。しかし、山田氏の言及は論拠となる史料が提示されておらず、論証していく必要がある。また、山田氏は長沼・藤川・男谷三派の分離を指摘しているが、氏の言及においては長沼派について、また佐藤・酒井両氏の論考においては藤川派についての言及がそれぞれ欠落している。したがって、これまでに三派を対象として修練形態の分離を考察した研究は管見の限りみることができず、三派を同時に考察し、分離の様相を論証する必要があると考えられる。

このあたりを解明することを中心に本論を進めていくこととしたい。

四、研究方法

先にも述べた通り、本論の目的は、直心影流における伝承の様相を解明することである。そのために、基本的には直心影流の剣術伝書を読み込み、解釈することにより、問題にアプローチしていく。また、他流の伝書や剣術伝書以外の史料においても、当流の剣術について記述された史料が存在するため、これらも考察対象とする。

本論の構成は 4 章立てになっている。

第一章においては、「直心影流の成立過程と分派」と題し、研究対象となる直心影流がどのような経緯を辿り、成立し、その後いかに分派していったかを明らかにする。これまでに述べてきた通り、後世の直心影流の伝書で語られている成立過程は実際の成立過程と異なっている可能性があるため、実際に存在していた成立過程を明らかにしておく必要がある。そのため、第一章においては、まず、従来の伝書で語られている伝承について把握し、その後、この伝承が実際の成立過程と一致するかどうかを検証していく。したがって、第二章以降と論調が異なることをここで断っておきたい。

⁵²佐藤泰彦・酒井一也「新発田藩における直心影流について」（『新発田郷土史』第 37 号所収）新発田郷土研究会、pp.12-14,2009,参照。

第一節では、直心影流成立以降の伝書において語られている伝系および伝承について把握する。第二節においては、第一節で把握した伝系および伝承に関する問題点を浮き彫りにしていく。そして、第三節および第四節において、実際の成立過程を明らかにしていく。第五節については、直心影流成立後、いかに伝播していったかを把握する。なお、この節は第四章の前提となる部分である。

第二章では「法定とその修練過程」と題し、直心影流の基本の形である法定について考察を行う。第一節では法定の概要や形としての特徴をみていき、法定がどのような特徴を有する形であるかを把握する。第二節から第四節においては、法定が成立した初期において、どのように修行が行われていたか考察を行うこととする。

第三章では「十之形としない打ち込み稽古」と題し、しない打ち込み稽古の基本技術の形である十之形としない打ち込み稽古を対象とし、考察を行う。第一節では十之形の概要ならびに十之形の特徴を明らかにする。第二節では直心影流の伝系におけるしない打ち込み稽古の導入の歴史を把握しつつ、他流の剣士が述べた直心影流についての記述からしない打ち込み稽古の特徴を検討し、直心影流の伝系においていかにしない打ち込み稽古が導入され、またどういった特徴を有していたのかを明らかにする。第三節では直心影流の他流試合の記述を分析し、十之形ならびにしない打ち込み稽古の特徴が他流試合の場においていかに現れているかを考察していく。

第四章では「分派による修練形態の分化と対立」と題し、近世後期における三つの分派それぞれの試合・修練形態について、しない打ち込み稽古・形稽古二つの側面から考察していく。また、試合・修練形態を形成する一要因であると考えられる、各派の剣術観についても考察を行い、試合・修練形態の分化の様相を明らかにする。第一節では長沼派、第二節では藤川派、第三節では男谷派をそれぞれ考察の対象とする。

本論文の構成は次のとおりである。

序章

- 一、研究の目的
- 二、研究対象と時代設定
- 三、先行研究
- 四、研究方法
- 五、用語について
- 六、文献史料

第一章 直心影流の成立過程と分派

第一節 直心影流の伝系と伝承

第一項 直心影流の伝系

第二項 直心影流の伝書にみられる伝承

1. 流派の起源としての神話
2. 松本備前守
3. 上泉伊勢守～小笠原源信斎
4. 神谷伝心斎～長沼四郎左衛門国郷

第二節 直心影流の伝系・伝承における問題点

第一項 流名と流祖の改変

1. 伝系の各流派における流名の変遷
2. 各流派の伝書における流祖の相違

第二項 後世における神話の付加

1. 奥書「鹿島神伝」
2. タケミカヅチについての記述

第三節 新陰流から真新陰流までの系譜

第一項 形の名称からみる流派の系譜

1. 新陰流における形の名称
2. 真新陰流との比較

第二項 新陰流の創始からみる成立過程

第四節 直心流から直心影流の成立までの系譜

第一項 神谷伝心斎による直心流の創始

1. 直心流成立の経緯
2. 神谷伝心斎の他流批判

第二項 直心正統流から直心影流の成立

1. 直心正統流の成立
2. 直心影流の成立

第五節 分派の発生と伝播

第一項 長沼四郎左衛門国郷以降の伝系

第二項 長沼派

1. 長沼派の発生
2. 長沼派の伝播と主な人物

第三項 藤川派

1. 藤川派の発生
2. 藤川派の伝播と主な人物

第四項 男谷派

1. 男谷派の発生
2. 男谷派の伝播と主な人物

結節

第二章 法定とその修練過程

第一節 法定の特徴

第一項 法定について

1. 法定の成立と構成
2. 法定の名称
3. 法定修行の用具

第二項 形としての法定の特徴

1. 呼吸と気
2. 上半円と下半円
3. 諸腕

第二節 法定の修行過程

第一項 流派における修行過程の全容

第二項 法定の修行段階

第三節 初学の修行

第一項 太刀筋の矯正

1. 縦一文字・横一文字
2. 法定の動作に見る太刀筋

第二項 身体の矯正

第四節 中学の修行

第一項 非切

1. 非切について
2. 法定にみる非切

第二項 仕懸

1. 仕懸について
2. 法定における仕懸

結節

第三章 十之形としない打ち込み稽古

第一節 十之形

第一項 十之形について

1. 十之形の名称
2. 十之形の用具

第二項 十之形の特徴

1. 十之形の構成
2. 「曲尺」にみる十之形の特徴
3. 「圓連_{刀連体連}」にみる十之形の特徴

第二節 直心影流におけるしない打ち込み稽古の導入と特徴

第一項 直心影流の伝系におけるしない打ち込み稽古の導入

1. 伝系における道具の導入
2. 『兵法雑記』にみるしない打ち込み稽古

第二項 他流から見た直心影流の特徴

1. 『神道無念流剣術心得書』からみた直心影流
2. 千葉周作『剣法秘訣』からみた直心影流

第三節 直心影流の他流試合

第一項 『大禾一件』にみる鏡新明智流との試合

1. 大禾伴山・桃井春蔵親子と鏡新明智流
2. 長沼正兵衛一門 対 大禾・桃井親子の試合

第二項 藤川弥司郎右衛門近義の試合

1. 鈴木弥藤次について
2. 藤川弥司郎右衛門近義 対 鈴木弥藤次の試合

第三項 『加藤田平八郎東遊日記抄』にみる男谷派の試合

1. 加藤田平八郎とその廻国修行
2. 男谷精一郎一門 対 加藤田平八郎一門の試合

結節

第四章 分派による修練形態の分化と対立

第一節 長沼派

第一項 長沼派のしない打ち込み稽古

第二項 長沼派の形稽古

1. 長沼派の形
2. 長沼派の形の特徴

第三項 長沼派の剣術観

第二節 藤川派

第一項 藤川派のしない打ち込み稽古

第二項 藤川派の形稽古

1. 藤川派の形
2. 藤川派の形の独自性

第三項 藤川派の剣術観

第三節 男谷派

第一項 男谷派のしない打ち込み稽古

第二項 男谷派の形稽古

第三項 男谷派の剣術観

結節

結章

一、各章における結果の要点

二、直心影流の成立過程について

三、直心影流の修練実態について

五、用語について

ここでは、本論において頻出する用語について述べるとともに、本論における用法の定義をしておきたい。

(1) 流派

まず、「流派」という語句について辞書的に解釈をすると、「流儀の違いによるそれぞれの系統。りゅう⁵³」と定義されている。ここで述べられている「りゅう（流）」とは「血筋。系統。学術・芸能などで、その人・家の特有な方式。固有なやり方⁵⁴」という意味であると考えられる。つまり、流派とは、家や人に存在する、学術や芸能の分野において独自の方式を持つ系統のことである。

中林信二氏は流派成立の条件として、①天才的な人物の出現、②技法そのものが非常に高度であること、③教習課程と技術体系の整備、の三点を挙げている⁵⁵。つまり、天才的な人物の優れた技術を求めて人が集まり、そこに師弟関係が生まれ、この関係下において技術が後世に受け継がれていくといえる。したがって、技術の教授を行う師弟関係の成立をもって、流派が成立したといえることができる。

また、「完全相伝」という伝承形式などの諸条件によって、剣術流派の分化、分流が非常に進んだとされているのは先にも述べた通りであるが⁵⁶、このことは、直心影流の伝系からも窺うことができる。先述したように、直心影流は、代々流名を変えつつ継承されている。これら流名の変更は分流の証としてみることができる。たとえば、新陰流（上泉伊勢守）

⁵³ 新村出『広辞苑第六版』岩波書店,p.2958,2008.

⁵⁴ 新村出『広辞苑第六版』岩波書店,p.2953,2008.

⁵⁵ 中林信二『武道のすすめ』中林信二先生遺作集刊行会,pp.23 - 24,1987,参照.

⁵⁶ 西山松之助『家元制の展開』吉川弘文館,p.507,1982,参照.

からは、直心影流の伝系に登場する神影流（奥山休賀斎）だけでなく、新陰柳生流⁵⁷（柳生宗厳）、タイ捨流（丸目蔵人）、疋田陰流（疋田豊五郎）などが出ており、多くの人物が上泉伊勢守に師事し、その後、流名を改め、分流を興したことが窺える⁵⁸。直心影流もこのような分流を繰り返し、成立に至ったと考えられる。

（２）かた

上記のように流派は成立し、後世に継承されていくが、この流派の技術を教授する基本的な方法が「かた」である。芸道や武芸における稽古の内容は習⁵⁹であり、修行者は「かた」を通して習を学んでいく。「かた」は自流の法則や精髓を伝達する手段として、無駄なく確実に、かつ速く理解でき、習得できるものとして尊重されていた⁶⁰。「かた」はそれぞれの流派において絶対的な権力をもっており、学ぶ者に対して強い拘束力をもつ⁶¹。師は「かた」を弟子に教授し、弟子はそれを寸分の狂いもなく、正しく繰り返し修練することが求められる⁶²。また、「かた」は単なる定められた身体の動かし方や所作といったものではなく、それぞれの状況や身体運動に応じてなすべき精神的な活動（剣術の伝書において解説されている「位」や「心持」など）についても定められており、身体活動と互に関連している⁶³。それ故に「かた」を学ぶことで弟子は流派独自の技術が身に付くだけでなく、そこに内在している精神や信念も自然と学んでいくことになる⁶⁴。つまり、「かた」の中で定められた身体運動を通して自身の精神をも練磨していくということである⁶⁵。また、「かた」を用いた技の修行方法は身体運動や技術を部位や局面によって分類し、それぞれを分析的に

⁵⁷ 新陰柳生流とは俗称であり、正式名称は新陰流である。また、柳生新陰流とも呼称する場合もある。

⁵⁸ 綿谷雪・山田忠史編『武芸流派大事典』東京コピー, pp.388-389, 1978, 参照。

⁵⁹ 「習」とは①なれること。しきたり。習慣②世の常。きまり③ならうこと。学ぶこと。学習。練習④口授されて学ぶべき秘事など、の意味を有する（新村出『広辞苑第六版』, 岩波書店, p.2104, 2008, 参照。）。本論においては④の意味でこの語を使用する。

⁶⁰ 中林信二『武道論考』中林信二先生遺作集刊行会, pp.5-6, 1988, 参照。

⁶¹ 西山松之助は『「型」の規範性、拘束性は逆にいえば、それを規範とし、拘束されなければ芸道の道を通れないか、あるいは通るのに甚だ困難だということに、むしろその存在基盤がある』と述べている（西山松之助「近世芸道思想の特質とその展開」『近世芸道論 日本思想体系 61』所収, 岩波書店, p.596, 1972.）。

⁶² 日本の伝統的芸能や武道の稽古や修行では、「守・破・離」という修行段階の「守」が最も重んぜられ、その徹底性が追及されてきたという（源了圓『型と日本文化』創文社, p.49, 1992, 参照。）。

⁶³ 吉谷修「剣術型の構造と機能に関する研究—武道の文化的特性に関する研究の試論—」『日本武道学研究 渡邊一郎教授退官記念論集』渡邊一郎教授退官記念会, p.118, 1988, 参照。

⁶⁴ 中林信二『武道論考』中林信二先生遺作集刊行会, p.6, 1988, 参照。

⁶⁵ 源了圓氏は、日本の型の文化が、技術を基盤に置きつつ精神性を強くもっていることが日本の型の文化をきわめて個性的でありつつ、一つの普遍性をもつものに高めた理由であると述べている（源了圓『型と日本文化』創文社, p.49, 1992, 参照。）。

捉え、その在り方を追求していく西洋的技術観とは異なり、身体運動や技を定式化されたひとまとまりの運動として全体として把握し、理解させようとする態度であるという。したがって、一定程度までの技術を速やかに身に付けさせることが可能となるだけでなく、局面ごとに分析してしまうと消失してしまうであろう局面と局面の間に存在する「間」や「気」などを積極的に習得することができる⁶⁶。

そして、「かた」は原理的に同じものを再生、再現できる機能を有している。「かた」を身に付けたものは誰でも同じことを何度でも繰り返すことができ、文化の普及に大きく貢献し、時系列的に機能すれば、文化の伝承を容易にするという⁶⁷。

さて、「かた」には「型」と「形」という二種類の字があてられるため、本論における用法をここで定義しておきたい。まず、この二字について辞書的解釈をすると、「形」は、①形状、②事があったあとに残り、それがあったと知られるようなしるし。あとかた、③模様。あや、④占いの際に現れるしるし。うらかた、⑤銭の表。古銭、⑥物に似せて作った型。肖像。図画、⑦貸したしるしとして取った物。抵当、などの意味を持つという⁶⁸。この「形」は、外に現れ、目に見えるものであるとする捉え方が強いと考えられる。

一方、「型」は、①形を作り出すもとになるもの、鋳型・型紙などの類、②伝統・習慣として決まった形式、③武道・芸能・スポーツなどで規範となる方式、④ものを類に分けた時、それぞれの特質をよく表した典型。そのような形式・形態。タイプ・パターン、⑤決まった大きさ。サイズ、などの意味を持つことが述べられている⁶⁹。武芸における「かた」を表す字として主に使われているのは「型」の方である。また、この「型」は「形」のもとであるという。

次に、先行研究において「型」と「形」について、いかに住み分けがなされているか、みておくこととしたい。

まず、源了圓氏は、「型」は人間の動作によってつくられる形のうち、ある形がとくに選択され、その形を繰り返して洗練し、その形の現実化を持続的なものとしようとする努力・精進の結果、成就し、完成したいわば「形の形」ともいうようなものであると述べる。そして、「型」には機能性、合理性、安定性があり、演技者は自身が望むとき、いつもその形を演ずることができると述べている⁷⁰。この見解によれば、「型」は「形」を何度も繰り返していくことで洗練されていき、完成するものであると考えられる。そしてその「型」は

⁶⁶ 前林清和『近世日本武芸思想の研究』人文書院,pp.129,2006,参照。

⁶⁷ 前林清和『近世日本武芸思想の研究』人文書院,pp.129 - 130,2006,参照。

⁶⁸ 新村出『広辞苑第六版』岩波書店,p536,2008,参照。

⁶⁹ 新村出『広辞苑第六版』岩波書店,p536,2008,参照。

⁷⁰ 源了圓『型』創文社,pp.13-14,1989,参照。

機能性、合理性、安定性をもっているということである。

前林氏は、身体運動に限定した場合、「型」はある目的のために創出された一連の動作を、本人あるいは第三者が再び行うことを前提とし、ひとまとまりのパターンとして定式化したものであり、それを学ぼうとする者に対しての規範となると述べ、「型」は「形」の背後にあって「形」のあり方に影響を与えているという。また、能や武芸などの身体運動文化の場合、「型」は無機的であるが、「形」は命を持っているという⁷¹。

これら先行研究の知見を踏まえた上で、直心影流の伝書をみると、直心影流の伝書にみられるのは「形」という文字ばかりである。これについては、石垣安造『直心影流極意伝開』に「形は動を伴うものであるから『型』の字を用いたり、カタチと云ってはいけない⁷²」と、岩佐勝『鹿島神伝直心影流』に「直心影流の場合は、昔から『形』という表現が使われていたが、山田次朗吉は新しい時代を予感したのか『型』という漢字を意識して用いたようだ⁷³」とそれぞれ述べていることから、流派の中では、「形」と記されており、伝書の中で意識的に「型」「形」と漢字で区分するようなことはしていなかったようである。

本論では、直心影流においてどのような形が存在していたのか、またそれらの形の特徴などを主に考察する。したがって、本論では「形」を用いて表記するが、先行研究や参考文献を引用する際、「型」と表記されている場合はそのまま用いることとする。

(3) しない打ち込み稽古

直心影流の場合、上記の「かた」の修練に加え、しない打ち込み稽古が考察対象となる。しない打ち込み稽古とは、身を守る「道具」を身に付け、「しない」を用いて相手と自由に打ち合い、攻防を行う稽古法のことである。まずはこの稽古法が誕生した背景として、近世中期の剣術界の状況を把握しておきたい。

近世中期は、平和な世の中が続き、士風が退廃した時期であるといわれている⁷⁴。前述の通り、武芸者は流祖が創始し、流派間で保守されてきた形を学び、模倣することによって自流の技術や精神を学んでいた。しかし、剣術の場合、その技術は相手との関係の中で成立しており、実戦における攻防のほとんどは一過性の出来事である。形の中では攻防をいくつかパターン化し、実戦を想定した稽古をしていたに過ぎない⁷⁵。ここに形のみの稽古の限界があると考えられる。近世中期にもなると、全く戦闘を経験したことのない武士も現れたようで、修行者本人が実戦を経験しないことにより修練の効果が薄くなるのは避け

⁷¹ 前林清和『近世日本武芸思想の研究』人文書院,pp.176-179,2006,参照。

⁷² 石垣安造『直心影流極意伝開』島津書房,p.305,2001.

⁷³ 岩佐勝『鹿島神伝直心影流』武道振興會,p.92,2005.

⁷⁴ 富永堅吾『剣道五百年史』(復刻新版)島津書房,p.275,1996,参照。

⁷⁵ 前林清和『近世日本武芸思想の研究』人文書院,pp.139-140,2006,参照。

られなかったようである。こういった状況下で、形は外見上の形^{かたち}ばかりを学ぶためのものになっていき、そこに内在される精神や真髓を汲み取り学ぶこと以上に、見た目の派手さ、立派さなどが追及されるようになっていった。こういった剣術を「華法剣術」という⁷⁶。この事態を打開するため、しない打ち込み稽古が生まれ、実際に相手と打ち合う稽古がなされるようになった。つまり、しない打ち込み稽古自体が形稽古を補足するために導入されたものであり、形稽古では学ぶことのできない要素の修得が可能であると考えられる。

直心影流が自流の修練にしない打ち込み稽古を取り入れたことで、徐々に導入する流派が増えていったようであるが、一方で流派によっては伝統に固執し、しない打ち込み稽古を排斥し、批判する流派もあったという。また、しない打ち込み稽古を導入した側からも形のための稽古に固執する流派への非難もよく行われたという⁷⁷。用いるしないや道具については、流派によって長さや製法が異なっていたという⁷⁸。

次にこのしない打ち込み稽古に用いる用具について定義をしておく。

①しない、竹刀

まず、先行研究において、これらの語がいかに住み分けされているか確認しておきたい。ここでは『剣道五百年史』、『剣道事典—技術と文化の歴史—』、『剣道の歴史』における用法を確認していく。

『剣道五百年史』においては「竹刀」という語自体は剣術に竹刀を用いる以前から存在しており、槍術稽古に使用した稽古槍のことを「竹刀」と表記し、「チクトウ」と呼んでいたという。しないについては、しない、またしなえとって近世以前から幕末の頃まで両方の言葉が用いられ、文字は撓という字が最も多く遣われたという⁷⁹。

富永氏は袋しないについては「撓」の字を用いており、今日用いるような四つ割りのものを「竹刀」と表記している⁸⁰。

⁷⁶ 堀正平『大日本剣道史』剣道書刊行会, pp.87 - 88, 1934, 参照。

⁷⁷ 例えば心極細野流の山崎金兵衛利秀が寛政3年(1791)に著した『剣術義論』には、「まづ最初には、刀法^{しんきよくほそのりゅう}を習ひ修行すべし。夫より面・小手をあてて、ひたすらに打合^{うちあふ}べし。兎角打あふにしくはなし。しかりといへども、打合ひさへすれば上手になると一概に心得たるもよろしからず。業に委しき人に問ては打あひ、打合ひては尋ぬべし。刀法ばかりにて打合をせざれば、かた兵法といふて、勝負に益なし。しかれども刀法を正しくつかはざれば、術も伝へがたし」と、「かた」としない打ち込み稽古を併行して稽古することが記されており、どちらか一方による修練を批判している。本書は、剣を学ぶ意義を論じた啓蒙書として、初心の手引書として広く読まれたものである(山崎金兵衛利秀『剣術義論』, 渡辺一郎編『武道の名著』所収, 東京コピイ, p.124, 1979.)。

⁷⁸ 富永堅吾『剣道五百年史』(復刻新版) 島津書房, pp.277 - 279, 1996, 参照。

⁷⁹ 富永堅吾『剣道五百年史』(復刻新版) 島津書房, pp.446 - 447, 1996, 参照。

⁸⁰ 富永堅吾『剣道五百年史』(復刻新版) 島津書房, pp.450 - 451, 1996, 参照。

『剣道事典—技術と文化の歴史—』において、中村氏は、四つ割り竹の竹刀がいつ頃、誰によってつくられたのか、確定することは出来ないが、1800年前後から、「竹刀」と書いて「しない」と読むようになってきたことは間違いないという。長さは袋しないとはほぼ同じで、より腰の強いしないが工夫され、次第に四つ割りの竹刀に近づいていったものと思われる、と述べている⁸¹。

『剣道の歴史』においては「正徳年間（1711～16）に直心影流の長沼四郎左衛門国郷とその父山田平左衛門によって、面・籠手（小手）が工夫され、従来の袋しないよりは強固なものの使用が可能になった⁸²」と述べられており、天保期に至り、柳川藩士大石進が5尺3寸の長さにするために考案した現在とほぼ同型のものを「竹刀」と表記している⁸³。また、天保期以後の講武所において統一された3尺8寸のものは「しない」と記されている⁸⁴。

以上の先行研究においては、袋しないについて「しない」と「撓」の二つの表記が用いられるものの、四つ割りの形体のものについては、どの書も「竹刀」と表記している。本論においては、以上の用例に基づき、「竹刀」「しない」の語を使用する。直心影流で用いていたものについては、四つ割りの形体であったか不明であるため、「しない」と表記する。

②剣道具、防具、道具

しない打ち込み稽古のときに身を守るために装着する用具を指す、「剣道具」「防具」「道具」という語について先行研究の用例を確認しておきたい。

『剣道五百年史』において、富永氏は防具という語を一貫して用いており、「剣道具」「道具」とは述べていないようである⁸⁵。中村氏も『剣道事典—技術と文化の歴史—』においては、「防具」という語を用い、その発生から幕末期に至るまでその歴史について言及しているが、江戸時代に防具という語が使われた形跡はないと述べている⁸⁶。また氏は、『剣道の歴史』において「江戸初期の剣道具を描いた絵画作品や実物資料は乏しいので⁸⁷」「直心影流が道具を用いるようになった契機は⁸⁸」などと、「剣道具」・「道具」という語を用いている。ここで、問題となるのが近世剣術のものを指す場合、「剣道具」という語を適用できるかということである。通説では、「剣道」とは近代以降の名称であり、近世以前は「剣術」

⁸¹ 中村民雄『剣道事典—技術と文化の歴史—』島津書房, pp.99 - 100, 1996, 参照.

⁸² 全日本剣道連盟編『剣道の歴史』財団法人全日本剣道連盟, p. 13, 2003.

⁸³ 全日本剣道連盟編『剣道の歴史』財団法人全日本剣道連盟, pp.12 - 13, 2003, 参照.

⁸⁴ 全日本剣道連盟編『剣道の歴史』財団法人全日本剣道連盟, pp.289 - 294, 2003, 参照.

⁸⁵ 富永堅吾『剣道五百年史』（復刻新版）島津書房, pp.456 - 466, 1996, 参照.

⁸⁶ 中村民雄『剣道事典—技術と文化の歴史—』島津書房, pp.107 - 116, 1996, 参照.

⁸⁷ 全日本剣道連盟編『剣道の歴史』財団法人全日本剣道連盟 p. 245, 2003.

⁸⁸ 全日本剣道連盟編『剣道の歴史』財団法人全日本剣道連盟 p. 247, 2003.

と称されていたため⁸⁹、近世剣術において用いていたものを「剣道具」と称するのは不適切であると考え。したがって、本論においては、「道具」という語を用いて、しない打ち込み稽古のときに身に付ける用具を指すことを予め断っておく。

（４）剣術観

以上のように、師は弟子に「かた」やしない打ち込み稽古を指導し、自流のわざを学ばせ、心身を鍛練させていくが、この教授は「師の剣術に対する捉え方・考え方」に従ってなされることが考えられる。本稿では、この「剣術に対する考え方・捉え方」を「剣術観」と呼称する。先学でこの「剣術観」という語が用いられているのは、管見の限り、岡田一男氏の「江戸時代初期における儒学者の剣術観⁹⁰」（『武道学研究』第9巻2号所収, 1976.）と題した学会発表抄録のみである。従来、武道学研究においては、「剣道観」「稽古観」「師弟観」「刀剣観」「武芸観」などの語が用いられ、研究がなされてきたが、これらの用語の中で、明確に定義されているのは「刀剣観」のみである。酒井利信氏によれば、刀剣観とは「刀剣に関する観念⁹¹」である。「観念」とは辞書的な解釈をすると、①観察し思念すること。仏陀の姿や真理などに心を集中してよく考えること。②あきらめること。覚悟。③思考の対象となる意識の内容・心的形象の総称。山の観念、善悪の観念など。ギリシア語の「イデア」に由来。④物事に対する考え。見解⁹²であり、この場合、④の意味で用いられていると考えられる。この定義を踏まえ、他の用語をみてみると、例えば、「武芸観」という用語は、杉江正敏氏や菊本智之氏、高山基紀氏が使用しており⁹³、これらの論考において、「武芸観」という語は、「武芸についての捉え方、考え方」という意で使用されているとみてとれる。これらの事例に倣い、本論においても同様の意で「観」の字を用いるが、本論で取り扱う内容は、直心影流の剣士の剣術に対する見解であるため、「剣術観」という語を用いることが適当であると考え。本論において「剣術観」として取り扱う観念を具体的に述

⁸⁹ 全日本剣道連盟編『剣道の歴史』においても、近世は「剣術」、近代は「剣道」という住み分けをしていると考えられる（全日本剣道連盟編『剣道の歴史』財団法人全日本剣道連盟 pp. 9-15, 2003. 参照。）

⁹⁰ 岡田一男「江戸時代初期における儒学者の剣術観」『武道学研究』第9巻2号所収, 日本武道学会, pp. 78-79, 1976.

⁹¹ 酒井利信『日本精神史としての刀剣観』第一書房, p. 2, 2006.

⁹² 新村出『広辞苑第六版』, 岩波書店, p. 645, 2008, 参照.

⁹³ 杉江正敏「近世における養生思想と身体運動の関連について—松平定信の武芸観を中心として—」『日本武道学研究渡邊一郎教授退官記念論集』所収, 渡邊一郎教授退官記念会, pp. 173-203, 1988, 参照.

菊本智之「松平定信の武芸観とその政策」『武と知の新しい地平—体系的武道学研究をめざして—』所収, 昭和堂, pp. 142-160, 1998, 参照.

高山基紀「平山行蔵の武芸観に関する一考察」『武道文化の研究』所収, 渡邊一郎先生古稀記念論集刊行会, pp. 82-106, 1995, 参照.

べると、剣術の技術に対する考え方、剣術修行の在り方についての見解などである。
本論においては、剣術に対する捉え方・考え方である「剣術観」を伝書の中から読み取り、
これが修練形態の形成に影響を及ぼしているものとして考察を行う。

六、文献史料

次に本研究で取り扱う、文献史料について述べておきたい。

本研究は直心影流をはじめとする剣術の関係史料を読み込み、解釈を行う文献研究である。
以下、本論において引用・参照した史料を流派ごとにまとめ、成立年代順に列記しておく。
なお、原書については「原」、写本については「写」の文字を付記した。また、全日本剣道
連盟所蔵の鈴鹿家文書⁹⁴については、『全日本剣道連盟（写）鈴鹿家文書解説』（一）～（四）
を参考に、年代を記した。

（1）直心影流

長沼四郎左衛門国郷『直心影流目録口伝書』写,宝暦14年（1764）,文化3年（1806）以降
写,鈴鹿家文書,全日本剣道連盟蔵。

宇成之『大禾一件』原,安永2年（1773）東京長沼正兵衛家蔵。

赤石郡司兵衛孚祐『斑龍軒覚書』寛政2年（1790）,『武道伝書聚英第十二集』所収,宇都
宮大学教育学部,1990。

『長沼家伝直心影流伝書』写,享和2年（1802）以降写,鈴鹿家文書,全日本剣道連盟蔵。

『切紙聞書之辨書』写,文化3年（1806）鈴鹿家文書,全日本剣道連盟蔵。

佐藤郡兵衛『靈剣傳解』原,文政2年（1819）,熊本県立図書館蔵。佐藤郡兵衛

杉本新次郎『直心影流兵法窮理之巻』原,文政3年（1820）,小田原市立図書館蔵。

長沼秀門武七徳堂『切紙究理秘解弁』写,天保4年（1833）写,熊本県立図書館。

田代正容『直心影流窮理之巻注解秘書』原,天保9年（1838）,中京大学附属豊田図書館蔵。

男谷精一郎『武術雑話』天保14年（1843）,安政6年（1859）写,『武道伝書聚英第十二集』
所収,宇都宮大学教育学部,1990。

『直心影流秘書二』写,嘉永4年（1851）写本,鈴鹿家文書,全日本剣道連盟蔵。

小川棟吉郎『直心影流兵法目録』原,安政2年（1855）,小田原市立図書館蔵。

藤川整斎『靈剣略解』原,安政4年（1857）,東京国立博物館蔵。

窪田鏖三郎『兵法伝記』原,慶応3年（1867）,佐藤泰彦氏蔵。

⁹⁴ 鈴鹿家文書はかつての大日本武徳会武道専門学校が剣術を中心とし、全国に散在する武
術関係文献資料を収集したものであり、現在、全日本剣道連盟で所蔵されている（『全日本
剣道連盟所蔵（写）鈴鹿家文書解説（一）』財団法人全日本剣道連盟,p.4,2003,参照.）。

斎藤明信『直心影流剣術極意教授図解』井口魁真書楼,明治 34 (1901) .

『直心影流伝書集』写,明治 42 年 (1909) 鈴鹿家文書, 全日本剣道連盟蔵.

山田次朗吉『鹿島神伝直心影流』一橋剣友会,昭和 2 年 (1927) .

石垣辰雄『鹿島神伝直心影流極意』直心影流振興会, 昭和 10 年 (1935) .

山田次朗吉『剣道極意義解』一橋剣友会,昭和 12 年 (1937) .

『男谷先生行状録』原,年代未詳,熊本県立図書館蔵.

河崎藤之丞義追『鞘之内秘伝書』写,年代未詳, 鈴鹿家文書,全日本剣道連盟蔵.

『剪紙口授書』写,年代未詳,鈴鹿家文書,全日本剣道連盟蔵.

『三州遺芳 卷四』年代未詳,『武道伝書聚英 第十二集』所収,宇都宮大学教育学部,1990.

『直心影流秘書一』写,年代未詳,鈴鹿家文書,全日本剣道連盟蔵.

『直心影流秘書三』写,年代未詳,鈴鹿家文書,全日本剣道連盟蔵.

『整斎随筆』原,年代未詳,国立公文書館蔵.

『長沼国郷先生小伝』年代未詳,『武道伝書聚英 第十二集』所収,宇都宮大学教育学部,1990.

『長沼分家伝直心影流伝書』写,年代未詳,鈴鹿家文書,全日本剣道連盟蔵.

(2) 新陰流

上泉伊勢守信綱『燕飛序』永禄 9 年 (1566) ,『渡邊一郎先生自筆 近世武術史研究資料集』所収,渡邊一郎先生を偲ぶ会,2012.

(3) 真新陰流

小笠原源信斎『真之心陰兵法目録』原,寛文 10 年 (1670) ,小田原市立図書館蔵.

小笠原源信斎『真之心陰兵法免状』原,寛文 11 年, (1671) ,小田原市立図書館蔵.

(4) 直心流

神谷伝心斎『軍法非切書并入唐目録』写,寛文 3 年 (1663) ,天保 5 年 (1834) 写,熊本県立図書館蔵.

久須美順三郎『直心流伝書剪紙許状』嘉永 4 年 (1851) 『武道伝書聚英 第十二集』所収,宇都宮大学教育学部, 1990.

(5) 直心正統流

高橋弾正左衛門重治『直心正統流兵法免状』写,天和 3 年 (1683) ,『吟味之趣意』所収,鈴鹿家文書, 全日本剣道連盟蔵.

高橋弾正左衛門重治『稽古法定序并理歌』原,貞享 3 年 (1686) ,東京長沼正兵衛家蔵.

山田平左衛門光徳『直心正統流兵法目録』写,元禄 7 年 (1694) ,『吟味之趣意』所収,鈴鹿家文書,全日本剣道連盟蔵.

山田平左衛門光徳『兵法雜記』原,宝永～正徳年間頃,東京長沼正兵衛家蔵.

（6）その他の剣術流派

柳生宗矩『兵法家伝書』寛永 9 年（1632）,渡辺一郎校注,岩波文庫,1985.

小出切一雲『夕雲流剣術書』貞享 3 年（1686）,『武道伝書集成・第二集剣術諸流心法論集 上巻』所収,筑波大学武道文化研究会,1988.

川村弥五兵衛秀束『無住心剣辞足為経法集』享保 10 年（1725）『武道伝書集成・第二集剣術諸流心法論集 上巻』所収,筑波大学武道文化研究会,1988.

加藤田平八郎『加藤田平八郎東遊日記抄』写, 天保 9 年（1838）,鈴鹿家文書,全日本剣道連盟蔵.

千葉周作『剣法秘訣』年代未詳,千葉栄一郎編『千葉周作遺稿』所収,櫻華社,1942.

武藤七之介『神道無念流剣術心得書』原,年代未詳,国立国会図書館蔵.

また、剣術流派以外の関係史料については次のものを取り扱う。

『新発田藩月番日記』原,文政 2 年（1819）,新発田市立図書館蔵.

『新発田藩月番日記』原,弘化 2 年,（1845）新発田市立図書館蔵.

『新発田藩月番日記』原,安政 4 年,（1857）新発田市立図書館蔵.

清水礪洲『ありやなしや』安政 4 年（1857）,『続日本随筆大成 8』所収,吉川弘文館,1980.

『新発田藩月番日記』原,慶応 2 年,（1866）新発田市立図書館蔵.

新発田市史編纂委員会『新発田藩史料(1)藩主篇』新発田市史刊行事務局,1965.

第 一 章

直心影流の成立過程と分派

第一節 直心影流の伝系と伝承

本章においては、直心影流の成立過程について考察していく。成立過程を考察するにあたり、はじめに、後世の直心影流の伝書の中で語られている当流が成立するまでの伝系、ならびにその伝系に登場する人物に関する伝承の概要を把握する。

第一項 直心影流の伝系

まず、後世の直心影流の伝書において記されている、直心影流が成立するまでの伝系を以下に図1－1として記しておきたい。

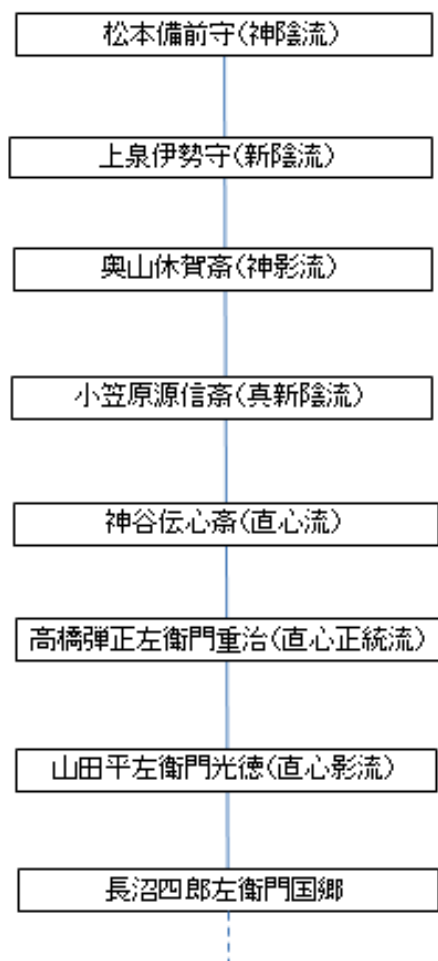


図1－1 直心影流成立までの伝系

図1-1からわかるように、直心影流は成立するまでに、流祖の松本備前守から流名を代々変更している。そして、山田平左衛門光徳が直心正統流を継承し、直心影流と改称することで直心影流の成立に至る。山田平左衛門光徳は子の長沼四郎左衛門国郷とともに当流を興隆させていったという。これが後世の直心影流の伝書で語られている成立過程である。

第二項 直心影流の伝書にみられる伝承

次に、後世の直心影流の伝書にみられる伝承を把握していくこととしたい。図1-1に記した松本備前守から、長沼四郎左衛門国郷までの各人物と、松本備前守の前に流派の起源として記される神話を対象とする。

本項において主に扱う史料は『兵法伝記』という伝書である。これは直心影流の成立以降、修行者全員に授与されていたもので⁹⁵、直心影流の歴史を伝系に沿って解説したものである。当流の起源とされる神話にはじまり、流祖松本備前守から人物を追って流派の流れが記述される。記述自体は、冒頭から直心影流を名乗ったとされる山田平左衛門光徳までは全て同様である。その後の長沼四郎左衛門国郷については、書によって記述に違いが見られ、さらに国郷以降は流派が分派していくため、記される人物についても違いが生じている。本項の考察では、記述内容が一定である光徳まで、男谷派の窪田鏐三郎⁹⁶が慶応3年（1867）に井上定次郎に与えたものを取り扱う。国郷の記述については複数の『兵法伝記』を取り扱うこととする。なお、『兵法伝記』の原文は漢文のみとなっているため、石垣安造⁹⁷『直心影流極意伝開』（島津書房、2001）を参考に返り点、ルビ、送り仮名を付した。

1. 流派の起源としての神話

『兵法伝記』では、流祖の松本備前守の前段として、タケミカヅチの活躍する国譲り神話を流派の起源として記している。まずは、この神話の記述についてみていく。

⁹⁵ 中村民雄氏によると、本書は初伝として渡される伝書であるという（中村民雄「幕末関東剣術流派伝播形態の研究（2）」『福島大学教育学部論集社会科学部門』第66号所収、福島大学教育学部 p.60,1999,参照.）。

⁹⁶ 新発田藩士で、はじめ長沼派に属していたが、後に藩命により、男谷精一郎に師事し、男谷派となった。新発田藩における男谷派直心影流の先駆者である。

⁹⁷ 石垣安造は、男谷精一郎の高弟、榊原鍵吉の弟子であった野見鍬次郎の子孫であり、男谷派に属する人物である。

凡日域之兵法稽其原委曰鹿島神流者伝言本朝将師之任起神代而其始

天照大神欲降天孫葦原中国之時遺經津主神^{人齋主神香取神是也}健雷神^{鹿島神是ナリ}令平諸不順者矣⁹⁸

以上が『兵法伝記』における神話の記述であるが、『直心影流窮理之卷注解秘書』においては、この記述を詳しく解説しているため、この書の記述についてみていくこととしたい。

鹿島神流者伝言本朝将師之任起神代而其初

鹿島神流者トハ其源ヲ稽ルニ神伝也、故ニ鹿島神流ト云、神陰流トモ云、伝言トハ昔ヨリ書伝言伝タル事也、本朝トハ日本ノ事ナリ、吾国ヲ尊テ称タル也、将師ノ任トハ大将モ兵士モ此兵法道ヲ自身ニ引受テ知ラ子ハナラヌト云事也、任ハ委任ト云テユタ子マカスル事也、起神代トハ、兵法ト云事、上大将下士卒マテ用ヒ子ハナラヌハ神代ヨリ初ル⁹⁹（読点筆者）

ここでは、流祖・松本備前守の流名は、神から授かったということに起因し、「鹿島神流」または「神陰流」と呼称する、と述べられている。

そして、当流の由来を古代神話に求める。以下はその一文である。

遺經津主神^{人齋主神香取神是也}健雷神^{鹿島神是ナリ}令平諸不順者矣

右ノ如ク天孫ノ欲降ノ時、悪神共此国ヲワタサシト云、鹿島香取ノ二神先手蒙ル、御当家国初ノ井伊藤堂両臣ノ如キ者ナリ、鹿島ハ至テノ武神故、利劍ノ鋒端ニ腰ヲ掛、此国ヲ渡スヤ否ヤト宜フ、武威ノ氣当リニ悪神平伏ス、是当流氣当リノ初ナリ、可信ノ第一也、後ニ香取神ハ下総国香取郡ニ鎮座ス、鹿島神ハ常陸国鹿島郡ニ鎮座ス、此両神吾朝兵ヲ用ル元祖ナリ、令平諸不順者矣トハ不従ヲ平也、平均ナリ、国ヲ平ニシタル事ナリ、此処迄ハ神言続ニ致事ナリ

神書曰、二神先出雲国ニ降テ、大貴己神ニ問曰、汝此国ノ将タリヤ天神ニ奉渡ヤ、対曰吾兒事代主射鳥遨遊シテ、三崎ニ在、今当ニ問テ報之遣使人訪焉曰、天神所求何ソ不奉哉、故ニ大己貴神其子ノ辞ヲ以ニ神報¹⁰⁰（読点、下線部筆者）

ここでは当流の起源として、国譲り神話を引き合いに出している。国譲り神話とは天上

⁹⁸ 『兵法伝記』慶応3年、佐藤泰彦氏蔵。

⁹⁹ 『直心影流窮理之卷注解秘書』天保9年、中京大学附属豊田図書館蔵。

¹⁰⁰ 『直心影流窮理之卷注解秘書』天保9年、中京大学附属豊田図書館蔵。

（高天原）の最高神であったアマテラスが地上（葦原中国）を治めていたオオクニヌシに使者を派遣し、葦原中国を差し出すように求める神話である。その 3 番目の使者がタケミカヅチである。タケミカヅチは古来武神、または剣の神とされている。

このように自流の由来として国譲り神話を語るのは、当流のみではないようであり、例えば日夏弥助繁高が正徳 4 年（1714）に著した『本朝武芸小伝』などにもみられることを酒井利信氏が指摘している。酒井氏はこの国譲り神話においてタケミカヅチが腰掛けた剣である「劔霊劔」が「平国の劔」であると述べ、この辺りの神話を根拠に、近世の劔術伝書において、刀劔が治国の表徴として捉えられていたことを論じている¹⁰¹。

酒井氏の論説から、国譲り神話を流派の起源として記すことは当流に限ったことではないことがわかるが、ここでは「鹿島ハ至テノ武神故、利劔ノ鋒端ニ腰ヲ掛、此国ヲ渡スヤ否ヤト宜フ、武威ノ気当リニ悪神平伏ス、是当流気当リノ初ナリ」という記述に注目しておきたい。タケミカヅチが劔の切先に腰掛け、国譲りを迫り、その武威によって、下界の神々を平定したと記されており、このタケミカヅチの武威こそが当流に伝わる気当りの始まりだとしている。つまり、自流の劔術が神に由来することを、気当りという具体例をもって述べているといえる。また、この「気当り」については、長沼四郎左衛門国郷が著したとされる『直心影流目録口伝書』においても「○鹿島神ノ此国ヲ渡スヤ否トノ玉フモ気当リ也¹⁰²」と記されており、こういった見解が国郷の頃から存在していたようである。

2. 松本備前守

直心影流の流祖とされる人物は松本備前守である。この人物については、その名前に関する論争が流派の中で長い間なされてきたようである。まず、流祖の名前について検討し、その後、直心影流の伝書で語られている伝承をみていくこととする。

（1）流祖の名前に関する論争

当流の流祖の名前については、「松本備前守」と「杉本備前守」とする説がある。はじめに、この流祖の名前が先行研究の中でどのように捉えられているかを把握する。

中村民雄氏は流祖の名前について、「通説では『松本』となっている。しかし、直心影流の伝書ではすべて『杉本』となっている¹⁰³」と述べている。氏が言及している通り、この「杉本」が「松本」の誤りであると指摘する先行研究が多い。また、この松本備前守につ

¹⁰¹ 酒井利信『日本精神史としての刀劔観』第一書房, pp.306-308, 2004. 参照.

¹⁰² 『直心影流目録口伝書』[写], 鈴鹿家文書, 全日本劔道連盟蔵

¹⁰³ 中村民雄「幕末関東劔術流派伝播形態の研究（2）」（『福島大学教育学部社会科学部門』第 66 号所収）福島大学教育学部, p.71, 1999.

いても「松本備前守尚勝（政信）」であるのか、それとも子の政元であるかで意見が分かれる。

それでは、諸先行研究において、流祖についていかに記されているか確認をしておきたい。

次の表 1-1 は各先行研究において①誰を直心影流の流祖としているか、②松本備前守についての説明、をまとめたものである。

表 1-1 先行研究における流祖の記述について

書名	①流祖	②松本備前守尚勝について
山田次朗吉 『日本剣道史』 (一橋剣友会, 1925)	松本備前守尚勝(政信)	<ul style="list-style-type: none"> ・生没年 応仁元年(1467)～大永4年(1524) ・常陸国鹿島神宮の祝部で、常陸の大掾鹿島氏の四家老の一人。 ・戦場の高名に槍を合わすること 23 度、首級を得ること百以上。 ・大永4年、高間ヶ原にて奮戦して横槍に脇腹を突かれて戦死。享年 57。
堀正平 『大日本剣道史』 (剣道書刊行会, 1934.)	松本備前守(尚勝か政元かについては言及せず)	<ul style="list-style-type: none"> ・生没年 応仁2年(1468)～大永4年(1524) ・槍を合わせること 23 度、高名の首 25 級、並の首を加えて、74 級に及んで、首供養を二度した。 ・高天ヶ原で4尺2寸の太刀を振って、津賀大膳其他八人を斬り、横槍に突かれて討死。
富永 堅吾 『剣道五百年史』 (百泉書房, 1971)	松本備前守 杉本は松の誤りであるが、下の名前については「後の考証を俟つ」と留めている。	<ul style="list-style-type: none"> ・鹿島神宮の祝部で、常陸の大掾鹿島氏の四家老の一人。 ・戦場の高名に槍を合わすること 23 度、高名の首 25、並の追い首 76 を取った。 ・大永4年(『鹿島治乱記』では大永3年)戦死。
綿谷 雪 『日本剣豪 100 選』 (秋田書店, 1971)	松本(右馬允)政元 杉本は松本の誤記	<ul style="list-style-type: none"> ・前後の戦いに槍を合わすこと 23 度、高名の首 25、並の追首 76 を取った。 ・高間ヶ原の戦いで討死。大永4年。享年 57 歳。
綿谷 雪・山田岳史 『武芸流派大事典』 (東京コピー, 1978)	松本(大炊助)政元 「杉本」は松本の誤記	<ul style="list-style-type: none"> ・鹿島神宮の祝部で、常陸の大掾鹿島氏の四家老の一人 ・戦場の高名に槍を合わすること 23 度、首級を 73 あげる。(『甲陽軍鑑』には首級 25、並の首 76) ・大永4年戦死。享年 57 (54 とも)
今村嘉雄 『日本武道大系 第三巻』 (同朋舎出版, 1982.)	松本備前守政信	<ul style="list-style-type: none"> ・生没年 応仁元年(1467)～大永4年(1524) ・常陸国鹿島神宮の祝部の家に生まれる。 ・高間ヶ原の戦いで交戦 23 度、首級を 100 以上あげて戦死。

横山健堂 『日本武道史』 (島津書房, 1991.)	山田平左衛門光徳(上泉が師事したのは、松本備前守政信としているが、直心影流の流祖としては記されていない。)	※松本備前守についての記述はみられない。
笹間 良彦 『日本武道辞典』 (柏書房, 2003.)	松杉いずれかが誤りであるが、松本と記した方が多いと指摘。	<ul style="list-style-type: none"> ・生没年 応仁元年(1467)～大永4年(1524) ・鹿島神宮の祝部で、常陸の大掾鹿島氏の四家老の1人 ・戦場の高名に槍を合わすこと 23 度、功名首 25、追首 76、二度の首供養に結向首一つ余也) ・大永四年戦死。享年 57 (54 とも)

まず、この表 1-1 から明らかであるのは、先行研究の多くが流祖の名を「杉本備前守」ではなく、「松本備前守」としていることである。その中でも綿谷氏のみが、尚勝の息子である政元を流祖とする立場をとっている。また、松本備前守尚勝(政信)については人物像や戦での功績、その最期などが諸書で言及されており、これらの根拠は『甲陽軍鑑』『常陸国誌』『鹿島治乱記』などによるようである。先行研究によれば、松本備前守は鹿島の祝部であり、鹿島家の四家老の一人であった。そして戦場において高名の者と 23 度槍を合わせ、多くの首を取るほど強かったという。しかし、大永4年(一説には大永3年)に高天原において戦死したといい、これが 57 歳のときであったようである。

先行研究のこれらの説に反して、男谷派の末裔である石垣安造が著した『直心影流極意伝開』(島津書房, 2001) では、流祖は「松本」ではなく、「杉本」であるという主張が展開されている。石垣氏は、当流の正しい流れを受け継いだ者は、正系の伝書、分派の伝書等、どの伝書にも杉本姓を明記していることを述べている¹⁰⁴。また、天保14年(1843)版行の『武術流祖録』の直心影流略系は松本性になっているが、これはあからさまに当流の『兵法伝記』から写し取った文で、姓だけを勝手に杉本から松本にすりかえて改変したものに他ならない¹⁰⁵、と指摘する。さらに、氏は当流の山田次朗吉を批判しており、山田次朗吉が流祖の名を「松本備前守尚勝」と公表してしまったことから、他流の者や時代考証家がこれを信じてしまったという¹⁰⁶。氏は山田次朗吉を否定する根拠として、山田次朗吉が発見した松本備前守の過去帳の年代を挙げ、『常陸国誌』によるとこの人物の没年は大永

¹⁰⁴ 石垣安造『直心影流極意伝開』島津書房, p.62, 2001, 参照.

¹⁰⁵ 石垣安造『直心影流極意伝開』島津書房, p.62, 2001, 参照.

¹⁰⁶ 石垣安造『直心影流極意伝開』島津書房, p.62, 2001, 参照.

4 年(1514)で過去帳記載の没年の天文 3 年(1534)と相当な年代のずれがあると指摘する¹⁰⁷。そして、杉本備前守と主張する理由については「杉」を「松」と読み間違えることはあるかも知れないが、名乗りの「政元」と「政信」では字が全く違い、見間違えるわけがないということ¹⁰⁸、元来口伝で杉本備前守政元という発音を伝承してきており、「スギモト」という発音はどう聞いても「マツモト」とは聞こえないことを述べている¹⁰⁹。

以上の主張を踏まえた上で、まず、修行の過程で全ての修行者に伝授される『兵法伝記』についてみると、ここでは、石垣氏の指摘の通り、「一 第一鹿嶋神流之元祖杉本備前守¹¹⁰」と、「松本備前守」ではなく、「杉本備前守」と記されている。次にこの『兵法伝記』の一文について補足を加えた記述が複数の伝書にみられるため、これらの記述をみていくこととしたい。この記述の内容についてまとめたものが、次の表 1-2 である。

表 1-2 伝書における流祖についての記述

伝書名・成立年代	松（杉）本備前守についての記述（読点筆者）
『長沼分家伝直心影流伝書』	○武芸小傳ニ松本備前守政信者出、飯篠長威斎之門為精妙云云、長威斎ハ天真正傳神道流ト号ス、鹿島香取ノ取合ニ鎗ヲ合スル義廿三度、ハレナル高名ノ首級廿五、並ノ追首七十六、三度首供養ニ結句一つ余之ト有り、杉本氏高名ノ事等、傳來スルトコロ前文ノ松本ト相同シ、元祖長叟先生碑文ニ杉本ニ作ル然ル時ト不可易
『直心影流兵法窮理 卷 口伝』	備前守ハ鹿島三郎トイフ人ノ幕下ニテ、兵法コゝロサス深事シテ修行致サレ候得共、其發明ナキヲナケカレ、鹿島ノ廣前ニ、七日七夜参籠ナサレテ、祈願致サレ候所、満夜、明神枕神ニタゞセラレ、源九郎義経所奉納之所也
『直心影流兵法窮理 秘録』	一、第一鹿嶋神流之元祖杉本備前守紀政元住于常陸国 政元ハ足利ノ時ノ人也、常州鹿島郡ニ居住シ、紀氏ノ者武ノ内ノ宿称ノ末孫也、七万石ヲ領セシ鹿島三郎ノ幕下也、其頃ハ戦国故日々攻戦アリ、政元刀鎗達人功名場数ノ人也、場中鎗ヲ合ス事十三度、三十三ノ首供養三度シテ首ノ余リタルト云、傳其勇無双也
『切紙究理秘解弁』	備前守ハ足利時代之人、三百年 ^{明和ノ初迄} 可也、鹿島三郎砌ト云人ノ幕下ニテ、武功ノ人也、一番鎗十三度トモ、十七度トモ云、三十三ノ首塚三度立タルトモ、マダ首ガ除リシト也 （中略） 田邊倫曰、武内宿称ノ後裔、杉本備前守紀政元ハ鹿島ノ三郎ノ麾下ニ属シテ、常陸国ニ住ス、政元鹿島神宮ニ参籠シテ靈夢ヲ蒙リ、一卷ノ書ヲ授ル、是則義経奉納スル所ノ書ニシテ、鬼一カ傳ル処也、願書添義経運ヲ開キ玉ハバ、復去シ下サン事ノ由、政元此書ヲ得テ其妙旨ヲ悟ル、コレ神ノ久敷秘陰シ玉フ書ナレハ、神陰流ト称シテ、多クノ門人ニ附興ス云云、政元戦功多ク世ニ勇名傳ル

¹⁰⁷ 石垣安造『直心影流極意伝開』島津書房、p.64、2001,参照.

¹⁰⁸ 石垣安造『直心影流極意伝開』島津書房、p.64、2001,参照.

¹⁰⁹ 石垣安造『直心影流極意伝開』島津書房、p.64、2001,参照.

¹¹⁰ 『兵法伝記』慶応 3 年、佐藤泰彦氏蔵.

	<p>(中略)</p> <p>武芸小傳曰、松本備前守政信者出飯篠長威斎之門為精妙云云、長威斎ハ天真正傳神道流ト号ス、又政信ハ鹿島香取ノ取合ニ鎗ヲ合スル事廿三度、ハレナル高名之首数廿五、並ノ首七十六三度ノ首供養ニ結句首一ツ余也トアリ、杉本氏高名ノ事等伝来スル処、前文ノ松本トマサニ相同ジ、長叟先生碑文ヲ杉本ニ作ル然ル時ハ、師家ノ傳ル処易ヘスヘカラス、田邊為倫弟子問答ニモ師傳ヲ信シテ可ナラトアリ、後哲ノ糺明セン事ヲ只冀ノミ</p>
『切紙聞書之辨書』 文化 3 年(1806)	<p>第一鹿島神流之元祖杉本備前守紀政元住干常陸國</p> <p>政元ハ足利ノ時ノ人也、常州鹿島郡ニ住居ス、紀氏ノ者武内宿祢ノ末孫也、七万石ヲ領セシ鹿島三郎ノ幕下也、其頃ハ戦国故日々攻戦アリ、政元刀鎗ノ達人、功名場数ノ人也、場中ノ鎗ヲ合事十三度、三十三ノ者首供養三度シテ首余リタルト云、其勇無雙也</p>
斎藤明信 『直心影流極意教授 図解』 明治 34 年 (1901)	<p>第一元祖抑鹿島神流は、杉本備前守紀政元を以て祖とす、政元旦暮鹿島宮を祈念す、其信心の奇特にや或夜夢の告げありて、一卷の書を授け賜ふ、是神傳靈劍の妙術なり、是より法定の太刀筋生じたる也、一卷の書や源九郎義経公鹿島宮へ納められたるものにて、六韜三略の秘傳なり、此書を授かりてより劍術の奥義を極め、名人の位を得られたりき、全く神より授りたる秘傳なる故を以て、神の御陰にて此術を得たりといふ所より、是を称して神陰流といふ、杉本氏は常州鹿島郡に住し、桓武天皇の後胤にして一大に戦場に出て槍を合すること、幾度なるを知らずといへとも、抜群の高名を顕はせしは廿三度也、といふ、大永の頃に向ひ敵八人を薙伏せし時、脇槍の為に胸板の外れを突れ、年五拾八才にして討死せられたり、実に惜しむべき事なり</p>
『直心影流伝書集』 明治 42 年(1909)	<p>第一 元祖杉本備前守紀政元 桓武天皇ノ後胤ニシテ常陸國鹿島郷ニ住ス、幼ヨリ劍法ヲ学ヒ、其技ニ熟ス、然レトモ戦場ニ於テ抜群ノ功ヲ奏スルコト能ハス、是ニ於テ発憤シテ、鹿島神祠ニ詣テ兵法ノ奥義ヲ授ケラレンコトヲ祈願スルコト七昼夜、結願ノ夜、神夢ニ靈劍ノ妙術ヲ授ケラレ、又タ神祠内常陸分文ノ箱ヲ開キ見レバ、源義経奥州下向ノ時鹿島祠ニ奉納セラレタル、鬼一法眼伝来ノ六韜三略ノ秘傳書ト義経ノ願文ナリ、依リテ靈夢ニ授ケラレタル神伝靈劍ノ妙術ヲ、神前ノ櫛ヲ伐テ木劍トナシ、之ヲ試ミシニ心氣劍一致シテ劍道ノ真理ヲ悟ル、此靈劍ヨリシテ法定ノ太刀筋ヲ生ス、依リテ一流ヲ開キ名ケテ神陰流ト称ス、之レ全ク神ヨリ授ケラレタル秘伝ナルヲ以テ、神ノ御陰ニテ此術ヲ得タルヲ以テナリ、後チ山名宗全ト細川勝元ト七年戦ノ時ハ、鹿島ノ旗頭トシテ出陣シ、一代中鎗ヲ合スルコト幾度ナルヲ知ラスト雖モ、抜群ノ高名ヲ顕ハセシモノ廿三度、一番鋒十三度、首供養三度致サレシト云フ、大永ノ頃高天ヶ原ノ戦ニテ、四尺三寸ノ薙刀ヲ以テ、大敵ノ中ニ向ヒ敵八人ヲ薙伏セシトキ、脇槍ノ為メニ胸板ノ外レヲ突カレ、戦死サレタリ時二年五十八歳</p>
山田次朗吉 『剣道極意義解』 昭和 12 年(1937)	<p>杉本ト云ハ誤リナリ。又政元ト云モ非也。</p> <p>松本ハ常陸國ノ鹿島左衛門大夫ノ宿老トテ代々ノ家老三人ノ内ノ一人也。左衛門大夫ハ桓武天皇ノ末葉也。 (中略) 朝夕被夜鹿島ノ神前ヘ祈リ奉リ神ノ御心ニ契御約束申シ上ゲ、是非々々劍術ノ奥儀ヲ授ケ給ヘト奉願タル事也。 (中略) 信心ノ奇特ニテ或夜夢アリ。猶一ノ巻物ヲ授ケ賜リタリ。是則神伝靈劍ノ太刀筋也。是ヨリ法定ノ太刀筋生レタル也。其巻物ハ源九郎義経ノ奉納スル所ノ書ニテ、太公望ノ六韜三略ノ伝也。是ハ鬼一法眼ヨリ義経ヘ伝授ノ巻物ナリ、之ヲ授リテヨリ熟練シテ劍術ノ奥儀ヲ發明ナサレ、名人トナリタル也。右巻物ノ伝ハ来ル則ハ迎ヘ去ル則ハ送ル</p>


	云々是ナリ。（中略）松本氏ハ常州鹿島郡ノ人ニテ桓武天皇ノ後胤ニシテ、一代ニ鎗ヲ合スルコト二十三度、晴ノ高名二十五度、並ニ追首ヲ取コト七十六、大永年間高天ヶ原ノ合戦ニ四尺三寸ノ薙刀ヲ以テ大勢ノ中ニ割テ入り、向敵七八人ヲ薙伏セシニ脇槍ニ胸板ノ外レヲ突カレ五十八歳ニテ討死スト云。
--	---

以上の表1-2からこれらの伝書において記述されている流祖の説明はおおよそ次のようにまとめることができる。

- ・鹿島の住人であり、鹿島三郎の家臣であった。
- ・武内宿称の子孫であるという説と、桓武天皇の子孫であるという説がある。
- ・合戦に数十回出向き、多くの武将の首をとった（高名な武将の首を 25、並の武将の首を 76 という記述がある）。33 人の首供養を 3 回行っても首が余った。
- ・鹿島神宮において参籠し、祈願した結果、夢の中で神から源義経が奉納したとされる一巻の巻物を授かり、その結果、極意を悟り、神陰流を興した（『直心影流極意教授図解』『直心影流伝書集』『剣道極意義解』では、備前守が靈剣の妙術を授かり、その靈剣の妙術を基に法定の形が創られたとされている）。
- ・大永年間、高天原にて脇槍を受け、58 歳で戦死した。

これらの記述は、先行研究において述べられている「松本備前守」の記述とほぼ同様のものであるとみて大過ないであろう。先学において流祖が「杉本備前守」ではなく、「松本備前守」であると論じられてきた根拠はこの辺りにあると考えられる。

これらの記述の中で特に注目すべきは、『長沼分家伝直心影流伝書』と『切紙究理秘解弁』にみられる「杉本氏高名ノ事等伝来スル処、前文ノ松本トマサニ相同ジ、長叟先生碑文ヲ杉本ニ作ル、然ル時ハ師家ノ傳ル処、易ヘスヘカラス¹¹¹」という記述である。この記述から、杉本備前守の高名な伝承が『本朝武芸小伝』における松本備前守の伝承と同様であることが窺える。そして長沼四郎左衛門国郷の碑文が「杉本」となっていることを挙げ、これまで伝わってきたものであるから変えるべきでない、という主張がなされている。つまり、これらの記述において、松本備前守と伝承の内容が同一でありながら、なお「杉本」と表記されるのは、長沼四郎左衛門国郷の碑文に「杉本」と記されているからに他ならないということである。このことから、「杉本氏高名ノ事等伝来スル処、前文ノ松本トマサニ相同ジ」とあるように、伝書が継承されていく中で、流祖とされる「杉本備前守」が「松本備前守」の間違いであることは既に認識されていたようであるが、国郷の碑文に「杉本」と記されており、これをむやみに「松本」に変更することが懸念されたため、杉本姓のま

¹¹¹ 『切紙究理秘解弁』, 天保4年，熊本県立図書館。

ま伝承されてきたと考えられる。

以上のことから「杉本備前守」は「松本備前守」と同一人物であると考えられるため、本論においては以下、流祖を松本備前守に統一しておくこととする。

（２）松本備前守についての伝承

次に直心影流の伝書において、流祖・松本備前守についてどのような伝承がなされているかみていくこととしたい。次は『兵法伝記』における松本備前守についての記述である。

一 第一鹿嶋神流之元祖杉本備前守紀政元^ハ住シ^ニ干常陸國^ニ且暮奉^リ祈^リ鹿島之広前^ニ而契^ニ神慮^ニ一夜夢^ニ授^ケ賜フ一巻之書^ヲ→源九郎義経所奉納之書也ト云正^ニ是^レ為^ス神伝^ト之故^ニ称^{シテ}之^ヲ曰^フ神陰流^ト¹¹²（返り点、送り仮名、筆者）

この記述においては、常陸国の住人であった松本備前守が朝夕鹿島の神前において祈願したところ、ある夜、夢に神が現れ、源義経が奉納したという一巻の書を授かった。そのため、まさしく神から授かったという意を込めて、自流を「神陰流」と名乗ったという。松本備前守は鹿島神宮に参籠した結果、神から極意を授かったという伝承がなされているが、このことに関する記述について、直心影流の他の伝書から補足しておきたい。

政元鹿島神宮ニ参籠シテ、霊夢ヲ蒙リ一巻ノ書ヲ授ル、是則義経奉納スル所ノ書ニシテ鬼一カ傳ル処也、願書添義経運ヲ開キ玉ハバ、復去シ下サン事ノ由、政元此書ヲ得テ、其妙旨ヲ悟ルコレ、神ノ久敷秘陰シ玉フ書ナレハ、神陰流ト称シテ多クノ門人ニ附興ス¹¹³（読点筆者）

この記述からわかることとしては、流祖が霊夢を介して授かった書というのは元々鬼一法眼¹¹⁴から義経に伝えられたものであるということである。

また、この記述においては「神陰」の意味を「神が長い間秘してきた」という意であるとしている。「神陰流」の名の由来について諸説あるようだが、神から授かったという点は共通した認識である。

¹¹² 『兵法伝記』慶応3年、佐藤泰彦氏蔵。

¹¹³ 『剪紙口授書』^写、鈴鹿家文書、全日本剣道連盟蔵。

¹¹⁴ 鬼一法眼とは、義経伝説に登場する陰陽師で六韜兵法を伝授していたとされる。義経はこの兵法をひそかに写し取ったという（下中邦彦『日本架空伝承人名事典』平凡社、p.162,1986,参照.）。

直心影流の伝書では、流派の成立に鹿島の神であるタケミカヅチと鹿島と縁が深い松本備前守が関わっているといえる。

3. 上泉伊勢守～小笠原源信斎

流祖・松本備前守の後には、上泉伊勢守（新陰流）が流儀を継承したとされている。そして、その後、流儀は奥山休賀斎（神影流）、小笠原源信斎（真新陰流）と継承されていく。ここでは人物別に伝承をみていくこととしたい。

（1）新陰流・上泉伊勢守

松本備前守の後には新陰流の上泉伊勢守が継ぐ。先学によれば彼は鹿島・香取において発展していた神道流系統の剣術も学んでいたようで、さらに塚原ト伝とも関係があったとされているが¹¹⁵、特に愛洲移香が興した陰流の影響を受けているとされており¹¹⁶、陰流系統に属する人物である。しかし、直心影流においては、愛洲移香と上泉伊勢守の関係について、「或人云、九州鶴戸岩窟ニ而、愛洲惟孝ト云人、霊夢ヲ得而、兵法ヲ自得シタリ、上泉其伝ヲ得タリト言ハ非也¹¹⁷」と述べられており、上泉が愛洲移香から伝を得たことを否定している。直心影流の伝書においては、あくまでも上泉伊勢守は松本備前守の神陰流の正統であるという態度がとられているといえる。

『兵法伝記』においては、上泉伊勢守について次のように記述されている。

一 第二上泉伊勢守藤原秀綱者杉本門下之正統而兵法之達人也以テ鹿流^{まさ}ヲ^{まさ}恐レ^{まさ}神ノ字ヲ改メ^{まさ}神陰ヲ^{まさ}而称ス^{まさ}乎新陰ト^{まさ}¹¹⁸（返り点、ルビ、送り仮名、筆者）

上泉伊勢守は松本（杉本）門下の正統で、兵法の達人であるという。「鹿流」というのは鹿島神伝神陰流の意である¹¹⁹。上泉伊勢守は松本備前守から流儀を継承にするにあたり、この神陰流の「神」の字を恐れ多く感じ、「新陰流」と称するようになったということである。このことについて『切紙聞書之辨書』には「上泉ハ杉本ヨリノ伝授故、神ノ字ヲ恐レ流号ヲ改、新陰トス、日々新ノ意ニテ、新ノ字ニ改タル由、一説ニ親ノ意トモ云¹²⁰」（読点筆者）と記されており、上泉伊勢守が神の字を恐れたのは、自身が鹿島の神ではなく、松

¹¹⁵ 下川潮『剣道の発達』（大日本武徳会本部，pp.185-186，1925.）や富永堅吾『剣道五百年史』（復刻新版，島津書房，p.34，1996.）において述べられている。

¹¹⁶ 綿谷雪・山田忠文編『武芸流派大事典』東京コピー，p.385，1978，参照。

¹¹⁷ 『剪紙口授書』^写，鈴鹿家文書，全日本剣道連盟蔵

¹¹⁸ 『兵法伝記』慶応3年，佐藤泰彦氏蔵。

¹¹⁹ 石垣安造『直心影流極意伝開』島津書房，p.65，2001，参照。

¹²⁰ 『切紙聞書之辨書』^写，鈴鹿家文書，全日本剣道連盟蔵。

本備前守から流儀を授かったためであること、そして「日々新」の意味を込め、新陰流と称したという伝承がなされている。

（２）神影流・奥山休賀斎

次に上泉伊勢守の新陰流を継承した奥山休賀斎について、『兵法伝記』からその伝承についてみていく。

一 第三奥山孫次郎平公重後ニ号ス休賀斎ト考ルニ一流之家系ヲ其先ハ奥平家之末裔也、継ギ上泉伊勢守兵法之正統ヲ而以テ住スルコトニ干三洲奥山ニ年尚シ日夜詣テ至リ於奥山産神之社ニ祈願ス為ランコトヲ兵法之津梁ニ或夜夢リ夢ニ於神託ヲ改メ新陰ヲ号ス神影ト爾後舞フコトヲ剣ヲ如シ影ノ随フガ形ニ警策シテ門人ヲ以テ震イ威風ヲ於東海ニ一箇モ無シテ対スルニ其刃ニ者上矣既ニ而奉リ始メ東照宮君ヲ至リ秀忠公及ビ御連枝ニ共ニ夢リ台命ヲ以テ奉ル授ケ兵法之奥義ヲ¹²¹（返り点、送り仮名、筆者）

奥山休賀斎の祖先は奥平家の末裔であるという¹²²。上泉伊勢守の兵法の正統を継ぎ、三洲の奥山に長く住み、日夜奥山産神に参籠し、兵法の橋渡しになることを祈願したところ、ある夜夢を介して神託を蒙り、新陰流を改め神影流と称したという。奥山休賀斎についても参籠修行の結果、神から神託を受けていることが窺える。その後、徳川家康や秀忠ならびにその兄弟に兵法の奥義を授けたと言われている。

『切紙聞書之辨書』には次のような記述がみられる。

上泉ハ甲州ヲ退出、常州鹿島ニ参詣シテ、夫ヨリ東海道筋段々執行三河ニ至リシ時、奥山是ヲ聞キ、入門ス、シカシ奥山一人ニ足ヲ止ム事難レ成、前五十日後五十日、シヒテ百日バカリ昼夜修行シテ、事究メ、免許ヲ受、当時ノヤウニ年数掛、修行ハ不出来故、得度ナキ事多ク、底解セサルニ付、奥山産神ヘ祈リ、日本無二ノ兵法ニ成テ、高名ナラント丹誠シ、七ヶ日神前ニ参籠ス、満願ノ夜神夢有テ、摩利支天ノ剣ト云フ授ル、此剣ハ吾一体ヲ神ニ

¹²¹ 『兵法伝記』慶応3年、佐藤泰彦氏蔵。

¹²² 『新訂 徳川家康文書の研究 上巻』（日本学術振興会,1980.）や『戦国人名辞典』（吉川弘文館,2006.）においては、奥平久賀斎と記されている。久賀斎は奥平貞能の家臣であったようである。奥平貞能は三河国作手の戦国武将である。元亀元年（1570）の姉川の戦いの時、貞能の弟・信昌が戦功を立てたことに徳川家康は大いに感心したという。そして家康は、信昌が久賀斎に就いて奥山流の剣法を学んだことを知り、自ら入門したという（中村孝也『新訂 徳川家康文書の研究 上巻』日本学術振興会,p.220,1980,参照.）。

成スマシテ明ニ勝負セイト云伝也、夫ヨリ發明アリ¹²³（読点筆者）

上泉伊勢守は甲州を出て、鹿島を参詣してから東海道に至った。上泉が三河国についた時、奥山休賀斎はこれを聞きつけ、上泉に入門したという。しかし、上泉伊勢守は休賀斎一人の為にその足を止めることができなかったため、奥山は上泉に百日ほど就き、修行をしたという。修行の結果、免許を得るが、得心のいかないことが多かったため、奥山産神に参籠し、祈祷した結果、極意を授かったとされている。奥山休賀斎が上泉に師事したのは短期間であり、その時の修行だけでは極意を悟ることが出来なかったため、参籠修行を行ったという伝承がなされている。

（3）真新陰流・小笠原源信斎

神影流の奥山休賀斎の後には、真新陰流の小笠原源信斎という人物が続く。

『兵法伝記』において小笠原源信斎は次のように記されている。

一 第四小笠原金左衛門尉源長治、後号ス源信斎ト、兵法熟練ニ而入唐シ更ニ得妙術ヲ還、奥山一流之正統也、有テ故改メ神影之名ヲ曰フ真新陰ト、百練精金色転鮮ナリ¹²⁴（返り点、送り仮名、筆者）

この記述によると、小笠原源信斎は兵法が熟練した後に、中国に渡り、更に妙術を得て帰国したということである。奥山休賀斎の正統であり、神影の名を、真新陰流と改めたという。末尾の「百練精金色転鮮」の部分は源信斎の剣技の鮮やかさを褒め称えた句である¹²⁵。

ここでは、中国に渡り、妙術を得たという記述に注目しておきたい。『剪紙口授書』における小笠原源信斎の記述について「入唐シテ門人多シ張良ガ戈ノ伝ト云フ伝来ス¹²⁶」。と記されており、源信斎が得たこの妙術とは、張良の戈の術であったという。さらに『直心影流伝書集』に収録された『兵法伝記¹²⁷』における次の記述をみておきたい。

日本ヲ去リ入唐シ、大イニ兵法ヲ講シ明人共門下ニ入り、業ヲ受クルモノ数千人又タ

¹²³ 『切紙聞書之辨書』, 鈴鹿家文書, 全日本剣道連盟蔵。

¹²⁴ 『兵法伝記』慶応3年, 佐藤泰彦氏蔵。

¹²⁵ 石垣安造『直心影流極意伝開』島津書房, p.82, 2001, 参照。

¹²⁶ 『剪紙口授書』鈴鹿家文書, 全日本剣道連盟蔵。

¹²⁷ この『直心影流伝書集』に収録された『兵法伝記』は通常伝授されているものに比べ、詳細に記述されている。伝記を追っていくと、第13代高山峰三郎まで記載されており、高山が明治33年に没していることからこの伝記は明治33年以降に著されたようである。

明国伝来ノ剣法ヲ究ム、門人中漢張良ノ正統アリ、此者ヨリ張良ノ秘伝張良鋒ノ伝ヲ八寸ノ延鉄（曲尺）ノ術ヲ自得シ、帰朝ノ後チ、彼我ノ術ヲ折衷シテ、撓（韜）十四本ノ形ヲ工夫シテ伝ヘラル¹²⁸（読点筆者）

源信斎が中国に渡り、門人を取り、兵法の指南をしていたところ、その中に漢の張良の正統を継ぐものがおり、この人物から張良の秘伝である「八寸の延鉄」という術を得たという。この秘術は『切紙聞書之辨書』に「其勤方ハ、順ニ打ト四寸延、足ヲ不出ニ体ヲヒ子リテ打ト、八寸ノ延曲ト云¹²⁹」と記されているように、打つ時に太刀を4寸伸ばし、足を出さずに体を捻って打つというような遣い方であったという。

そして日本に戻った後、自身の剣術と張良の秘術を融合させ、新たな形を創出したという。この形については第三章において詳述するが、「十之形」という袋しないを用いて行う形である。直心影流の伝書においては、小笠原源信斎の頃に十之形が成立したと伝承されている。

4. 神谷伝心斎～長沼四郎左衛門国郷

ここでは、小笠原源信斎の真新陰流を継承し、新陰直心流を創始したとされる神谷伝心斎からその後の直心正統流を経て直心影流に至るまでの伝承をみていくこととする。

（1）新陰直心流・神谷伝心斎

小笠原源信斎の後は神谷伝心斎が継ぎ、新陰直心流を名乗る。流名からもわかるように、この神谷伝心斎から流名に「直心」の語を用いるようになる。

次の文は『兵法伝記』の一文である。

一 第五神谷文左衛門尉平直光、後号ス_二伝心斎ト_一最英霊也、改ス_二真新陰ヲ_一曰_二新陰直心流ト_一伝テ言、神ハ則チ心也、新ニ直ニ指テ而竟ニ做ス_二流之称ト_一¹³⁰（返り点、送り仮名、筆者）

神谷伝心斎は真新陰流を改称して新陰直心流と名乗ったという。名称の意味としては、「神ハ則チ心ナリトハ、神ハ誠清浄ナル、少モ情欲ノ無キ天地ト同一体ナルカ神ノ処也、心ハ人ノ心ニテ私欲ニ暗クナルナリ、夫ヲ兵法ニハマリ、己ニ克チ十悪ヲ去リ、満キツタル処、

¹²⁸ 『直心影流伝書集』写，鈴鹿家文書，全日本剣道連盟蔵。

¹²⁹ 『切紙聞書之辨書』写，鈴鹿家文書，全日本剣道連盟蔵。

¹³⁰ 『兵法伝記』慶応3年，佐藤泰彦氏蔵。

神心不二也、心ガ神ニナリ、一杯ニ充処、新ニ直ニソレコソガ神トユヒ指スノ事也¹³¹」とあるように、「直」というのは「それ」などという指示語であり、「心」は「神」を指しているようである。

また、伝心斎が小笠原源信斎から流儀を継承するにあたっては次のような伝承が記されている。

源信帰朝シ、小綱町ニテ繁昌ヲ聞、伝心ハ無我ナル人故、門入シテ日々修行セシニ、或日高弟ノ針谷五郎右エ門石雲、野村長門、鞠安円四郎等、源信ニ問テ曰、宮本武蔵カ兵法ハ如何ニテ候哉、源信答テ曰、誠ノ名人ハ武蔵ナリト云、伝心末席ヨリ進出申ハ、只今ノ御答ハ不審ニ存ルナリ、門人ノ暗キヲ明メサスヲ名人ト云、又誘引シテ達人ナラシムルヲ上手ト云ニ、武蔵ハ左ニテハ無ク、手頃ノ者ヲ打挫キ打倒シ、力ノ剛強ニ任セルナリ、中々以テ上手名人ノ位ニ非ス、覇者也ト云、源信以テノ外立腹シ、我ハ武蔵ヲ殊ノ外信仰也、吾武蔵ニ成、相手ニスヘシト云、止事ヲ不得、立合フ、源信ハ武蔵ノ名代故、両刀ヲ以テ、トツカツト云構ヘ仕掛ル、伝心ハ上段ニ構ヘ、曲尺マテ仕掛ルニ、互ヒ動モナキ故、伝心靈剣ノ意ニテ、右転左転ト動カシ、下段ニスレハ、源信トツカツニテ、上ヨリ挟ミ押ヘントス、伝心下ヨリハ子飛スレハ、二刀トモハ子飛シ返ス、太刀ニテ打割ル、源信殊外感シ、真ニ摩利支天ノ化神也ト称美シ、流義ノ極意并ニ朱印墨印マテ相授ケ、五百人ノ門人皆譲リ我カ本意モ達タレハ、遠州ニ帰ルト云、一説ニ未修行モ足スト云テ、伊豆奈山引籠リ行方知レズニ成タルトモ云伝ヘリ¹³²（読点筆者）

ある日、源信斎の高弟たちが、源信斎に「宮本武蔵の兵法はどのようなものですか」と尋ねたところ、源信斎は「誠の名人は武蔵である」と答えた。この問答を聞いた伝心斎は末席から進み出て、「今の答えは疑わしい、道理に暗い門人を明るくさせる者を名人と呼び、門人を誘い、引き入れて達人にさせる者を上手と呼ぶのに対し、武蔵はそういった人物ではなく、手頃な者を打ち負かし、力の剛強に任せるだけである。上手や名人という位ではなく覇者である」と述べた。源信斎はこの言動に腹を立て、「私は武蔵を殊の外信仰している、私が武蔵に成り変わり、相手になろう」と言い、伝心斎はやむを得ず師と立合うこととなった。立合いの結果は、上から挟み押さえようとしてきた源信斎の二刀を伝心斎が下から跳ね飛ばし、返す太刀でそのまま源信斎を打ち、勝利した。負けた源信斎は伝心斎を

¹³¹ 『切紙聞書之辨書』写，鈴鹿家文書，全日本剣道連盟蔵。

¹³² 『切紙聞書之辨書』写，鈴鹿家文書，全日本剣道連盟蔵。

「摩利支天の化身である」と称賛し、流儀の極意ならびに朱印・墨印そして 500 人もの自分の門人もすべて譲り、去ったという。

真新陰流から新陰直心流に至る伝承は、弟子が師を負かすことにより免許を授かるという、直心影流の伝系の中でも、他の師弟間においてはみることのできない伝承がなされている。

（２）直心正統流・高橋弾正左衛門重治

神谷伝心斎の後は高橋弾正左衛門重治が流儀を継承し、直心正統流を名乗っている。彼は神谷伝心斎に師事し、修行の甲斐あって伝心斎が免許を授けた 33 人の弟子のうち、最も優れていたという¹³³。次は『兵法伝記』の記述である。

一 第六高橋弾正左衛門尉源重治、後号ス直翁斎ト寛永ヨリ而至リ元禄ニ誘引シテ門人ヲ務ム兵法ヲ、歎キ下流派多端ニシテ而混ズルヲ中支流上、故ニ以テ直心正統ヲ為ス吾言之流号ト¹³⁴
(返り点、送り仮名、筆者)

弾正左衛門は寛永から元禄にかけて門人を募り、兵法を指導したという。この当時、剣術流派が無数に上っていたため、弾正左衛門は支流と混交するのを嘆き、直心正統流と称し、他流との差別化を図ったようである。このことについては、『直心影流伝書集』に「寛永年間ヨリ元禄ニ至リ門人ヲ奨励シ諸国ヲ遊歴シテ兵法ヲ教授ス伝心斎免状三十三人アル内ニ直翁斎誠ノ的伝タル故流名ヲ直心正統流ト改メラレ¹³⁵」と記されているように、神谷伝心斎には 33 人の免許を授けた弟子がおり、弾正左衛門はその中の一人であったようである。そして自身が真の的伝であることを証明するために「直心正統流」を名乗ったということである。直心正統流は自らが新陰直心流の正統を継いでいることを主張するために、高橋弾正左衛門が名付けた流名であったと考えられる。

（３）直心影流・山田平左衛門光徳

高橋弾正左衛門の直心正統流は山田平左衛門光徳によって継承される。次は『兵法伝記』の一文である。

一 第七山田平左衛門尉藤原光徳、隠退シテ曰フ一風斎ト、重治手ツカラ書シ直心正統的伝之印状ヲ、以テ付属シテ干光徳ニ、光徳親ヲ伝フ直心正統流ヲ、無極之微意、思ヒ前ヲ顧ミ

¹³³ 綿谷雪・山田忠文編『武芸流派大事典』東京コピー，p.333，1978,参照.

¹³⁴ 『兵法伝記』慶応 3 年，佐藤泰彦氏蔵.

¹³⁵ 『直心影流伝書集』写，鈴鹿家文書，全日本剣道連盟蔵.

後ヲ、以テ改メテ流号ヲ曰フ直心影流ト而已矣¹³⁶（返り点、送り仮名、筆者）

山田平左衛門光徳は、隠居してからは一風斎と名乗った。高橋弾正左衛門の直心正統流を継承し、流派の歴史と行く末を考え、流名を「直心影流」に改めたという。

まず、直心正統流を継承するまでの光徳に関する伝承をみておきたい。

光徳初戸田采女頭家臣ナリシカ、故有テ致仕シテ暫浪卒、其時正兵衛ト云テ直道流之馬術指南セシニ、三ヶ年ノ内二三百人計ノ門人有リ、夫故世コソツテ直道正兵衛ト称ス、後永井信州へ被抱国郷師ノ父也、馬術ハ業ノ賤キヲ嫌ヒ止メ、直翁ノ弟子ニ成ル、行年三十六歳其志厚ク、昼夜懈怠ナク修行兵法日記ヲ云ヲ拵へ、自分ノ日々ノ執行直シ并聞タル事ハ勿論ノ事同門ノ直シ等迄モ書付置ホトノ厚学故、四十六歳ニテ免許受シト云¹³⁷（読点筆者）

光徳ははじめ戸田采女頭なる人物の家臣であった。直道流の馬術を指南しており、3年のうちに2、300人の門人がいたという。その後永井家¹³⁸に召し抱えられたが、馬術は業が賤しいと嫌って中断し、高橋弾正左衛門の弟子になった。これが36歳のときである。そして、昼夜怠ることなく修行し、46歳で免許を受けたということである。また、流名については次のような伝承がなされている。

直翁ノ代ハ流派混雑ヲ痛ミ、正統流ト改メ一風ニハ一人当流ヲ請タル故、何流ヨリ出タル哉ト末世ノ惑ヲ明メン為ニ、前後ヲ考ヘテ直心影流ト改ナリ、直ハジキニ夫レトユヒサスノ意、心ハ神ト云意也、ジキニ神影ト云ノ意也¹³⁹（読点、下線部筆者）

弾正左衛門は兄弟弟子が多く、流派が混交しないようにと「直心正統流」と改めたが、光徳は一人で継承したため、何流より出たのか後継者たちが惑わないようにするために自

¹³⁶ 『兵法伝記』慶応3年、佐藤泰彦氏蔵。

¹³⁷ 『切紙聞書之辨書』写，鈴鹿家文書，全日本剣道連盟蔵。

¹³⁸ 『剣道五百年史』によれば、「永井伊賀守尚敬」に仕えたという（富永堅吾『剣道五百年史』復刻新版、島津書房、p.324,1996,参照.）。これは永井直敬^{なおひろ}のことであると思われる。直敬は寛文4年(1664)に河内国二万石永井伊賀守尚庸の嫡男として生まれる。貞享2年(1685)下野国那須郡に移され烏山城主になる。その後、元禄15年(1702)播州赤穂へ、宝永3年(1706)信州飯山に国替えされ、正徳元年(1711)、武蔵国岩槻城を賜ったという（『三百藩藩主人名事典 第三巻』新人物往来社、pp.433-434,1987,参照.）。

¹³⁹ 『切紙聞書之辨書』写，鈴鹿家文書，全日本剣道連盟蔵。

身の前後を考えて流名を「直心影流」にしたということである。

この伝承から、光徳による流名の改称の意図を解釈すると、「ジキニ神影」とあるように、神陰流の流れを継承しているという意識があったと考えられる。

（４）長沼四郎左衛門国郷

最後に父・山田平左衛門光徳とともにしない打ち込み稽古を大いに興隆させたといわれる長沼四郎左衛門国郷についての伝承をみていくこととしたい。

前述の通り、国郷に関する記述について複数の『兵法伝記』を確認したところ、記述の違いがみられた。はじめにこれらの記述を挙げておくこととする。次の表 1-3 が国郷に関する『兵法伝記』の記述をまとめたものである。

表 1-3 兵法伝記における長沼四郎左衛門国郷の記述

	記述（返り点、送り仮名、筆者）
慶応 3 年（1867） 窪田鐮三郎から 井上定次郎へ	一 第八長沼四郎左衛門尉藤原国郷、武州江府住 _ミ 西久保 _ニ 、自 _リ 正 _ニ 徳至 _リ 明和四年 _ニ 誘引 _シ 門人 _ヲ 鳴 _ル コト _ニ 世 _ニ 久 _シ 於 _テ 此 _ニ 終 _ニ 使 _テ 名 _ヲ 有 _{ラシム} 聞 _ク 世 _ニ
安政 5 年（1858） 嶋村外也から 被授与者不明	一 第八長沼四郎左衛門尉藤原国郷、武州江府住 _ス 西久保 _ニ 、 光徳第三子也、自 _リ 八歳 _ニ 使 _テ 習 _フ 兵法 _ヲ 、且暮思 _ヒ 兵術 _ヲ 、益厚 _{シト} 其志 _ニ 雖 _モ 鍛 _テ 練 _テ 此道 _ノ 只恐 _ル 儼 _モ 、 然 _バ 不 _レ 至 _ラ 、或時、於 _ニ 動上 _ニ 得 _テ 大明 _ヲ 、爾後、執 _リ 劍 _ヲ 活道自在也、光徳門下之正統 _ニ 而刀鎗 _ノ 達人也、 自 _リ 正 _ニ 徳至 _リ 明和四年 _ニ 誘引 _シ 門人 _ヲ 鳴 _ル コト _ニ 世 _ニ 久 _シ 於 _テ 此 _ニ 終 _ニ 使 _テ 名 _ヲ 有 _{ラシム} 聞 _ク 世 _ニ 、以 _テ 真実 _ノ 業 _ニ 導 _ク 門人 _ヲ 而、不 _レ 耻 _ニ 天帝 _ニ 直心影流為 _ニ 二代 _ヲ 者也
文政 10 年（1827） 田那邊半弥為衛 から 増田藤馬へ	第八長沼四郎左衛門尉藤原国郷者光徳第三子也、自 _リ 幼弱 _ニ 、雖 _モ 好 _{ムト} 刀術 _ヲ 、勤仕繁 _キ 多 _ク 、不 _レ 能 _ヘ 修 _ム ルコト _ニ 兵法 _ヲ 也、雖 _レ 然、益厚 _ク 其志 _ニ 、寤寐思 _ヒ 服、頻 _リ 涵浴 _ス 、此道良久 _{シク} 而於鬪争之中、卒 _{カニ} 昏 _ニ 倒 _ス 不 _レ 知 _レ 人、須臾而蘇 _リ 省 _ス 谿 _ニ 、然 _バ 貫 _テ 通 _シ 兵法之極 _ヲ 則、然後、体用一源頭微無 _ク 隔 _テ 、其術活達自在也、光徳知 _リ 其機 _ヲ 、宝永五 _{丙子} 年六月二十八日拔 _テ 於群生之中 _{ヨリ} 、授 _ケ 与 _フ 当流之道統 _ヲ 也、国郷吾道之信 _ジ 深 _{キヲ} 、歎 _キ 裏 _ヲ 、博 _ク 以 _テ 修 _{ムル} 兵法 _ヲ 辞 _ス 仕 _レ 居 _ニ 於武州西久保 _ニ 日新 _ニ 修 _ム 之 _ヲ 、其年五十 _ニ 而大 _ニ 令 _ム 名 _ヲ 顕 _ヘ 世 _ニ 、不 _レ 恥 _ニ 天帝 _ニ 、以 _テ 真実之業 _ヲ 鞭 _ニ 策 _ス 門人 _ヲ 、則諸生益進、大凡直弟四千余人也干明和四丁亥年七月廿四日以 _テ 天寿 _ヲ 卒 _ス 、年八十、影流為 _ニ 中興 _ヲ 元祖者也

これらの記述における内容はおおよそ同様である。簡潔に内容をまとめると、国郷は幼少から兵法を学び、苦しい修行の末に極意を悟り、宝永 5 年の 6 月 28 日に直心影流の道統

を継いだという。国郷は江戸西久保に住み、正徳年間から明和4年まで門人たちを教育し、その名前が世に轟くようになったという。また『剪紙口授書』には、次のようにある。


二十二歳父ノ業ノ衰ルヲ嘆キ、博ク兵法ヲ修スルヲ以仕ヲ辞シ、道場芝西ノ久保ニ建而門人ヲ誘ヒ、兵法ヲ修行ス、先生弓馬劍鎗ニ達シ、軍理ニ通シ禅機ヲサトリ、故実ニ委ク粗聖賢之書ヲ読ム、誠ニ当流ノ諸流ニ起タルハ先生アルヲ以也、他流ト試ル事数一度モ負ル事ナシ¹⁴⁰（読点筆者）


国郷は22歳の頃、父である山田平左衛門光徳の剣技が衰えてきたことを嘆き、兵法の修行に専念するために職を辞し、西久保に道場を立て門人を集めたという。また国郷の人物像として、多くの武芸に優れ、軍法や禅を悟り、故実に精通し、聖賢の書を読んでいたことが描かれている。

剣術の実力としては、他流と試合をしても一度も負けることがないほどの強さであったという。そして、「門人凡四千斗国々ニ渡テ、業ヲ弘ケル者尤多シ、当流中興ノ名人ト云ベシ、免許之面々四拾三人程有¹⁴¹」と、4000人程の門人は全国に及び、流儀が広まっていったようである。国郷から免許を受けたものは43人程いたという。

国郷は相当の剣術の実力を有していたと考えられ、若年の頃より流儀を継承し、多くの門弟を教育したようである。

本節では、直心影流の伝系にみられる人物に関する伝承についてみてきたが、これらはすべて後世の直心影流の伝書にみられるものである。次節では、この伝系にみられる人物本人が記した伝書に可能な限りあたり、本節でみてきた伝系と伝承における問題点を浮き彫りにしていく。

¹⁴⁰ 『剪紙口授書』, 鈴鹿家文書, 全日本剣道連盟蔵.

¹⁴¹ 『剪紙口授書』, 鈴鹿家文書, 全日本剣道連盟蔵.

第二節 直心影流の伝系・伝承における問題点

前節では直心影流の伝書の中で通常述べられている伝系とそれらに登場する人物の伝承について把握した。本節では、この直心影流の伝系・伝承について検討していく。

第一項 流名と流祖の改変

1. 伝系の各流派における流名の変遷

まずは直心影流の成立までの流名について検討を行う。はじめに、①直心影流の伝系において語られている各流名ならびにその意味と、②伝系に登場する人物が自身の伝書において実際に名乗っている流名を比較し、以下に表 1-4 として示しておきたい。

表 1-4

人物名	①直心影流の伝書における伝承		②実際の名称
	流名	流名の意味	流名
松本備前守	神陰流	・ 神から授かったという意を込めて ・ 神の秘したる太刀という意味	？
上泉伊勢守	新陰流	・ 自身は松本備前守から流儀を授かったため、「神陰流」の「神」の字を恐れ多く感じた	新陰流
奥山休賀斎	神影流	記述なし	奥山流
小笠原源信斎	真新陰流	記述なし	真之心陰之兵法
神谷伝心斎	新陰直心流	直→それ、という指示語 心→神という意味	直心流
高橋弾正左衛門 重治	直心正統流	流派が多く支流が混交するのを嘆き、自身が真の正統であることを主張するため	直心正統流
山田平左衛門 光徳	直心影流	何流から出たのか、後世の人物が分からなくなるのを避けるため 直→それ、と指差すという意味 心→神という意味 直心影流→じきに神影という意味	直心正統流二代
長沼四郎左衛門 国郷	直心影流 (光徳から継承)		鹿島神伝

この表からわかるように、複数の流派において、直心影流における伝承と本人が実際に名乗っていた流名とその意味で相違がみられる。これらについて検討していくこととした。なお、松本備前守、高橋弾正左衛門重治、長沼四郎左衛門国郷については、考察の対象から外すこととする。考察の対象から外す理由としては、松本備前守は、本人の記した伝書が管見の限りみられないため、高橋弾正左衛門重治は直心影流の伝承と実際に名乗っている流名に相違がないためである。

長沼四郎左衛門国郷については、直心影流の伝承によると、直心影流を山田平左衛門光徳から継承したとされているが、実際には『直心影流目録口伝書』において「鹿島神伝」と記している。つまり、伝書の表題に「直心影流」と流名が表記されているものの、奥書は「鹿島神伝」と記されているということである。このことは後世における直心影流の史料についても同様であり、修行過程の中で伝授される『直心影流兵法究理之巻』『直心影流兵法目録』『直心影流免状』は表題において「直心影流」という流名を名乗っていながらも、必ず奥書に「鹿島神伝」の表記が記されている（『兵法伝記』については表題に「直心影流」という流名は見られないが、奥書では「鹿島神伝」と表記している）。このことから修行過程の中で門弟に授与される当流の伝書は奥書に「鹿島神伝」と記されていることがわかる¹⁴²。以上から、国郷における直心影流の伝承と実際に国郷本人が名乗っていた流名は一致していると考えられるため、ここでの考察対象からは外すこととする。

（1）上泉伊勢守

直心影流の伝書においては、上泉が松本備前守の神陰流を継承するにあたり、自身が神から授かったわけではないことから神の字を恐れ多いと感じ、「神」の字を「新」に改めた、という伝承がなされている。しかし、上泉自身は「予究_二諸流奥源_一於_二陰流_一^別抽_二出奇妙_一号_二新陰流_一¹⁴³」と諸流を究め、特に陰流から優れた部分を抽出し、新陰流と名付けたと述べている。これは陰流を学んだことが前提で新陰流を創始したということであると考えられる。したがって新陰流という流名は、陰流の影響を踏まえてのものであると考えられ、直心影流の伝承とは相違があるといえる。

¹⁴² 石垣安造氏も『直心影流極意伝開』において同様の事を述べている（石垣安造『直心影流極意伝開』島津書房,p.48,2001,参照.）。

¹⁴³ 『燕飛序』（『渡邊一郎先生自筆 近世武術史研究資料集』所収）渡邊一郎先生を偲ぶ会，p.2，2012.

（２）奥山休賀斎

直心影流の伝書においては、奥山休賀斎が上泉の新陰流を継承し、自身の流派を興すにあたって「神影流」と名乗ったということのみが記されており、この理由については記されていない。奥山休賀斎自身が著したとされる史料は管見の限りにおいてみることができない。しかし、彼は徳川家康に自身の剣術を指南していたようであり、徳川家康から『剣法伝授起請文』及び『扶助許可状』を授かっている。その『扶助許可状』においては「今度奥山流平法、奇獨之妙術共一覽祝著候¹⁴⁴」と記されており、家康には、「奥山流」と称されていたことが窺える。休賀斎が活躍した当時、彼の流派は「奥山流」と称されていたようであり、この流名についても直心影流の伝承と異なっている。

（３）小笠原源信斎

小笠原源信斎も奥山休賀斎と同様、神影流を真新陰流と改称したことが直心影流の伝書で語られているが、改称の理由は「有テ故」と記されているのみで、伝承から窺うことは出来ない。小笠原源信斎は自身の伝書において流名を「真之心陰之兵法¹⁴⁵」と呼称している。直心影流の伝承では「新陰」の文字を用いているが、ここでは「心陰」と表記されている。現在確認される源信斎のもう一つの著作である『真之真陰兵法目録』においても「心」の字を用いており、表記に違いがあることが看取できる。また、源信斎は「予自リ若、雖^ニ試^ルト^ニ諸流ヲ、未^ダ至^ラ其奥儀ニ、異朝ニ渡^ル故、人ニ相応ズル之旨叶、忿テ勤^メ之ヲ、情々思之以真之心陰云¹⁴⁶」（送り仮名、返り点筆者）と述べている。自分は若年より諸流を学んできたが、未だその奥儀にいたることがなかったという。そして外国に渡り、人に従うという旨を叶え、即座にこれを修めたという。そしてよくよくこのことを思い、「真之心陰」と名付けたという。この記述は、自流の創始の経緯として外国に渡り、人に従い、兵法を学んだことを述べたものであると考えられる。直心影流における伝承においても源信斎が中国に渡り、妙術を得たと述べられており、帰国後流名を改めたとされている。このことについては小笠原源信斎自身の言と一致している。しかし、直心影流の伝書において述べられている張良の矛の伝を得て帰国したことや十之形を考案したということについては、源信斎自身は述べておらず、このあたりの整合性については確認することができない。

¹⁴⁴ 中村孝也『新訂 徳川家康文書の研究上巻』日本学術振興会,p.221,1958.

¹⁴⁵ 『真之心陰兵法免状』小田原市立図書館蔵.

¹⁴⁶ 『真之心陰兵法免状』小田原市立図書館蔵.

(4) 神谷伝心斎

直心影流の伝書においては、神谷伝心斎が興した流儀は新陰直心流とされている。「新陰」はこれまでの流名を継承した語で「直」は指示語、「心」は「神」を意味するとされている。一方、神谷伝心斎は自身が著した『軍法非切書并入唐目録』において自身の流派を「直心流」と呼称しており、「新陰直心流」とは名乗っていない。また、弟子の高橋弾正左衛門の著した『直心正統流兵法免状』には神谷伝心斎の免状の旨趣について記された箇所があり、そこには「神谷直心流」「直心流」と記されている¹⁴⁷。また、伝心斎は『軍法非切書并入唐目録』において直心という用語について複数の箇所ですべて「性ニ背キ不_レ正_レ本人間直心ナレトモ智恵ノ湧ニ従ヒ一心不_レ成_レ清ク濁ル心ヲ含ミ一心外ヨリ不見誠ヲ尽シ正シクスト雖モ一心ニハ色々トムサキ穢ラハ敷キ非ヲ密シ濁心計リ有リ¹⁴⁸」「本人間本来空虚也過去現在未来心トハ性善父母末生之以前ノ仏ハ本来ノ面目也本来空風火水地父母之色縁ニ連レテ今此界ニ出生ス即直心也¹⁴⁹」「明鏡天地之間ニ明ナルハ理也常々之大事モ道ニ違ヒ申ハ直心ニ叶不申本ヲタスヘシ¹⁵⁰」「本心明德ヨリ見出ス直心ナレハ無_レ疑頼母敷稽古セヨ¹⁵¹」(すべて下線部筆者)などの記述に直心という語がみられるが、記述から解釈すると、「直心」とは人間の持つ本来の心であり、またあるべき状態の心の事を指していると考えられる。伝心斎はこの理想的な心である「直心」を自流の流名に冠したと考えられる。したがって、直心影流における伝承とは流名とその意味、両方において相違があるといえる。

(5) 山田平左衛門光徳

直心影流の伝書においては、自流が何流から出たのか、後世の者が分からなくなるのを避けるために、光徳が「直心影流」を名乗ったとされている。ここでの「直」「心」の意は、先に触れた新陰直心流と同様で「直」は指示語、「心」は神の意味であり、「直心影流」は「じきに神影流」という意であるという。つまり、流祖・松本備前守からの流れを継承していることを意識した流名であると考えて良い。

一方、光徳本人は『兵法雑記』において直心正統流の二代を名乗っており¹⁵²、直心影流

¹⁴⁷ この記述の後ろに「直心流元祖 神谷伝心真光」と記されていることから、正式名称は「直心流」であり、「神谷直心流」というのは神谷伝心斎の直心流という意味の表記であると考えられる(『直心正統流兵法免状』、『吟味之趣意』所収、鈴鹿家文書、全日本剣道連盟蔵.)。

¹⁴⁸ 『軍法非切書并入唐目録』写、熊本県立図書館蔵。

¹⁴⁹ 『軍法非切書并入唐目録』写、熊本県立図書館蔵。

¹⁵⁰ 『軍法非切書并入唐目録』写、熊本県立図書館蔵。

¹⁵¹ 『軍法非切書并入唐目録』写、熊本県立図書館蔵。

¹⁵² 『兵法雑記』においては、「△直心正統二代山田氏一風斎註ス」、「一 光徳ヲ直心正統

を名乗っていない。また、「直心」という心のあり方についても述べており¹⁵³、直心流の流れを汲んでいるという意識があったと考えられる。直心影流における光徳についての伝承と彼が名乗った実際の流名とでは相違があるといえる。

以上のように、直心影流の伝系に登場する各人物本人の史料をみると、名乗っていた流名ならびにその意味という点において、直心影流の伝承と随所に違いがみられる。直心影流における伝承は直心影流の成立以降に書き換えられたと考えられる。

2. 各流派の伝書における流祖の相違

次に、伝系に登場する各人物が、誰を流祖として記しているのかを確認していくこととする。次の表 1-5 は、伝系に登場する各人物が、自身が著した伝書の中で誰を流祖としているかをまとめたものである。なお、流祖について述べている記述箇所についても記しておくこととする。

表 1-5 伝系に登場する各人物が述べる流祖について

流派名	伝書名	年代	著者	流祖とされる人物とその記述
真心陰流	『真之心陰兵法目録』	寛文 10 年 (1670)	小笠原源信斎	流祖・先師を述べる記述なし
真心陰流	『真之心陰兵法免状』	寛文 13 年 (1673)	小笠原源信斎	流祖・先師を述べる記述なし 自身が流儀を見出した 予自若雖試諸流未至其奥儀、異朝渡故人相応 之旨叶念勤之、情々思之以真之心陰云
直心流	『軍法非切書并入唐目録』	寛文 3 年 (1663) 天保 5 年 (1835)写	神谷伝心斎直光	流祖・先師を述べる記述なし 自身が流儀を見出した 紙屋伝心儀剣術十五流執行スト雖正利運徳得 セス仁義礼智之四徳ヲ考ヘ一流ヲ見出シ直心 流ト極伝授ス
直心正統流	『直心正統流免状』	天和 3 年	高橋弾正左衛門重治	神谷伝心斎

ノ二代ト定ル事高橋氏直翁ヨリ定レ之其證左リニ記之」など、光徳が直心正統流の 2 代を名乗っていたことが随所にみられる（『兵法雑記』東京長沼正兵衛家蔵.）。

¹⁵³ 「△管見工夫曰 直心ノ註 吾ヨリ上手ニハ負ル筈去レハ負テ悲ナシ亦吾ヨリ下手ニハ勝筈去レハ勝テモ喜ナシ喜モ無ク悲モナケレハ自然ト直心ニテハナキカ」（『兵法雑記』東京長沼正兵衛家蔵）

		(1683)		直心流元祖神谷伝信直光
直心正統流	『直心正統流兵法目録』	延宝 7 年 (1679)	高橋弾正左衛門重治	神谷伝心斎
				右者従先師神谷氏伝信大居士目録乃旨趣雖 (以下略) (奥書に元祖神谷氏伝信) とあり
直心正統流	『兵法雑記』	貞享 3 年 (1686)	山田平左衛門光徳	神谷伝心斎
				神谷氏伝心ト云人中興ノ機分有テ一流ノ祖ト 成テ ○直心元祖○ 元祖神谷氏伝心
直心影流	『直心影流目録口伝書』	宝暦 14 年 (1764) 文化 3 年 (1806) 以降写	長沼四郎左衛門国郷	杉本備前守紀政之
				鹿島神伝元祖

上記の表によると、真新陰流・直心流においては、自身の師や流祖について記した記述はなく、自身が流儀を興したことのみに記されている。高橋弾正左衛門重治と山田平左衛門光徳は、神谷伝心斎を流祖とし、両者の伝書では神谷伝心斎を「直心元祖」と称している。高橋弾正左衛門は、自身が直心流の正統であることを主張するために、「直心正統流」と名乗ったようであるが、直心流の神谷伝心斎を流祖としていることから、この神谷の直心流を継承しているという意識が強いことが窺える。

神谷伝心斎よりもさらに遡って伝系が記されるようになるのは長沼四郎左衛門国郷が著した『直心影流目録口伝書』からである。この伝書より、直心影流の流祖とされる「杉本備前守」(松本備前守)の名が記されるようになり、以降、直心影流の中でこの人物が流祖であるという伝承がなされるようになる。

直心影流の伝系の中で、実際に松本備前守が流祖とみなされはじめるのは、国郷からであると考えられる。

第二項 後世における神話の付加

直心影流の伝系に登場する人物が著した書の中で、松本備前守が流祖としてみなされはじめるのは国郷の伝書以降であることは先に触れた通りである。本項では、前節において触れた、松本備前守の前段として記述される神話に関する項目について考察していく。

1. 奥書「鹿島神伝」

流祖・松本備前守が参籠修行を行った結果、極意を得たという伝承を顕著に表しているのが、伝書の奥書である。直心影流の伝書では奥書に「鹿島神伝〇代」と記し、自流が鹿島の神・タケミカヅチから伝わることを主張する。本項でははじめに、この奥書がいつ頃から見られるようになったのか確認していくこととする。次の表 1-6 は伝系における諸流派の伝書の中で奥書「鹿島神伝」の有無をまとめたものである。

表 1-6 各伝書に見られる奥書「鹿島神伝」の有無について

流派名	伝書名	年代	発行者・著者	「鹿島神伝」の有無
真心陰流	『真之心陰兵法目録』	寛文 10 年 (1670)	小笠原源信斎	×
真心陰流	『真之心陰兵法免状』	寛文 13 年 (1673)	小笠原源信斎	×
直心流	『軍法非切書并入唐目録』	寛文 3 年 (1663) 天保 5 年(1835)写	神谷伝心斎直光	×
直心流	『直心流伝書剪紙許状』	嘉永 4 年 (1852)	久須美順三郎	「鹿島神伝」 (「〇代」とは記されていない)
直心正統流	『直心正統流免状』	天和 3 年 (1683)	高橋弾正左衛門重治	×
直心正統流	『直心正統流免状裏書』	文政 5 年 (1822)	長沼四郎左衛門亮郷	「鹿島神伝十代」
直心正統流	『直心正統流兵法目録』	延宝 7 年 (1679)	高橋弾正左衛門重治	×
直心影流	『兵法雑記』	貞享 3 年(1686)	山田平左衛門光徳	×
直心影流	『直心影流目録口伝書』	宝暦 14 年(1764) 文化 3 年 (1806) 以降写	長沼四郎左衛門国郷	「鹿島神伝」 (「鹿島神伝元祖」として「杉本備前守紀政之」と記した後、自身の名前が記されている。杉本から国郷の間の人物は「六人略」と記されている。)

表 1-6 から分かるように、奥書に「鹿島神伝」という表記を用いているのは、『直心流伝書剪紙許状』（嘉永 4 年、久須美順三郎から小野鉄太郎へ）、『直心正統流免状裏書』（文政 5 年、長沼四郎左衛門亮郷から長沼中へ）、『直心影流目録口伝書』（宝暦 14 年、長沼四郎左衛門国郷から清水助左衛門へ）の三つの書である。

まず、『直心流伝書剪紙許状』について考察する。本書は『武道伝書聚英 第十二集』（宇都宮大学教育学部,1990.）に所収されている伝書である。松本備前守（原文は杉本）を流祖として記しており、神谷伝心斎までは直心影流と同じ伝系となっている。伝系に違いが生じるのは神谷の後からであり、松岡猪太夫→松岡七郎兵衛→松岡次郎太夫→今堀吉之助→久須美順三郎と伝系が続いている。この伝書の存在から、「鹿島神伝」の表記は、直心流の頃よりなされていたように思われるが、前項においても触れたように、神谷伝心斎本人は『軍法非切書并入唐目録』において自身の流儀を「直心流」と呼称しており、「鹿島神伝」という表記を確認することができない。このことに加えて『直心流伝書剪紙許状』は嘉永 4 年（1852）に記された史料であり、『軍法非切書并入唐目録』が著された寛文 3 年（1663）からおよそ 200 年の歳月が経過している。この点を考えると、この約 200 年の間に直心影流と交流を持ち、その影響を受けて「鹿島神伝」と名乗るようになったことも考えられる。さらに『直心流伝書剪紙許状』の記述内容をみると、「稽古とは勝負によらず法定の序は肝要と勉むべきなり¹⁵⁴」「稽古をば勝負するぞと思ひなし勝負は常の稽古なるべし¹⁵⁵」などの歌がみられる。これらの歌は『兵法雑記』によると、本史料の伝系に登場することのない高橋弾正左衛門が詠んだ歌であるという¹⁵⁶。また、「世の中に徘徊する兵法者などいふ者の類、切組兵法、構勝兵法、所作兵法、系図兵法、理兵法の者どもは、七病人にいたし可_レ申ものか¹⁵⁷」とこれらの兵法を批判しているが、これらは高橋弾正左衛門が自分の相弟子について批判したものであるとされており、高橋弾正左衛門や、その弟子である山田平左衛門光徳がこれらの兵法について記している。このことに加え、『直心流伝書剪紙許状』ではこれらの兵法を学んだ結果、陥ってしまう弊害である「七病人」についても記しているが、これについては、高橋弾正左衛門や山田平左衛門光徳の著作に確認できず、さらに時代が下った直心影流の伝書にみられる。

¹⁵⁴ 『直心流伝書剪紙許状』（渡辺一郎編『武道伝書聚英 第十二集』所収）宇都宮大学教育学部,p.14,1990.

¹⁵⁵ 『直心流伝書剪紙許状』（渡辺一郎編『武道伝書聚英 第十二集』所収）宇都宮大学教育学部 p.15,1990.

¹⁵⁶ これらの歌は『兵法雑記』において「△高橋直翁利歌集メ」と記され、高橋弾正左衛門重治の詠んだ理歌として紹介されている。

¹⁵⁷ 『直心流伝書剪紙許状』（渡辺一郎編『武道伝書聚英 第十二集』所収）宇都宮大学教育学部,pp.15-16,1990.

以上のことを鑑みて、『直心流伝書剪紙許状』は後世において直心影流の影響を受けていると考えられ、直心流の頃より「鹿島神伝」の表記が用いられていたとは考えにくい。「鹿島神伝」の表記ならびに、神話の描写について考察する際に、この史料は考察の対象として外すべきである。

次に『直心正統流免状裏書』について検討を行う。この伝書については奥書が3ヶ所みられる。一つ目の奥書が宝永5年（1708）6月28日、山田平左衛門光徳から山田平太（のちの長沼四郎左衛門国郷）へのもの、二つ目が明和2年（1765）1月5日、長沼四郎左衛門国郷から長沼勇へのもの、三つ目が文政5年（1823）5月、長沼四郎左衛門亮郷から長沼中へのものとなっている。これらの奥書を表1-7として次に挙げておきたい。

表 1-7 『直心正統流免状裏書』の奥書

宝永5年（1708）6月28日	明和2年（1765）1月5日	文政5年（1823）5月
<p>山田氏直道一風斎</p> <p>宝永五^{戊子}</p> <p>六月廿八日 源光徳</p> <p>山田平太殿</p>	<p>明和二^{乙酉} 天</p> <p>鹿島神伝八代</p> <p>長沼四郎左衛門藤原</p> <p>正月五日 国郷 花押</p> <p>長沼勇殿</p>	<p>鹿島神伝十代</p> <p>長沼四郎左衛門藤原</p> <p>亮郷 花押</p> <p>文政五年</p> <p>壬午五月</p> <p>長沼中殿</p>

上の表からも分かるように、「鹿島神伝」と表記しているのは明和2年と文政5年の二つの奥書であり、山田平左衛門光徳はこの表記を用いていない。このことに加えて、前述したように『兵法雑記』において光徳が「直心正統流二代」と名乗っていること、『直心影流目録口伝書』において国郷が「鹿島神伝」を名乗っていることを考えると、国郷の頃にこの奥書の表記が定着したと考えられる。

2. タケミカヅチについての記述

次に、奥書「鹿島神伝」の有無を検討してきた各伝書において、タケミカヅチについての記述がみられるかどうかを検討する。タケミカヅチの記述についての有無を次の表1-8に表した。ただし、直心流の伝書『直心流伝書剪紙許状』と直心正統流の伝書『直心正統流免状裏書』については、直心影流の成立後の史料であるため、考察の対象から外す。

表 1-8 各伝書に見られる神話の記述について

流派名	伝書名	年代	著者	タケミカヅチの記述
真心陰流	『真之心陰兵法目録』	寛文 10 年 (1670)	小笠原源信斎	×
真心陰流	『真之心陰兵法免状』	寛文 13 年 (1673)	小笠原源信斎	×
直心流	『軍法非切書并入唐目録』	寛文 3 年 (1663) 天保 5 年(1835)写	神谷伝心斎直光	×
直心正統流	『直心正統流免状』	天和 3 年 (1683)	高橋弾正左衛門重治	×
直心正統流	『直心正統流兵法目録』	延宝 7 年 (1679)	高橋弾正左衛門重治	×
直心影流	『兵法雑記』	貞享 3 年(1686)	山田平左衛門光徳	○
直心影流	『直心影流目録口伝書』	宝暦 14 年(1764) 文化 3 年 (1806) 以降写	長沼四郎左衛門国郷	○

表 1-8 から明らかなようにタケミカヅチについての記述がみられるのは『兵法雑記』『直心影流目録口伝書』の二つの書である。はじめに『直心影流目録口伝書』からみていく。

『直心影流目録口伝書』の「気当り」の説明箇所には「鹿島神ノ此國ヲ渡スヤ否ヤトノ玉フモ気当り也¹⁵⁸」と記されている。この記述は前節において取り上げた、タケミカヅチが活躍する国譲り神話を流派の起源とする描写にもみられ、タケミカヅチが流派の起源であることを物語る記述の一つであるといえる。つまり、国郷は自流を鹿島の神・タケミカヅチから授かった流儀であると認識していたといえ、国郷の頃より流派の起源を神話に求めていたと考えられる。

次に国郷の師である山田平左衛門光徳が著した『兵法雑記』にみられる記述から、タケミカヅチを特別視していたかどうかを検討する。まず、『兵法伝記』の「気当り」の記述は、『直心影流目録口伝書』のようにタケミカヅチや国譲り神話と関連する説明はなされていない¹⁵⁹。

¹⁵⁸ 『直心影流目録口伝書』写，鈴鹿家文書，全日本剣道連盟蔵。

¹⁵⁹ 『兵法雑記』における気当りの記述は次の通りである。

「是ハ品々伝多、気当リハ手ニモ取レズ、目ニモ不_レ見_ヘ、其中ニ勝負アリ、亦伝云、目ニテ見タ計ニテハ物ニ不_レ当_ラ、目付ハ勿論一ニ目ヲ付二ニ一_ニ気ヲ当ルト云リ目ニテ見入ル計ニテモ用ニ不立、亦目ヲフサギ、モウモクニテモ用ニ不_レ也依テ一ニ目ニ二_ニ気当リトハ教也亦云大元一_ニ気ヲヒシト当テ敵ヲ吞事也亦日向ヘアツル伝云一ニ相手ノボンノクボニ我ガ一_ニ気ヲアツル亦ノ伝向ノ艮背ノアテ、洩サヌ様ニト云リー儀ハ向ノヒタイニ^{ツイ}杭ヲ打テ鉄クイ也艮ヨリ打テ鉄縄ソソレヲフマエテナト云伝モアルソ或ハ弘ク厚クナレハ其間一ハイニ

本書において唯一、タケミカヅチの記述が確認できるのは「兵法ハ鹿島香取ヤ日本武不動多門ノ威イトシレ¹⁶⁰」という理歌のみである。この歌は、兵法というのは鹿島や香取の神、ヤマトタケル、不動明王などの武威であることを知れ、という意味に解することができる。鹿島の神であるタケミカヅチも武威を持つ神仏や英雄の中の一つとして描写されているに過ぎない。このことから、光徳は鹿島の神であるタケミカヅチを特別視していなかったと考えられる。このことは光徳の修行時代の覚書¹⁶¹であるとされる『長沼家伝直心影流秘書』の次の記述からも窺うことができる。

勝負守神ニ自身ハ不動明王クリカラ大黒殿ヲ好ム
直翁ハ鹿島大明ト云リ¹⁶²

この記述においては、光徳が勝負における守り神として不動明王、俱利伽羅、大黒天などを信仰していたことが窺える。また、「好ム」と記されていることから、これが個人的な嗜好であったと考えられよう。守り神として信仰していたこれらの中でも、光徳は特に不動明王を信仰していたことが『兵法雑記』から窺える¹⁶³。光徳が自流を鹿島の神から授か

火煙ヲ当ルモアリ不動ノ火エン是也畢竟火氣空氣ヲ当ルニ不ト_レ当_ラ云コトモナシ逃ル事ナラス依之無形無術以_レ理_ヲ所作トスル教是也」(『兵法雑記』東京長沼正兵衛家蔵.)

¹⁶⁰ 『兵法雑記』東京長沼正兵衛家蔵.

¹⁶¹ 『長沼家伝直心影流秘書』の巻末において、「右者一風先生修行中之覚書享和二年壬戌秋八月清水先生被写候ヲ亦写也実帳中の秘物也ト先生云リ」と記されている。

¹⁶² 『長沼家伝直心影流伝書』**写**，鈴鹿家文書，全日本剣道連盟蔵。

¹⁶³ 光徳幼重ヨリ不動尊ヲ信仰ス、如何_ニトナレハ考_ニ誕生日_ニ凡_ソ月廿八日_ニ当_レリ、此日ハ則_チ不動尊之縁日ト云リ、漸ク及_ニ成長_ニ取_ニ兵劍_ニ既_ニ行成テ一流ノ受_ニ目録_ニ日天然ト此日叶ヘリ、或云功術老シテ其流ノ世代及_ニ免状ヲ受ルノ日モ為_レ不_レ計_ヲ当_ニ此日_ニ、或ハ平生公務_ニ至_テ忽焉ト受_ニ君恩_ニ日モ幸_ニ叶_ニ此日_ニ、光徳感_ニ常_ニ之_ニ是則_チ不動尊ノ叶_ニ冥慮_ニ、去_レハ一道修行之体意奉_レ授_{ツケ}件ノ五大尊_ニ乎、言_ハ卷頭ニ寂然不動ノ形ト云是也、祈法曰_ク東方_ニ降三世明王、南方俱陀利刃舍明王、西方大威徳明王、北方金剛刃舍明王、中央大照不動明王トカヤ、五法円満_ニ体認シテ、良背_ニ覆_ニ火煙_ニ、左_ニ持_ニ繩縛_ニ、右_ニ以_ニ宝劍_ニ、悪魔降伏ノ形相也、亦曰、クリカラ不動ノ様相ハ、四海ヲ治ル宝劍吞_レ之、邪見ノ劍ヲ唯一口ニ吞玉フトモ云リ、武威モ亦然ナリ、伝曰仇人イカメシク劍戟ヲ打振テ、猛威ヲ震ヒ来ルトモ、劍戟両トモニ唯一口ニ吞込テ、打_亡ス形ヲ一風流儀ノ体意トス、此ノ理ヲ弘ク宣ルトキハ、凡天地モセハカルヘシ、奥蔵之大事可秘_ス云々、○伝曰仇人ト立合ニ大元一氣ヲ当満ル事、其間毎ニ如_ニ火煙_ニハイニ満チ、目ニサヘキルトイナヤ、其火氣ニ

ったものと認識していれば、このような記述はされず、鹿島の神を勝負の守り神として記したであろう。

また、光徳の師である高橋弾正左衛門（直翁）は鹿島の神を信仰していたというが、前文である光徳の信仰が個人的なものであることを踏まえると、この記述における弾正左衛門のタケミカヅチの信仰も個人的なものであったと考えられる。

以上から、鹿島の神であるタケミカヅチを流派の起源として捉える観念は長沼四郎左衛門国郷の頃より定着したと考えて良い。これに加え、奥書の「鹿島神伝」も国郷の頃から使用され始めていることを踏まえると、直心影流におけるタケミカヅチに対する信仰は国郷からはじまったと考えられる。

本節においては、前節で確認した後世の直心影流の伝書の中で述べられている伝系とそれらに登場する人物の伝承について検討した。

第一項においては流名と流祖の改変について考察を行った。

まず、直心影流の成立までの流名について検討を行った結果、上泉伊勢守、奥山休賀斎、小笠原源信斎、神谷伝心斎、山田平左衛門光徳の各人物の流名について、直心影流における伝承と本人が実際に名乗っていた流名ならびにその意味で相違がみられた。これらの直心影流における伝承は直心影流の成立以降に書き換えられたと考えられる。

次に、伝系に登場する各人物の伝書における流祖について検討した。真新陰流や直心流においては、自身の師や流祖について記した記述はなく、自身が流儀を興したことのみが記されている。高橋弾正左衛門重治と山田平左衛門光徳は、神谷伝心斎を流祖とし、両者の伝書では神谷伝心斎を「直心元祖」と称している。直心影流の流祖とされる「杉本備前守」（松本備前守）の名が記されるのは、長沼四郎左衛門国郷が著した『直心影流目録口伝書』からである。したがって、直心影流の伝系の中で、実際に松本備前守が流祖とみなされはじめるのは、国郷からであると考えられる。

第二項では、松本備前守の前段として記述される神話に関する項目について考察した。

はじめに、直心影流の伝書における奥書「鹿島神伝」について考察した。この奥書の表記を山田平左衛門光徳は用いておらず、長沼四郎左衛門国郷から用い始めていたと考えられる。

次に、奥書「鹿島神伝」の有無を検討してきた各伝書において、タケミカヅチについての記述がみられるかどうかを検討した。タケミカヅチについての記述は『兵法雑記』『直心影流目録口伝書』の二つの書にみられるが、タケミカヅチを特別に信仰していることが窺

アタルヘシ、是則_テ不動明王ノ火煙也、以_ニ縄縛_ニシバル事秘中_ヲ秘也、口伝（読点筆者）

える記述は『直心影流目録口伝書』のみにみられ、『兵法雑記』においては確認されなかった。したがって、鹿島の神であるタケミカヅチを流派の起源として捉える観念は長沼四郎左衛門国郷の頃より定着したと考えられ、直心影流におけるタケミカヅチに対する信仰は国郷からはじまったと考えられる。

次節以降は、実際に存在した直心影流の成立過程について論を進めていくこととしたい。

第三節 新陰流から真新陰流までの系譜

前節では直心影流の伝書における伝承と、伝系に登場する各人物の記した史料を比較し、両者に違いがあることについて触れてきた。つまり、直心影流が成立するにあたって実際の成立過程からある程度の書き換え作業があったと考えられる。

本節と次節では、全体の伝系を大きく二つに分けて、各人物の著した史料に基づき詳細に検討を行う。まず、本節においては二つに分けた前半部分である新陰流から真新陰流までを対象として実際の成立過程がどうであったかを考察していく。はじめに本節の考察対象となる伝系を再度、載せておきたい。なお、生没年については、上泉伊勢守は『正伝新陰流¹⁶⁴』（島津書房,1989.）、奥山休賀斎は『剣道五百年史¹⁶⁵』（復刻新版,島津書房,1996.）、小笠原源信斎については岩佐勝『鹿島神伝直心影流¹⁶⁶』（武道振興会,2005.）にそれぞれ記載されている年を記しておく。



図 1-2 新陰流から真新陰流までの伝系

考察の対象となる部分の伝系は上記の通りである。しかし、神影流の奥山休賀斎については管見の限り本人の記した伝書を確認することができないため、本節の考察対象から外すこととし、新陰流の上泉伊勢守と真新陰流の小笠原源信斎の二者について考察する。

¹⁶⁴ 柳生厳長『正伝新陰流』島津書房,p.68,1989,参照.

¹⁶⁵ 富永堅吾『剣道五百年史』（復刻新版）島津書房,p.118,1996,参照.

¹⁶⁶ 岩佐勝『鹿島神伝直心影流』武道振興会,p.26,2005,参照.

第一項 形の名称からみる流派の系譜

本項では上に挙げた伝系の流れが実際に存在していたかどうかを、形の名称という観点から考察することとしたい。前述の通り、上記の伝系のうち本人の記した伝書が確認されるのは、上泉伊勢守と小笠原源信斎の二者であるため、本項での考察はこの二者が対象となる。また、両者の遺した史料は目録がほとんどであるため、名称以上のことを窺い知ることは難しい。ここでは、目録から形の名称を中心に見ていき、これらがどのように継承されていたか、という点の考察が中心になることを予め断っておきたい。

1. 新陰流における形の名称

はじめに、上泉伊勢守の新陰流について考察していく。上泉は、柳生宗厳に「一国一人の印可状」を与えたとされており、以降、新陰流は宗厳の嫡孫である利厳が興した尾張柳生家に正伝されていくという¹⁶⁷。また、上泉伊勢守は宗厳以外にも多くの弟子をとっており、多くの流派が新陰流から派生したようであるが、宗厳以外には伝わっていない形もあるという。上泉の流儀がどの程度直心影流に伝わっているか見るためには、まず、新陰流の伝書にみられる形を「上泉伊勢守の頃から存在する形」と「上泉以降に形成された新陰柳生流の形」に分類する必要がある、前者を対象として考察しなければならない。ここでは新陰流の形の名称を把握する。

新陰流の形については示唆に富んだ先行研究がいくつかあるため、はじめに、これら先行研究の知見を基に新陰流における、上泉伊勢守の頃から存在する形について把握しておきたい。

新陰流の形に関する主要な先行研究としては、大森宣昌氏・加藤純一氏の研究が挙げられる。大森氏は、上泉伊勢守の目録について、上泉直伝のものと、直伝された年次にできるだけ近い主な目録や印可状の比較考察から、新陰流の基本となる形は、燕飛の太刀 6 箇所とその奥の附随太刀 2 箇所、三学の太刀 5 箇所、九箇の太刀 9 箇所であると述べている¹⁶⁸。また『正伝・新陰流』の柳生厳長の言から、上泉はそれより奥の天狗抄、奥義太刀（添載乱截、無二剣、活人刀、向上、極意、神妙剣）、八箇所必勝については秘伝したと述べている¹⁶⁹。つまり、これらの形が上泉の頃より存在していたということである。大森氏の考察によると、上泉伊勢守の頃から存在していた形は以上の通りである。

¹⁶⁷ 柳生厳長『正伝・新陰流』講談社,p.5,1957,参照。

¹⁶⁸ 大森宣昌『武術伝書の研究 近世武道史へのアプローチ』地人館,p.14,1991,参照。

¹⁶⁹ 大森宣昌『武術伝書の研究 近世武道史へのアプローチ』地人館,p.14,1991,参照。

次に加藤純一氏の研究についてみていきたい。はじめに、加藤氏は、現在確認されている上泉が著した目録3点について考察している。一つ目は永禄9年(1566)に著された『影目録』4巻であり、この目録には「燕飛」、「七太刀」、「参学」、「九箇」の四つの形がみられることを指摘している。また、二つ目、三つ目の目録の考察から「殺人刀」、「活人剣」という形の存在を明らかにしている。さらに、尾張柳生の兵法補佐役であった長岡房成^{ながおかふさしげ}170が著した『刀金録・勢法篇¹⁷¹』から上泉が選定した「^{まろばし}転」、愛洲移香が選出した「天狗抄」の存在を指摘している。

加藤氏の見解から、上泉伊勢守の頃より存在する形は以上のように看取できる。

以上が上泉伊勢守の頃から存在する形であるが、これらについてもさらに分類する必要があると考える。前述の通り、上泉伊勢守は、「予究_二諸流奥源_一於_二陰流_一別抽_二 - 出奇妙_一号_二新陰流_一¹⁷²」と諸流を究めた後、新陰流を興すにあたり、愛洲移香の陰流から「奇妙」を抽出したことを述べている。つまり、この記述から新陰流の形の中に愛洲移香の陰流が基となる形が存在していたことが窺える。直心影流の伝書では、愛洲移香と上泉伊勢守の関係が否定されていることは前に触れた通りである。そのため、当流の伝系に陰流を起源とする形が継承されているか確認する必要があるだろう。さらに、その他の流派の影響を受けた形や、上泉自身が考案した形が存在すると考えられる。以下、①陰流起源の形、②その他の流派の影響を受けた形、③上泉伊勢守考案の形、に分類しておきたい。

大森氏は、形の由来についても言及しているが、その論拠はすべて柳生厳長『正伝新陰流』(講談社,1957)による。柳生厳長『正伝新陰流』によれば、燕飛は、「陰流の『猿飛』を上泉流祖が大成したものの¹⁷³」であり、三学の太刀は、上泉が新たに編み出した形¹⁷⁴、九箇の太刀は上泉が諸流の奥源を極め、それらの秘伝の太刀から選び出したものであるという¹⁷⁵。したがって「燕飛」は陰流がルーツであり、「三学」は上泉が考案した形、九箇は諸流から上泉が抽出したというのが柳生厳長氏の見解である。しかし、氏はこの論拠となる

170 長岡家は尾張柳生家に仕えた兵法補佐家であり、長岡房成(1763-1849)は第9代柳生^{としひさ}厳久(1792-1821)の師範役を務めていたという。房成は流祖上泉伊勢守以来の型を集大成したことと約200本に及ぶ「試合勢法」^{しあいがた}を考案するという功績を残した(加藤純一『柳生新陰流の研究』文理,p.264,2003,参照.)。

171 加藤氏によれば、『刀金録・勢法篇』は文政12年(1829)から天保8年(1837)の間に著されたという(加藤純一『柳生新陰流の研究』文理,p.20,2003,参照.)。

172 『燕飛序』(『渡邊一郎先生自筆 近世武術史研究資料集』所収) 渡邊一郎先生を偲ぶ会,p.2,2012

173 柳生厳長『正伝新陰流』講談社,p.267,1957.

174 柳生厳長『正伝新陰流』講談社,p.271,1957,参照.

175 柳生厳長『正伝新陰流』講談社,p.278,1957,参照.

史料については提示していない。

加藤氏は、『刀金録・勢法篇』から燕飛、九箇、天狗抄が陰流から継承された形であること、参学、転、七太刀、殺人刀、活人剣は上泉伊勢守が考案した形であることを指摘している¹⁷⁶。このうち七太刀については、新当流を基にしたものと思われると見解を述べている¹⁷⁷。

これらの見解に基づき、「陰流が起源」「その他の流派からの影響」「上泉が考案した形」「不明」の四つに分類し、表 1—9 にまとめた。なお、柳生厳長氏が九箇について上泉が諸流を極め、そこから選出したという見解を示す一方で、加藤氏は長岡房成『刀金録・勢法篇』を論拠として、九箇が愛洲移香伝来の形であると述べており、両者の見解が異なっている。ここでは、九箇は「不明」に分類することとする。

表 1—9 新陰流の形

形の由来	形の総称	各名称
陰流が起源	燕飛	燕飛 猿廻 山陰 月影 浦波 浮舟 獅子奮迅 山霞
	天狗抄	花車 明身 善待 手引 乱剣 二具足 打物 二人懸
その他の流派からの影響	七太刀	踞地獅子 天関 容髪 籠手 地軸明月之風 燕鴈
上泉が考案	参学(三学)	一刀両段 斬釘截鉄 半開半合 右旋左転 _{左旋右転} 長短一味
	転	下段取勝勢 中段取勝勢 雷刀取勝勢
		殺人刀、活人剣
その他	九箇	必勝 逆風 十太刀 花木 睫径 小詰 大詰 八重垣 村雲
		添載乱截、無二剣、活人刀、向上、極意、神妙剣 八箇必勝

以上が先行研究において述べられている、上泉伊勢守の頃より存在していた新陰流の形の名称である。

¹⁷⁶ 加藤純一『兵法家伝書に学ぶ』日本武道館,p.31,2003,参照.

¹⁷⁷ 加藤純一『兵法家伝書に学ぶ』日本武道館,p.31,2003,参照.

2. 真新陰流との比較

次に上記の抽出した新陰流の形が小笠原源信斎の真新陰流にいかにもられるか考察を行うこととする。

小笠原源信斎が記した史料に、寛文 10 年（1670）、小林七三郎へ授けた『真之心陰兵法目録¹⁷⁸』がある。この目録と上記の新陰流の形を比較し、名称という観点で、新陰流の要素がどのように受け継がれているか見ていくこととしたい。

表 1-10 新陰流と真新陰流の形名の比較

新陰流			真新陰流
陰流が起源	燕 飛	燕飛 猿廻 山陰 月影 浦波 浮舟 (奥の附随太刀) 獅子奮迅 山霞	不行不帰不留 圓飛 参学 一 一刀両断 一 右転左転 一 長短一味 五輪攔 一 和 ト 一 八重垣 一 按 車 一 五関一剣 丸橋 天狗集 一 岩切 一 洞入 一 逆風 一 露之打 一 乱車 一 高山 一 乱切 一 玉簾 目付
	天 狗 抄	花車 明身 善待 手引 乱剣 二具足 打物 二人懸	
その他の流派 からの影響	七 太 刀	踞地獅子 天関 容髪 箆手 地軸明月之風 燕鴈	
上泉が考案	参 学	一刀両段 斬釘截鉄 半開半合 右旋左転 _{左旋右転} 長短一味	
	転	下段取勝勢 中段取勝勢 雷刀取 勝勢	

¹⁷⁸ 『真之心陰兵法目録』寛文 10 年,小田原市立図書館蔵.

その他	九 箇	必勝 逆風 十太刀 花木 睫径 小詰 大詰 八重垣 村雲	水月 懸待用 種子 法心
		添載乱截 無二剣 活人刀 向上 極意 神妙剣 八箇必勝	相分 西江水 打留太刀 一 光明剣 一 神妙剣 一 真心明剣

まず、陰流を起源とする形である「燕飛」「天狗抄」の名称がいかに関新陰流にみられるか考察をしておきたい。新陰流の形である「燕飛」は、真新陰流において「圓飛」と記されていると推測される。この理由としては伝授方法が口伝であったことが考えられる。つまり、口伝によって「えんぴ」という音で伝授されてきたということであり、このことは「燕飛」が「猿飛」と記されている事例があることから窺えよう¹⁷⁹。したがって「圓飛」は新陰流から伝授されてきているようであるが、これが「燕飛」の形 6 本と奥の附随太刀 2 本を指しているのか、それとも 6 本の中の第一の太刀である「燕飛」を指しているのかは不明である。天狗抄については、『真之心陰兵法目録』の中に確認することが出来なかった。

次に上泉伊勢守が考案した形の名称がいかに関新陰流にみられるかを考察する。

新陰流「参学」の 5 本の太刀のうち、「一刀両段」「右旋左転」「長短一味」の 3 本が真新陰流に伝承されている。ただし、『真之心陰兵法目録』においては、「一刀両段」は「一刀両断」と、「右旋左転」は「右転左転」と表記されている。これについても、口伝による伝承のため、表記が異なっていると考えられる。「七太刀」「転」については、その名称を確認することができなかった。

由来が不明の形については、九箇の太刀は「花木（和卜）」「逆風」「八重垣」の三つが確認できる。しかし、『真之心陰兵法目録』において「和卜」と「八重垣」は「五輪欄」という形の中に、「逆風」は「天狗集」という形の中に含まれており、もともと同じ形の技法であったものが分かれて編成されているといえる。また新陰流の「神妙剣」は真新陰流においても確認することができる。

以上のように、新陰流と真新陰流の形の名称を比較したところ、共通した名称を確認す

¹⁷⁹ 上泉伊勢守が足田豊五郎に宛てた目録には「猿飛」と記されている。

ることができた。したがって、新陰流は真新陰流に影響を与えていたといえ、この流れは実際に存在したと考えられる。さらに、愛洲移香の陰流を起源とする名称である「圓飛」が真新陰流の目録においても確認できたことは注目すべきである。

第二項 新陰流の創始からみる成立過程

前項において述べたように真新陰流に陰流を起源とする形がみられる。つまり、真新陰流にまで陰流の影響があったということが考えられる。

しかし、第一節においてみてきた直心影流の伝承においては、上泉伊勢守は松本備前守の伝を受けたとされており、愛洲移香から流儀を授かったことが否定されている。本項においては、愛洲移香と上泉伊勢守の関係について考察を行い、この伝承についての検討を行う。まず、先行研究における知見から確認していくこととする。

『武芸流派大辞典』によれば、「上泉秀綱は松本備前守政元に学び、鹿島神流二代を継いで神陰流と改称したとも、愛洲移香斎の陰の流を学んで新陰流とあらためたともいうが、術名から見ても陰の流を踏襲していることは明白であり、新陰流の伝書では、愛洲移香斎—愛洲小七郎—上泉秀綱……と順次されている¹⁸⁰⁾」と、愛洲移香の陰流の影響が強いという。

ここで、『武芸流派大事典』を含む諸先行研究において、上泉伊勢守による新陰流の創始がどのように捉えられているのか把握しておきたい。このことについて、①記述のされ方、②特に影響を受けた流派、③伝を授かった人物と流儀、④流名の表記をまとめたものが次の表 1-11 である。

¹⁸⁰⁾ 綿谷雪・山田忠文編『武芸流派大事典』東京コピイ，p.385，1978.

表 1-11 先行研究における上泉伊勢守の記述について

書名	①記述	②③④
山田次朗吉 『日本剣道史』 (一橋剣友会, 1925)	足利中世以後に新流の翹楚として起つたものは、神陰流の上泉信綱である。信綱の父を武蔵守秀繼初め憲繩、後義秀といひ最後秀繼に改むといつて、上野国勢多郡大胡の城主で、土地の豪族である。(中略)これが愛洲小七郎惟衆より統を継で影流を善くした。其子の伊勢守秀綱初め秀長が古今無比の剣客で、所謂神陰流の開祖である。(中略)神陰流伝書の記載に由れば、信綱は鹿島の松本備前守が門系である。惟ふに弱年より常州鹿島に赴いて松本が秘太刀を研究し、業成て故郷に帰り、父秀繼に就て愛洲陰流の蘊奥を学徳したものであらう。新流を樹つるに二流の精粹を融合して、神流と陰流の二字を合せて神陰と命ぜられたのである。(pp.39-40)	②陰流と神流 (どちらの影響が強いかは記載せず) ③愛洲小七郎から流儀を継いだ父から陰流、鹿島の松本備前守から神流 ④神陰流
下川潮 『剣道の発達』 (大日本武徳会本部, 1925.)	彼は長野信濃守に仕へ上州箕輪城にありて屢々戦功を樹て此家にて十六人の槍と称せらる、中にも信濃守、同国安中の城主(姓名未詳)と合戦の時槍を合せ上野国一本槍と云ふ感状を信濃守より授けられし程の人なりしが、幼より刀槍の術を好み後愛洲惟孝の子小七郎につきて影之流を極め遂に精妙の域に達し、後工夫を加へこれを潤飾して新陰流と号せり。 (中略) 本来此新影流は上泉武蔵守信綱が、愛洲惟孝の影流に工夫を加へ更らに潤飾して一流を開きしものなれば愛洲惟孝の陰流即ち古影流に対する新影流の意にて名づけたるものにて神影とするは非なり。 (pp.166-167)	②陰流 ③愛洲移香の子の小七郎から陰流 ④新陰流 (愛洲移香の陰流に対する新しい陰流という意味で名付けたものであるため、神影とするのは間違い)
堀正平 『大日本剣道史』 (剣道書刊行会, 1934.)	上泉は諸流の兵法を究めたといふが、愛洲移香又は其子小七郎に学んだのが主で、その他塚原卜伝が天文頃野州に來た時に、佐野天徳寺等と前後して学んだらしい。猶軍法は小笠原宮内大輔氏隆に学んだ。 然るに信ずる処の愛洲陰流も実はあるが、花がないので、改作しようと苦心したが、未だ修行が足らなかつたので、成功しなかつた、そこで信州飯綱の権現に数日参籠して、兵法の奥儀を悟り、刀法を改作して新陰流と号した。(p.383)	②諸流を学んだが陰流が主 ③愛洲移香または愛洲小七郎に陰流 ④新陰流
富永 堅吾 『剣道五百年史』 (百泉書房, 1971)	信綱は諸流の奥を究め、そして特に陰流から奇妙の業を抽出し新一流を創め、新陰流と号したのであった。 ところで、信綱が諸流の奥源を究めたというのが、一体誰等について学んだものかを見ると、撃劍叢談には、信綱が飯篠長威斎に又愛洲移香に従つてその妙を得たと記してある。しかしこれは恐らく間違であらう。	②諸流を極め、特に陰流から技を抽出 ③愛洲移香の子、小七郎から陰流 ④新陰流

	<p>信綱の生年月が判然せぬので確たることは分らぬが、前にいった様に長威斎とト伝との時代関係、又下に述べる様なト伝と信綱との年齢関係推定からすると、長威斎に師事することは不可能であり、移香との関係は時代が合わないわけではないが、伝書にあるように移香—小七郎—信綱と小七郎を経て伝を受けたものと解される。(p.106)</p>	
<p>綿谷 雪 『日本剣豪 100 選』 (秋田書店, 1971)</p>	<p>上泉秀綱は、松本備前守政元に学び、鹿島神流二代の道統を得て神陰流と改称したとも、あるいは愛洲移香斎の子、愛洲小七郎元香斎に愛洲陰流を学び、新陰流とあらためたともいうが、術名から見ても、陰の流を踏襲していることは明白である。一説に、上泉秀綱の父の武蔵守秀継(初め憲綱、憲繩、義秀)が愛洲小七郎に陰の流を学び、信綱はそれを父から学んだともいうが、小七郎の年齢・経歴からかんがえて、秀継(父)への伝授は考えにくい。伝書に、移香—小七郎—上泉信綱とあるのを信すべきであろう。(p.32)</p>	<p>②陰流を踏襲している ③愛洲移香—愛洲小七郎—上泉信綱 ④神陰流、新陰流の二説を紹介</p>
<p>綿谷 雪・山田岳史 『武芸流派大事典』 (東京コピー, 1978)</p>	<p>上泉秀綱は松本備前守政元に学び、鹿島神流二代を継いで神陰流と改称したとも、愛洲移香斎の陰の流を学んで新陰流とあらためたともいうが、術名から見ても、陰の流を踏襲していることは明白であり、新陰流の伝書では、愛洲移香斎—愛洲小七郎—上泉秀綱……と順次されている。(p.385)</p>	<p>②陰流を踏襲している ③愛洲移香—愛洲小七郎—上泉信綱 ④神陰流、新陰流の二説を紹介</p>
<p>今村嘉雄 『日本武道大系 第三卷』 (同朋舎出版, 1982.)</p>	<p>新陰流は上泉伊勢守秀綱(後に武蔵守信綱)が流祖である。その流名が示すように、秀綱は愛洲移香斎久忠の陰(影)流を主流とし、香取、鹿島の神道(新当)流、中条・戸田(富田)流をも学んだと伝えられている。(p.5)</p>	<p>②陰流が主でその他神道流、中条・戸田流 ③記述なし ④新陰流</p>
<p>中林信二 『武道のすすめ』 (中林信二先生遺作 集刊行会, 1987.)</p>	<p>上泉伊勢守は、松本備前守政信に学んで鹿島神流を嗣ぎ神陰流と改称したという説と、愛洲移香の陰の流を学んで新陰流に改めたという説があるが、目録等の技の名称からして、系統としては巧者の陰の流を主に受けているといえる。時代的に見ても新陰流伝書に見られる通り、愛洲移香→愛洲小七郎(移香の子)→上泉伊勢守という流れが今の所妥当な考えであろう。しかし、上泉が鹿島・香取の神道流系統についても心得があったようで、新陰流は、両者を上泉自身統合しているとも考えられる。(pp.37-38)</p>	<p>②陰流が主 ③愛洲移香の子、小七郎から陰流 ④神陰流と新陰流の二説を紹介</p>
<p>横山健堂 『日本武道史』 (島津書房, 1991.)</p>	<p>伊勢守は、元と愛洲移香の陰流を学び、後にまた飯篠長威斎の高弟、松本備前守政信に就いて神道流を学び、此二流を基礎として、陰流を改めて、神陰流(または神影流)を創め、其流祖となつたものであるから、伊勢の守の神陰流は総合武術といふべく、それに心法の研究を加えて、斯道に一生面を開き、天下を風靡したのである。(p.61.)</p>	<p>②陰流と神道流 ③愛洲移香の陰流、松本備前守に神道流 ④神陰流(または神影流)</p>

笹間 良彦 『日本武道辞典』 (柏書房, 2003.)	上泉信綱は、上野国の名族で、長野信濃守に仕えて箕輪城に住した。箕輪城が滅ぶと武田晴信が召し抱えようとしたが、武者修行を理由に断わって諸国を巡った、幼少より刀槍の術を好み、愛洲陰流を学んで、のち自ら工夫して神陰流と称し、京都に上って天下一を許され、柳生の荘に遊んで柳生宗厳にその宗を授けた。(p.228)	②愛洲陰流 ③記述なし ④神陰流
------------------------------------	---	------------------------

上記に挙げた先行研究においては、すべて陰流の影響を受けていることが指摘されている。『日本剣道史』『日本武道史』においては、陰流と松本備前守から学んだ神道流（『日本剣道史』では神流）を融合させ、神陰流を創始したとされており、どちらの流からの影響が強いかをこの記述から窺うことはできない。『日本剣道史』『日本武道史』以外の先行研究においては、上泉伊勢守が諸流を学んだとしている書が多いが、いずれも愛洲移香、またはその子である愛洲小七郎から授かった陰流を主として新陰流を創始したとしている。

以上のように、先行研究の多くが、上泉が新陰流を興すにあたって陰流に強い影響を受けたことを指摘している。

これら先行研究の成果を挙げた上で、上泉伊勢守の伝書をみていくこととしたい。次の記述は上泉伊勢守が永禄9年（1566）に著したとされる『燕飛序』の一文である。

凡兵法者、亘_二梵漢和三国_一有之、_レ於梵者七佛師文殊上将堤持智慧劍截_二断無明賊_一、則一切衆生_レ莫_レ不罹_二其刃_一、_レ可謂_二兵法濫觴_一、摩利支尊天尊以為_二秘術_一者也、_レ於漢者、三皇昔、横帝_レ從戰_二友泉涿鹿_一、而下自_二五帝三王_一至_二元明_一不_二断絶_一者兵法也、_レ於倭者自_二伊弉諾尊伊弉咩尊_一至_二今日_一不可_二一日_一無_二之_一其中間有_二上古流_一中古念流、新当流亦復有_二陰流_一其外_レ不_レ勝計、予究_二諸流奥源_一於_二陰流_一別_二抽_一 - 出奇妙_二号_一新陰流_一¹⁸¹（下線部筆者）

この記述において注目すべきは下線部の「予究_二諸流奥源_一於_二陰流_一別_二抽_一 - 出奇妙_二号_一新陰流_一」という記述である。上泉は諸流を極めたが、特に陰流の優れた部分を抽出して新陰流と号したという。この記述から、新陰流を興すにあたり、上泉が陰流から大きく影響を受けていることが窺えよう。

また、このことは次の記述からも窺える。次は『渡邊一郎先生自筆 近世武術史研究資料集』に所収された上泉伊勢守の伝書である。上泉伊勢守が漢文で書いたものを西一頓、

¹⁸¹ 『燕飛序』（『渡邊一郎先生自筆 近世武術史研究資料集』所収）渡邊一郎先生を偲ぶ会，p.2, 2012

または山北三蔵が仮名書きに改めたものであるという¹⁸²。なお、伝書本文のほとんどが平仮名表記で難解であるため、渡邊氏が補足として記した漢字も同時に記載しておく。

たうりうのきほんはあいすいかふといふひとあつて、へいはうのしよりうをきわめ、
そのなかよりいちりうをえらみいたし、よにひろめんとほつす、

(中略)

よへいはうをおもふは、けんたいひやうりをもつてこんぽんとす、たゞけんにあらずた
ひにあらず、しんそうぎやうのくらしいによつて、もつてかつことをごす、けだしたうり
うえんぴいけのたち、そのじつあつてその花なし、せんじんこれをちゆうことがふす、
よかひさくせんとはつして、くわじつとそなへんとおもひて、ふのうさんかんし、とき
あつてしんしういつなのみやうじんにけひして、さんるふすることすじつ、かのみや
うじんはじひまんきやうひやうせんしゅごのかみなり、こゝにおひてかたじけなくも
むちうにきみうの一けんをでんじゆして、よこれをもちう時、すなはちしよけんみな
これにしたがふ、あたかもしよぎよのりうりんをいづるがごとし、よいまあにざん
かんあらずや、なんぞくわじつをそなへて、よつてしんかげりうとがふすものなり、

上泉伊勢守

藤原 信綱

西 一頓

源 高乗

山北 三蔵

慶長拾五年七月吉日

藤原 頼忠¹⁸³

まず、注目したいのは、この記述の冒頭において、当流の基本は愛洲移香という人物が兵法の諸流を極めて、その中から一流を選び出したところにはじまる、と述べていることである。そして燕飛以下の太刀は、「実」があるものの、「花」がなかったため、上泉は自身で改作しようと思い立ち、信州の飯綱神社に参籠したという。その結果、極意を得、「花」と「実」の両方が備わったため、新陰流と称することとする、とある。

つまり、上泉伊勢守は陰流の燕飛以下の形を受け継ぎ、参籠修行を行った結果、これらを改作することに成功し、新陰流を創始したということである。このことから、新陰流の創始には愛洲移香の陰流の影響が多分にあったことが窺える。先行研究において陰流の影

¹⁸² 堀正平『大日本剣道史』剣道書刊行会 p.388, 1934, 参照。

¹⁸³ 『渡邊一郎先生自筆 近世武術史研究資料集』渡邊一郎先生を偲ぶ会, pp.10-11, 2012.

響が強いとされているのもこのあたりの記述に由来すると考えられる。

本節においては、上泉伊勢守の新陰流から小笠原源信斎の真新陰流までを対象とし（上泉と小笠原の間に位置する奥山休賀斎については本人の記した史料が管見の限り見当たらないため、対象から外した）、考察を行ってきた。

考察の結果、新陰流の形の名称が真新陰流の目録においても散見され、新陰流が真新陰流に影響を及ぼしていることが確認できた。したがって、直心影流の伝系における新陰流（上泉伊勢守）—真新陰流（小笠原源信斎）の系譜は、実際に存在していたと考えられる。ただし、この間に奥山休賀斎（神影流）を介しているかどうかは不明である。

本節の考察において特筆すべきは、愛洲移香の陰流を起源とする形の名称が真新陰流の目録においても確認できた点である（陰流では「猿飛」、新陰流では「燕飛」、真新陰流では『圓飛』として記されている）。直心影流の伝書では、上泉伊勢守が愛洲移香から流儀を授かったという伝承を否定している。しかし、本節の考察により、陰流の形の名称が上泉の新陰流を経て小笠原源信斎の真新陰流にまで伝わっていることが確認され、直心影流の伝系も愛洲移香の影響を受けていることが明らかとなった。従って、直心影流における愛洲移香と上泉伊勢守の関係を否定する伝承は後世に付け加えられたものであると考えられる。

第四節 直心流から直心影流の成立までの系譜

本節では、前節に引き続き、大きく二つに分けた伝系の後半部分について考察をしていく。まず、本節において考察の対象となる伝系を以下に図示しておきたい。なお、後世の直心影流の伝承では、山田平左衛門光徳が直心影流を名乗ったとされているが、これまで論じてきた通り、光徳本人は「直心正統流二代」を名乗っているため、ここではその後継者である長沼四郎左衛門国郷から直心影流として捉えることとする。なお、考察する時代であるが、このあたりの人物の生没年については、直心影流の人物が著した書以外の資料にほとんど記されていないため¹⁸⁴、石垣安造『直心影流極意伝開』（島津書房,2001.）岩佐勝『鹿島神伝直心影流』（武道振興会,2005）という直心影流の継承者が著した二書を参考に生没年を記しておきたい¹⁸⁵。

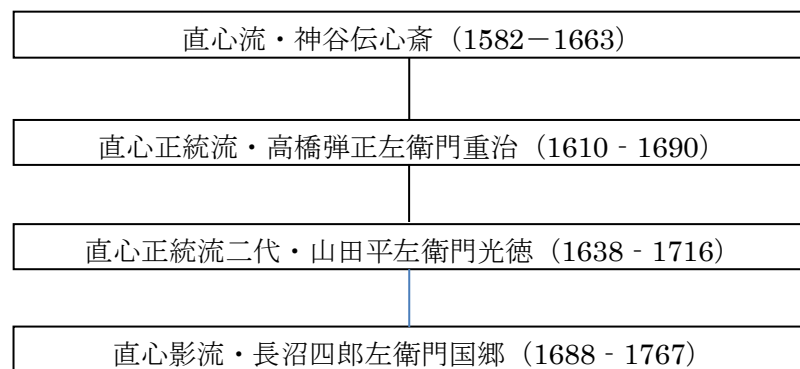


図 1－3 新陰流から真新陰流までの伝系

¹⁸⁴ この中で、生没年が明らかなのは、長沼四郎左衛門国郷のみである。神谷・高橋・山田、三者の生没年については、根拠が不明ではあるが、それぞれの人物が著した史料と年代を照合すると、妥当といえる。

¹⁸⁵ 神谷・高橋・山田、三者の生没年について、石垣安造『直心影流極意伝開』においては、岩佐勝『鹿島神伝直心影流』記載のものとはほぼ同年代を記しているが、不明な個所が多いため、ここでは岩佐勝『鹿島神伝直心影流』に記載の生没年を記す。（岩佐勝『鹿島神伝直心影流』武道振興会,pp.27 - 29,2005,参照.）

第一項 神谷伝心斎による直心流の創始

1. 直心流成立の経緯

まず、直心流の開祖である神谷伝心斎と彼が直心流を興した経緯について考察する。伝心斎は『軍法非切書并入唐目録』において、直心流を創始した経緯について、自身のこれまでの修行を振り返りながら次のように述べている。

紙屋伝心六十七歳ニテ一流見出シ、直心流ト極メ致御伝授ニ付、改兵法之根元
一 伝心義他流四十年之内、難行苦行真剣之勝負迄執行ストイヘトモ、更ニ心ニ落ス、
本ヲ失ヒ、表理ヲ専ラトシ、業ニ計心ヲ寄せ、体モミ一身乱面目体ニ顛レ、火焰ヲ求
メ、屈度息ヲ切シ、東西明ニ見ヘス、勝負皆外道乱心之兵法也、皆非也¹⁸⁶（読点筆者）

伝心斎は他流を 40 年もの間、難行、苦行を行い、さらには真剣勝負まで行ってきたが、決して心に納得するところがなく、根本を失い、表裏を専一とし、技にばかり心を寄せ、乱れが顔、目、身体に立ち現れ、恨み怒りで心が燃え立ち、精気を失い、息を切らし、東西さえははっきりとわからなかったという。そして勝負はすべて外道で、心が乱れた兵法であるといい、これらの兵法は皆「非」であると述べている。

ここでは、これまで学んできた他流を伝心斎がはっきりと否定していることに注目しておきたい。つまり、伝心斎はこれまで学んできた他流が不十分なものであったために、直心流を新たに創始したということである。このことについては「紙屋伝心義十五流執行ストモ正利運徳得セス仁義礼智之四徳ヲ考ヘ一流ヲ見出シ直心流ト極伝授ス¹⁸⁷」という記述がみられるように、伝心斎が学んだ剣術流派は 15 流にも上ることがわかる。

ここで考えておきたいことは、伝心斎が批判している他流の中に、直心影流の伝系における伝心斎の師・小笠原源信斎の真新陰流が含まれるか、ということである。

まず、小笠原源信斎と神谷伝心斎の間に師弟関係が実際にあったかどうかを検討する。前節において取り上げた源信斎の『真之心陰兵法目録』には「一刀両断」「右転左転」「長短一味」の 3 本で構成される「参学」と称される形がみられる。一方、『軍法非切書并入唐目録』には「八相」「一当」「重端一身」「右天左天」という 4 本の形名が記されている。「重端一身」は「ちょうたんいちみ」、「右天左天」は「うてんさてん」と読むと考えられ、これらの名称は『真之心陰兵法目録』の形名と共通している。この 2 本の形の共通性を踏ま

¹⁸⁶ 『軍法非切書并入唐目録』写, 寛文 3 年, 熊本県立図書館蔵。

¹⁸⁷ 『軍法非切書并入唐目録』写, 寛文 3 年, 熊本県立図書館蔵。

えると、『軍法非切書并入唐目録』にみられる「一当」とは「一刀両断」の略称であると考えられる。『軍法非切書并入唐目録』からは真新陰流との共通点をこれ以上確認することは出来ないが、ある程度の影響があったと考えられ、小笠原源信斎の流儀を神谷伝心斎が学んでいたということは間違いなさそうである。

しかし、前述の一文において伝心斎は「紙屋伝心^{マモ}六十七歳ニテ一流見出シ、直心流ト極メ致御伝授ニ付、改兵法之根元」と、直心流を創始するにあたり、兵法の根本を改める、と述べている。この記述から、伝心斎は、それまでの流派と自流が相当に異なるという意識をもって直心流を創始したと考えられる。「兵法之根元」を改めるという記述から考えて、神谷伝心斎が否定した 15 の剣術流派の中に真新陰流も含まれていると考えられる。

以上より、神谷伝心斎はある程度真新陰流の影響を受けていると考えられるが、これまで自身が学んできた剣術を否定し、新しく直心流を興したようである。したがって、直心流は真新陰流から大きく変化していると考えられる。

2. 神谷伝心斎の他流批判

(1) 神谷伝心斎の他流批判の記述

前述したように神谷伝心斎は多くの他流を学んだものの、それらの兵法は皆非であると否定し、直心流を創始している。ここでは伝心斎が批判した他流について検討していくこととする。

まずは、伝心斎本人の記した他流批判の記述をみておきたい。前述した「伝心義他流四十年之内難行苦行真剣之勝負迄執行ストイヘトモ更ニ心ニ落ス本ヲ失ヒ表理ヲ専ラトシ業ニ計心ヲ寄せ体モミ一身乱面目体ニ顛レ火焰ヲ求メ屈度息ヲ切シ東西明ニ見ヘス勝負皆外道乱心之兵法也皆非也¹⁸⁸」をみると、伝心斎は他流を修行してきたことで剣術の本質を失い、「表理」を専一とし、技にばかり心を配るようになってしまったと回想している。

つまり、「表理」に専念するあまりに、技術にばかり意識を向けるようになってしまったということである。この「表理」の語は『軍法非切書并入唐目録』においてこの記述以外に確認する事は出来ない。しかし、後世の直心影流の伝書には、「請タリ、付込タリ、表裏ヲナシ、飛ハ子ル、カヽルトノ五ツハ、業ニナツンテ内ヲオサメヌ也¹⁸⁹」と記されており、「請ける」「付け込む」「表裏をなす」「飛び跳ねる」「かかる」という五つの兵法は技に拘泥して、心を静めることができない兵法として非難されている。この記述から「表裏」が

¹⁸⁸ 『軍法非切書并入唐目録』^写,寛文3年,熊本県立図書館蔵。

¹⁸⁹ 『長沼分家伝直心影流伝書』^写,鈴鹿家文書,全日本剣道連盟蔵。

技に拘泥してしまう兵法の一つとしてみなされているといえる。同じ伝系の中において、同様の理由で批判されている「表理」と「表裏」は同義であると考えられ、『軍法非切書并入唐目録』における「表理」は「表裏」のことを指していると考えて良いだろう。

また『軍法非切書并入唐目録』には次のような記述もみられる。

一 表四組ト極過去現在未来三ツ之躰

八相 一当 重端一身 右天左天

頭端無相打¹⁹⁰

この記述は4本の形名を列記したものであるが、ここには「相打」が存在しないと述べている。同様の記述が本伝書にもう一箇所みられ、そこでは「頭端合打ナシ¹⁹¹」と記されている。これらは漢字の表記が異なるのみで同様の事を指しており、「あいうち」と読むと考えられる。この「あいうち」も直心流において批判の対象となっていると考えられる。

以下、これら「表裏」「相（合）打」について個別に検討していくこととしたい。

(2) 表裏

これまで触れてきたように、神谷伝心斎は『軍法非切書并入唐目録』において、表裏を専らとし、技にばかり心を配っていたことを反省しており、「表裏」という概念を批判している。この「表裏」という言葉は新陰流の祖・上泉伊勢守が記した伝書に確認することができ、基本的な意味内容は新陰柳生流¹⁹²の代表的伝書である『兵法家伝書』にみられるものと同じである¹⁹³。また、源了圓氏は「柳生宗矩と同時代の伊藤一刀斎とその弟子の小野次郎右衛門忠明（神子上典膳）らによって始められた『一刀流』の刀技に『表裏』が比較的少ない点を見れば、ここには剣者の個性というものがあるかもしれない¹⁹⁴」と指摘する。表裏を中心的な兵法として用いているのは、新陰流またはその流れを汲む諸流派であると考えて差し支えないであろう。伝心斎が学び、後に批判したと思われる真新陰流は、その名からも明らかなように新陰流の系統であり、この流派にも新陰流の中心的な兵法である表裏が伝わっている可能性が高い¹⁹⁵。

¹⁹⁰ 『軍法非切書并入唐目録』[写],寛文3年,熊本県立図書館蔵。

¹⁹¹ 『軍法非切書并入唐目録』[写],寛文3年,熊本県立図書館蔵。

¹⁹² 正式名称は新陰流であるが、柳生家に伝わった新陰流という意でこの俗称が用いられる。

¹⁹³ 前林清和『近世日本武芸思想の研究』人文書院,p.215,2006,参照。

¹⁹⁴ 源了圓『型』創文社,p.200,1989。

¹⁹⁵ 富永氏は小笠原源信斎も元来は上泉伊勢守の弟子であり、上泉の高弟であった奥山に小笠原源信斎が就いて学んだのではないかと述べている（富永堅吾『剣道五百年史』（復刻新

ここでは新陰流から表裏という兵法を受け継いだ新陰柳生流から表裏を検討してみたい。
以下は新陰柳生流の代表的伝書である『兵法家伝書』の一文である。

一 表裏は兵法の根本也。表裏とは略也。偽りを以て真を得る也。表裏とはおもひながら、しかくればのらずしてかなはぬ也。わが表裏をしかくれば敵がのる也。のる者をば、のらせて勝つべし。のらぬ者をば、のらぬよと見付くときは、又こちらしかけあり。然れば敵ののらぬも、のつたに成るなり。仏法にては方便と云ふ也。真実を内にかくして、外にはかりごとをなすも、終に真実の道に引入る時は、偽り皆真実に成る也。神祇には神秘と云ひ、秘して以て人の信仰をおこす也。信ずる時は利生あり。武家には武略と云ふ。略は偽りなれ共、偽りをもつて人をやぶらずして勝つ時は、偽り終に真と成る也。逆に取りて順に治まると云ふ、是也¹⁹⁶

この記述から窺えるように「表裏」とは、偽りによる策略を相手に仕掛け、意表をつく兵法である。そして偽りを用いて勝利を得たときは最終的には真となる、ということであり、敵を欺くことを正当化している。

前述の通り、直心流においては、この表裏を技に拘泥するという理由から批判していると考えられ、直心影流においても「請タリ、付込タリ、表裏ヲナシ、飛ハ子ル、カヽルトノ五ツハ、業ニナツンテ内ヲオサメヌ也」と同様の理由で批判されていることが確認できる。直心流における表裏を批判する態度は、直心影流にまで継承されていると考えられる。また、直心正統流の2代目である山田平左衛門光徳の修行時代の覚書とされる『長沼家伝直心影流秘書』における以下の記述も見ておきたい。

アシキトハ

○請ツ ○ハツシツ ○ツケ ○ヒヤウリ 至極ハカヽレ先ハ極楽○無二無三飛込
此五ツニ迷フ者ヨリ外ハ、大体ニハ有マシキ也、我ヨリ上手ナラハ切ラレ可申、則淨
仏也、毛頭我ヨリ下手ナラハ、向ノ者亡ヒ候ハン、勝タルトテ悦モナシ、負タルトテ
悲モナシ

○唯我直心ヲ勤申ヘキヨリ無他

版) 島津書房, p.118,1996,参照.)。小笠原源信斎も上泉からある程度、剣術の指南を受けていたと考えられ、新陰流の中心的兵法である「表裏」に触れた可能性は高いといえる。

¹⁹⁶ 柳生宗矩著・渡辺一郎校注『兵法家伝書』岩波文庫, pp.32 - 33, 1985.

右我ハ五常ヲ守テ立合時、右ノ五心ニテ非意ヲ以我ニ向者ハ、常式ノ慮外者也
我ニ慮外スルモノヲ、何ヲ以可免ス、然トモ爰ニ大事ノ傳アリ
○慮外者トテ亡スハ、ヲトナシカラス、目錄位ハ爰ニ止ル由
○至極ハ我ニ邪ヲ以向者、己ガ邪ニ行アタツテ自メツサスヘシ、マツタク此方ヨリ非
意ヲトカメ其者ニ惡ミモナク、可亡ストモ、不思自身ノ五常ヲ守テ正直堅固ノ難ヲ合
スル耳己 立合ト我ヲ亡スアタヤツミ其アタツミノ人ハ自メツソ¹⁹⁷ (読点、下線部筆者)

まず、冒頭に記される「アシキトハ○請ツ○ハツシツ○ツケ○ヒヤウリ至極ハカヽレ先ハ極楽」というのは理歌であり、光徳の著した『兵法雑記』にも確認することができる¹⁹⁸。ここで特に注目すべきは、自身が五常¹⁹⁹を守って立ち合う時、「請ツ」「ハツシツ」「ツケ(付)」「ヒヤウリ(表裏)」「無二無三飛込」の兵法を遣い、「非」の心を持ち、向かってくる相手は慮外者(ぶしつけもの、無礼者²⁰⁰)であると述べられていることである。換言すれば相手が「表裏」を含むこれらの兵法を用いるとき、その心には「非」があるということにも捉えられる。これらの兵法を遣う者は「慮外者」と評されていることから、少なくとも批判されていることは間違いない。

「表裏」を遣う者は心が乱れているとみなされていたといえ、それ故に批判の対象となっていたと考えられる。

(3) 相討

『軍法非切書并入唐目錄』に「頭端無相打」と記されているように、直心流では、「相(合)打」という兵法を否定する。神谷伝心斎の頃に存在していたという点を踏まえると、この「相打」は針ヶ谷夕雲が創始した夕雲流の兵法であったと考えられる。

『夕雲流剣術書』によれば、針ヶ谷夕雲は13、4歳の頃より兵法を習いはじめ、その後小笠原源信斎の弟子となって新陰流を受け継いだとされる。その際、八寸の延金という秘術まで全ての技法を受け継いでおり、弟子の中で2、3人の内に入る程の実力の持ち主であったようである²⁰¹。つまり、針ヶ谷夕雲は神谷伝心斎の兄弟弟子であり、相当に高名な人物であったと考えられる。当然、伝心斎も夕雲の存在を知っていたとみて大過ないであらう

¹⁹⁷ 『長沼家伝直心影流秘書』[写], 鈴鹿家文書, 全日本剣道連盟蔵。

¹⁹⁸ 「悪シキトハ請ツハツシツ付ヒヤウリ至極ハカヽレ先ハ極」_レと記されている(『兵法雑記』東京長沼正兵衛家蔵.)。

¹⁹⁹ 儒教で、人の常に守るべき五種の道徳を指す(新村出編『広辞苑 第六版』岩波書店, p.1015, 2008, 参照.)。

²⁰⁰ 新村出編『広辞苑 第六版』岩波書店, p.2966, 2008, 参照。

²⁰¹ 『武道伝書集成・第二集剣術諸流心法論集 上巻』筑波大学武道文化研究会, p.25, 1988。

う。

夕雲流の伝書『無住心剣辞足為経法集』に「夕雲四十歳の頃まで新陰流にて有し、五十歳計りの頃より当流をつかひ給ひしと也²⁰²」とみられるように、夕雲は40歳前後まで新陰流（ここでは小笠原源信斎の真新陰流であると考えられる）であったが、その後参禅し、50歳のころに自流を創始したようである。夕雲の生没年から考えると夕雲流の成立は1642年頃と考えられる。

一方、神谷伝心斎は、『軍法非切書并入唐目録』に「紙屋伝心六十七歳ニテ一流見出直心流ト極致²⁰³」とあるように、67歳で直心流を創始したという。『軍法非切書并入唐目録』を記した寛文3年（1663）、伝心斎は82歳であるから、直心流の創始年は1648年になる。

以上から神谷伝心斎と針ヶ谷夕雲は共に小笠原源信斎の門弟であり、そこから互いに自流を創始したが、夕雲流の方が若干早く成立していると推測できる。夕雲流と直心流の成立年代が非常に近く、かつ創始者である針ヶ谷夕雲と神谷伝心斎が小笠原源信斎の相弟子であったことを踏まえると、伝心斎が否定した「相打」とは夕雲流の「相討」である可能性が高いと考えられる。

この夕雲流の「相討」がどのような特徴を有する兵法であるのか、夕雲流の伝書から探っていくこととしたい。次は『夕雲流剣術書』の一文である。


当流兵法の意地は、元来勝負に拘わらず。取分け余が思ふ所、相討を以て至極の幸とす。その子細は、兵法を用るに及て、其場漸く三つならではなし。一つは戦場の太刀討、一つは泰平の時主君の命に依て仕る討者、さては運命逆になりて不意の喧嘩の切合ひ此外さらに太刀討すべき場なし。三つ共に、其場の相討死は、武士の耻に非ず。

（中略）

此心得を以て、余は相討を最初の手引として、兵法を伝ふる也²⁰⁴

夕雲流の心根は元来勝負にこだわらないことであり、「相討を以て至極の幸」とするといふ。相討を行うべき場は三つあり、一つ目は戦場、二つ目は泰平の世において主君の命により敵を討つ時、三つ目は突然の喧嘩における斬り合いである。この三つの場での相討による死は武士として恥にならないということである。そして、相討を最初の手引として兵法を伝授するといふ。

²⁰²『武道伝書集成・第二集剣術諸流心法論集 上巻』筑波大学武道文化研究会, p.77, 1988.

²⁰³『軍法非切書并入唐目録』, 寛文3年, 熊本県立図書館蔵.

²⁰⁴『武道伝書集成・第二集剣術諸流心法論集 上巻』筑波大学武道文化研究会, pp.33 - 35, 1988.

この記述から、相討は夕雲流の理想的な剣術とされていることが窺える。そしてこれが修行の初歩であるという。それでは、相討の修行は一体どのようなことになるのか、次の記述をみておきたい。

其間遠くば、太刀の当る所まで行べし。行つきたら、打べし。其間近くば、其まゝ打べし。何の思惟も入るべからず。然るに、敵を一目見て、目付と云事を定め、其間の遠近に慮を加え、活地、死地、了簡を生じ、或は太刀の長短の寸尺に泥み、其上に与へ、奪ひ、うかがひ、^{おびやか}刳し、動かし、^{から}擒め、^ゆ縦るめ、遅速品々の習ひ心どもを発して、上手めかしく働く。如_レ此の心入れに、天理本分の良知良能は聊かもきざすべからざるに、如_レ此取扱ふ流の人などの、向上を談じ聖佛の言句などを引言にして、心を説き気を談じて極意のやうにせらるゝは、恥の上の恥なれども、自己心元来明かならぬ上に、暗師の伝を受て弥々意識の増長したる輩なれば、尤とも云べし²⁰⁵

相討は、間合が遠ければ近づいていき、太刀の当たる間合に入れば打つ、という動作のみの兵法である。そして、少しの思慮も入れることなく打たなければならないという。

それにもかかわらず、敵を見て、目の付けどころを定め、間の遠近や太刀の長短などから有利・不利を考え、出方を窺い、時には脅かして動じさせ、遅速を使い分ける者がいるという。このような者の心に、本来備わっているはずの知恵と能力は少しも生まれないと指摘し、このような兵法を遣う者が悟りの知見を談じ、仏の言葉などを引用し心を説き、気について談じ、極意のようにするのは非常に恥なことであると批判している。

夕雲流では色々と思考をめぐらせ、策を講じることを否定的に捉えていたようである。こういった兵法における相手との駆け引きを否定的に捉えていたため、遠ければ近づき、間に入ったら打つ、という無意識で行うことが出来るような、極めて単純な技法になっていたと考えられる。

そして、この相討の修練の結果、至る境地について以下のように述べられている。

又或は修行年々月々上達し、心理發明にして凡情意識を尽し、大道本然の天理に近づき、平生の所作稽古も流の心を守り、実のしあひの場に臨みても、常の稽古のまゝにて少しも自己の了簡を加へず、内心教の如く調て、いさゝか勝負にわたらぬ人あるべ

²⁰⁵ 『武道伝書集成・第二集剣術諸流心法論集 上巻』筑波大学武道文化研究会, pp.42 - 43, 1988.

し。当流上品の弟子也。終には師と相ぬけすべき器量なり²⁰⁶

この記述は弟子が最終的に到達すべき境地について述べたものである。夕雲流の弟子は修行をしていくことで凡人の思考や意識を無くし、自然の天理に近付いていくという。そして日常の所作・稽古においても流派の心を守り、実戦も稽古も思慮を一切加えず、心を教え通りに調べ、少しも勝負に心を奪われない人物が夕雲流の上級の弟子であるといえる。このレベルに達することが出来れば、師と極意である「相ぬけ」を成功させることが出来るという²⁰⁷。

この記述から、夕雲流の優れた弟子は、師から教えられた通りに心を整えることができ、さらに、少しも勝負に心を奪われることがない人物であったといえる。そして、「相討を心やすく思ひこめ、いつも相討よと心得たる武士は、一代運さへ尽ぬ程なれば、無類の勇を働きたる事限りもなし。自分を全うして勝を取らんと計りしたるものゝ思ふまゝに勝を得たるは一人も見へず。相討さへ快くはならずして、片負け計りしたる類多し²⁰⁸」と相討が出来た者は出来ない者と違い、戦場で「無類の勇」を働くことが出来る、と述べられていることから、この剣術を学び、勝利への執着を捨てることこそが勝つ事につながると考えられていたようである。

それでは直心流に話を戻し、直心流はどのような理由で相討を批判していたか考察していきたい。「相討」についても、『軍法非切書并入唐目録』において、先に挙げた記述以外にみることができないが、表裏同様、これを批判する態度が直心影流まで継承されているようである。『直心影流秘書一』には以下のような記述が確認できる。

伝心斎ノトキハ、世上ニ相打ト云事流行スル故ニ、塗炭相打ト云モノハアヤマチ也
タトヘハ天地ノ間ニ相打ナキハ、可暑則暑、可寒則寒、是天地ノ常ナリ
然レトモ、アツカルヘシトキニ寒キ事アリ、是全クアヤマチナリ

²⁰⁶ 『武道伝書集成・第二集剣術諸流心法論集 上巻』筑波大学武道文化研究会,p.46,1988.

²⁰⁷ 相討を否定するのであれば夕雲流の究極の境地ともいえる「相ぬけ」を否定しているということも考え得る。しかし「相ぬけ」は夕雲流の師弟一組のみが成功させることのできるもので、「佛在世に佛は唯我獨尊にて一世に二佛は生ぜず。この理を以て見れば当流相弟子中にも同じやうの者一世に二人はあるべからず」とこの世で同時に二つの「相ぬけ」が成立することは有りえないと『夕雲流剣術書』では説かれている（『武道傳書集成・第二集剣術諸流心法論集 上巻』筑波大学武道文化研究会,p.54,1988.）。従って極意である相ぬけを他流の人間が知り得る術はなかったと考えられる。それに対して、相討はまず手始めに教授されるものであるため、他流の人物である伝心斎がそれを知ることは比較的容易であったと推察できる。

²⁰⁸ 『武道伝書集成・第二集剣術諸流心法論集 上巻』筑波大学武道文化研究会,p.35,1988.

スレハ、相打ハナキモノト也²⁰⁹（読点筆者）

記述から、神谷伝心斎の時代に、この「相打」が世に広まっていたことが窺える。そして、この世の中に「相打」が存在しないのは、暑さや寒さと同じであるという。暑ければ暑く感じ、寒ければ寒く感じる、というのが世の中の理であり、暑い季節に寒いということとはあり得ない、あったとしてもそれは間違いである、と指摘する。この文は自然の理について説いていると考えられる。

剣術という斬り合いの場において勝敗は必然的なものであり、避けて通ることは出来ない。したがって勝負の決着が着かないという事態は起こり得ないことである。そのため、勝敗のつかない相討は存在しない、と捉えられている。

また、次の『長沼家伝直心影流秘書』の記述もみておきたい。

トタン相打ナシ是直心流ノ称号

○相打ハ絶テナキ事ナリト云々

言ハ天下ノ人ヲ集メテモ同キ者ナケレハ也

左右ノ目サヘ同キハナシト云ホト也


況ヤ其人違タレハ同人ト云ハナキ也²¹⁰

ここでは、「相打ハ絶テナキ事ナリ」と述べ、その理由として世界中の人を集めても同じ人間は存在しえない、と述べる。さらに左右の目でさえも同じではないのであるから、言うまでもなく人が違えば、同じにはならないという。

つまり、相討の「勝ち負けをつけない」という性格を批判していると考えられる。いくら気心の知れた師弟が相討を試みたとしても結局のところ、その師と弟子は二人の違う人間である。同時に剣を振り上げ、振り下ろす動作を行うとしても、剣を振るう技術、スピード、力強さ、などに必ず違いがあるはずである。そのような二人が太刀を持って打ち合えば、勝負がつかない、という結果にはなりえないと主張していると考えられる。

直心流の神谷伝心斎は自身がこれまで学んできた他流を批判している。批判する他流の中でも特に「表裏」「相討」という兵法の名称を挙げており、これらを批判する態度は直心影流にまで継承されているといえる。

²⁰⁹ 『直心影流秘書一』 鈴鹿家文書、全日本剣道連盟蔵。

²¹⁰ 『長沼家伝直心影流秘書』 鈴鹿家文書、全日本剣道連盟蔵。

第二項 直心正統流から直心影流の成立

1. 直心正統流の成立

本項においては、高橋弾正左衛門重治による直心正統流の創始ならびに山田平左衛門光徳の直心正統流の継承、そして直心影流の成立について考察する。

(1) 高橋弾正左衛門による直心正統流の創始の経緯

高橋弾正左衛門自身が直心正統流の成立経緯を述べた記述は管見の限りみられないが、直心正統流を継承した山田平左衛門光徳が『兵法雑記』において、神谷伝心斎の直心流の創始にまで遡り、その成立の経緯を記している。以下がその記述である。

一 風ノ曰、夫兵法ノ正理、凡ノ百有余年以往断ト謂ヘン乎、其家々末流ニ至テハ、漸ク形而已残テ正実ハ失フ之ヲ、タマタマ神谷氏伝心ト云人中興ノ機分有テ、一流ノ祖ト成テ、一世ニ三十余輩ノ譲ルニ免状ヲト云トモ、多分ハ亦切組ニ下テ、失フ正理ヲ、其内漸ク亦一人止リテ、高橋氏重治ハ続レ之者乎²¹¹

まず、神谷伝心斎が直心流を興すまでの記述に注目すると「其家々末流ニ至テハ漸ク形而已残テ正実ハ失フ之ヲ」とある。この形だけが残し、正しい「実」が失われたという事態は「華法化」のことを指していると考えられる。華法化とは近世中期頃に起きた剣術の沈滞化現象であり、これまで攻防の技術の修練として学ばれてきた「かた」が実戦性と実用性（体力強化や精神の活性化など）の両面において効用が認められなくなってしまった事態である²¹²。この当時の剣術は、形の修行を本体として形式化していたという。そのため、流祖が実戦真剣の経験から考案した形は伝わる内に真意を失い、新たに形を考案しても、無闇にその数を増したり、外観上の体裁を飾るような傾向があったという²¹³。

このように兵法の正しい理が途絶えている中、神谷伝心斎があらわれる。伝心斎は直心流を創始することで兵法を中興し、30名ほどに免許を授けたが、その中で高橋弾正左衛門以外の者は再び切組（ここでは形の意であると考えられる²¹⁴）に落ち、正しい理を失ってしまったという。換言すれば、神谷伝心斎－高橋弾正左衛門の系譜のみに剣術の正しい理が残されている、ということである。相弟子たちが剣術の理を失っていく中で、この相弟子たちと明確に自流を区別するために、弾正左衛門は「直心正統流」を名乗ったと考えら

²¹¹ 『兵法雑記』東京長沼正兵衛家蔵。

²¹² 全日本剣道連盟編『剣道の歴史』全日本剣道連盟,p.11,2003,参照。

²¹³ 富永堅吾『剣道五百年史』（復刻新版）島津書房,pp.275,1996,参照。

²¹⁴ 『兵法雑記』における法定の形の解説の部分に「法定切組」とあることから形のことを意味していると考えられる（『兵法雑記』東京長沼正兵衛家蔵）。

れる。これまでみてきた直心影流の伝承においても、直心正統流の改称の経緯について同様のことが述べられており、直心影流の伝承と『兵法雑記』における記述内容は一致しているといえる。

（２）相弟子の批判

直心正統流・高橋弾正左衛門が記した『稽古法定序并理歌』には次のような記述がみられる。

右序并利歌口伝智也少々行ニウツラハ切組兵法構勝兵法所作兵法理兵法此四ツノ品ノモノハ仮令弟子ハ数万人トリ其身年長平生可然仁体ニ見エタリトモソレニハヨルヘカラスウタカイナク勝ヘシ²¹⁵

ここでは、「切組兵法」「構勝兵法」「所作兵法」「理兵法」という四つの兵法について、たとえ弟子を数万人とり、その兵法の人物が立派でふさわしい人柄に見えても、それに左右されず、疑いの念を持つことなく、勝つべきであるという。この記述からは、これら四つの兵法は多くの弟子がおり、また、これを実践する者が一見、人格的にも立派であるようにみえるが、実はそうではない、と述べているように捉えられる。

これら四つの兵法は山田平左衛門光徳が著した『兵法雑記』においてもみられる。『兵法雑記』には、他流についての記述が数ヶ所みられるが、そのうちの一つは高橋弾正左衛門が記した文を光徳がそのまま載せたものであるという。以下、その部分を挙げておきたい。

- 一 直翁自筆悦世間兵法柄日野累嚙
- 一 ウケ左右同突ウケ 一シノギズリ
- 一 鏑責 ○ツケ ○表裏 ○ハリヲトシ
○ハヅシ ○ヒラク ○浮シヅミ ○飛ハ子
○無二無三 ○無メンモリ ○カルワザ
○一眼二サソク ○一心二力 ○手足眼心
○運次第 ○調子拍子 ○気然 ○位ヲトル
○戯ヲウツ ○相気ヲハツス ○寒夜ニ霜ヲキク
○懸待遊 ○上段中段下段 ○左リニカマエ
右品々ヲ一首ニ

²¹⁵ 『稽古法定序并理歌』貞享3年、東京長沼正兵衛家蔵。

一 アシキトハウケツケ表裏飛ハ子ツ至極ハカゝレサキハ極樂

一 キリムスブ太刀ノ下コソ地獄ナレタゝフミカゝレ先ハ極樂

○切組兵法 ○構勝兵法 ○所作兵法 ○理兵法

○事理ノニツ業ヲカラシテ後理ヲ説ト云

○信陰流表ハ序キリト云 ○テングシヨ ○圓バシト云テ水月ノ位ト云

シン妙劍極意 始終手裏劍ト云

○一刀流 星 刀 発車刀 表ゴテン切ヲトシ

△極意 獅子本テキ

○ト伝流 表ニホツソ振セメ 極意一太刀

累年耳目ニフルゝ事今記此而已

直心正統一流ハ事理一体也口傳

吾ガ流ハ請ツケ表裏飛ハ子ズ

切ニモアラズキラヌニモナリ 是亦口傳

貞享十二乙丑年六月三日 高橋弾正重治²¹⁶（下線部筆者）

まず、冒頭に「直翁自筆」とあり、この記述が弾正左衛門の自筆のものであることが窺える。以下、他流の記述が箇条書きで記されており、ここにも『稽古法定序并理歌』にみられた「切組兵法」「構勝兵法」「所作兵法」「理兵法」をみることができる。

また、これら四つの兵法は『兵法雑記』における光徳自身が記した箇所にもみられる。

風翁曰異端ヲ集ム

○切組兵法○所作兵法○^(ママ)構勝○理兵法○系図兵法

○取手○ヤワラ○居合○小具足○朴ツカイ

右十段之行者世ニ弘マリ数万人ハ業スル妙術ト云トモ一其味益^{マスマス}異端也是ヲ詠シテ

△世ニ鳴ス利法劍術サマサマニ怒^{イカ}モノ喰^{グイ}ヤ牙齒ノ争

△吾ガ家ノ神尊シヤ井ノ内ノカハヅ合戦ニ泥田朴ウチ

此外ハ前ニ記ス勿論此二首モ前ニ見ルト云トモ専ラ対異端²¹⁷（下線部筆者）

光徳（風翁）は以下の 10 種の兵法を異端であると評し、これらを修行する者が世に広がり、その数が数万人に至ったとしても、その剣術は異端であることに変わりはないという。

²¹⁶ 『兵法雑記』東京長沼正兵衛家蔵。

²¹⁷ 『兵法雑記』東京長沼正兵衛家蔵。

ここにみられる「切組兵法」「所作兵法」「構勝」「理兵法」などは直心正統流の『稽古法定序并理歌』や先述の『兵法雑記』の弾正左衛門が記した記述にもみられるものであり、これらの兵法を批判する態度が弾正左衛門の頃より継承されているといえよう。また、この光徳が述べた箇所には「系図兵法」が新しく加えられている。流派が光徳に受け継がれた後にも、新たに批判の対象となるような流派が発生していることが窺える。

これらの兵法を批判する態度は、後世の直心影流の伝書にもそのまま受け継がれている。直心影流の修行者に伝授される『直心影流兵法窮理之巻²¹⁸』には、「世の中に徘徊する兵法者など云ふ者の類、切組兵法、所作兵法、系図兵法、理兵法、此類のものともは世間の人を此七病人に致すと見へたり²¹⁹」（読点筆者）と、切組兵法・所作兵法・系図兵法・理兵法などの兵法が世間の者を「七病人」という弊害に陥らせるという。『直心影流窮理之巻注解秘書』においては、この「世の中に徘徊する兵法者」を以下のように詳述している。

世ノ中ニ徘徊スル兵法者ナト云者ノ類ハ、トハ他流ノ事ニアラス、前ニ云三十三人ノ
伝心ノ弟子ナリ、国々ニ広マレトモ、多クハ名利ニノミ掛リ、実学ナラヌ也、切組トハ色々人ノ目ノ付切組ヲコシラヘ、骨ヲ折ラシ、外見ハ見事ナレトモ、実気ナシ、構勝トハ是又切組ト同ジ、構ニテ勝ト云テ、種々人ノ目ヲ驚スルナリ、所作トハ色々ノ事ヲ拵ヘ、深山ニ入テ天狗ノ伝ヲ受ケタル杯ト云フラシ、サマザマノ所作ヲスル事也、系図トハ此兵法世上猶多シ、事理ノ事ハ外ニシテ兵法ノ伝ト号シテ、七書ノ中ノ三略或ハ仏ノ巻杯ト名付、日取時取方角杯ノ事ヲ教ヘ、先師ト云テ書立ルニ知モセヌ一千年ニモ及フ士ノ名ヲカリ、音曲本ニ有ル如キノ事ヲ伝ル也、理トハ言ヲ巧ニシテ千万ノ理屈ヲ云フラシ、武州東海寺沢庵ノ云フラシタル法語仏教ナトヲ以テ、人ニ教ヘ経文等ニ注釈シテ、口利根ニ云教ユ、大小杯異体ノ拵ヘヲナシ、行住座臥剣術者ト思レン事ヲノミ望ム事也²²⁰（下線部、読点筆者）

これらの兵法の類は他流ではなく、神谷伝心斎の 33 人の弟子の事を指しているという。つまり、高橋弾正左衛門重治の相弟子たちの兵法であると捉えられる。したがって、高橋弾正左衛門が『稽古法定序并理歌』において批判していたのは、相弟子のことであったと

²¹⁸ ここでは文政 3 年（1820）に鹿島神伝 12 代である杉本新次郎から鈴木亀五郎に授与されたものを取り扱うこととする。この書には『兵法伝記』も収録されており、これを見ると、長沼四郎左衛門国郷—長沼正兵衛綱郷—藤川弥司郎衛門近義—志村弥平治という伝系を辿っており、杉本は藤川の門弟であった志村弥平治に師事したことが窺える。

²¹⁹ 『直心影流兵法窮理之巻』文政 3 年、小田原市立図書館蔵。

²²⁰ 『直心影流究理之巻注解秘書』天保 9 年、中京大学附属豊田図書館蔵。

考えて良い。以下、これら批判の対象となっている兵法についての説明を列記しておく。

- ・切組兵法…人の目につく様々な形を考案することに精を出す兵法で、外見は見事であるが、実際には役に立たない。

- ・構勝兵法…切組兵法と同じような兵法で、構えによって勝利を得るといい、人々の目を驚かせるような兵法。

- ・所作兵法…色々と物事を装い、山に入って天狗から授かったとして様々な所作をするような兵法。

- ・系図兵法…先師として知りもしない千年にもわたる武士の名前を借りて、音楽の本に載っているようなことを伝える兵法。

- ・理兵法…言葉を巧みに使い、多くの理屈を述べ、仏教の用語をもって人に教えたり、経文などに注釈する兵法。

これらの兵法は多くの国に広まったが、名誉と利得のみを重んじるもので、実理の学ではないと批判する。

このような兵法が神谷伝心斎の 33 人の弟子の中から生まれており、弾正左衛門はこれらの剣術を批判するとともに、自流を「直心正統流」と名乗り、これらとの差別化を図っていたと考えられる。

2. 直心影流の成立

(1) 山田平左衛門光徳の直心正統流の継承

次に直心影流の成立についてみていくこととする。

直心影流の伝書においては、光徳が直心影流を名乗ったとされているが、実際には光徳が直心正統流二代を名乗っていたことは第二節で述べた通りである。直心影流の成立を考察するにあたり、まずはこの点について詳細な記述をみておきたい。次の文は先に挙げた『兵法雑記』の記述（注 26）の続きである。

一 風ノ曰、夫兵法ノ正理、凡ソ百有余年以迄断ト謂ヘン乎、其家々末流ニ至テハ、漸ク形而已残テ正実ハ失フ之ヲ、タマタマ神谷氏伝心ト云人中興ノ機分有テ、一流ノ祖ト成テ、一世ニ三十余輩ノ譲ルニ免状ヲト云トモ、多分ハ亦タ切組ニ下テ、失フニ正理ヲ、其内漸ク亦一人止リテ、高橋氏重治ト云続レ之者乎、是亦寛永年中ヨリ宝永ノ比マテ積年八十年ニ及ヘリ、件ノ一派弘メ世ニ譲ルニ免状ヲト云トモ、終ニ正理真実ノ行者ナシ、愚老モ亦微運ニ而、時世ニ功ヲ難ト云立云トモ、正統一派ノ二代ノ證文相続シ、今年

齡及_二七十_ニ露命不足ト云トモ、幸_ヒ求_メ、歎_ク一_ニ道之廢絶_ヲ余_リニ願_{コトハ}後弟残_シト_ヲ、限_ル命_ヲ者也²²¹（読点筆者）

この記述によれば、高橋弾正左衛門は自流を世に広め、免状を 20 人余りの者に授けたが、終に正しい理を持つ真実の修行者がいなくなってしまったという。このような経緯から光徳は自身が世に功を立てるような人間ではないものの、この直心正統流の二代を相続したことを述べている。そして、今年 70 歳になり、余命が十分ではないが、一道の廢絶を嘆く余りに、後継者を残すことを願い、このことに残りの命を費やすという。

この記述から、光徳は 70 歳という高齢になっても未だ直心正統流の二代を名乗っていることがわかる。

さらに、光徳の 70 歳の時の記述を『兵法雑記』からもう一箇所挙げておきたい。

一 免状者三男右平太重寛ニ伝授ス于時宝永五年六月廿八日年齢_ニ十一歳先師重治直ノ判印譲_レ之裏書曰ク

表書之一卷先師高橋弾正重治_{ヨリ}免状之旨趣文法者猶本文ニ明白也ニ然旁下從幼年流術之執行無_二怠慢_一就中近年者愚老_モ在府之公務無_二余力_一乍_レ思怠_二出席_ヲ覺_レ場_ヲ所_ニ更_ニ退屈之無_レ色予_ガ為_二官代_ト踏_二直心之道場_ヲ専_ヲ誘_二学友_ヲ一派相続之志_シ不_レ残_ヲ令_二感心_一未_タ年齢二十余雖_レ為_ト若年_一日来之褒_メ力行_ヲ且_ハ于_二流門_一為_メ引入_シ達_シ公聞_ニ学友_ニ弘_メ之予_ガ年齢_モ漸_ク及_二七十_ニ今幸_ヒ奉公致仕ノ期也依_テ之從_二先師_一予_ガ所_レ伝_ル目錄免状譲_レ之畢又且亦_タ先年一派之修行目錄ノ格位雖_レ有_ト相応之節_一修行之意味有而暫_ク延_レ之今度元祖伝心老任_二古列_ニ目錄免状一_ニ之令_二相伝_一者也²²²（下線部筆者）

この記述は宝永 5 年 6 月 28 日に国郷に与えた免状の裏書で、大まかな内容としては国郷の日頃の行いを称え、目錄ならびに免状を授けるというものである。ここで光徳は自身が 70 歳であることに触れている。前掲の記述も踏まえると、光徳は国郷が流儀を継承するまでの間、直心正統流二代を名乗っていたといえる。

以上から、直心影流の伝書において述べられている山田平左衛門光徳が直心影流と改称したという伝承は否定され、長沼四郎左衛門国郷が直心影流を名乗ったと考えられる。

²²¹ 『兵法雑記』東京長沼正兵衛家蔵。

²²² 『兵法雑記』東京長沼正兵衛家蔵。

(2) 直心正統流と直心影流の比較

これまで直心流、直心正統流における他流批判について考察し、それらが直心影流にまで継承されていることを述べてきたが、今度は、直心正統流から直心影流へ至る段階で変化した箇所について考察していきたい。

基本的には直心正統流の目録と直心影流の目録は共通点が多いようであるが、ここで両者を列記し、表 1-12 として比較しておきたい。『直心正統流兵法目録²²³』は元禄 7 年(1694)に山田平左衛門光徳が山田甚之助に授けたものを取扱い²²⁴、『直心影流兵法目録²²⁵』は安政 2 年(1856)に小川棟吉郎²²⁶が早川真之助に与えたものを載せる。

表 1-12 直心正統流と直心影流の目録の比較

『直心正統流兵法目録』	『直心影流兵法目録』
直心影流兵法目録次第	直心影流兵法目録次第
八相 発破	八相 発破
一刀両断	一刀両断
右転左転 旋トモ	右転左転 旋トモ
長短一味	長短一味
	龍尾 左右
	面影 左右
	鉄破 進退
	松風 左右
	早船 左右
	曲尺
圓連 刀連体連	圓連 刀連体連
右口伝	右口伝
一 陰之構之事	一 陰之構之事
一 陽之構之事	一 陽之構之事
一 相構之事	一 相構之事

²²³ 『直心正統流兵法目録』(『吟味之趣意』所収,) 写, 鈴鹿家文書, 全日本剣道連盟蔵。

²²⁴ 光徳が書いた奥書の前に、延宝 7 年(1679)に高橋弾正左衛門重治が山田平左衛門光徳に与えたというもう一つの奥書がみられる。

²²⁵ 『直心影流兵法目録』安政 2 年, 小田原市立図書館蔵。

²²⁶ 伝系を見ると、この人物は藤川弥次郎右衛門貞近(整斎)から流派を継承しており、藤川派の人物であるといえる。

一 相心之事				一 相心之事			
一 目付之事				一 相尺之事			
一 仕懸之事				一 目付之事			
一 手之内之事				一 仕懸之事			
一 横一文字之事				一 手之内之事			
一 豎一文字之事				一 横一文字之事			
一 氣当之事				一 豎一文字之事			
一 体当之事				一 留三段之事			
附太刀当之事				一 体当之事			
極意				一 太刀当之事			
				一 切落之事			
				一 吟味之事			
右口伝				右口伝			
アウン（梵字）	功妙劍	口伝		アウン（梵字）	功妙劍	口伝	
	心妙劍	口伝			心妙劍	口伝	
権体勇 不行不帰不止		口伝		氣当		口伝	
西江水		口伝		権体勇 不行不帰不止		口伝	
惣体之 𠄎		口伝		西江水		口伝	
口上極意之事		口伝		惣体之 𠄎		口伝	
以上				口上極意之事		口伝	
右條々極意者有口伝以理為誠以誠為理也愈				不立之勝		口伝	
夫鍛練二六時中無怠慢御勉可為肝要者也				十悪 非トモ		口伝	
				カマン カシン トンヨク イカリ			
右者從先師神谷氏伝信大居士目錄之雖為奥				ヲソレ アヤフミ ウタカヒ マヨイ			
儀今旁下数年有深実信仰而二六時中依被励				アナツリ マンシン			
懇精之不殘一塵授之剩加愚意説弥抽丹誠此				勝といふは先々先に後の勝は			
道有切磋琢磨工夫可被鍛練而猶心妙不測之				また先々に先後先後と			
所免状之時可顯之者也				右左後も前も一致して			
惣体之 𠄎		口伝		天地万物同根一空			
不立之勝		同		書渡し口に伝ふる言の葉の			
心 目 体		同		常の心に持はたんれん			

<p>十悪 <small>非トモ</small> 同</p> <p>食欲と慢心愚智の起りなは</p> <p>家と我身を切ると知るへし</p> <p>勝といふは先々先に後の先は</p> <p>亦先々に先後先後</p> <p>左右後も前も一致して</p> <p>天地同根万里一空</p> <p>尋ねてもたつねても又空の道</p> <p>又たつねても空の一空</p> <p>書渡し口に伝る云の葉の</p> <p>常の心に持は鍛錬</p> <p>右五首 口伝</p>	<p>右三首 口伝</p> <p>以上</p> <p>右條々極意者口伝以理為実以実為理也愈工夫鍛練二六時中無怠慢御勉可為肝要者也先師杉本氏政元目錄之旨趣雖為奥義今足下数年有信実深仰而二六時中依被励懇精不殘一塵授之弥抽丹誠此道有切磋琢磨工夫可被鍛練而猶心妙不測之所免状之時可頌之者也</p>
---	--

表 1-12 から、直心正統流と直心影流の目録上の変化について特筆すべき点を考察しておきたい。

最も目立つ変化としては、直心影流の目録に「龍尾」から「曲尺」までの項目が新しく追加されていることである。これらは目録上からは分らないが、十之形²²⁷というしな打ち込み稽古における基本技術の形の名称である（この十之形については第三章において論じる）。直心影流の伝承では、十之形は真新陰流の小笠原源信斎が考案したとされているが、直心影流成立以前の伝書（真新陰流『真之心陰兵法目録』、直心流『軍法非切書并入唐目録』、直心正統流『兵法雜記』）においてその名称を窺うことは出来ない。このことは中村氏も先行研究において「直心正統流の伝書には『龍尾』から『曲尺』まで韜の形十四本の内十三本までが欠落している²²⁸」と指摘している。十之形の存在が確認できるのは国郷が著した『直心影流目録口伝書』からである。

また、この他に「相尺之事」「留三段之事」「切落之事」「吟味之事」が新たに追加されている。これらについても光徳の著した『兵法雜記』には確認できないが、国郷の『直心影流目録口伝書』には記述されている。

直心正統流から直心影流に流名が変化するに従い、目録上においてもいくつか変化が見受けられるが、これらの変化は光徳の著した『兵法雜記』にみられないことから流名を変更

²²⁷ 「韜の形」と表記する場合もあるが、本論では十之形と表記する。

²²⁸ 中村民雄「幕末関東剣術流派伝播形態の研究（2）」（『福島大学教育学部論集 社会科学部門』第 66 号所収）福島大学教育学部，p.72,1999.

した国郷によって付加されたものであると考えられる。

本節では、直心流の創始から直心影流に至るまでの伝系を考察してきた。本節における考察結果を以下に簡潔にまとめておきたい。

直心流は神谷伝心斎がこれまで自身が学んできた流派を否定し、兵法の根元を改め創始した流派であることから、これまでの流派から大きく変化していると考えられる。神谷伝心斎は他流の剣術について批判しているが、これらを批判する記述が直心影流にもみられるため、直心流の他流を批判する態度は直心影流にまで伝わっているといえる。

その直心流を継承した高橋弾正左衛門重治は神谷伝心斎の 33 人の弟子の中で、自身が直心流を正しく継承しているという意識から、「直心正統流」と改称したようである。流名は変わったものの、直心流を継承しているという立場に立っていることは間違いない。このような経緯から、直心正統流では相弟子の流儀を批判しており、これらについても直心影流の伝書にも確認することができる。

本節において最も特筆すべき考察結果としては、直心正統流から直心影流に至るまでの過程において、後世の直心影流の伝書で語られている伝承と異なる点がみられたことである。後世の伝承では山田平左衛門光徳が直心影流を名乗ったとされているが、『兵法雑記』の記述から、光徳は 70 歳まで「直心正統流二代」を名乗り、この 70 歳の時に流儀の免状・裏書を国郷に授けたということが明らかである。つまり、国郷は光徳から直心影流ではなく、直心正統流を継承しているということである。したがって流名が直心影流となったのは国郷以降であることが分かり、国郷が流名を直心影流に改めたと考えられる。

また、流名の変化に伴い、形や習の名称についても変化が確認される。直心正統流と直心影流の目録を比較すると、しない打ち込み稽古の基本の形である、十之形の「龍尾」から「曲尺」までの項目が新しく追加されていることが確認できる。この形に加え、「相尺之事」「留三段之事」「切落之事」「吟味之事」の習が新たに追加されている。これらの項目は光徳の著した『兵法雑記』には確認できず、国郷の『直心影流目録口伝書』に記述されているため、直心影流の成立にあたり、国郷によって付け加えられたものであると考えて良いだろう。

第五節 分派の発生と伝播

本節では、次章以降を論じていくための前提として、長沼四郎左衛門国郷以降の伝播を把握していきたい。国郷以降、後世に継承されていくにつれて流派が分化し、分派が形成されていく。この中でも主な三派に注目し、先行研究の知見に加え、可能な限りの史料にあたり、伝播を追っていくこととする。

第一項 長沼四郎左衛門国郷以降の伝系

はじめに、国郷以降の流派の伝播ならびにそれに伴う分派の発生を大まかに把握しておくために、以下に国郷以降の伝系を図示しておきたい。

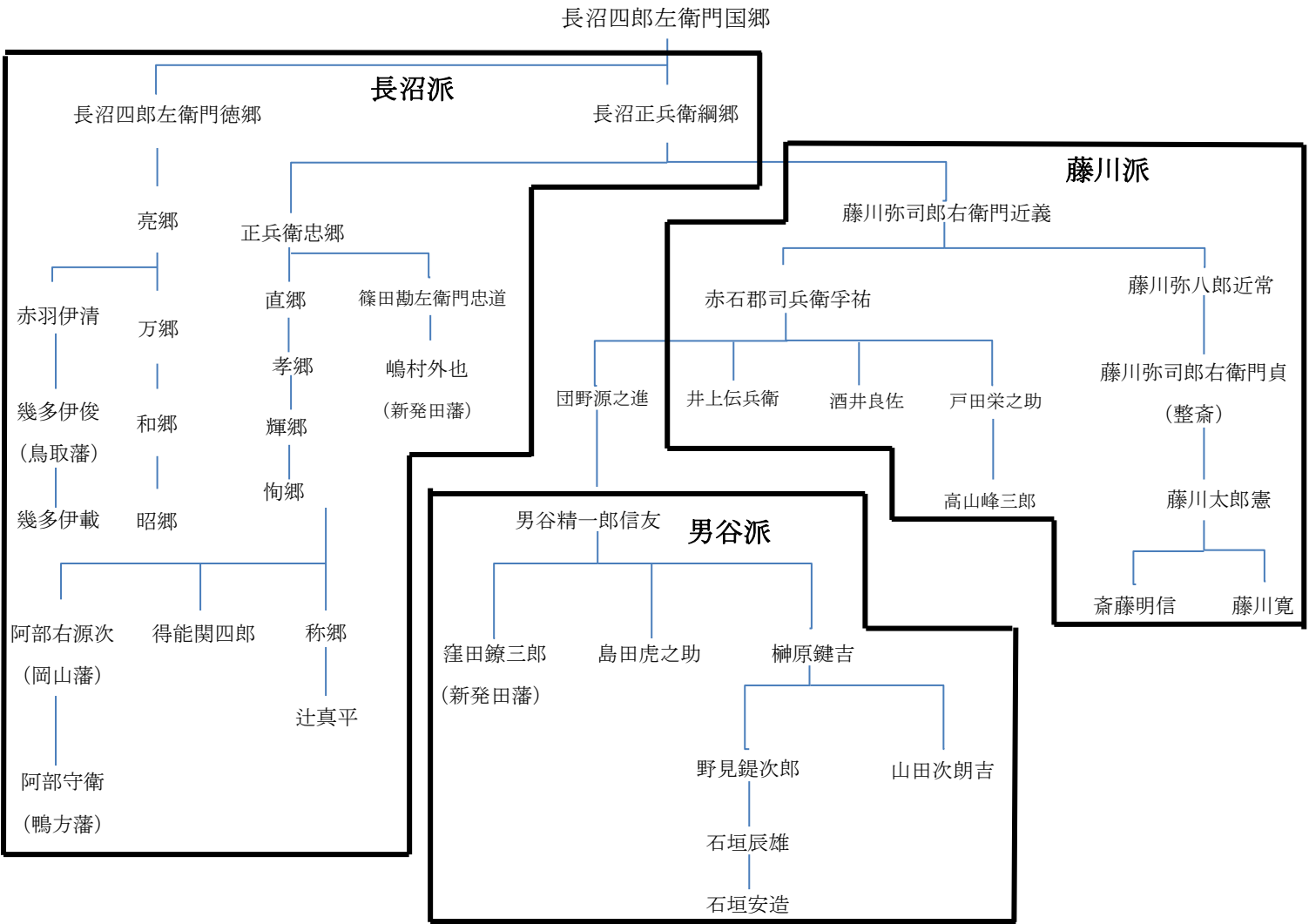


図 1 - 4 長沼四郎左衛門国郷以降の伝系図

国郷以降の当流は大きく分けて三つの派に分化する²²⁹。長沼宗家・分家を中心に発展した「長沼派」、藤川弥司郎右衛門近義を祖とし、藤川家を中心に栄えた「藤川派」、幕末、講武所の頭取を務めた男谷精一郎が率いる「男谷派」の三派である。

次項以降、分派別にその伝播と主な人物についてみていくこととする。

第二項 長沼派

1. 長沼派の発生

本項では、三派の中でも特に早く派生した長沼派についてみていくこととする。

長沼派は、二つの家を中心に構成される分派である。岩佐勝²³⁰『鹿島神伝直心影流』に記載された伝系によれば「四郎左衛門家」は「宗家長沼派」、「正兵衛家」は別家長沼派と記されている²³¹。つまり、長沼宗家である「四郎左衛門家」、そして分家である「正兵衛家」の伝系を合わせて「長沼派」と呼ぶということである²³²。まず、これら二つの家を別々にみていくこととしたい。

(1) 四郎左衛門家

四郎左衛門家は国郷を祖とする。国郷には長い間子どもが出来なかったため、国郷は道統を存続させるために高弟であった斎藤祐五郎に長沼姓を与え、綱郷と名乗らせた。

しかし、寛保元年（1741）、国郷に男児が生まれる。これが後の四郎左衛門徳郷^{のりさと}である。徳郷は高齢の父国郷にかわって道統を継いでいた綱郷に師事し、後に独立、四郎左衛門家を継承した²³³。

しかし、徳郷は安永4年（1777）に36歳の若さで亡くなってしまう。徳郷には子供がいなかったため、国郷の父、山田平左衛門光徳の曾孫にあたる貞郷^{さださと}を後継者とし、肥田次郎太夫秀行、伊藤荘左衛門政実が後見を務めたが、貞郷も天明元年（1781）に没する。そこで伊藤荘左衛門の弟が跡を継ぐこととなる。これが亮郷^{すけさと}である²³⁴。亮郷が長沼宗家を継いだ後は、ようやく元のような賑わいを取り戻すことができたという。亮郷の後は万郷^{まささと}・楽郷^{やすさと}

²²⁹ 『武芸流派大事典』によると、団野源之進は直心影流団野派という独自の分派に属するようである（綿谷雪・山田忠文編『武芸流派大辞典』東京コピー,p.332,1978,参照.）。そのため、本節で考察の対象とする三派からは外れる。

²³⁰ 岩佐勝は図1-2にみられる山田次朗吉の系統の流れを汲む人物である。

²³¹ 岩佐勝『鹿島神伝直心影流』武道振興会,p.18,2005,参照。

²³² 中村民雄氏は先行研究において、「四郎左衛門系」「正兵衛系」と称している（中村民雄「幕末関東剣術流派伝播形態の研究(2)」『福島大学教育学部論集 社会科学部門』第66号所収,福島大学教育学部,pp.65-68,1999,参照.）。

²³³ 中村民雄「幕末関東剣術流派伝播形態の研究(2)」(『福島大学教育学部論集 社会科学部門』第66号所収) 福島大学教育学部,p.65,1999, 参照。

²³⁴ 富永堅吾『剣道五百年史』（復刻新版）島津書房,p.326,1996, 参照。

(万郷の長男であったが、早世) —和郷²³⁵ (万郷次男) —昭郷²³⁶と続いていく²³⁷。

(2) 正兵衛家

上記のように長沼四郎左衛門国郷は、養子に迎えた斎藤祐五郎を長沼正兵衛綱郷と名乗らせる。この綱郷からはじまる長沼分家が正兵衛家である。

斎藤祐五郎 (のちの綱郷) は早くから国郷の下で修行をし、頭角を現した。その実力は国郷の代稽古にあたるほどであったという²³⁸。駿州田中城主・土岐頼稔は国郷を剣術師範に招聘したいと申し込んだが、国郷は高齢を理由に辞退したようで、その代りに綱郷を推薦したという。このような経緯で綱郷は享保 8 年 (1723) より土岐頼稔に仕えるようになる。その後、寛保 2 年 (1742) に、土岐頼稔は上州沼田へ国替えとなるが、綱郷は江戸定府のまま兵法師範を続けたという。明和 4 年 (1767) に国郷が亡くなると、四郎左衛門家から独立し、芝愛宕下田村小路に道場を構え、多くの門弟を指導した²³⁹。門人の数は三千人にも上ったという²⁴⁰。

綱郷の死後は忠郷が継ぎ、兵法師範を務めた。忠郷には義郷と光郷という二人の息子がいたが、病弱のため、井上八十吉なる人物の弟を養子に迎え、直郷と名乗らせ、家督を継がせた。直郷は文政 2 年 (1819)、忠郷の長男・義郷の子、孝郷が免許皆伝し、家督を相続するまで兵法師範を務めた。家督を譲ってからの直郷は隠居し、沼田に移り住み、現地で直心影流を教えたという。

しかし、家督を継いだ孝郷は文政 10 年 (1827) に亡くなってしまう。孝郷には子供がいなかったため、弟の輝郷 (次男) が家督を継いだ。輝郷も天保 2 年 (1831) に 26 歳の若さで死去してしまう。そこで輝郷の弟・恂郷 (三男) が家督を相続し、多くの門弟を育てていったという。恂郷の後は称郷 (三男) が家督を継いだ。廃藩後は道場を閉鎖したという²⁴¹。

²³⁵ 中村氏によれば、和郷は大正 14 年に剣道範士号を贈られたという (中村民雄「幕末関東剣術流派伝播形態の研究(2)」『福島大学教育学部論集 社会科学部門』第 66 号所収, 福島大学教育学部, p.72, 1999, 参照)。

²³⁶ 昭郷は、岩佐勝『鹿島神伝直心影流』の伝系図による (岩佐勝『鹿島神伝直心影流』武道振興会, p.18, 2005, 参照)。

²³⁷ 中村民雄「幕末関東剣術流派伝播形態の研究(2)」『福島大学教育学部論集 社会科学部門』第 66 号所収, 福島大学教育学部, p.65, 1999, 参照。

²³⁸ 富永堅吾『剣道五百年史』(復刻新版) 島津書房, p.326, 1996. 参照。

²³⁹ 中村民雄「幕末関東剣術流派伝播形態の研究(2)」『福島大学教育学部論集 社会科学部門』第 66 号所収, 福島大学教育学部, pp.65-66, 1999, 参照。

²⁴⁰ 『沼田市史 資料編 2 近世』沼田市, p.967, 1997, 参照。

²⁴¹ 中村民雄「幕末関東剣術流派伝播形態の研究(2)」『福島大学教育学部論集 社会科学部門』第 66 号所収, 福島大学教育学部, pp.67-68, 1999, 参照。

2. 長沼派の伝播と主な人物

以上、長沼派は本家の四郎左衛門家と分家の正兵衛家を中心に発展してきており、これら両家から全国各地に伝播していく。ここでは両家から伝播した地域や当派の著名な人物についてみていきたい。

(1) 鳥取藩への伝播

四郎左衛門家からは鳥取藩に伝播していく。鳥取藩における直心影流の伝播は、三島清久なる人物が、江戸で西尾源左衛門忠恕に学んだことにはじまる。『武芸流派大事典』によると、西尾源左衛門忠恕は、長沼四郎左衛門徳郷—西尾源左衛門克忠という伝系の流れを汲んでおり、四郎左衛門家の系統の人物であるといえる²⁴²。その後一旦中断されるようであるが、幾多伊俊によって文政年間に再び伝えられた。

幾多伊俊は直心影流を松山藩士の赤羽伊清²⁴³に学んだという。また、父・伊真から種田流の鎗術を学び、16歳で目録を受けている。そして直心影流剣術と種田流槍術によって松山藩に召し抱えられ、十人扶持を与えられた。しかし、松山藩には長くとどまらず、文政4年(1821)に山陰道を通り、米子²⁴⁴に足を留めたとき、彼の名声を聞きつけた多くの者が入門を希望したため、そのまま数年を米子で過ごした。文政12年(1829)より、藩から毎年賄料として銀10枚を与えられるようになり、天保3年(1833)には五人扶持を与えられ、米子の組士となり、仕官することとなった。天保11年(1841)ごろより、鳥取城下の武士の入門者が増え、伊俊は門弟たちの願いにより鳥取に移り、200石を与えられた。

幾多伊俊には伊載という息子がおり、彼が伊俊の跡を継ぐ。伊載は種田流槍術および直心影流剣術を伊俊に学んだという。稽古ぶりは直心影流古流の遣方で、3尺3寸の竹刀で上段に構え、足遣いは軽快で、前後に進退しつつ、遠間から機を見て打込んだ後、体当たりをして、敵の斜面を打ち、また遠間に戻る、という様子であったという。敵の打込みに対しては左または右に開いて応じていたようである。

しかし、明治維新前から鳥取においても長竹刀が流行し²⁴⁵、伊載の江戸詰中に門人も長

²⁴² 綿谷雪・山田忠史編『武芸流派大辞典』東京コピー,p.329,1978,参照。

²⁴³ この人物は長沼四郎左衛門亮郷に学んだようである(山根幸恵『鳥取藩剣道史』溪水社,p.149,1982,参照.)。

²⁴⁴ 米子は池田藩の城下町であったという(新村出『広辞苑 第六版』岩波書店,p.2908,2008,参照.)。

²⁴⁵ この長竹刀は天保年間、江戸で流行した。流行の契機となったのは、柳河藩士・大石進が天保4年(1833)と天保10年(1839)の二度にわたって、江戸に滞在し、5尺3寸の長竹刀で江戸中の剣術家を打ち破ったことである。大石進は、柳河藩の剣術・槍術師範であったため、長竹刀によって剣術と槍術を融合させた技を遣い、突技、胴技を主体としていたようである(中村民雄『剣道事典—技術と文化の歴史—』島津書房,p.100,1994,参照.)。

竹刀を使うようになり、試合ぶりも変わってしまったため、以後、槍術のみを指南することにしたという。明治 16 年（1883）には元藩主池田輝知²⁴⁶に招かれて東京へ行き、剣術を教授した²⁴⁷。

（2）村上藩・新発田藩への伝播と嶋村外也

次に正兵衛家から伝播した地方として、特に村上藩・新発田藩に焦点を当て、伝播をみていきたい。

この二つの藩における伝播は、村上藩士・篠田勘左衛門忠道が正兵衛忠郷に入門したことから始まる。篠田は、父を角右衛門忠永と言ひ、禄高 100 石であったという。幼少から剣を好み、江戸の長沼正兵衛忠郷に師事し、研鑽を積み、村上藩に戻り師範となった。これが寛政年間のことであったという²⁴⁸。帰藩した篠田のもとに、藩命を受けた新発田藩士・嶋村外也と師橋幸三郎が入門する。篠田の下で直心影流を学んだ嶋村は帰藩後、新発田藩の剣術師範役を命じられ、これより新発田藩において直心影流が学ばれることになる。

全国的に他流試合が盛んになる天保の頃になると、新発田藩は天保 14 年（1843）に嶋村門下であった窪田鐮三郎と溝口周太の 2 名を選抜し、男谷精一郎へ入門させる。そして弘化 2 年（1845）に男谷から免状を授かり、男谷道場での修行を切り上げ帰藩した窪田・溝口は「其方共儀剣術上達したし追々隨身之者も有之趣に付三人扶持ツゝ被下置剣術世話被仰付²⁴⁹」との通達を受け、剣術世話役になり、嶋村とは別に男谷派の直心影流を教授するようになる。ここにおいて新発田藩内に直心影流の二つの分派が存在するようになり、別流派であるかのように別々に指南され始めたということである。窪田は安政 4 年（1857）に「其方儀男谷精一郎様より被仰進候儀も有之²⁵⁰付剣術師範被仰付別而門弟共行立候様世話致候²⁵¹」とあるように、剣術師範役を任命され、嶋村と同格になったという。そして藩は講武所で行われているような打ち込み稽古を奨励し、「両門弟打込順熟稽古いたし候様世話可致候²⁵¹」と藩内でも行うように、嶋村・窪田両師範に通達した。しかし、嶋村は古法を墨守し、時流に乗った打ち込み稽古や他流試合に応じなかったという。これに対して藩は

天保年間のおよそ 20 年後に講武所が創設され、ここで 3 尺 8 寸以上のしないの使用が禁止されたが、講武所以外では変わらず長竹刀が用いられたようである（堀正平『大日本剣道史』剣道書刊行会, pp.149 - 152, 1934, 参照.）。

²⁴⁶ 池田輝知は、鳥取藩池田家第 12 代当主の池田慶徳^{よしのり}の次男であり、明治 5 年に家督を譲り受けた人物である（『三百藩藩主人名事典 第四巻』新人物往来社, pp.31, 32, 1986. 参照.）。

²⁴⁷ 堀正平『大日本剣道史』剣道書刊行会, p.658, 1925, 参照.

²⁴⁸ 『村上郷土史』歴史図書社, pp.166 - 167, 1974, 参照.

²⁴⁹ 『新発田藩月番日記』弘化 2 年, 新発田市立図書館蔵.

²⁵⁰ 『新発田藩月番日記』安政 4 年, 新発田市立図書館蔵.

²⁵¹ 『新発田藩月番日記』安政 4 年, 新発田市立図書館蔵.

安政 5 年（1858）に「嶋村外也剣術指南御免、右門弟共以来上段遣方見合、精眼専遣方致候様被仰付²⁵²」と、嶋村を剣術師範役から外し、と嶋村の門弟にも上段方式の稽古を見合わせ、精眼方式を強制させた。

しかし、嶋村の門弟たちはそれに従わず、藩の思うようにいかなかったため、慶応 2 年（1866）、藩は「先年以来精眼一方之遣方ニ被仰付候得共、此度外也元形指南被仰付候而ハ、以来精眼上段銘々心懸次第之事ニ候、乍去各其質ニより得手不得手も可有之儀ニ付兩人熟談を遂各其器ニ応し教導いたし、両派俱繁昌門弟引立御用立候もの出来候様心を合厚世話可致候²⁵³」との通達を出し、嶋村外也を師範役に復帰させ、上段と精眼両方をそれぞれの器量に応じて学ぶように改めたという²⁵⁴。

（3）その他の長沼派に属する人物

その他、長沼派に属する人物で主要な人物を挙げておきたい。

＜阿部右源次・阿部守衛＞

阿部右源次は文政 2 年（1819）江戸浅草に生まれ、長沼正兵衛恂郷に入門し、直心影流を学んだという。池田信濃守²⁵⁵の世臣で、江戸詰であったが、不平があつて、一時浪人した。後に復帰し、国詰となり鴨方藩の師範役を務めた。その後、岡山藩から剣術指南を所望されたため、鴨方藩は子の阿部守衛に譲り、岡山藩藩校の武陽館の師範役を務めたという²⁵⁶。

右源次の息子である守衛は鴨方藩の師範を務め、廃藩後は岡山県巡查教習所や第六高等学校で剣術教師を務めた。明治 28 年（1895）に精錬証、明治 38 年（1905）教士、明治 39 年（1906）に範士の称号を授与された²⁵⁷。

＜得能関四郎＞

得能関四郎は天保 13 年（1842）、土岐美濃守家臣の得能隼人の長男として江戸見坂の沼田藩邸内で生まれた。安政 3 年（1856）、15 歳の時、沼田藩剣術師範・長沼正兵衛恂郷の道場に入門する。文久 2 年（1862）に 21 歳で免許皆伝、恂郷の子である称郷とともに同門の二秀才と称されたという。廃藩後も東京で市中取締役などを務め、明治 13 年（1880）警

²⁵² 新発田市史編纂委員会『新発田藩史料(1)藩主篇』新発田市史刊行事務局,p.355,1965.

²⁵³ 『新発田藩月番日記』慶応 2 年,新発田市立図書館蔵.

²⁵⁴ 佐藤泰彦・酒井一也「新発田藩における直心影流について」(『新発田郷土誌』第 37 号所収) 新発田郷土研究会,pp.1-12,2009,参照.

²⁵⁵ この池田信濃守は、右源次の生年から考えて、鴨方藩池田家 8 代当主の池田政善（1810-1847）であると考えられる（『三百藩藩主人名事典 第四巻』新人物往来社,p.109,1986,参照.）。

²⁵⁶ 堀正平『大日本剣道史』剣道書刊行会,p.640,1925, 参照.

²⁵⁷ 中村民雄『剣道事典—技術と文化の歴史—』島津書房,p.335,1994, 参照.

視庁警衛掛、明治 23 年（1890）警視庁警部、同 24 年（1891）巡查、同 36 年（1903）巡查部長を務め、警視庁撃剣教師、日本武徳会の名誉師範を兼ねていた²⁵⁸。

明治 20 年頃における関四郎の警視庁内の級位は最高級二級であり、実力的にも上田馬之助・逸見宗助・下江宗太郎らと肩を並べる警視庁きっての使い手であった。明治 28 年（1895）精錬証、明治 36 年（1903）教士、即日範士の称号を授与されたという²⁵⁹。

<辻真平>

嘉永 2 年（1849）、佐賀に生まれる。安政元年（1854）からより実父である肥前小城藩心形刀流師範永田右源次に心形刀流を習っている²⁶⁰。明治 2 年（1869）に藩主鍋島公の命により、直心影流長沼正兵衛称郷へ入門する。翌明治 3 年（1870）の 12 月 15 日に直心影流の切紙目録免状総伝マツを受けた²⁶¹。明治 7 年（1874）以来、同 31 年（1898）まで佐賀県下の警察署剣術教師を務め、明治 32 年（1899）に佐賀県立第一中学校ならびに大日本武徳会佐賀県支部の剣術教師となる。大正元年（1912）の大日本帝国剣道形の制定に際しては、5 名の主査のうちの一人に選ばれる。明治 34 年（1901）精錬証、明治 38 年（1905）教士、明治 42 年（1909）範士の称号を授与された²⁶²。

第三項 藤川派

1. 藤川派の発生

本項では、主な分派の一つである藤川派についてその伝播をみていくこととしたい。藤川派は藤川弥司郎右衛門近義を祖とする分派である。まず、当派の発生について、近義を中心にみていくこととする。

藤川弥司郎右衛門近義は享保 11 年（1726）、江戸に生まれる。父は藤川近知といい、上州沼田藩主、土岐山城守に仕えた者である。幼少の頃より国郷に入門したが、師から替流を勧められるほど不器用であったという。しかし、根気よく修行を続け、国郷隠居後は、正兵衛綱郷について修行をし、免許を得た。そして、宝暦 6 年（1756）、31 歳の時に下谷長者町に道場を開いたという²⁶³。

寛政 10 年（1798）に近義が亡くなると、養子の近徳²⁶⁴が家督を継いだ、3 ヶ月後に近

²⁵⁸ 山下素治『明治の剣術—鉄舟・警視庁・榊原』新人物往来社、165-167、1980、参照。

²⁵⁹ 中村民雄『剣道事典—技術と文化の歴史—』島津書房、p.359、1994、参照。

²⁶⁰ 堀正平『大日本剣道史』剣道書刊行会、p.740、1925、参照。

²⁶¹ 堀正平『大日本剣道史』剣道書刊行会、pp.740 - 741、1925、参照。

²⁶² 中村民雄『剣道事典—技術と文化の歴史—』島津書房、pp.358-359、1994、参照。

²⁶³ 石垣安造『直心影流極意伝開』島津書房、pp.99-101、2001、参照。

²⁶⁴ 石垣氏によれば同藩の河野氏より迎え入れ、娘と配したという（石垣安造『直心影流極

徳は急死する。残された子息である兄の弥八郎近常と弟の鵬八郎（のちの整斎）は若年であったため、近義の高弟の赤石郡司兵衛孚祐がこの兄弟の後見役を務めた。近常は文化 7 年（1810）に家督を継いだ²⁶⁵が、病弱であったために、文政元年（1818）に弟の整斎に家督を譲った²⁶⁵。

整斎の後は藤川太郎^{ただし}憲、藤川寛と流儀が受け継がれていった²⁶⁶。

2. 藤川派の伝播と主な人物

本項では、藤川派の主な人物について把握し、藤川派の伝播についてみていく。まずは、近義の後、近義の孫である弥八郎近常と鵬八郎（後の整斎）兄弟の後見を務めた赤石郡司兵衛孚祐とその門弟たちについてみていくこととする。

（1）赤石郡司兵衛孚祐とその門弟

＜赤石郡司兵衛孚祐＞

赤石郡司兵衛孚祐は藤川弥司郎右衛門近義の門弟である。赤石郡司兵衛本人が著したとされる『斑龍軒覚書』によれば、「予者、寛延二己巳年七月十五日、常陸国江戸崎天王町赤石家ニ生ズ、凡我若年ヨリ兵法之道ニ心ヲ掛ケ、二十一歳ニシテ都ニ出、近藤用随公ニ属、是ヨリ藤川近義ニ随テ直心影流ノ刀術ヲ修行ス²⁶⁷」とあり、21 歳のとき江戸に出て、近藤用随公なる人物に仕えながら、藤川近義に直心影流を学んだという。安永 6 年（1777）、下谷車坂下に道場を開き、その後浅草本願寺北に移したという²⁶⁸。

赤石は前述の通り、近義の孫である弥八郎近常と鵬八郎の後見役を務めた。近常が家督を継いだ後、赤石は独立するが、それまでに藤川派の高名な酒井良佐や井上伝兵衛、戸田栄之助を育てたという。以降、赤石が育てた藤川派の門弟についてみていきたい。

＜酒井良佐＞

酒井良佐は、越後高田藩の家臣である酒井総右衛門憲福の子であり、寛政 4 年（1792）江戸下谷の藩邸に生まれた。幼少より剣術を好み、藤川弥司郎右衛門近義について直心影流を学び、修行に励んだ。文政 3 年（1820）に独立し、道場を小石川竜慶橋に開き、門弟を指導したという²⁶⁹。

意伝開』島津書房,p.101,2001,参照.)。

²⁶⁵ 中村民雄「幕末関東剣術流派伝播形態の研究(2)」『福島大学教育学部論集 社会科学部門』第 66 号所収,福島大学教育学部,pp.69 - 70,1999,参照。

²⁶⁶ 石垣安造『直心影流極意伝開』島津書房,p. 101 ,2001, 参照。

²⁶⁷ 『斑龍軒覚書』（『武道伝書聚英第十二集』所収）、宇都宮大学教育学部,p.114,1990。

²⁶⁸ 石垣安造『直心影流極意伝開』島津書房,p. 102 ,2001,参照。

²⁶⁹ 富永堅吾『剣道五百年史』（復刻新版）島津書房,pp. 327－328,1996,参照。

＜井上传兵衛＞

井上传兵衛は藤川門指折りの剣士であり、赤石郡司兵衛に師事したという。幕府の御徒であったが、従弟の子供を養い、井上誠太郎と名乗らせ御徒の役を譲り、自身は下谷車坂に道場を開いて門弟を指導した。男谷精一郎や心形刀流の伊庭軍兵衛などと交流があり、道場は繁栄したようである、しかし天保9年（1838）53歳の時に、門弟の本庄茂平次に暗殺された²⁷⁰。

＜戸田栄之助・高山峰三郎＞

戸田栄之助については『直心影流伝書集』に記述がみられるため、まず、この記述を確認していきたい。


戸田栄之助大判良茂一心斎ト号ス、伊予大州藩士江戸ニ生ル、幼ヨリ兵法ヲ孚祐ニ学ビ、其奥儀ヲ極ム、因テ四方ニ周遊シテ其技ヲ試ム、年廿四、京都ニ来リテ講武場ヲ開キ、其名大ニ顕ハル、業ヲ受クルモノ前後数千人而シテ、真伝ヲ得ルモノ亦タ多シ、明治四年辛未十二月歿年六十有六²⁷¹（読点筆者）

戸田栄之助は伊予大洲藩士として江戸に生まれた。幼いころから兵法を赤石郡司兵衛孚祐に学んで奥儀を極めた後、各地を回り、その剣技を試していたという。24歳のとき京都を訪れた栄之助は道場を開き、その名を広めたという。門弟は数千人にも上ったようである。この戸田道場には、大石進、奥村左近太、高山峰三郎、籠手田安定、阿部守衛などの名剣士が出入りしたということである²⁷²。


戸田の後は高山峰三郎が継いだという。高山峰三郎についても『直心影流伝書集』に記述を確認することができる。

高山峰三郎伊予大州ノ藩士家世々儒臣タリ七歳ニシテ藤川弥次郎右衛門ノ門ニ入り其蘊奥ヲ極ム後チ伊庭軍兵衛ニ隨身シテ神道無念流ヲ千葉周作ニ隨身シテ北辰一刀流ヲ桃井俊蔵鏡心明智流ヲ学ビ後チ四方ニ周遊シテ京都ニ至リ戸田栄之助ニ從ヒ皆伝ヲ受ケ明治ノ初雲州侯ノ師範ニ聘セラレ廃藩後籠手田安定ノ実師トナリ明治二十五年大阪府警察部ノ教師トナリ同三十三年病歿年五十有九²⁷³

²⁷⁰ 富永堅吾『剣道五百年史』（復刻新版）島津書房, pp. 328－329, 1996, 参照.

²⁷¹ 『直心影流伝書集』, 鈴鹿家文書, 全日本剣道連盟蔵.

²⁷² 『大日本剣道史』剣道書刊行会, p. 611, 1925, 参照.

²⁷³ 『直心影流伝書集』, 鈴鹿家文書, 全日本剣道連盟蔵.

高山峰三郎も戸田と同様、伊予大洲の藩士であった。7歳で藤川弥司郎右衛門²⁷⁴（整斎）に入門し、奥義を極めたという。その後、伊庭軍兵衛から神道無念流を、千葉周作から北辰一刀流を、桃井春蔵（原文は俊蔵）に鏡新明智流（原文は鏡心明智流）を学んだ後、各地を回り、京都にたどり着いた。京都では、戸田栄之助に師事し、免許皆伝を受けたという。この経緯から考えると、峰三郎ははじめに整斎に師事し、ある程度の技量まで到達し、藤川派から独立していた戸田栄之助に入門し、免許を授かり、戸田の跡を継いだと考えられる。いずれにせよ、藤川派の流れを汲んでいるといえる。

峰三郎は明治の初めから「明治ノ初雲州侯ノ師範ニ聘セラレ」とあるように、剣術指南をしはじめたようであるが、このことについては『大日本剣道史』に詳しい。峰三郎は明治元年（1868）出雲松江藩の指南番として抱えられたが、明治4年（1871）の廃藩とともに浪人となり、困窮し、再び京都に戻っていた。その後籠手田安定県令²⁷⁵に窮状を告げ、身の振り方を頼んだところ、滋賀県巡査として撃剣教師専務になったという。明治18年（1885）、籠手田県令が島根県に転任すると、また島根県に転勤して同23年（1890）まで務めた。明治24年（1891）からは、大阪府撃剣教師になり、死ぬまで務めたという²⁷⁶。

（2）藤川整斎

藤川整斎は藤川次郎四郎近徳の次男で寛政3年（1791）に生まれた。藤川家の家督を継いだ兄の近常は元来病弱であったため、整斎は文政元年（1818）に家督を譲り受ける²⁷⁷。

家督を譲り受けた整斎は「偶々嘉永五年、米艦渡来セシヲ以テ、武術俄カニ流行シ、諸藩主競テ武術家ヲ聘ス、貞先生、藤堂家、柳沢家ノ聘ニ応ジ、藩士ニ剣道ヲ指南セリ、而シテ其自家ノ道場益々繁昌シ、其伝ヲ得ルモノモ亦タ少ナカラズ、文久二年八月卒年七十有二²⁷⁸」と、外圧の関係から武術が流行した際、藤堂家、柳沢家に招聘され、藩士に剣術指南を行ったという。


また整斎について特筆しておきたいことは、「此先生の代に至り当流元祖よりの伝書等に若し不明なる処有れば精はしく是を調べ法定及び種々の形の手気相等を悉く究理し是を試合に懸けて活用さすることを教へ子弟を集めて説明し只管戦場実地の利害をおしへられた

²⁷⁴ この「藤川弥司郎右衛門」については、生没年の関係から、藤川弥司郎右衛門貞、つまり整斎のことであると考えられる。

²⁷⁵ 籠手田安定は行政官であるだけでなく、無刀流の剣士であったという（富永堅吾『剣道五百年史』復刻新版、島津書房、p.377,1996,参照.）。

²⁷⁶ 『大日本剣道史』剣道書刊行会、pp. 612 - 614,1925, 参照。

²⁷⁷ 中村民雄「幕末関東剣術流派伝播形態の研究(2)」『福島大学教育学部論集 社会科学部門』第66号所収、福島大学教育学部、p.70,1999, 参照。

²⁷⁸ 『直心影流伝書集』, 鈴鹿家文書、全日本剣道連盟蔵。

り²⁷⁹」と、形の研究を詳細に行い、試合に活用することを門弟たちに教えたことである。このことについては、第四章において詳しく考察する。

（3）斎藤明信

斎藤明信は天保 13 年（1842）の生まれである。嘉永 2 年（1849）に「剣術稽古始メヨリ土岐山城守殿御家臣藤川貞師ノ門ニ入り直心影流ノ剣術ヲ学ブ²⁸⁰」とあるように、藤川整斎に入門し、直心影流剣術を学んだという。この他に道雪派の弓術、大坪流馬術、神道流槍術、荻野流砲術、山鹿流軍学、越後流軍学などを学んでおり、武術全般を広く修練していたようである。

明信は遠州相良藩主田沼意尊²⁸¹に仕えるが、明治維新後、相良藩が上総へ転地し、小久保藩になるとともに小久保藩権大属に任命された。廃藩後は職を転々としていたが、亀岡甚造という人物に雇われ、亀岡邸内の警護をしつつ、門弟を集めて邸内で直心影流の形を教授したという。その結果、門弟から免許を得た者が 56 名も出たという。このように、門弟を指導していく中で形の動作が崩れやすいことを感じたため、直心影流の形を図解しようと思い立ち、『直心影流剣術極意教授図解』を著した²⁸²。

第四項 男谷派

1. 男谷派の発生

男谷派の発生は、男谷精一郎による。はじめに、男谷精一郎の人物についてみていくこととしたい。

（1）男谷精一郎について

男谷精一郎は寛政 10 年（1798）男谷新次郎信連の子として生まれた。のちに一族で小十人組の男谷彦四郎の養子となる。養子となった精一郎は若年の頃より武芸を好み、平山子龍に講武実用流の兵学を学び、文化 14 年（1817）、本所亀沢町にあった直心影流の団野源之進の門に入った。免許を受けた後、一時、麻生狸穴に道場を構えていたが、安政元年（1854）に師の道場を受け継いだ。男谷は嘉永年間頃より、旗下の子弟や諸藩士の子弟に剣槍砲術

²⁷⁹ 斎藤明信『直心影流剣術極意教授図解』井口魁真書楼,p.21,1901.

²⁸⁰ 斎藤明信『直心影流剣術極意教授図解』井口魁真書楼,p.30,1901.

²⁸¹ 田沼意尊（1819 - 1869）は相良藩主田沼意留の嫡子である。天保 11 年（1840）、22 歳で家督を継ぎ、藩主となる。文久元年（1861）若年寄、元治元年（1864）水戸天狗党の乱に追討使として幕府軍を指揮して鎮圧にあたった（『三百藩藩主人名事典 第二巻』新人物往来社,pp.254 - 255,1986,参照.）。

²⁸² 斎藤明信『直心影流剣術極意教授図解』井口魁真書楼,pp.29 - 45,1901, 参照.

を教え、士気を高めるために講武所を建設すべきと幕府に建議していた²⁸³。安政3年(1856)に講武所が開設されてからは、男谷は頭取及び筆頭剣術師範を務め、ついで先手頭、講武所奉行となった²⁸⁴。

男谷に係る史料としては『男谷先生行状録』がある。この史料から、男谷精一郎の人物像が窺えるため、いくつか記述を挙げ、その人物について把握しておきたい。

其人となり厳毅方正、天の縦せる英武雄才、濶達大度にして能く衆を容るの大量なり、天性武事を好み、幼年より勉励し、槍剣は古今に独歩せり、弓馬、拳法、何れも深く学ざるなし、好んで歴史を読み、旁書画を能す、常に人の長短得失を論せず、別して公辺政務の批判をきらふ、唯古人の忠孝節義代々の興廃盛衰杯の外他の話なし²⁸⁵（読点筆者）

男谷は、しっかりとした体格の持ち主で、端正であり、武勇に優れ、その度量は非常に大きかったという。元来武芸を好み、幼い頃から精進し、槍術、剣術は古今で抜きんできた力を持っており、さらに弓術、馬術、拳法についても深く学んだという。また歴史書を好んで読む傍ら、書画も嗜んでいたようである。常に人の長所や短所などは話さず、また政治の批判も嫌った。話すことは古人の忠孝・節義や各時代の繁栄や衰退のみであったという。

また、男谷の門弟教育の様子については次のように記されている。

前にも申す如く、暫く三十年来の武場なれとも、門下の内武術拔群なるもの沢山に出来せしは、偏に先生の教育方によれるものならん、大勢の事なれば素より種々様々の人物もありしか広大の量にていれさせられ、目前の聊の非をとかめす、唯自身の言行いかにも正しくいたす故自然に風化いたし、遂には先生の風儀をしたひ各信義の道を重んじ行跡を正しく改めたる由に成り行しなり、是いわゆる不言の令とも言ふべきなり、右の輩の内、今都下四方に武場を開き、或は候家の師範となり、夫々大勢の門下を教導する者二十余人なり、国初よりいまた斯の如をきかず²⁸⁶（読点筆者）

²⁸³ 中村民雄『剣道事典—技術と文化の歴史—』島津書房,pp.343 - 344,1994,参照。

²⁸⁴ 富永堅吾『剣道五百年史』（復刻新版）島津書房,p.330,1996,参照。

²⁸⁵ 『男谷先生行状録』熊本県立図書館蔵。

²⁸⁶ 『男谷先生行状録』熊本県立図書館蔵。

男谷門下から抜きんできた剣術の遣い手が登場したのは、男谷の教育によるものであるという。門弟には様々な者がいたが、男谷は寛大な度量で、目の前での門弟の非を少しも咎めることがなく、ただ自身の言動・行為を正しくするだけであったという。この教育により、門弟の非は自然と風化し、最終的には男谷の姿を慕い、信義の道を重んじ、行いを正しく改めるようになっていったという。このような門弟のうち、江戸に道場を開いたり、大名家の師範となって、大勢の門人を指導する者が 20 人余りも出たということである。

男谷の教育方法は門弟の悪い行いを、叱ることで直すのではなく、自身の正しい言動・所作を見せ、門弟の自覚を促すというものであったようである。この方法で、門弟たちが成長し、江戸で道場を開いたり、藩に召し抱えられ剣術師範となっていたようである。

（２）講武所について

次に男谷精一郎が深く関わった講武所についてみていくこととする。

近世末期になると、国内外が騒然として²⁸⁷、国防の必要が認められるようになり、武芸振興の目的で安政 2 年（1855）に講武所設置の命が下された。場所は築地小田原町紀州侯屋敷跡で翌安政 3 年（1856）に開設となった²⁸⁸。男谷精一郎は講武所頭取を務め、その後剣術師範役に就任する。講武所における剣術の教授方は従来の伝統に拘泥することなく選ばれた。そのため、将軍家師範の柳生家・小野家からは選ばれず、当時、しない打ち込み稽古によって隆盛を極めていた直心影流・心形刀流・北辰一刀流・神道無念流・忠也派一刀流・田宮流などの人物が選出された。その中に、男谷の門人である榊原鍵吉・本目鎗次郎が名を連ねている²⁸⁹。

講武所における試合稽古では、しないの長さが定められた。講武所における稽古規則はたびたび変更されており、規則書のしないに関する規定をみると、若干の違いがあるという。以下にしないに関する規定の変化を列記しておく。

安政 3 年（1856）4 月に定められた「稽古規則覚書」…3 尺 8 寸以内

安政 7 年（1860）正月の「稽古規則」…4 尺から 3 尺 8 寸に限る

文久元年（1861）11 月の「講武所規則」…3 尺 8 寸に限る²⁹⁰

安政 3 年の「稽古規則覚書」は、これまで長短さまざまであったしないの長さについて、

²⁸⁷ 具体的には嘉永 6 年（1853）のペリーの浦賀来航に代表される外国船の来航に伴い、尊王攘夷論に対して開国論、佐幕論に対し、討幕論、または公武合体論など、世論が一致せず、揺れ動いていた時代であったようである（富永堅吾『剣道五百年史』（復刻新版）島津書房,p.290,1996,参照.）

²⁸⁸ 笹間良彦『図説日本武道辞典』柏書房,p.307,2003,参照.

²⁸⁹ 富永堅吾『剣道五百年史』（復刻新版）島津書房,p.294,1996, 参照.

²⁹⁰ 全日本剣道連盟編『剣道の歴史』全日本剣道連盟,p. 294,2003, 参照.

3 尺 8 寸以上の長さを禁じたものであり、これが定寸のようになり、後世に及んだという²⁹¹。この 3 尺 8 寸という長さについては、長短を折衷したという説や²⁹²、当時の小手は握りが約 4 寸 5 分であり、柄が 9 寸では間隔に余裕がなかったため、柄をのばして握りを自由にし、その分全体の調和をはかるため切先も三寸伸ばし、この長さとしたという説もある²⁹³。講武所においては、形稽古は行われず、試合稽古のみが行われ、流派間の交流が促進された²⁹⁴。

講武所で行った試合中心の稽古法と、しないの長さを 3 尺 8 寸に定めたことが、その後の剣道を流派統一へと向けられる流れをつくり、競技化に拍車をかけたと言われている²⁹⁵。

2. 男谷派の伝播と主な人物

次に男谷派の主な門弟として島田虎之助、榊原健吉、野見鋌次郎についてみていきたい。

(1) 島田虎之助

島田虎之助は男谷門下で目立って頭角を現した剣士である。文化 11 年（1814）、島田市郎衛門親房の四男として中津藩に生まれ、文政 9 年（1827）中津藩の剣術師範であった堀一刀斎に学んだという²⁹⁶。その後九州の各所を回る武者修行を重ね、天保 5 年（1834）、21 歳で、途中各地の剣士と試合を重ねながら、江戸に上り、男谷精一郎の道場に入門することとなる²⁹⁷。数年男谷道場で修行した後、東北地方を中心に武者修行を行った。虎之助は単に剣術を学ぶだけでなく、よく書物を読み、廻国修行の際も、剣士だけでなく、儒学者や僧侶などのもとを訪れて見識を深めたという。このことは富永氏が「かれははじめ猛暴で好んで人を凌ぐの風があったが、後には節を折ってこれを改めたというが、これは彼が儒教その他の名士に接して自ら修養を重ねたこと、又師男谷の風化に預ったことなどによるものが少くなかったと思われる²⁹⁸」と述べているように、虎之助の荒々しい性格を矯正するのに役立ったようである。武者修行から江戸に戻ると男谷道場から独立し、深川霊岸島に自身の道場を開いたという。嘉永 5 年（1852）、39 歳にて亡くなった²⁹⁹。有名な門弟としては、明治維新で活躍した勝海舟がいる。

²⁹¹ 富永堅吾『剣道五百年史』（復刻新版）島津書房,p.295,1996,参照.

²⁹² 山田次朗吉『日本剣道史』一橋剣友会,p.327,1925,参照.

²⁹³ 中村民雄『剣道事典—技術と文化の歴史—』島津書房,p.101,1994, 参照.

²⁹⁴ 全日本剣道連盟編『剣道の歴史』全日本剣道連盟,p. 158,2003, 参照.

²⁹⁵ 中村民雄『剣道事典—技術と文化の歴史—』島津書房,p.155,1994, 参照.

²⁹⁶ 島田梅仙『剣豪 島田虎之助直親』硯山会,pp.12—19,1972, 参照.

²⁹⁷ 富永堅吾『剣道五百年史』（復刻新版）島津書房,p.334,1996, 参照.

²⁹⁸ 富永堅吾『剣道五百年史』（復刻新版）島津書房,p.334,1996.

²⁹⁹ 島田梅仙『剣豪 島田虎之助直親』硯山会,pp.52—56,1972,参照.

（２）榊原鍵吉

榊原鍵吉は天保元年（1831）に旗本榊原益太郎友直の子として生まれた。幼少の頃より直心影流男谷精一郎の門に入り、門下生第一の実力といわれた。安政 3 年（1856）、師の推挙により幕府講武所の剣術教授方となる。将軍家茂が上洛する際にはその供として守護の任にあたった。家茂の死後は下谷車坂の道場で門人教育に専念していた³⁰⁰。

榊原鍵吉を語る上で外せないのが、彼が行った撃剣興行である。幕末・維新の動乱期に各藩の募兵あるいは武術師範として活躍した多くの武術家は、廃藩置県によりほとんどの者がわずかな一時金を支給され、解職されてしまう。このような生活に困窮していた武術家を救済するために、榊原鍵吉は明治 6 年（1873）に撃剣の興行化を願い出た。具体的には小屋を設置し、東西に剣士を分け、試合を行うというものであった。さらに観客に見せるために規則を定めた。試合は 3 間に 4 間の板の間を試合場とし、竹刀の長さは幕末の講武所に倣い、3 尺 8 寸に定めたという³⁰¹。明治 6 年（1873）3 月末に政府から許可が下り、「官許撃剣会」と名付けて、4 月 26 日より 10 日間、浅草で催した。興行は大成功したが、東京府から 7 月 31 日限りで中止命令が出された³⁰²。その後、明治 10 年代に撃剣興行は復活する。警視庁をはじめとする各府県警察署で武術師範を採用しようとする機運が盛り上がっていたことから、番付上位の剣術家は、次第に武術師範へと採用されていった。しかし、榊原は他人を推挙しても自らは決して官に仕えようとはしなかったという³⁰³。

この撃剣興行についての毀誉褒貶は様々で、明治初期、剣術が衰退していく中で、これを一般の大衆に関心を持たせ、剣術の危機を救ったという説もあるが、これとは反対に神聖な剣術を墮落させたという説もあるという³⁰⁴。

榊原鍵吉は明治 27 年（1894）65 歳で亡くなった。高名な門弟としては、野見鍬次郎、山田次朗吉などがいる。

（３）野見鍬次郎

野見鍬次郎は榊原鍵吉の高弟であり、文政 10 年（1827）徳川御手組執当与力石垣五郎次郎安貞の次男として、駒込片町徳川先手頭内藤近江守の組屋敷に生まれた。嘉永 3 年（1850）24 歳の時、講武所で学ぶと共に、榊原鍵吉を師と仰ぎ、剣術修行に励むようになる。

明治初期においては、師の榊原と共に撃剣興行を行った。特に明治 11 年（1878）、東京府の再認可による再開以降は、師の榊原が隠居を希望したため、鍬次郎を中心に行われた。

³⁰⁰ 中村民雄『剣道事典—技術と文化の歴史—』島津書房,p.349,1994,参照.

³⁰¹ 全日本剣道連盟編『剣道の歴史』全日本剣道連盟,pp.297-298,2003, 参照.

³⁰² 石垣安造『直心影流極意伝開』島津書房,p.141,2001,参照.

³⁰³ 中村民雄『剣道事典—技術と文化の歴史—』島津書房,p.350,1994,参照.

³⁰⁴ 富永堅吾『剣道五百年史』（復刻新版）島津書房,p.336,1996, 参照.

鋹次郎の剣術復興と大衆化への念願は榊原鍵吉亡き後も続けられ、明治 38 年（1905）には門人・星野仙蔵を通して第 21 回帝国議会へ「体育ニ関スル建議案」を提出した。明治 41 年（1908）、82 歳にて亡くなったという³⁰⁵。

本節では、次章以降を論じていくための前提として国郷以降における主な三派を中心とした伝播の把握に努めた。

長沼派においては、四郎左衛門家と正兵衛家という二つの長沼家を中心に沼田藩、鳥取藩、村上藩、新発田藩、岡山藩、鴨方藩などに伝播していったようである。これらの中でも特筆すべきは新発田藩における普及である。新発田藩では嶋村外也という人物が長沼派の直心影流を藩内で教授していたが、藩命により、嶋村の門弟である窪田鏖三郎らが男谷派に入門した。帰藩後、窪田は、嶋村とは別に男谷派の直心影流を教授しはじめ、同じ流派でありながらも、別々に普及されていったという。その理由としては他流試合への見解や修練方式に違いが生じていたことが挙げられる。

藤川派は藤川弥司郎右衛門近義を祖とし、藤川家を中心に栄えた。藤川派は近義の後、後継者の近徳が早世したため、近徳の息子である弥八郎近常と鵬八郎（のちの整斎）兄弟の後見役を赤石郡司兵衛が務めることにより、道統が存続されていった。赤石は酒井良佐や井上传兵衛などの名剣士を育てたという。赤石が後見を務めた近常は病弱であったため、弟の整斎に家督を譲ることになった。整斎は藤堂家や柳沢家において剣術指南を行ったという。また整斎は形稽古中心の修練を行ったようである。

男谷派は幕末において活躍した男谷精一郎を祖とする分派である。男谷について特筆すべきは自らが幕府に建設を建議し、安政 3 年（1856）に開設された講武所において頭取ならびに筆頭剣術師範となったことである。講武所における剣術教授陣 11 人の中には男谷の門弟である本目鍵次郎・榊原鍵吉が選出されている。講武所における剣術の稽古は試合稽古を中心としたものであり、しないの長さが 3 尺 8 寸に定められた。

男谷の有名な門弟としては島田虎之助や榊原鍵吉などがいる。榊原鍵吉は弟子の野見鋹次郎とともに撃剣興行を行い、一般大衆に剣術を広め、危機を救ったとされている。

以上が三派の伝播と動向の概要であるが、これら三派においてはそれぞれ別々に教育がなされていたようであり、さらにその修練の内容にも違いが生じていたことが窺えよう。これらの分派における門弟教育については、後に第四章において詳細に考察していくこととする。

³⁰⁵ 石垣安造『直心影流極意伝開』島津書房,pp.140 - 144,2001,参照。

結節

本節では、まとめとして、直心影流の成立過程について、流派の起源とされる神話ならびに流祖・松本備前守から長沼四郎左衛門国郷までを対象とし、再度考察しておきたい。

まず、直心影流の伝書の中で通常語られている伝承について改めて確認をしておく。直心影流の伝書における特筆すべき伝承についてまとめたものが以下の図 1-4 である。

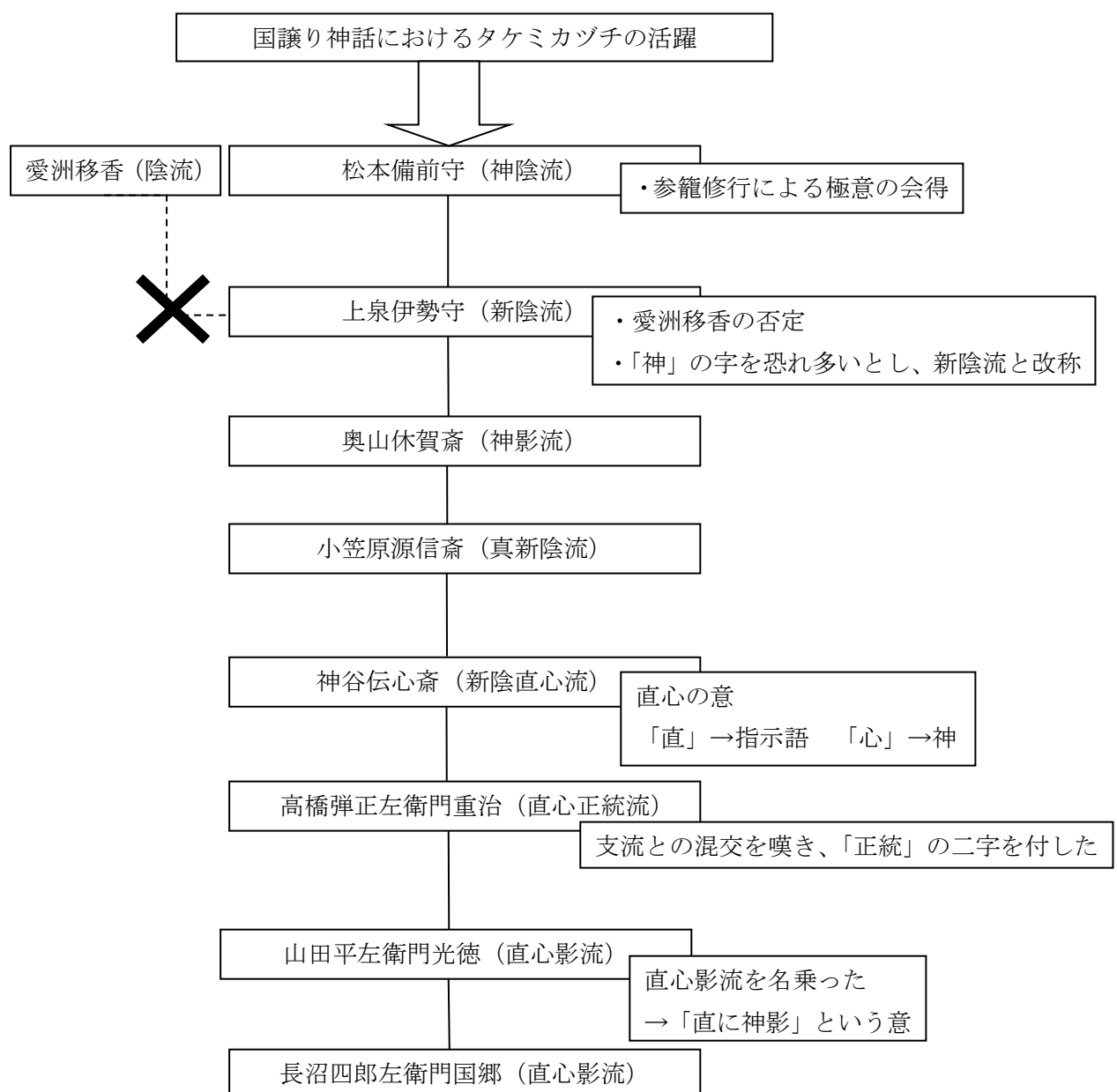


図 1-4 直心影流の伝書における伝承

以上が直心影流の伝書の中で通常語られている伝承である。

この直心影流における伝承を、再度、簡潔に振り返っておきたい。

直心影流は、武神タケミカヅチの国譲り神話における活躍からはじまる。そして、タケミカヅチが祀られている武の聖地・鹿島神宮において松本備前守が参籠修行を行い、タケミカヅチから夢を介して極意を授かり、流派を創始した。松本備前守は、神から授かったという意味を込めて流名を「神陰流」と称したという。

上泉伊勢守は松本備前守の流儀を継承するが、自身は神から授かったわけではないことから、「神」の字を恐れ多いとし、「新陰流」と改名したという。また、上泉が愛洲移香の陰流を継承したことが否定されている。

上泉の後、奥山休賀斎・小笠原源信斎を経て、神谷伝心斎に流儀が伝えられる。神谷は新陰直心流と流名を改めたという。この流名における「直心」という語の「直」は指示語、「心」は神を意味するということである。

神谷伝心斎の新陰直心流は高橋弾正左衛門重治が継承し、弾正左衛門は新たに直心正統流と名乗った。流名を改称した意図としては、支流との混交を防ぐためであったという。

高橋弾正左衛門の後は山田平左衛門光徳が流儀を継承し、新たに直心影流を名乗る。この流名の「直心」も神谷伝心斎の新陰直心流と同様で「直」は指示語、「心」は神をあらわしているという。光徳は自身の流派が何流から出たのか、後世の者がわからなくなってしまうようにするため、流名を改めたといい、「直心影流」とは「直に神影」という意味であるという。ここには松本備前守の神陰流を継承しているという意図があると考えられる。

そして光徳以降は流名の変更もなく、継承されていく。光徳の後は息子の長沼四郎左衛門国郷が継ぎ、直心影流は各地に伝播していく。

次に伝系に登場する各人物が著した伝書を検討した結果、明らかとなった直心影流の伝系・伝承の問題点、そして実際の成立過程について述べていくこととしたい。以下の図 1-5 が本章における考察の結果、明らかとなった直心影流の実際の成立過程である。なお、奥山休賀斎については、特筆すべき考察結果が得られなかったため、図から省いた。

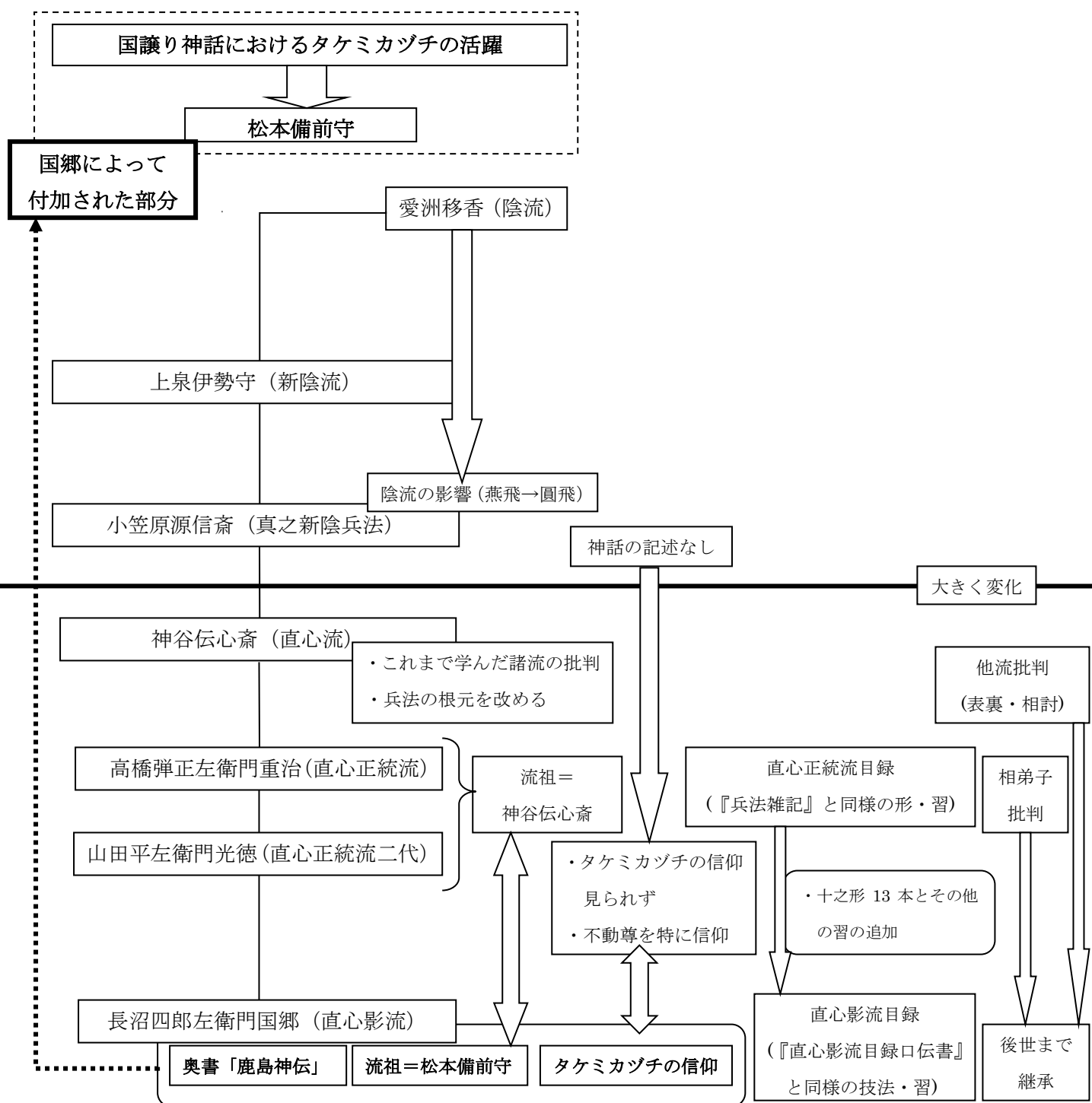


図 1-5 直心影流の成立過程

以下、伝系に沿って、いくつかの特筆すべき項目に分け、成立過程を述べておきたい。

<新陰流から真新陰流における陰流の影響>

まず、直心影流の伝書において否定されている愛洲移香と上泉伊勢守の関係については、

上泉自身が陰流から優れた部分を抽出したと記していることから、愛洲移香の陰流の影響があったといえる。また、陰流の形の名称が真新陰流・小笠原源信斎の目録にも確認できることから、真新陰流も新陰流を経て陰流の影響を受けているといえよう。したがって、直心影流において愛洲移香からの流れを否定する伝承は何らかの意図により、後世に付け加えられたものであると考えられる。

<真新陰流・小笠原源信斎と直心流・神谷伝心斎の関係>

真新陰流・小笠原源信斎と直心流・神谷伝心斎については、形の名称にある程度の共通点がみられることから、この両者の関係は実際に存在したと考えられる。しかし、神谷伝心斎がこれまで学んできた他流を批判し、兵法の根元を改めると述べていることから、直心流は真新陰流から大きな変化を伴い、成立したと考えられ、直心流がこの伝系において転換点であると考えられる。

<直心流の名称と意味について>

直心影流の伝承において、神谷伝心斎は「新陰直心流」を名乗ったとされ、流名の中の「直心」という語は「直」が指示語を表し、「心」が神を表していると伝えられている。しかし、神谷伝心斎は自身の伝書において「直心流」を名乗っており、流名に冠した「直心」は理想的な心のありようを指す語である。直心影流の伝承における神谷伝心斎の流名ならびにその意味は、実際に本人が名乗っていたものとは異なっており、この伝承も後世に付加されたものであると捉えられる。

<直心流から直心正統流までの系譜>

直心流においては「表裏」「相討」という具体的な語を挙げ、他流を批判しており、この二つの兵法を批判する態度は直心影流にまで受け継がれている。

直心正統流においては、流祖が神谷伝心斎とされていることに加え、流名を改変した意図として、直心流の正統な後継者であることを主張している。このことから、直心流を継承している意識が多分に強いといえる。また、自身を直心流の正統と名乗る一方で、相弟子たちへの批判的な態度があったと考えられ、これについても直心影流に継承されていることが看取できる。

<直心影流への改名>

直心正統流から直心影流への改名についても、直心影流の伝書で語られている伝承と異なっている。先述の通り、直心影流の伝承では山田平左衛門光徳が直心影流を名乗ったとされているが、光徳は流儀の免状・裏書を国郷に授けた 70 歳のときまで、直心正統流の二代を名乗っていたことが明らかである。つまり、国郷は光徳から直心影流ではなく、直心

正統流を継承していることがわかる。したがって流名が直心影流となるのは国郷以降であるといえ、国郷が流名を直心影流に改めたと考えられる。

また、国郷は流名を改めただけでなく、いくつか形ならびに習を加えたと考えられる。これは直心正統流から直心影流への目録上の変化を見ることで明らかであり、直心影流の目録において、しない打ち込み稽古の基本の形である十之形の「龍尾」から「曲尺」までが新しく追加されていることが挙げられる。十之形の他にも「相尺之事」「留三段之事」「切落之事」「吟味之事」が新たに追加されている。これらの項目は光徳が著した『兵法雑記』には確認することができないが、国郷の『直心影流目録口伝書』には記述されている。

これらの知見をまとめると、直心影流の成立過程を次のようにまとめることができる。直心影流の伝系は本来、愛洲移香の流れを汲んでおり、上泉伊勢守 - 奥山休賀斎 - 小笠原源信斎 - 神谷伝心斎と流儀が継承されていたが、神谷伝心斎が大きく流儀を変化させ、直心流を興した。その直心流は高橋弾正左衛門に受け継がれ、直心流の正統であることを意味する「直心正統流」に流名が変更される。直心正統流は山田平左衛門光徳に継承され、光徳は直心正統流二代を名乗る。そして、長沼四郎左衛門国郷が直心正統流を継承するにあたり、流名を改めるとともに、形・習をいくつか加え、直心影流の成立に至った。

以上が、本章の考察によって明らかとなった直心影流の実際の成立過程であるが、直心影流の伝承において流派の起源とされている神話、そして流祖とされている松本備前守に関する伝承はどの段階から発生したのであろうか。

結論を先取りするが、これらの伝承は国郷によって付加されたものであると考えて良い。この結論は次の三つの点から導き出せる。

まず、国郷の伝書の奥書から「鹿島神伝」と記されるようになることである。これは自流が鹿島の神から授けられたことを意味する記述であるが、この記述は国郷以前の伝書において確認することができない。

次に、流祖として松本備前守の名が記される最初の伝書が、国郷の著したとされる『直心影流目録口伝書』であることである。国郷の師である山田平左衛門光徳や光徳の師である高橋弾正左衛門は流祖を直心流の神谷伝心斎としており、松本備前守という人物名が登場するのは国郷以降の伝書である。

三つ目に国郷以前の伝書において、タケミカヅチへの信仰が看取できないことである。国郷以前の伝書においてタケミカヅチに関する記述は光徳の著した『兵法雑記』のみにみられるが、この記述においては、タケミカヅチは数多くの神仏・英雄の中の一つとして語られているに過ぎない。また、光徳はこれら神仏の中でも特に不動明王を信仰していたと

いうことであり、タケミカツチに対する特別な信仰を確認することはできない。

以上の点を鑑みて、国郷が本来の伝系を書き換え、タケミカツチの登場する神話と松本備前守という流祖を意図的に付け加えたと考えられる。先に述べてきた、愛洲移香と上泉伊勢守の関係を否定する伝承、直心流の流名ならびにその意味に関する伝承は、付け加えた神話と松本備前守の伝承に整合性をもたせるために、後世に創作されたと考えられる。

第 二 章

法定とその修練過程

第一節 法定の特徴

第一項 法定について

直心影流には法定^{ほうじょう}という形がある。これは、当流において基本とされる形であり、4 本から構成されている。本章はこの法定について論を進めていくものである。

本節では法定について考察する手はじめとして、形としての特徴的な点を考察していく。まず、本項では法定の成立と構成、「法定」という用語、法定修行の用具という三つの観点から法定の概要を理解することに努めたい。

1. 法定の成立と構成

法定をみていくにあたり、まずはこの形がいつ成立したのか明らかにしておきたい。次の表 2-1 は、真新陰流、直心流、直心正統流、直心影流の伝書から類似する形名を抽出したものである。なお、前章で述べてきた通り、実際に直心影流が成立したのは長沼四郎左衛門国郷以降であると考えられるため、光徳が著した『兵法雑記』は直心正統流の伝書として取り扱うこととし、光徳の子である国郷が記した『直心影流目録口伝書』を直心影流の伝書として取り扱うこととする。

表 2-1 伝系にみられる諸流派の類似する形の比較

	真新陰流	直心流	直心正統流		直心影流
史料名	『真之心陰 兵法目録』	『軍法非切書并入 唐目録』	『直心正統流兵法目録』	『兵法雑記』	『直心影流目録口伝書』
技名	一刀両断 右転左転 長短一味	八相 一当 右天左天 重端一身	八相 発 破 一刀両断 右転左転 長短一味	八相 発 破 一刀両断 右転 ^{左転} トモ 長短一味	八相 発 破 一刀両断 右転左転 長短一味


真新陰流では「八相」に相当する形名はみられず、「一刀両断」「右転左転」「長短一味」の 3 本の形のみであり、この 3 本の総称を「参学」と記している。先に第一章第三節第二項において検討してきた新陰流の形において、この「参学」の太刀がみられ、この「参学」


は「一刀両段」「斬釘截鉄」「半開半合」「右旋左転」「長短一味」の5本から成り立っている。これを踏まえると、真新陰流の「参学」は新陰流の「参学」を踏襲していると考えられ、この時点では、新陰流の「参学」を継承しているという意識が強く、法定が成立しているとは考えにくい。直心流になると、「八相」「一当」「右天左天」「重端一身」から成る4本の形がみられるようになる。『真之心陰兵法目録』と比較すると、直心流から「八相」の形が発生したと考えられる。また、他の3本の形については表記する漢字が異なるものの、真新陰流の3本の形そして後の直心正統流・直心影流の太刀名と類似しているといえる。形の動作そのものは不明であるが、名称という観点からみれば、直心流から法定の原形ともいえる4本の形が成立していたと考えて大過ないであろう。

『直心正統流兵法目録』『兵法雑記』と『直心影流目録口伝書』においては、名称だけでなく、表記されている漢字も同様である³⁰⁶。このことから法定は直心正統流のときには成立していたと解してよいであろう。

前述の通り、法定は「八相発破」「一刀両断」「右転左転」「長短一味」という全4本で構成されているが、ここで特筆しておきたいことは、この4本が「右四本ノ形ハ春夏秋冬ノ四時ヲ表シ又天地四方ノ円満ニ象ル也³⁰⁷」と四季を表現しているということである。『直心影流秘書二』にも同様のことが記されており、「一 形ニ陰陽ノ論有哉 曰、木刀四本象四時 初本ハ春二本ハ夏、段々押移ル誠ニ如四時也³⁰⁸」と1本目は春、2本目は夏、と徐々に移っていくという。つまり、1本目「八相発破」は春、2本目「一刀両断」が夏、3本目「右転左転」が秋、4本目「長短一味」が冬と、それぞれ一つの季節を表しているということである。『直心影流秘書二』は、嘉永4年（1851）に写されたという³⁰⁹。したがって、これ以前に本書は成立していたと考えられ、嘉永4年（1851）にはすでに、法定が四季をあらわす形とされていることが窺える。山田次朗吉の『鹿島神伝直心影流』には1本目「八相発破」については、「春季発陽ノ氣勢ニテ発シ破ル事ヲ勤ム³¹⁰」、2本目「一刀両断」は「夏気炎天焼クガ如キ勇氣ヲ全体ニ充実セシメ間髪ヲ容レザル勢力ヲ以テ勤ム³¹¹」、3本目「右転左転」は「秋季肅殺ノ氣勢ニテ無窮ノ変化ヲ勤ムルナリ³¹²」、4本目「長短一味」は「冬季陰蔵ニ象リ精

³⁰⁶ 『兵法雑記』のみ「右転左転」が「右転左転トモ」と記されており、表記の方法が異なっている。しかし、『直心正統流兵法目録』において「右転左転」と述べられていることから、『兵法雑記』においては、省略した形で記述したのではないかと推察できる。

³⁰⁷ 『直心影流秘書一』、鈴鹿家文書、全日本剣道連盟蔵。

³⁰⁸ 『直心影流秘書二』、鈴鹿家文書、全日本剣道連盟蔵。

³⁰⁹ 『全日本剣道連盟（写）鈴鹿家文書解説（一）』全日本剣道連盟、p.57,2004,参照。

³¹⁰ 山田次朗吉『鹿島神伝直心影流』一橋剣友会、p. 7,1927.

³¹¹ 山田次朗吉『鹿島神伝直心影流』一橋剣友会、p. 66,1927.

³¹² 山田次朗吉『鹿島神伝直心影流』一橋剣友会、p. 97,1927.

神ノ昇降自在ヲ内習シ業ハ最モ静カニ勤ム³¹³」と述べられており、それぞれの形における氣勢や動作の激しさなどによって四季が表現されるようである。

2. 法定の名称

次に、「法定」という用語についてその出典と意味を探っていくこととしたい。

(1) 「法定」の初出

「法定」という語がはじめに確認されるのは、直心正統流・高橋弾正左衛門重治が著した『稽古法定序并理歌』である。

稽古法定序并理歌

抑此直心正統一流稽古修行^者先以信誠真元根ヨリ志ヲタテ誠ヨリ真ニイタル誠ヲ以理トシ理ヲ以真トシ又理ヲ以所作トスルナリ、所謂四ツノ形ヲ仕太刀打太刀共ニ能覚体ノ曲ヲ直シ太刀ノ巡逆竪一横一ノ矩ヲ真直ニイタシ、体ハ前後左右ニカタヨラス、地ニ不_レ居付_レ、又カルカラスシテ_レ可_レ勤之（下線部筆者）

ここでは「稽古法定」という語が用いられている。下線部において「四ツノ形」^ヲと述べられていることから、この「稽古法定」は法定の形稽古について記したものであると解釈してよいだろう。

直心正統流の頃より、すでに4本の形の総合名称として「法定」という用語が存在していたと考えられる。このことは、直心正統流を継承した山田平左衛門光徳が『兵法雑記』において四つの形の事を「法定切組³¹⁴」と呼称していることから窺える。前述したように直心正統流の頃から全く同じ表記で変わらずに直心影流に継承されている点を踏まえると、法定は直心正統流の頃に成立したと考えられる。

(2) 「法定」の意味

次に、この「法定」という語が何を意味しているのか考察を行う。

「法定」という語の初出である『稽古法定序并理歌』においては、法定の意味について記している記述を確認することができない。しかし、『兵法雑記』において「法定ト云ハカマエ切組トモニ定式ヲ以法定ト云、中学以上功学ニ至テハ、定格ヲ離レ、無形無構ニシテ、心行ヲ以極意トス³¹⁵」（読点、下線部筆者）と述べられている。『兵法雑記』においては、構

³¹³ 山田次朗吉『鹿島神伝直心影流』一橋剣友会, p. 131, 1927.

³¹⁴ 『兵法雑記』東京長沼正兵衛家蔵.

³¹⁵ 『兵法雑記』東京長沼正兵衛家蔵.

えや形の所作を定式として設けた、という意味で「法定」の語が用いられていることがわかる。同様の意は『直心影流秘書一』にも確認することができ、「法定トハ、ノリノ定マリタル事ヲ平生ナス故、当流木刀ノ形ノ事ヲ法定ト云³¹⁶」（読点筆者）と記されている。ここでの「法定」は、規準を定めたという意味であると考えられ、『兵法雑記』における意味と非常に類似している。以上二書の記述から、「法定」とは構えや所作の守るべき定式といった意味に捉えられている。

しかし、通常、形の中で構えや動作が決められていることは、当然のことであり、それこそが形の特徴である³¹⁷。それにも関わらず、なぜ「法定」という名称がつけられたのであろうか。『兵法雑記』には次のような記述がみられる。

古法曰 理歌

○法定ハ初心中学巧者マテ備ヲ専ニ勝ヲ後トス

言ハ初心ヨリ氣勢ヲハラセ朴刀ヲ強ク打セ進ム事ヲハゲマスレバ勝身ハ早く本ツクヤウナレトモ形ヲクヅシ容法乱テ進付混乱ス先師ハ其進ムヲ忌テ無勝負ニシテ形ヲ直ニト教タリ予モ其ヲ含テ詠之³¹⁸

この文は法定について述べられた歌の解説であるが、法定修行の留意点が述べられている。初心者に氣勢を張らせ、強く打たせることを奨励すると、早く勝つようになると思われるが、形を崩し、姿や所作が乱れて修行の進み具合が混乱するという。そのため、光徳の師である高橋弾正左衛門重治は、初心者の段階では勝負を行わないようにし、形をそのままに教えることにしたという。このような対策が高橋弾正左衛門によってなされたということは、換言すれば、この当時に形が崩れるような事態が発生していたと考えられる。そしてこのような事態が発生していたからこそ、形における定式（構え、所作）を守ることが説かれたと考えてよいであろう。以上から「法定」という語は、形が崩れるという事態の収束を図るため、高橋弾正左衛門によって命名されたと考えられる。

「法定」という語は高橋弾正左衛門の伝書から確認することができ、その成立の背景と

³¹⁶ 『直心影流秘書一』 鈴鹿家文書。

³¹⁷ 前林氏は「型」の稽古には、模倣と没我が大切であると述べる。「型」は各流派において絶対的な権威をもち、学ぶ者に対して強い拘束力がある。したがって弟子たちは「型」を学ぶにあたり、厳格な定式を守りながら、ただひたすら「型」を繰り返し、その技法を身体で覚えていくと述べている（前林清和『近世日本武芸思想の研究』人文書院,p.131,2006,参照。）。

³¹⁸ 『兵法雑記』 東京長沼正兵衛家蔵。

して形が崩れるという事態が当時発生していたようである。

3. 法定修行の用具

次に法定の修練に用いる木刀についてみていくこととする。

法定を修練する際は、専用の木刀を用いる。この木刀は、反りがついておらず、切先が切り落とされている独特の形体を持つ。また、鐔が付いていないのも特徴の一つとして挙げられる。以下に山田次朗吉『鹿島神伝直心影流』にみられる木刀の図を挙げておく。

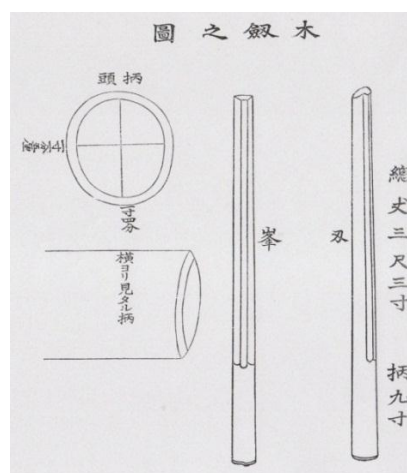


図 2-1 法定専用の木刀

次に木刀の長さについて触れておきたい。長さは、分派によって若干の違いがみられる。長沼派の伝書である『直心影流秘書一』には次のように記されている。

一 木刀ハ長サ三尺ニシテ、柄ヲ七寸ト定メ、身ヲ二尺三寸ト定ルナリ、二尺三寸ナル寸ハ、イカホトノ小ウテニテモ、自由ニ取マワシナル故ナリ³¹⁹（読点筆者）

この記述から木刀の全長が 3 尺であり、そのうちの 7 寸が柄、刀身が 2 尺 3 寸とされていることがわかる。刀身が 2 尺 3 寸とされる理由としては、2 尺 3 寸という長さがどれほど腕が小さくても自由に上手く取り扱うことができる長さであるためだという。一方で、藤川派の斎藤明信『直心影流剣術極意教授図解』においては、木刀の全長が「三尺三寸五才³²⁰」

³¹⁹ 『直心影流秘書一』 鈴鹿家文書,全日本剣道連盟蔵。

³²⁰ 斎藤明信『直心影流剣術極意教授図解』井口魁真書楼, p.51, 1901.

とされている。この記述は3尺3寸5分の間違いであろう³²¹。柄は「九寸五分³²²」となっている。したがって刀身は2尺4寸である。藤川派の形を継承した山田次朗吉の『鹿島神伝直心影流』では先に図示したとおり、3尺3寸、柄9寸と記されており（刀身は2尺4寸）、男谷派の石垣安造は、全長を3尺2寸とし、柄を9寸としている³²³（刀身は2尺3寸）。また石垣氏は、この木刀の長さについて榊原門下の免許者の間で、明治初期から論争されていたことを指摘している。この理由としては榊原自身が用いていた木刀が3尺2寸から3尺3寸のものまでであったためであるという³²⁴。

伝系によって、木刀の長さは3尺から3尺3寸5分とある程度の違いがあり、藤川派・男谷派の木刀が若干長いようであるが、刀身と柄の比率はほぼ同じであるとみてとれる。

また、もう一つ特筆しておきたいことは、木刀の太さである。前掲の図2-1を見ても分かるように、この木刀は楕円形であり、縦1寸4分(42ミリ)、横1寸1分5厘(35ミリ)の太さがある。これは直心影流の修練で用いる道具の中でも特に太いものであり、その太さからも相当に重いことが窺えよう。

第二項 形としての法定の特徴

本項では法定の動作に注目し、その中でも特徴的なものについて考察を行う。

1. 呼吸と気

はじめに法定における呼吸とそれに関連する気について考察を行う。形の動作に合わせ、呼吸を意識的に行うことは法定の大きな特徴の一つであり、前林清和氏も先行研究において法定と呼吸が結びついていることを指摘している。しかし、先行研究では呼吸と技術との結びつきについて具体的に述べられていないため、ここでは呼吸がどのように技術と結びついているかを主に考察することとしたい。はじめに山田次朗吉『鹿島神伝直心影流』の1本目「八相発破」の記述を挙げておきたい。

³²¹ 「才」とは体積を表す単位であり、(新村出『広辞苑第六版』岩波書店,p.1082,2008.参照.)、「尺」や「寸」と併せて用いられることはないと考えられる。また、本書における他の用具を説明した記述は「分」を用いているため、「寸」の間違いと解釈して良い。

³²² 斎藤明信『直心影流剣術極意教授図解』井口魁真書楼, p.51, 1901.

³²³ 石垣安造『直心影流極意伝開』島津書房,p.300,2001,参照.

³²⁴ 石垣安造『直心影流極意伝開』島津書房,p.300,2001,参照.

○打太刀ハ右斜ニテ仕太刀ノ体ヲ充分ニ引伸サン為ニ阿ノ吸氣ト共ニ更ニ左足ヲ後方ニ引キ右足ヲ左足ノ前ニ引付ケル

○仕太刀ハ打太刀ノ引クニ応ジテ左單身ノ構ニテ右足ニ左足ヲ伴ヒ咩ノ氣勢ニテ一步踏込ム是肩ニテ体当リノ姿勢ト氣合ナリ³²⁵

ここでは、打太刀は右斜の構えをとり、息を吸いながら体を引くことで、仕太刀の体が十分に出るようにする。一方、仕太刀は打太刀が引くのに対し、左單身になり、右足に左足を伴いながら「咩」の氣合で踏み込むという。

ここで注目しておきたいのは「阿の吸氣」と「咩の氣勢」という記述である。直心影流では阿（あ）の口の形で息を吸い、その息を（う）で止め、氣界丹田まで深く沈め、咩（ん）の形で吐くという³²⁶。上記の箇所は、この直心影流の呼吸法を表現しているといえる。以下、動作別にその呼吸をみておきたい。

まず、形のはじめに行われる上半円という動作における呼吸からみていきたい。はじめに「打太刀ハ額前ニ捧ゲタル劍峯ヲ人差指ト拇指ノ間ニ受ケ吸氣ヲナシツト爪先ヲ立テ充分ニ伸上ル³²⁷」（下線部筆者）と、頭上に木刀を掲げるときは吸氣を行う。その後、手を開く部分においては「互ヒニ伸上ルヤ人差指ト拇指ノ間ニテ劍峯ヲシゴキツト劍先ニテ上半円ヲ書ク觀念ヲナシ充分ニ開キ左足右足ト肩幅ニ踏据エ腰腹兩部ニ力ヲ籠メ³²⁸」（下線部筆者）と記されている。腰腹兩部に力を籠めるという記述から、ここでは、呼吸を止めている状態であると考えられる。つまり、上記の「阿咩」の呼吸のうち、息を止めている段階（う）であると考えられる。

そしてこの後、お互いに前進し、攻防を行う間合に入っていく。体を運ぶ際は、「○打太刀ハ相精眼ニテ「ウン」ノ氣合ヲ加エ左足ヲ大勝ニ一步踏出シ仕太刀ヲ送ル○仕太刀ハ之ニ応ジテ「アー」ノ氣合ニテ右足ヲ大勝ニ一步引ク³²⁹」（下線部筆者）と前に出るときは呼氣、後に引くときは吸氣を行うため、間合を詰めていくこの場面は呼氣である。

間合に入ってから、構えと実際の打突が行われる。構えるときは「仕太刀吸氣ヲナシツト心身ヲ整エ正上段ヲ右八相ノ構ニ変ズ³³⁰」（下線部筆者）とあるように、吸氣が行われている。

³²⁵ 山田次朗吉『鹿島神伝直心影流』一橋劍友会, p. 44, 1927.

³²⁶ 岩佐勝『鹿島神伝直心影流』武道振興会, p. 54, 2005.

³²⁷ 山田次朗吉『鹿島神伝直心影流』一橋劍友会, p. 33 - 35, 1927.

³²⁸ 山田次朗吉『鹿島神伝直心影流』一橋劍友会, p. 35, 1927.

³²⁹ 山田次朗吉『鹿島神伝直心影流』一橋劍友会, p. 55, 1927.

³³⁰ 山田次朗吉『鹿島神伝直心影流』一橋劍友会, p. 42, 1927.

打つ際は呼吸が行われる。次は「八相_{発破}」の記述である。

○打太刀誘ヒヲ懸ケルヤ仕太刀八相トリ打込ムコレニ応ジテ左足ヲ引クト共ニ「ヤエー」ノ発声ニテ正面ヲ打ツ

○仕太刀ハ打太刀ノサソヒニ応ジ遅速ナシ右足ヲ充分ニ踏込ムト共ニ「ヤエー」ノ発声ニテ正面ヲ打ツ³³¹（下線部筆者）

この記述から、打太刀、仕太刀が互いに打つ時に発声、つまり呼吸を行っていると考えられる。この部分だけでなく、法定において打つ際はほとんど例外なく発声を行っており、息を吐きながら打突動作を行っているとは推測出来る。

最後に行う下半円の動作は「打太刀ハ互ヒノ氣脈相通ジテ劍先ヲ静カニ左方ニ向ケ劍先ニテ下半円ヲ描ク観念ヲナシ吸氣ト共ニ開ク³³²」（下線部筆者）と、吸気を行っていることが窺える。

以上、呼吸について記述されている部分についてみてきたが、大まかな形の流れと共に呼吸を確認すると、①上半円（吸気ならびに呼吸を止める）→②打ち間に入る（呼気）→③構え（吸気）及び打つ（呼気）などの攻防の動作→④下半円（吸気）→⑤身体を運び、元の位置へ戻る（呼気及び吸気）、といった動きになっている。なお、この流れは4本とも変わらない。法定は形のはじめから終わりまで呼吸を意識して行われる形であると考えられる。

それでは、なぜ法定において呼吸が重要視されているのか。

前林氏は山田次朗吉『鹿島神伝直心影流』を論拠とし、法定を行う際、心を臍下丹田におき、手足の指先にまで全身に気を巡らすことが重要であると述べ、これについては正しい呼吸によるところが大であると述べている³³³。つまり、法定において意識的な呼吸を行うのは気を重要視しているためであると考えられる。

実際に『直心影流秘書一』における法定の動作の記述をみると、「形終ル寸手ノ開キタル処ニテ氣ノタユム頭ヲ、打太刀ヨリ右手ハカリニテ、カケヲトシニフル寸ガ仕太刀ハ右転左転ニテトメ、打太刀ヨリ右転左転ニフレハ、カケヲトシニテトメル事也、又仕太刀ヨリスル事モアリ、其寸ハ打太刀ハトツコイト氣ヲシメテウコカズナルナリ³³⁴」「打太刀ハ

³³¹ 山田次朗吉『鹿島神伝直心影流』一橋剣友会,p. 42,1927.

³³² 山田次朗吉『鹿島神伝直心影流』一橋剣友会, p. 59,1927.

³³³ 前林清和『近世日本武芸思想の研究』人文書院,pp.177 - 178,2006,参照.

³³⁴ 『直心影流秘書一』写,鈴鹿家文書,全日本剣道連盟蔵.

向ノ太刀ノ衡ヲ刃ニテヒシヒシト氣ヲアテ打事也、木刀ヲ先へ出シ待テフル心ニテハ、世上ノ請太刀ト云ニ成テ氣当リナク、当流ノ執行ニハヅレ申ナリ³³⁵」「八相ヨリ打込タル処ノ氣アタリ大事也³³⁶」(下線部、読点筆者)と、気についての記述が随所に見られ、その中でも特に相手に自身の気を当てる「氣当り」の記述が多い。

この氣当りについて『兵法雜記』にみられる説明をみておきたい。

是ハ品々伝多、氣当リハ手ニモ取レズ、目ニモ不見へ、其中ニ勝負アリ、亦伝云、目ニテ見タ計ニテハ、物ニ不当ラ、目付ハ勿論一二目ヲ付、二ニ一氣ヲ当ルト云リ、目ニテ見入ル計ニテモ、用ニ不立、亦目ヲフサギ、モウモクニテモ用ニ不立也、依テ一ニ目、二ニ氣当リトハ教也、亦云、大元一氣ヲヒシト当テ敵ヲ吞事也、亦曰、向ヘアツル伝云、一二相手ノボントクボニ、我ガ一氣ヲアツル³³⁷ (以下略、読点、下線部筆者)

この記述が『兵法雜記』における氣当りの記述であるが、ここでは「一氣」を当てるとされている。この一氣は『直心影流兵法究理之卷』に次のように記されている。

尊師曰、鑑劍ノ徳陰陽ノ兩氣者勝負也、陰勝バ則陽退キ、陽勝バ則陰退ク、陰陽元は一氣也、養其一氣者ハ自ラ成ル英雄ト、其用フルコト志之長ヲ、厚ク長ケレバ則生ズルニ活物之有情ヲ至ル、既ニ而通ジレ三焦ニ虚実往来之氣ニ則天地神妙与物押移リ變動無クレ常、因テ敵ニ転化スル耳³³⁸ (読点、返り点、送り仮名筆者)

この記述においては、「陰陽の二つの気は勝負である」と述べられており、これら二つの気は本来、「一氣」という一つの気であり、これを養う者は自然と英雄になるという。当流においては、この一氣を養うことが重要であるという。

そして、山田次朗吉は「劍術ヲ修行スル者ハ其天地陰陽元一氣ナル理合ヲ能ク合点スル時ハ、則チ人ハ一箇ノ小天地又天地ト同体トモ云テ、人間ノ身ニ自ラ陰陽ノ氣ヲ天ヨリ受テ備リ有事ユヘ、天地陰陽ノ氣ニナラヒ、其理合ニ從テ我ニ有陰陽一氣ナル処ヲトクト合点シテ必ズ二氣ニナラザル様、二氣ニナル時ハ勝負ニナラズ、一氣ノ内ニ自

³³⁵ 『直心影流秘書一』写, 鈴鹿家文書, 全日本剣道連盟蔵.

³³⁶ 『直心影流秘書一』写, 鈴鹿家文書, 全日本剣道連盟蔵.

³³⁷ 『兵法雜記』写, 鈴鹿家文書, 全日本剣道連盟蔵.

³³⁸ 『直心影流兵法究理之卷』 文政 3 年, 小田原市立図書館蔵.

然ノ勝負アル事ヲ覺エテ、其一氣ヲ能ク養ヒソダテル様修行スル者ハ自ラ英雄豪傑ト成事也³³⁹」(下線部筆者)と、天地・陰陽の気にならい、その理に従い、自身に陰陽の気があるこそ、一気になる、ということを含点しなければならないと述べている。つまり、一気を養うためには、陰陽の気を統合する必要があると考えられていたようである。

そのために、上に挙げた『直心影流兵法究理之巻』の記述では、虚実往来の気が三焦に通ずるようにする、と説いている。これは山田次朗吉『剣道極意義解』において「虚ハ息を外ヘツキテ内ノ空虚ナル處、実ハ息ヲ内ヘ引テ満チタル處、往来ノ氣トハ息ノ出入ニ従ヒ、氣分モ又出入往来スルナリ。是ハ則チ陰陽ノ順還スル處ニテ、我体ニ陰陽ノ氣分、手足ノ指先マデモ残ル處ナク順還シ通達シテ滯ル事ナキ様ニナル也³⁴⁰」と記されているように、呼吸のことを指しており、呼吸により陰陽の気が循環するという。そして、手足の指先にまで陰陽の気を行き渡らせ、滯ることがないようにしなければならないと説かれている。ここでは呼吸を陰陽の気として捉えていることが窺え、法定では、呼吸により陰陽の気を全身に循環させることが重要視されていると考えられる。また、このように呼吸を陰陽の気としてとらえる考え方は、直心流の頃からあったようであり、直心流の『軍法非切書并唐目錄』に「息ハ陽也入息者陰也³⁴¹」という記述をみることができる。ここでは明確に「気」と記されてはおらず、また、形の動作の中で呼吸が行われていたかも不明であるが、直心流の頃から吸気と呼気を陰と陽に見立てていたことは確かである。

ここまで、気について伝書の記述を確認してきたが、ここにみられる「一気」「陰陽の気」という語から、直心影流は中国思想の影響を受けていると考えられる。気についての研究は数多くあるが³⁴²、ここでは、これらの中で特に古代中国思想における気について詳しく言及しているものを参考に、当流における中国思想の影響について考察しておきたい。ま

³³⁹ 山田次朗吉『剣道極意義解』一橋剣友会,p.36,1937.

³⁴⁰ 山田次朗吉『剣道極意義解』一橋剣友会,p.36,1937.

³⁴¹ 『軍法非切書并唐目錄』[写],熊本県立図書館蔵.

³⁴² 気についての主な先行研究としては、小野沢精一・福永光司・山井湧編『気の世界—中国における自然観と人間観の展開—』(東京大学出版会,1978.)、湯浅泰雄『気・修行・身体』(平河出版社,1986.)、丸山敏秋『気—論語からニューサイエンスまで』(東京美術,1986.)、湯浅泰雄『「気」とは何か 人体が発するエネルギー』(NHK ブックス,1991.)、湯浅泰雄編『気と人間科学』(平河出版社,1990.)、『東京大学公開講座 気の世界』(東京大学出版会,1990.)、湯浅泰雄・武本忠雄編『ニューサイエンスと気の科学』(青土社,1993.)、湯浅泰雄『宗教と科学の間 共時性・超心理学・気の科学』(名著刊行会,1993.)、身体運動文化学会編『武と知の新しい地平—体系的武道学研究をめざして—』(昭和堂,1998.)、前林清和・佐藤貢悦・小林寛『<気>の比較文化—中国・韓国・日本』(昭和堂,2000.)、大保木輝雄『武の素描 気を中心にした体験的武道論』(日本武道館,2000.)、湯浅晃『武芸伝書を読む』(日本武道館,2001.)、前林清和『近世日本武芸思想の研究』(人文書院,2006.)、前林清和『武道における身体と心』(日本武道館,2007.)などが挙げられる。

た、これら中国思想が直心影流に直接的に取り込まれたとは考えにくく、近世期の日本において朱子学をはじめとする中国思想が盛んに論じられたことが大いに関わっていると考えるべきである。そのため、近世期の日本における中国思想の展開についても大まかな流れを述べておきたい。

まず、古代中国においては、気が現象界における一切の存在ないし機能の根源であるとされ、人体も気の聚積物、生命活動は気の所作、精神機能すら気のはたらきとされる、気一元論的世界観が展開されていたという³⁴³。「一気」「陰陽の気」は元来このような世界観の中で用いられてきた語であるようだ。

「一気」とは、未分化で統合された気のことを指している³⁴⁴。上記の『鹿島神伝直心影流』の記述においても、一気は陰陽の気を統合した気の相として用いられているようである。

「陰陽の気」とは特に「易」の思想にみられるという。古代中国の春秋時代末期から戦国時代、諸子百家が自己の思想・主張を互いに競う中で、気の思想を徹底して説いたのが「陰陽家」と呼ばれる者たちである。この派の主唱する思想は陰陽二気のはたらきを自然現象の運行と絡めて構成したもので、このような思想傾向をも包摂し、気の思想を最も体系的に構築したのが「易」である³⁴⁵。「易」の思想には、陰陽二気の相対しつつ相待ち合う運動のしかたが万物を生成し変化せしめるという考え方が根底にある³⁴⁶。つまり、宇宙の実相は、陰陽二気という最小の構成要素からなるとみなされ、陰陽二気の循環・交替が、その宇宙の生成・変化を象徴しているということである³⁴⁷。

この「易」の思想は後代の中国で様々な思想と結びつく³⁴⁸。その中でも「易」の思想が人間・世界・存在・行為・政治等々と関連し、より深い思索と合理性に裏付けられ展開さ

³⁴³ 丸山敏秋『気—論語からニューサイエンスまで』東京美術, pp.19-20, 1986, 参照.

³⁴⁴ 丸山敏秋『気—論語からニューサイエンスまで』東京美術, p.21, 1986, 参照.

³⁴⁵ 高橋進「気」の思想と歴史(湯浅泰雄編『気と人間科学』所収)平河出版社, p.73, 1990, 参照.

³⁴⁶ 高橋進「気」の思想と歴史(湯浅泰雄編『気と人間科学』所収)平河出版社, p.77, 1990, 参照.

³⁴⁷ 前林清和・佐藤貢悦・小林寛『〈気〉の比較文化—中国・韓国・日本』昭和堂, p.16, 2000, 参照.

³⁴⁸ 漢の時代に至り、儒家思想が諸子の学に優位して政治・教育の指導的役割を果たすようになると、「易」は儒教と結合し一系の学問体系を構成したという。漢の武帝の末期にはすでに詩・書・礼・楽・春秋とともに「六経」として儒学の根底をなす思想書と意識されていたようである(高橋進「気」の思想と歴史, 湯浅泰雄編『気と人間科学』所収, 平河出版社, p.74, 1990, 参照.).

れたのが、11 世紀以降の宋代の思想である³⁴⁹。宋代の思想として代表的なものに気一元論と理気二元論が挙げられる。

気一元論の大成者として知られるのは張載（張横渠、1020 - 1077）である。この気論として特徴的なのは、気を「太虚」とみなすところであるという。太虚（気が離散した状態としての無形）と物（気が積聚した状態としての有形）とは、一方向性をもった移行ではなく互いに循環交替するとされる。万物と太虚とはまったく同一の事態であり、価値的、論理的に先後の区別がない。したがって太虚は気であるから物質的であり、また同時に根源的であるといえる³⁵⁰。

この気一元論と対比して説かれる考え方が理気二元論である³⁵¹。理気二元論の大成者であると同時に朱子学の大成者である朱子（朱熹、1130 - 1200）は気一元論の大成者・張載の気論に影響を受けつつも³⁵²、この思想はただ形而下について説いたに過ぎないと批判し、「理」を、形而下である陰陽の運動の原因、法則性として解釈したという³⁵³。つまり、理気二元論における形而下は気一元論が基盤になっていると考えられる。したがって理気二元論においても気によって万物が生成、変化すると考えられていたことは間違いないであろう。

また、少し時代が下るが、朱子学とともに近世の日本において盛んに論じられた思想に陽明学がある。陽明学は中国の明時代の思想家王陽明（1472 - 1528）によって始められた朱子学と並ぶ大きな新儒教の一つである。陽明学においては朱子学のように宇宙論に対する関心はなく、その関心は倫理の問題に向けられている。基本的立場は理即気の合一論であり、朱子学のように理と気の二元論をとらない³⁵⁴。

次にこれら中国思想が、近世初期の日本においていかに発展したか、代表的な例として朱子学・陽明学・古学思想についてそれぞれの代表的な人物ごとにみておきたい。

³⁴⁹ 高橋進「気思想と歴史」、湯浅泰雄編『気と人間科学』所収、平河出版社、p.78,1990,参照。

³⁵⁰ 前林清和・佐藤貢悦・小林寛『〈気〉の比較文化—中国・韓国・日本』昭和堂、p.139,2000,参照。

³⁵¹ 戸川芳郎「気一元論」（『東京大学公開講座 50 気の世界』所収）東京大学出版会、p.34,1990,参照。

³⁵² その形成過程においては、仏教学の要素を除けば、周敦頤（1017—1073）の『太極図説』を根幹として、これに邵康節（1011—1077）の数理論、張載の気一元論、二程子の形而上・形而下の説および理気二元論を主たる構成要素とし、これらを融合・体系化したものであると言われている（前林清和・佐藤貢悦・小林寛『〈気〉の比較文化—中国・韓国・日本』昭和堂、p.141,2000,参照.）。

³⁵³ 前林清和・佐藤貢悦・小林寛『〈気〉の比較文化—中国・韓国・日本』昭和堂、pp.140 - 142,2000,参照。

³⁵⁴ 源了圓『徳川思想小史』中央公論社、pp.39—41,1993,参照。

日本における朱子学の本格的な受容は藤原惺窩（1561 - 1619）からはじまる³⁵⁵。惺窩は元々禅僧であったが、京都の相国寺で儒教の經典に触れ、儒教へ転じた。惺窩の理気論は、天道を理と捉え、大宇宙の理は、人に具わった場合に性といい、共に同じ理であるとする。さらに、人の心に具わった「仁義礼智」の性は、天の「元亨利貞」と同一であるとし、天人合一論を説く。これは「性即理」に則っており、朱子の論を採っているといえる³⁵⁶。

その後、朱子学は惺窩の弟子である林羅山によって幕府の教学となる。師の藤原惺窩は朱子学だけでなく陽明学なども認める態度であったが、林羅山は朱子学を正統とし、他を排した³⁵⁷。羅山ははじめ王陽明の理気一元論に傾倒していたが、やがて朱子の二元論へ移っていく。太極を理と捉え、朱子の理気説に則っているが、理である太極を動くものとして捉えており、理と気を朱子ほどには明確に分析していない³⁵⁸。

次に陽明学についてみていく。近世初期の陽明学者とされる人物としては中江藤樹（1608 - 1648）と熊沢蕃山（1619 - 1691）を取り上げたい。

中江藤樹ははじめ朱子学に傾倒していたが、後に陽明学に転じた³⁵⁹。藤樹は、太極は単なる一気ではなく、人格的な神そのものであるとし、太極と陰陽、理と気の渾淪を説いていた。言い換えれば、人格神的性格を持った理気渾淪体を究極者として設定している³⁶⁰。熊沢蕃山は、はじめに張載の説を採っており、気一元論の立場に立ちつつ、「心即理」を論じていたが、その後、太虚を理および気と規定するように理気論を展開する。そして理気を一体として捉え、それを究極的なものとして道と表現した。また、天地自然の理（元・亨・利・貞）と気としての五行の関係において自然の成立、変化を説き、理を形而下的に捉えている。そして蕃山は天と人との関係を、天地自然を大宇宙、人間を小宇宙と捉え、大宇宙としての五行と小宇宙としての五倫の相通関係を明確に示している。つまり、蕃山は人間のあるべき生き方と天地自然の法則は同一のものであり、天地の法則にしたがい、人間が活動すれば、社会、国家も安定すると考えたということである³⁶¹。

³⁵⁵ 友枝龍太郎「熊沢蕃山と中国思想」『熊沢蕃山 日本思想体系 30』所収、岩波書店、1971、参照。

³⁵⁶ 前林清和・佐藤貢悦・小林寛『〈気〉の比較文化—中国・韓国・日本』昭和堂、pp.170 - 171, 2000、参照。

³⁵⁷ 源了圓『徳川思想小史』中央公論社、p.17, 1993、参照。

³⁵⁸ 前林清和・佐藤貢悦・小林寛『〈気〉の比較文化—中国・韓国・日本』昭和堂、p.171, 2000、参照。

³⁵⁹ 山井湧「陽明学の要点」『中江藤樹 日本思想体系 29』岩波書店、p.335, 1974、参照。

³⁶⁰ 友枝龍太郎「熊沢蕃山と中国思想」『熊沢蕃山 日本思想体系 30』所収、岩波書店、pp.550 - 551, 1971、参照。

³⁶¹ 前林清和・佐藤貢悦・小林寛『〈気〉の比較文化—中国・韓国・日本』昭和堂、p.171, 2000、参照。

最後に古学思想についてみておく。古学思想とは、朱子学や陽明学等の新儒教を飽き足りなく思い、孔子・孟子あるいはそれ以前の古代中国先王の教えこそ、仏教や老荘の影響を受けない真の儒教であるとして、そこに復古すべきことを説いた思想である³⁶²。朱子学の理を強調する傾向に対し、理よりも気を重んじ、あるいは理気論そのものを否定した³⁶³。ここでは代表的な人物として、山鹿素行（1622－1685）、伊藤仁斎（1627 - 1705）を挙げる。

山鹿素行は太極を理気妙合と説き、朱子の形而上学的な理を否定した。具体的には、理気妙合すると、わずかなしるしばかりの象となり、その中に多くの形象に展開すべきものが含まれているという現象未発現の芽のようなものとして太極を捉えていた³⁶⁴。

伊藤仁斎は、朱子が唱えた気の運動の原因・根拠としての理を批判し、気の運動そのままを道とし、理とした³⁶⁵。つまり、仁斎は、天地万物はすべて気によって生成され、陰陽の動きそのものを道とし、理は気の筋道として存在するという独自の気一元論を展開している。決して形而上学的に理を捉えず、気を中心とした世界観、人生観を考えた³⁶⁶。

以上、近世初期の日本における儒学思想の展開について簡単に把握してきたが、直心影流が特にどの思想の影響を受けているか、検討したい。『武芸流派大事典』においては、直心流について、神谷伝心斎が 67 歳のとき、当時儒学の新風であった宋学の理気二元論を基盤として創始した流派であると述べられている³⁶⁷。実際に神谷伝心斎が寛文 3 年（1663）、に著した直心流の伝書『軍法非切書并入唐目録』においては、「仁義礼智之四徳ヲ考ヘ一見出シ直心流ト極伝授ス³⁶⁸」「性ニ背キ不正本人間直心ナレトモ智慧ノ湧ニ従ヒ一心不_レ成清ク濁ル心ヲ含ミ一心外ヨリ不見誠ヲ尽シ正シクスト雖モ³⁶⁹」「仁義礼智之四徳ヲ以性トス然トモ智之不及カ故ニ過ツハ天ノ為ス殃也³⁷⁰」「陰陽端ナク出入無時陰一陽一分テ此ヲ両

³⁶² 源了圓『徳川思想小史』中央公論社,p.54,1993,参照.

³⁶³ 石田一良「前期幕藩体制のイデオロギーと朱子学派の思想」『藤原惺窩 林羅山 日本思想大系 23』岩波書店,p.428,1975,参照.

³⁶⁴ 友枝龍太郎「熊沢蕃山と中国思想」『熊沢蕃山 日本思想体系 30』所収,岩波書店,p.551 - 552,1971,参照.

³⁶⁵ 友枝龍太郎「熊沢蕃山と中国思想」『熊沢蕃山 日本思想体系 30』所収,岩波書店,pp.552 - 553,1971,参照.

³⁶⁶ 前林清和・佐藤貢悦・小林寛『〈気〉の比較文化—中国・韓国・日本』昭和堂,pp.174-175,2000,参照.

³⁶⁷ 綿谷雪・山田忠史『武芸流派大事典』東京コピー,p.333,1978,参照.

³⁶⁸ 『軍法非切書并入唐目録』写,熊本県立図書館蔵.

³⁶⁹ 『軍法非切書并入唐目録』写,熊本県立図書館蔵.

³⁷⁰ 『軍法非切書并入唐目録』写,熊本県立図書館蔵.

儀ト云³⁷¹」「其氣質之稟性ヲ尽シ理ヲ窮メ心ヲ正シ己ヲ修メ人ヲ治メ身ヲ正シ一心ヲ磋キ³⁷²」などの記述がみられた。ここに挙げた記述だけでも「仁義礼智之四徳」「氣質」「性」「陰陽」などの語から、これまでみてきた儒学思想の影響を受けていると考えられる。当伝系においては、直心流の頃より、儒学思想を取り入れていたとみてよい。ただし、記述から朱子学、陽明学、古学思想、のうち、どの影響を受けているのかを判断することは難しい。ここでは、直心流の時点で儒学思想の影響を受けているという点のみを述べるに留めておく。

次に直心正統流『兵法雑記』から儒学思想の影響をみてみたい。『兵法雑記』には、「心法図解」と題し、「天道」「人道」「心法」「凡心」それぞれについて図示されている箇所がある。以下、これら四つを図示しておきたい。

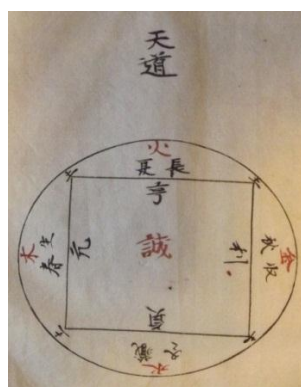


図 2-2 「天道」の図



図 2-3 「人道」の図

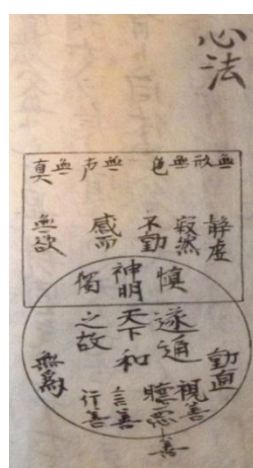


図 2-4 「心法」の図

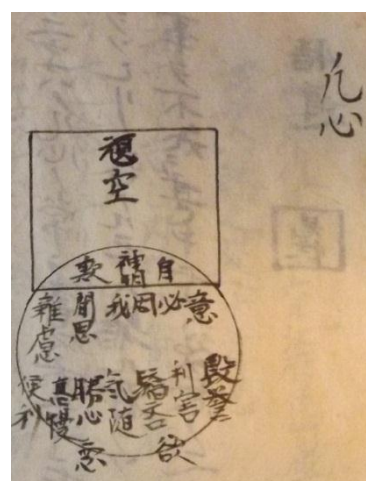


図 2-5 「凡心」の図

371 『軍法非切書并入唐目錄』写,熊本県立図書館蔵.

372 『軍法非切書并入唐目錄』写,熊本県立図書館蔵.

以上の四つの図についてそれぞれ解説が加えられているが、この図・解説は、若干の誤字³⁷³・脱字がみられるものの、熊沢蕃山の著した『集義和書』巻第六をそのまま転載したものである³⁷⁴。さらに、『兵法雑記』にみられる「亦曰仁者^ハ太虚ヲ心トス、天地、万物、山川、海河、皆吾有也³⁷⁵」「春夏秋冬、幽明昼夜、風雨雷露、皆我行也³⁷⁶」「順逆ハ人生ノ陰陽也、生死ハ昼夜之道也、何ヲカ好ミ、何カ悪マン、義トトモニシタカヒテ安シ³⁷⁷」（すべて読点筆者）という記述も『集義和書』巻第四にみることができる³⁷⁸。このように、『兵法雑記』においては『集義和書』を転載した箇所が散見され、熊沢蕃山の思想に影響を受けていることが窺える。『集義和書』は寛文12年（1672）刊行にされた書であり、直心流『軍法非切書并入唐目録』以降に成立している。したがって、山田平左衛門光徳が直心正統流を継承して以降、『集義和書』における思想が取り入れられたと考えられる。また、『兵法雑記』においては、先に挙げた『直心影流兵法究理之巻』と同意の記述がみられ³⁷⁹、『兵法雑記』の頃に影響を受けた思想がそのまま直心影流に継承されたと考えて良い。

以上の点から、当伝系では直心正統流の頃に熊沢蕃山の思想を取り入れていることが明らかであり、この頃の思想が直心影流に継承されていると考えられる。そして、当流においては、特に呼吸によって陰陽の気が表現され、一気を相手に当てるという用法がなされている。

2. 上半円と下半円

次に上半円・下半円について考察していきたい。法定4本の形は「上半円」と「下半円」という動作が必ず行われる。この動作は直心影流の形の中でも法定のみにみられるものである。まず、上半円からみていく。

上半円は4本の形それぞれのはじめに打太刀・仕太刀同時に行われる。山田次朗吉『鹿島神伝直心影流』によると、まず「打太刀ハ直立相精眼ニテ仕太刀ト気合相通ズルヤ剣先ヲ静カニ左方ヘ向ケ水平剣トナス³⁸⁰」と、打太刀は仕太刀と気合が通じたら、剣先を左に

³⁷³ 例えば「心法」の図における「真」は「臭」の誤字である。

³⁷⁴ 『集義和書』熊沢蕃山『日本思想体系30』所収、岩波書店、pp.101-108,1971.

³⁷⁵ 『兵法雑記』東京長沼正兵衛家蔵.

³⁷⁶ 『兵法雑記』東京長沼正兵衛家蔵.

³⁷⁷ 『兵法雑記』東京長沼正兵衛家蔵.

³⁷⁸ 『集義和書』熊沢蕃山『日本思想体系30』所収、岩波書店、p.71,1971.

³⁷⁹ 「尊師曰鑑^ル剣徳^ヲ陰陽両気者勝負也、陰勝時者陽退^ク、陽勝時者陰退^ク、陰陽元是一気也、養^ニ其^一気^ニ者、自^ラ成^ニ英雄^ト、其用必志之長厚^ニ長則生^ニ活物^ニ之情、有^レ至既而通^ニ三性虚実往来之気^ニ則天地神明与物押移變動、無常無常因敵転化而已」（『兵法雑記』）

³⁸⁰ 山田次朗吉『鹿島神伝直心影流』一橋剣友会、p.33,1927.

向けて太刀の棟を左手で持ち、木刀を額の前にかざして水平にする。その後、「打太刀ハ額前ニ捧ゲタル劍峯ヲ人差し指ト拇指ノ間ニ受ケ吸氣ヲナシツゝ爪先ヲ立テ充分ニ伸上ル³⁸¹」と、額の前で水平に持っている木刀の棟を人差し指と親指の間に置き、吸気を行いながら、爪先を立てて伸上る。そして、「互ヒニ伸上ツヤ人差し指ト拇指ノ間ニテ劍峯ヲシゴキツゝ劍先ニテ上半円ヲ描ク觀念ヲナシ充分ニ開キ左足右足ト肩幅ニ踏据エ腰腹両部ニ力ヲ籠メ左手ハ水平ニ伸ベ人差し指ニテ地ヲ指シ他指ハ堅ク握ル³⁸²」と、棟をしごきながら劍先で頭上に半円を描きながら開く。その後左足、右足の順に肩幅に踏み開き、腰部、腹部両方に力を籠め、左手は水平に伸ばし、人差し指で地を指差すという動作である。以下に、斎藤明信『直心影流劍術極意教授図解』における上半円の図を示しておく。



図 2-6 法定の形における上半円

次に 4 本の形それぞれの終わりに行われる動作である下半円について、山田次朗吉『鹿島神伝直心影流』からみていくこととする。

まず、打太刀・仕太刀ともに精眼に構え、「打太刀ハ互ヒノ氣脈相通ジテ劍先ヲ静カニ左方ニ向ケ劍先ニテ下半円ヲ描ク觀念ヲナシ吸氣ト共ニ開ク³⁸³」と、木刀から左手を離し、劍先を左に向ける。その後、息を吸いながら、劍先で下半円を描く。そして「打太刀ハ吸氣ト共ニ下半円ヲ開キ左足右足ト肩幅ニ踏据エ左手ヲ水平ニ伸シ握リハ人差し指ヲ伸シ他指ハ確ト握ル³⁸⁴」と左足右足と肩幅に踏み据えて、左手を水平に伸ばし、人差し指を伸ばす。このとき右手で持っている木刀は上を向くようにする。

³⁸¹ 山田次朗吉『鹿島神伝直心影流』一橋劍友会, p. 34, 1927.

³⁸² 山田次朗吉『鹿島神伝直心影流』一橋劍友会, p. 35, 1927.

³⁸³ 山田次朗吉『鹿島神伝直心影流』一橋劍友会, p. 59, 1927.

³⁸⁴ 山田次朗吉『鹿島神伝直心影流』一橋劍友会, p. 60, 1927.

以下が斎藤明信『直心影流剣術極意教授図解』における下半円の図である。



図 2-7 法定の形における下半円

このように特徴的な動作である上半円と下半円であるが、相手との攻防には直接関係がないと考えられる。実際に上半円を行うときは、打太刀・仕太刀共に攻防を行う間合には入っておらず、下半円を行うのは上半円を行った元の立ち位置に戻る時である。当流の基本の形とされる法定において、この動作が例外なく行われるということは、何か別に意味を持っていると考えられる。以下は斎藤明信『直心影流剣術極意教授図解』の記述である。

左り手を放し木刀の刃ばきと思ふ所へ添て頭上に高く上げたる所は陽氣にして盛んに清めらかなる軽き物は昇りて天となり濁りて重き物は下りて地となる所是則大極開け始て陰陽両儀を生じたる所³⁸⁵

まず、頭上に高く上半円を描くことは、清く軽いものは昇って天に、濁って重いものは下に降り地となるという、太極が開け陰陽が生じる状況をあらわしているという。つまり、この動作は天地の開闢を表現するものであるということである。これについては石垣辰雄³⁸⁶『鹿島神伝直心影流極意』についても同様の記述がみられ³⁸⁷、別の派において

³⁸⁵ 斎藤明信『直心影流剣術極意教授図解』井口魁真書楼，p.77，1901.

³⁸⁶ 石垣辰雄は、男谷派の野見鋌次郎の孫である。

³⁸⁷ 「夫れ、人は小天地の形にして頭の円きは天にかたどり、足のけたかなるは地にかたどる。是自然の理なり。当流最初入門の時、先づ如此混沌未分にとり、それより手を開き天地開くにかたどり、其内より千変万化の業出る。是天地開けてより萬草生ると云うに同じ、

も上半円、下半円によって同様のことを表現していると考えられる。また、『直心影流目録口伝書』には、「人ハ万物ノ靈ニシテ天地ノ形ヲ具ス頭上ノ丸カナルハ天ニ象リ足下ノ方ナルハ地ニ象リ³⁸⁸」と記されており、具体的に上半円が天を、下半円は地を表していることがわかる。上半円・下半円は国郷の頃から天地を表現する動作として行われていたと考えられる。


丸山氏は中国の伝統的な天地創造のパターンとして、世界が形成される以前、気が混沌の状態が存在し、そこから陰陽の気が剖判して天と地ができるという流れがあることを指摘している。そしてその後、陰陽の性質を持つ気が一方に偏ったり、和合したり、絶えざる運動を続けることで万物が形成され、自然界の諸現象が生起するということである³⁸⁹。これを踏まえて、法定について考えてみると、まず呼吸を伴った上半円・下半円を行うことにより、陰気・陽気が生まれ、天地が形成される。その後、呼吸を伴いながら法定 4 本の形を行うことで、自然界の現象である四時が表現されると考えられる。ここには上記の中国の伝統的な天地創造の描写が現れていると考えて良いだろう。

法定においては、陰陽の気を循環させるために呼吸を伴いながら、上半円・下半円がなされ、これらの動作により天地創造の描写がなされているといえる。

3. 諸腕

もう一つ法定の特徴的な動作が「諸腕^{もろうで}」という動作である。この動作は法定の 1 本目「八相^{発破}」および 3 本目「右転左転」にみられる、打太刀の木刀を仕太刀が打ち落とす動作である。はじめに斎藤明信『直心影流剣術極意教授図解』にみられる諸腕の絵図を以下の図 2-4 に記しておきたい。

故に天地自然の形を表して修行する所也」(石垣辰雄『鹿島神伝直心影流極意』直心影流振興会,pp.121 - 122,1935.)

³⁸⁸ 『直心影流目録口伝書』,鈴鹿家文書,全日本剣道連盟所蔵.

³⁸⁹ 丸山敏秋『氣一論語からニューサイエンスまで』東京美術,pp.35-36,1986.参照.



図 2-8 法定における諸腕

この図には次のような解説がなされている。

打太刀は仕太刀が姿勢整ひ気合満ちたるを見ヤエーヒと声掛け木刀を打たせて手内のよしあしを試みるなり○此太刀を諸腕を打といふ

仕太刀は打太刀掛け声と共に己もヤエーヒと掛け声しながら右の膝を高く揚げ是を右の腕の台となし打太刀の木刀の物打の所を充分に打たる所図の如し³⁹⁰

打太刀は仕太刀の姿勢や気合などの条件が整ったときを見計らって声を出し、自身の木刀を打たせて手の内の良し悪しを判断するという。この書ではこの動作を「諸腕を打つ」と称しているが、『兵法雑記』には「是ヲ俗ニモロウデト云³⁹¹」とあり、元々は「諸腕」と呼ばれていたようである。打太刀の木刀を打つ際、仕太刀は打太刀が掛け声をかけると共に自身も掛け声をかけながら右膝を高く上げ、右腕の台にするという。この理由については、「諸腕を打たするは手の内の善あしを吟味する也、因て手の内の不狂様、右の足を上げ膝を台にして打たする也³⁹²」とあるように、手の内が狂うのを防ぐためであるという。

このように斎藤明信『直心影流剣術極意教授図解』において、諸腕は相手が差し出した木刀を打ち落とす動作とされているが、『兵法雑記』においては若干の違いがみられる。次は『兵法雑記』の記述である。

扱打方左ノ下ヨリ仕太刀ノ右ノウデヲヒロウヲ引上ゲテ逆十文字ニ筋違テ両手ノ代リ

³⁹⁰ 斎藤明信『直心影流剣術極意教授図解』井口魁真書楼，p.74，1901.

³⁹¹ 『兵法雑記』東京長沼正兵衛家蔵.

³⁹² 斎藤明信『直心影流剣術極意教授図解』井口魁真書楼，p.74，1901.

ニ木刀ヲ打ヲトス也 是ヲ俗ニモロウデト云³⁹³

この記述においては打太刀が左下から仕太刀の右腕を拾うように斬ってくるため、その打ちを引上げて両手を斬る代りに木刀を打ち落とすという。つまり、これまでみてきた斎藤明信『直心影流剣術極意教授図解』における「諸腕」と打太刀の動作が異なっており、この『兵法雑記』においては、打太刀は木刀を差し出していない。『兵法雑記』にみられるこのような動作は長沼派においてみられるようである。佐藤泰彦『城下町新発田の剣道史上巻』においては、長沼派の法定の解説がなされており、その中で、諸腕は「打太刀が右から木刀を廻して仕太刀の小手を横から切り払いにくるので、左足を右足の所へ引き付けながら木刀を上段に取って打太刀の打ち込みを外し、流れた木刀を右足をあげて上段から打ち落とし、打太刀の喉に剣先をつける³⁹⁴」と記されている。ここでも、打太刀は木刀を水平に差し出すのではなく、仕太刀の小手を斬る動作を行っている。

また、男谷派の末裔である石垣氏は「仕太刀が己の木刀をぐるりと回して右わきに繰り込んできたら、木刀の切先を水平にして平を見せる。打太刀は『ヤエーイ』の声をかけ、仕太刀に己が木刀を打たせて、仕太刀の手の内の良し悪しを試み、相手の顔を見る³⁹⁵」と諸腕について述べており、男谷派は藤川派と同様の諸腕の動作であったことが窺える。

「諸腕」については、分派によって打太刀の動作が異なっているものの、相手の木刀を上段から一気に打ち落とす動作であるといえる。特に藤川派・男谷派においては、この動作が手の内の良し悪しを吟味するためのものであったようである。

本節においては直心影流の基本の形である法定についてその概要と形としての特徴という点から考察を行ってきた。

まず、法定は 4 本から構成される形である。真新陰流から直心影流までの目録を比較すると、この原形とみられる形は直心流の頃に成立したようである。また、直心正統流と直心影流の伝書においては、名称だけでなく、表記されている漢字も同様である。このことから法定は直心正統流のときには成立していたと考えられる。さらに、直心正統流の頃から 4 本の総合名称として「法定」という語が用いられ始めており、このことから、法定は直心正統流の段階で成立していたと考えられる。この法定という語は構えや所作を定式として定めたという意味である。この名称は高橋弾正左衛門重治が名付けたと考えられ、

³⁹³ 『兵法雑記』東京長沼正兵衛家蔵。

³⁹⁴ 佐藤泰彦『城下町新発田の剣道史 上巻』刊行発起人会,p.93,2007.

³⁹⁵ 石垣安造『直心影流極意伝開』島津書房,p.330,2001.

その背景として当時、形が崩れるという事態が発生していたことが考えられる。

この法定の稽古は専用の木刀を用いてなされる。この木刀は反りがない直刀で、切先が切り落とされており、鰐をつけないという特徴を持つ。また、非常に太く、重いものである。長さについては分派によって若干の違いがあるが、刀身と柄の長さの比率はおおよそ同様であるといえよう。

法定の形としての特徴としては、まず、動作に呼吸を伴うということが挙げられる。これは法定の中で気を重要視するためであると考えられる。直心影流においては陰陽二つの気が統合された「一气」という気を養うことが重要視されており、そのために法定においてはこの陰陽の気を全身に巡らせることが求められている。

また、上半円・下半円という動作がなされるが、これらの動作は呼吸を伴いながら行うことにより、天地創造の描写を表現していると考えられる。

相手の木刀を打ち落とす「諸腕」という動作も特徴的である。分派によって多少の動作の差異がみられるが、藤川派・男谷派においては手の内を確認するために行われるということである。

次節以降は、法定について、修行の過程を考察していくこととする。

第二節 法定の修行過程

前節において法定は、直心正統流の頃に成立したことを論じてきた。本節以降においては、直心正統流の伝書『稽古法定序并理歌』『兵法雑記』を中心に取扱い、初期の法定の稽古について考察したい。まず、本節では、流派における全体の修行過程と法定そのものの修行過程についてみていくこととする。

第一項 流派における修行過程の全容

はじめに法定について論じていくための前提として、当流全体の修行過程について山田平左衛門光徳が記した『兵法雑記』からみていくこととする。

亦曰修行之手段

一 初学四形ヲ立、序ヲ訳問シ、用具シナヒ木刀ニ至ルマテ、応_二其器_一、其氣ヲソタテ、威ヲ能ソナヘテ、教ヘ建ルヲ本トス、或云、伝書曰、七病ヲ知セ、三悪ヲ見立ルロ伝アリ

二 中学、非切、仕懸入_二心行_一、流儀切紙内渡之、専ラ可引立也

三 功学於真実ニ而、不怠人ハ専ラ目錄ニモ可引立也

右功劳、力行有テ、修行有実、則ハ免状大事不可残³⁹⁶ト云々³⁹⁶（読点筆者）

この記述においては、修行段階が「初学」「中学」「功学」という三つに分けられている。まず、第一の段階である「初学」の修行では、四つの形を設け、修行のはじまりの道理を追求し、しない、木刀などの用具に応じて気を養い、その威を十分に備えるように教えることが主であるという。この記述での四つの形というのは、法定のことを指していると考えられる³⁹⁷。この初学の段階においては法定による修行が行われていたといえる。

第二の段階である「中学」においては、「心行」という修行に入ることが述べられている。

³⁹⁶ 『兵法雑記』東京長沼正兵衛家蔵。

³⁹⁷ この理由としては、『兵法雑記』をはじめとする初期の史料には法定以外の形の記述がみられないこと、当流において4本を1組の形として構成している形は法定のみであることが挙げられる（藤川派における「刃引」の形は4本であるが、この形は長沼派では5本とされており、派によって形態が異なっているようである）。以上のことから、この記述における「四形ヲ」というのは、法定の事を指すとみて大過ないであろう。

この段階は流儀の切紙の段階に相当するという。第三の段階である「功学」では、修行を怠らない者は目録に取りたてべきであると述べられており、この段階から目録の段位に到達することが窺える。

さらに『兵法雑記』において、全体の修行過程を記した別の記述をみてみたい。

- 一 行者初学云、其形格ヲ立テ教エルハ、一道ノ全体ニシテ、タトヘハ家ヲ建ルニ地形縄張ヲ定メ、黒矩ヲアツルカ如シ為_レ体
- 二 中学、心行ニ入り、漸ク柱ヲ立、貫ヲ通ス乎
- 三 功学、心行専ラ行之事体忍シテ、体太刀一致ノ位可成、件ルトキハ、タトヘ大風吹テモ、滅却スル氣遣ナキノ
- 四 目録地形可成^ル、上手ニ至ルノ期也、流術ノ大意ヲ悟リ、氣中リヲ以根源ノ勝ヲ知ル、是ヲ修行^{虫食い}
- 五 空術妙術ニ至ルヘシ、専ラ法定ヲ離レ仕懸ニ移リ、亦ハ法定仕懸組合道具ニ離レ、自由ナルタイダン可成、如此ナレバ吾モ不知、自然ト功術ノ妙アラハスモノソ以_レ之功妙剣トモ心妙剣トモ云也、勿論一派ノ免状ニ至テ、為範者事歴然也³⁹⁸（下線部、読点筆者）

この記述においては、全体の修行過程が五つの段階に区分されているが、初学は「其形格ヲ立テ」、中学は「心行ニ入り」と述べられていることから、先に挙げた三段階で記される全体の修行過程と対応していることが窺える。

ここで注目しておきたいことは、初学・中学の修行過程が家を建てる過程に例えられている点である。初学は家を建てる過程に例えると、土地の形を決め、縄を張り、曲尺をあてることであるという。そして、中学というのは柱を立てて、貫を渡すという段階と同じであるとされている。

つまり、この初学・中学は家を建てる過程の土台や骨組を組み立てる段階であると考えられている。このことから、これら二つの過程は、特に流儀の基礎を固めるという段階であったと考えて差し支えないであろう。

当流における修行段階は以上のように構成されているが、ここで特筆しておくべきは初学の段階である。

次は『兵法雑記』の記述である。

³⁹⁸ 『兵法雑記』東京長沼正兵衛家蔵。

△亦曰、初学ヲ流儀ニ引入ル事、一道建立ノ根源ニシテ、無二太切也、只々流儀ノ体意ヲ以テ、実貞ニ無欲ニテ、吾身之直^{ロク}ハカリヲ、法定ニテ修^レ之^ヲ、全体直ニ建立スヘシ、必々件ノ位マテハ、無勝負也、毛頭モ勝タキ心、進ム心、征スル心アラハ、修行ノ仇ト可^レ成^ル399（読点筆者）

初学の者を流儀に引入れることは一道を建てる根源であり、無二で大切なことであるという。この段階では、ただ流儀のおおよその意義をもって正しく、無欲に法定の修練により身体を真直ぐに形成することに専念すべきであるという。そして特に注目しておきたい部分は、この初学の段階を「無勝負」としていることである。少しでも勝ちたい心や上達しようという心、相手を制する心があれば、修行の妨げとなると説いている。

また、前節において取り上げた記述に「言ハ、初心ヨリ氣勢ヲハラセ朴刀ヲ強ク打セ、進ム事ヲハゲマスレバ、勝身ハ早ク本ツクヤウナレトモ、形ヲクヅシ、容法乱テ、進付混乱ス、先師ハ其進ムヲ忌テ、無勝負ニシテ形ヲ直ニト教タリ、予モ其ヲ含テ詠之⁴⁰⁰」（読点筆者）とあるように、この初学における勝負の禁止は、先師である高橋弾正左衛門が定めたということである。また、ここでは勝負を禁止する理由として、初心の頃より氣勢を張らせたり、木刀を強く打たせることに励むと、早く勝てるようになるようであるが、形が崩れ、姿や所作が乱れて修行の進歩が乱れると述べている。そして、光徳は弾正左衛門が定めた初学における勝負の禁止をそのまま受け継いだという意味を含めて、「法定ハ、初心中学、巧者マテ、備ヲ専ニ、勝ヲ後トス⁴⁰¹」（読点筆者）という歌を詠んだという。

当流全体の修行段階の中でも、初心者の段階である「初学」は勝負という概念を取り除くことが求められている。そして、このような修行段階は高橋弾正左衛門の頃より成立し、山田平左衛門光徳にそのまま継承されていたと考えられる。

399 『兵法雑記』東京長沼正兵衛家蔵.

400 『兵法雑記』東京長沼正兵衛家蔵.

401 『兵法雑記』東京長沼正兵衛家蔵.

第二項 法定の修行過程

次に法定そのものの修行過程について考察していきたい。直心正統流の高橋弾正左衛門重治が著した『稽古法定序并理歌』では次のように法定の修行過程を記している。

稽古法定序并理歌

抑此直心正統一流稽古修行者、先以信誠真元根ヨリ志ヲタテ、誠ヨリ真ニイタル、誠ヲ以理トシ、理ヲ以真トシ、又理ヲ以所作トスルナリ、所謂四ツノ形ヲ仕太刀打太刀共ニ能覚、体ノ曲ヲ直シ、太刀ノ巡逆竪一横一ノ矩ヲ真直ニイタシ、体ノ前後左右ニカタヨラス、地ニ不居付、又カルカラスシテ可勤之、然而後心行号、心ノロクヲ貞ナリ、是ヨリシテ重々段々ノ習ハ、ヲソラクハ無極太極ノ理ニモ、斎カランカ慎而勿怠矣⁴⁰²（下線部、点線部筆者）

下線部及び点線部が修行過程を述べた記述であるが、「四ツノ形」⁴⁰³とあることからこの修行過程が法定について述べられたものであると考えられる。この記述からは、修行過程が大きく二つに分けられていることが確認できる。第一の段階（記述の下線部）では、まず四つの形を打太刀・仕太刀ともによく覚えることが説かれている。そして、身体の曲がりを矯正し、太刀筋を真直ぐにすることが求められている。また、身体が前後左右に偏らず、地に居ついたり、軽々しい動作にならないように修練するように説かれている。

第二の段階（点線部）では、「心行」と呼ばれる修行を行うという。先述の『兵法雑記』に記された全体の修行段階の記述においても、中学の段階で行う修行として「心行」を挙げ、その具体例として「非切」「仕懸」の二つが記されているが、これら二つについては「法定非切之事 非ヲ改木刀ニテツブシヲ云⁴⁰³」「仕掛之次第口伝条々略ス之ヲ法定ニモ仕懸アリ⁴⁰⁴」と記されていることから、法定の中で行う修行であったと考えられる（ただし、「仕懸」については「法定ニモ」と記されていることから、法定の中でのみ行われる修行ではなかったようである）。したがってこの段階も法定における修練がなされていたと考えて良い。

この記述においては「心行号心ノロクヲ貞ナリ」と述べられている。「ロク」とは水平であること、歪みなく正しいことなどを意味している⁴⁰⁵。つまり、ここで「心行」と称され

⁴⁰² 『稽古法定序并理歌』東京長沼正兵衛家蔵。

⁴⁰³ 『兵法雑記』東京長沼正兵衛家蔵。

⁴⁰⁴ 『兵法雑記』東京長沼正兵衛家蔵。

⁴⁰⁵ 「ろく」を辞書的に解釈すると、①水平な状態。たいら。②きちんとしていること。ま

る修行は「心が正しい状態であることを確認する⁴⁰⁶」といった意味に捉えることができる。心行は主に精神面に関連した修練であったと考えられ、この修練によって自身の心を理想的な状態に高めていたと考えられる。

法定の修練においても段階があったと考えられ、初心者の段階では、太刀筋や身体の矯正に、中級者の段階では心を理想的な状態に整えることにそれぞれ重点が置かれているといえる。そして、これら法定の修行段階は全体の修行過程における初学と中学の段階に対応しているようである。したがって初心の頃は勝負をすることなく、法定によって太刀筋、身体を矯正することに専念し、中学においては「心行」という修行を行っていたと考えられる。

本節においては、法定の修行過程について考察してきた。はじめにその前提として全体の修行過程がいかなるものであったか考察を行った。

流派全体の修行過程の記述は『兵法雑記』にみられ、「初学」「中学」「功学」という三つの修行段階が記されている。初学では法定を学ぶこと、中学においては心行という名の修行に入ることが求められている。また、別の記述においては、修行過程が家を建てる過程に例えられており、初学と中学の段階は、流儀の土台や骨組を作っていく段階に相当するとされる。また、この「初学」の段階では勝負を行うことを禁止している。この段階においては、法定の修練によって、真直ぐで正しい身体を形成することに専念することが求められている。

次に法定自体の修行過程について考察を行った。

法定の修練過程は二つに分けられている。

第一の段階では、打太刀・仕太刀の形の動作をしっかりと覚え、身体の曲がりや太刀筋を矯正することが求められている。そして身体がどこにも片寄らず、また居ついたり、所作が軽々しいものにならないように形を行うことが説かれている。この段階は身体面に重点が置かれ、修練がなされると考えられる。

第二の段階では心行と呼ばれる修行を行う。この心行は、「心が正しい状態であることを確認する」という意味に捉えることができ、この修行によって心を有るべき状態に昇華さ

つすぐなさま。③人の精神や事物がまともであること。④気持ちの楽なこと。安らか。などの意味を有している（『旺文社古語辞典』旺文社,p.1354,1960.参照.）。ここでは真直ぐで正しい状態を意味していると捉えられる。

⁴⁰⁶ ここでの『貞』の意味については、「問う」というような意味に捉えることができる（諸橋轍次著『大漢和辞典 卷十』大修館書店,pp.696-697,1957.参照.）。この文脈においてさらに積極的に解釈すると、「確認する」という意味であると考えられる。

せていたと考えられる。この段階は精神面に重点を置いた法定の稽古がなされることが考えられる。そしてこれらの修行段階はそれぞれ、全体の修行過程における「初学」「中学」に対応していると考えられる。

第三節および第四節においては、この法定の修行過程における初学の修行と中学の修行を各段階に分けて具体的に考察していくこととする。

第三節 初学の修行

前節においては、法定の修行過程について考察を進めてきた。その結果、法定は全体の修行過程の中でも特に「初学」「中学」という修行段階において学ばれる形であること、さらにその法定自体の修行過程において、初学では主に身体面に、中学では精神面にそれぞれ重点が置かれ、修練されていたことを『稽古法定序并理歌』から論じてきた。

本節では『稽古法定序并理歌』にみられる法定の第一の修行段階「所謂四ツノ形^ヲ仕太刀打太刀共^ニ能覚体ノ曲^ヲ直シ太刀ノ巡逆^ノ一横^ノ一^ノ矩^ヲ真直^ニイタシ体^ノ前後左右^ニカタヨラス地^ニ不^レ居付^ニ又カルカラスシテ可^レ勤^レ之^ヲ」の部分における修練について考察していく。

第一項 太刀筋の矯正

1. 縦一文字・横一文字

「太刀ノ巡逆^ノ一横^ノ一^ノ矩^ヲ真直^ニイタシ」と述べられるように、太刀筋の矯正ということが法定修行における一つの目的であったと考えられる。まず、当流における太刀筋について考察していきたい。

当流には「縦一文字」「横一文字」という太刀筋に関する習がある。まずは、この説明を『兵法雑記』からみておきたい。

縦一文字横一文字 真ノ切ヲ云、畢竟十文字也、一ハ物ノ始メナレハ也、十文字ノ口伝ハ前ニモ図^{シテ}之^ヲ委ク記ス、別テ剣術ハ十文字ヨリ無^レ外、万業ニ振廻ストモ、十文ノ理ニ叶フヘシ、去程常矩ヲ直スソ⁴⁰⁷（読点筆者）

これらの習は真の斬り方を指すものであり、それはつまるところ、「十文字」であるという。そしてどのように太刀を振ったとしてもこの十文字の理に叶うようにしなければならないと説いている。「十文字」については「前ニモ図^{シテ}之^ヲ委ク記ス」とあるように、この記述以前に、太刀筋を表した図がある。これが次の図 2-5 である。

⁴⁰⁷ 『兵法雑記』東京長沼正兵衛家蔵。



図 2 - 9 太刀筋に関する図

この部分に「究理曰、諸流トモニ太刀ノ形、凡此ノ八ノ外不可有⁴⁰⁸」（読点筆者）と記されているように、太刀の形、すなわち斬り方は全部でこの 8 通り以外にないという。これらに加え、中心の円を突きとし、全部で 9 通りの太刀筋⁴⁰⁹が記されている。

これらを踏まえると、豎一文字・横一文字という習は正しい斬り方、太刀筋を意味していると考えられる。『稽古法定序并理歌』にみられる「豎一横一ノ矩ヲ真直ニイタシ」という記述は、豎一文字・横一文字の習に沿って、十文字の理に適うように太刀筋を矯正することであると解釈できる。

⁴⁰⁸ 『兵法雑記』東京長沼正兵衛家蔵。

⁴⁰⁹ この太刀筋については『直心影流目録口伝書』においても記されている。本書によれば、「人ヲ切ル所八所トハ、頭ヨリ股マテ切下ケ、又下ヨリ上ヘ切上ルニツ也、左ケサニ切サケ、又返シテ上ニ切上ルニツ也、又胴ヲ右ヨリ左ヘ切払ヒ、又左ヨリ右切返スニツ也、是ニテ都合ハツ也、是ニ突ヲ入テ九重ノ伝ト云」とある（『直心影流目録口伝書』鈴鹿家文書、全日本剣道連盟蔵.）。この記述にみられるのは突きも入れて 7 通りの斬突の太刀筋のみであるが、人を斬る所は 8 カ所であると述べられていることから、右からの袈裟斬り、ならびに下から右斜め上の斬り上げの太刀筋が欠落していると考えられる。

2. 法定の動作にみる太刀筋

それでは、法定の形の中において、これらの太刀筋がどのように表現されているのか、『兵法雑記』における法定の記述から解釈していく。次の表 2-2 は『兵法雑記』における法定の動作についての記述とその記述にみられる太刀筋を解釈したものである。

表 2-2 法定の動作における太刀筋の記述

太刀名	記述（番号・下線は筆者）	解釈
八相	一、仕太刀八相ニ備ルヲ①打太刀ヨリ仕太刀ノケサヲ切ルホドニ十文字ニ応ズレバ則テ打太刀ノケサヘアタル也亦打方上ル所ヲ取懸トテ仕太刀ヨリ只中ヲ突マ子シテ打方右寄り我ガ左ヘ払ヲ引上テカムレバ、不当ヲ扱②打方左ニ有太刀ニテ左ケサヲ切ヲ真スグニ応ス是天ヘンハリノ代也亦③打方引カムリ右ケサヲ切ヲ是モ直ニ応ス天ヘン代トス扱④打方左ノ下ヨリ仕太刀ノ右之ウデヲヒロウヲ引上ケテ逆十文字ニ筋違テ両手ノ代リニ木刀ヲ打ヲトス也是ヲ俗ニモロウデト云	①打太刀が仕太刀の袈裟を斬るのに対して仕太刀は十文字に応じれば打太刀の袈裟に当たる。 ②打太刀が左に有る太刀で左袈裟を斬ってくるのに対し、真直ぐに応じる。 ③打太刀が引きかぶり、右袈裟を斬ってくるのに対し、真直ぐに応じる。 ④打太刀が左下から仕太刀の右の腕を拾いながら斬ってくるのに対して、逆十文字に筋違わせ、両手の代りに木刀を打ち落とす。
一刀両断	一、二目ヲ一刀ト云相カマエニシテ直クニカブリ天ヘンヲ切ル心行ニテ切先ヲ豎スグニ引ヌクラ仕太刀同様ニ立並ブ也能ク、不 ^レ 合 ^ハ 非切ト成ケガ有也 扱打方我右ノ肩ノ上ヘ陰ニトルヲ①仕太刀ヨリ其太刀ヲフサギ乍ラ首ヲ小ケサニ切ヲ②打方ヨリ右ヨリ小ケサニ切ルヲ仕方モ右ヨリ小ケサニ首ヲ打テバ打方ノ首ハ矢ハヅニ切ルノ代ト成也	①仕太刀からその太刀を遮りながら首を小さく袈裟に斬る。 ②打太刀から右から小さく袈裟に斬るのに対し、仕太刀も右から小さく袈裟に斬る。
右転左転	一、三目ヲ右転ト云①打太刀ヨリ大ケサニ切ルヲ仕方ハ巡ニ其ウデヲ懸テ細腰ヲ払ヒ切ル也亦②打方引カフリ高ケサニ切ヲ仕方ハスグニ応ス天ヘンノ代也亦③打方左ヨリ上ケ切ニスルヲ仕方ヨリ其両手ヲ打落ス代リニ太刀先ヲ打テ直ニ首ヲ払	①打太刀が大きく袈裟に斬ってくるのに対し、仕太刀は回すように腕を高く上げて細腰を払いながら斬る。 ②打太刀が引きかぶり、高袈裟に斬るのに対し、仕太刀は真直ぐに応じる。

	<p>切ニスルヲ④打方ヨリ左ケサニ切ヲ十文字ニ応ス 亦云⑤ケサニ切ヲ十文字ニ応スル也 是左右ノケ サヲキル代也</p>	<p>③打太刀は左から太刀を上げながら斬る のを仕太刀は其両手を打つ代わりに太刀 先を打って、そのまま首を払い斬りにす る。 ④打太刀が左袈裟に斬るのを十文字に応 じる。 ⑤打太刀が袈裟に斬るのに対し十文字に 応じる</p>
長短一味	<p>一、四目長短一味ト云出所二目ノ如備ヘテタガヒ ニニツフリ是ヲカケタリ切タリト云 此ヲ空ニニツ振ハ空ニ切也依テ仕太刀モ応スル ハ則チ、勝之也ソレヨリタカヒニ行合コト二目ノ 如シ扱①打方ヨリ仕方ノ左リノ外ヒデヲ下ヨリ切 ルヲ十文字ニ応ス亦②右ノウデヲ下ヨリ切ルヲ是 モ同ク十文字ニ応ス扱打太刀ノム子ヲ突キテ引 冠ル時ニ③打太刀ヨリケサニ切ルヲ亦十文字ニ応 スレハ向ノケサニアタル也</p>	<p>①打太刀が仕太刀の肘を下から斬るのを 十文字に応じる。 ②右の腕を下から斬るのを十文字に応じ る。 ③打太刀が袈裟に斬るのを十文字に応じ る。</p>

これらの記述から、「スグニ」「直ニ」「真スグニ」という言葉が多用されており、真直ぐに打ち込む、応じる、振りかぶるなどの動作が多くなされていることが窺える。また、「打太刀ヨリ仕太刀ノケサヲ切ルホドニ、十文字ニ応ズレバ、則テ打太刀ノケサヘアタル也」（読点筆者）と相手が袈裟がけに斬ってくるのに対し、十文字に応じるという技術を多用している。このとき、相手の袈裟斬りに対して応じることで、反対に相手の袈裟にあたるという。つまり、こちらが斜めに斬っていることが窺え、「十文字」という語、そして前掲の太刀筋の図も踏まえて解釈すると、「十文字に応じる」というのは、相手の太刀の軌道と直角に交差するように太刀を振ることであると考えられる。例えば、相手が右斜め上から袈裟がけに斬ってくるのであれば、こちらは左斜め上から袈裟がけに斬る、または右斜め下から左斜め上に向かって斬り上げることである。また、「右ケサヲ切ヲ是モ直ニ応ス」とみられるように、相手の袈裟斬りに応じる方法として、真直ぐに太刀を振ることもあったようである。

法定の動作においては「堅一文字」「横一文字」という習に沿った太刀筋が多くみられ、この形を修練することで、自然と正しい太刀筋に矯正されていくと考えられる。

第二項 身体の矯正

『稽古法定序并理歌』では、「四ツノ形ヲ仕太刀打太刀共ニ能覚体ノ曲ヲ直シ」と法定を学ぶことにより、身体の曲がりを直していくことが説かれている。第二節で取り扱った『兵法雑記』の記述においても「只々流儀ノ体意ヲ以テ実貞ニ無欲ニテ吾身之直ハカリヲ法定ニテ修之^レ全体直ニ建立スヘシ⁴¹⁰」と述べられている。また、法定を修行する際には「体ハ前後左右^ニカタヨラス地^ニ不^レ居付^ニ又カルカラスシテ可^レ勤^レ之」と前後左右いずれの方向にも偏ることがなく、また居ついたり、軽々しい動作にならないようにこの形を修行することを説いている。

つまり、上記のように法定の稽古を行うことで身体の曲がりが矯正されるということであり、その歪みのない身体が当流において理想とされていると考えられる。そして、その身体の状態は「直ニ」というように、「真直ぐ」という意味を持つ語によって表現されているといえよう。

この身体を真直ぐにするということについて考察していきたい。長沼四郎左衛門国郷が著したとされる『直心影流目録口伝書』には次のような記述がみられる。

惣体ノ

目ハ目、口ハ口、耳ハ耳、鼻ハ鼻、手ハ手、足ハ足ト一体ニ氣ヲ満、敵トツリ合テ、其上ヲシメアリ、然時ハ自然ト敵ノ虚実見エルナリ

理歌ニ惣体ノベト教ヘシ、六根ノ其大本ハ氣海丹田トア附名ニテ、ホゾノ処ヘ氣ヲ盛レハ、惣体ハシマルモノ也、古ハ六所ノベト云テ、眼耳鼻舌身意ヲヒシト合せ、氣一ハイニ満ルナリ

◎惣体ヲシメルトテ、敵ヲシムルモノニナケレハ、我ヲシメテ一身堅固ニナル事也、
我ヲサヘ能正直ニスレハ、向ノ非ハ自然ト現レ、一毛モ我ヨリ行下ケレハ、其早キニ水ハ流也、其流カ負ノ事也⁴¹¹（下線部、読点筆者）

⁴¹⁰ 『兵法雑記』東京長沼正兵衛家蔵。

⁴¹¹ 『直心影流目録口伝書』写、鈴鹿家文書、全日本剣道連盟蔵。

この記述は「惣体ノズ」という習について述べられたものである⁴¹²。簡単に述べると、この習は自分の全身に気を満たし、引き締めるということであり、この時には自然と敵の虚実が見えるという。そして、特に注目すべきは、下線部の記述である。全身を引き締めるというのは、敵を締め付けることではなく、自身を締めて一身を堅固にすることであり、自身をよく「正直」にすれば、相手の非⁴¹³は自然と現れるということである。つまり、自身の身体を正しい状態にすることで、相手の弱点を察知することができると考えられていたということである。身体を正しく真直ぐな状態にすることが当流において相当に重要視されていたことが窺える。この記述においても「身体を真直ぐにすること」は理想的な身体を指すと捉えることができ、自身の身体を引き締めることで理想とする正しく真直ぐな状態になると解することができる。この「惣体ノズ」という習は理想的な身体の形成に必要であると考えられる。

また、この習は「修行ノ工夫云、理歌ニ惣体ヲ満ルト云ハ、両眼ト、良背敵応、気海丹田 伝曰、惣体ヲズルモ、三ヶ所ヲ本ニ立ルトモ、修行体也⁴¹⁴」（読点筆者）と「惣体ヲ満ル」とも称されるようであり、「両眼」「良背」「気海丹田」をその拠り所とするように説かれている。このうち、「良背」とは何を意味しているのであろうか。『兵法雑記』には、次のような図がみられる。

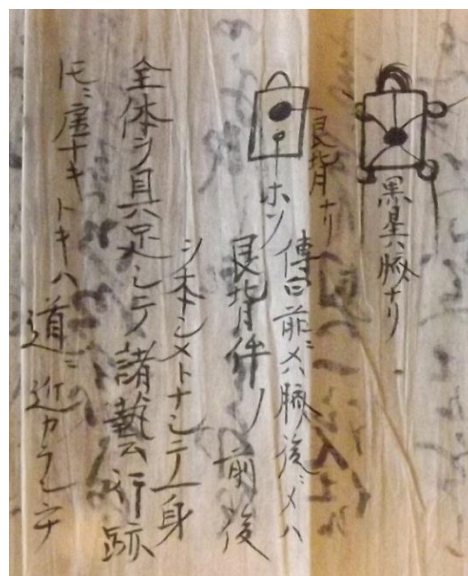


図 2 - 10 身体に関する図

⁴¹² この習は『兵法雑記』にも述べられており、直心正統流から継承された習である。

⁴¹³ 「非」とは、当流における去るべき心情のことである。これについては次節において詳述する。

⁴¹⁴ 『兵法雑記』東京長沼正兵衛家蔵。

この図を説明した記述が次の一文である。

伝曰、前ニ^ニハ臍、後ニ^ニハ良背、件ノ前後ヲ本シメトナシテ、一身全体ヲ具足シテ、
諸芸行跡トモ^ニ虚ナキトキハ、道ニ近カラン乎⁴¹⁵（読点筆者）

ここでは先に述べられている通り、身体全体を備えることを説いているが、その要所とされる「臍」と「良背」の位置が図に示されている。図から良背を解釈すると、背中のある一点を指していると考えられる。「良背」とは上記の図から背中のことを指していると考えられる。

当流では法定を行うことによって、身体を「直」「正直」という理想的な状態にすることが求められており、これには「臍」「背中」「両眼」を要点として身体全体を引き締める「惣体ノ^ニ」という習が深く関わっていると考えられる。

本節では初学における法定の修行について考察してきた。この段階の修行で求められることは二つある。

一つ目は太刀筋の矯正である。『兵法雑記』にみられる「竪一文字」「横一文字」という習は正しい太刀筋を意味しており、この習に沿って十文字の理に適うように太刀筋を矯正することが求められている。この正しい太刀筋については『兵法雑記』の図から 8 通りの斬り方に突きを加えた 9 通りであることが確認できる。そして法定にはこの太刀筋が動作として多くみられる。法定の動作の記述をみると、「真直ぐ」であることを意味する語が見られ、真直ぐ打つ、応じる、振りかぶるなどの動作が多くなされている。また、「十文字に応じる」という表現が多くみられるが、これは相手の太刀の軌道と直角に交差するように太刀を振ることであると考えられる。法定の動作にはこのように正しい太刀筋が含まれており、法定を修練する中で自然と太刀筋が矯正されていくと考えられる。

二つ目は身体の矯正である。当流では法定の稽古により身体を正しく、真直ぐな状態にすることが求められている。そのために法定を前後左右どこにも片寄ることがないように修練するように説かれている。また、このような理想的な身体を形成するための手立てとして「惣体ノ^ニ」という習が挙げられている。「惣体ノ^ニ」は自分の全身に気を満たし、引き締める習である。この習により自身の身体を理想的な状態にすることで、相手の弱点を

⁴¹⁵ 『兵法雑記』東京長沼正兵衛家蔵。

察知することができると考えられていたようである。そのために「両眼」「良背」「気海丹田」の３点をその拠り所とするように説かれている。

前節で述べた通り、初学における法定の修行は、身体面に重点が置かれているといえる。

第四節 中学の修行

本節においては、中学の段階における『稽古法定序并理歌』の「然而後心行号心ノロクヲ貞ナリ」という記述の部分について考察を行う。この記述にみられる「心行」とは精神面を中心とした修行である。先述の通り、この語は『兵法雑記』にもみられ、「中学非切仕懸入_ニ心行_ニ」⁴¹⁶と、具体例として「非切」「仕懸」の二つが挙げられている。ここでは、この二つについて具体的に検討していくこととしたい。

第一項 非切

1. 非切について

まず、「心行」の一つ目として「非切」についてみていきたい。伝系にみられる諸流派の伝書の中で最初にこの語が確認できるのは、直心流の『軍法非切書并入唐目録』である。まずは以下の記述からみておきたい。

木刀ヲ取揚ルト、一心木刀エ移リ、早打心ニ成ル、中々其一心ニテ不得正利、勝負勝身ハ一心ニ有リ、木刀ハ甲ト可申事^{ワザ}ニ勝負ハナシ、勝身ハ一心ニ有リ、直心ナル勝負天理ヲ清、過去現在未来一円相ト口伝之通り踏込可打、性ニ背キ不_レ正_レ本人間直心ナレトモ、智慧ノ湧ニ従ヒ一心不_レ成_レ清_ク、濁ル心ヲ含ミ、一心外ヨリ不見誠ヲ尽シ、正シクスト雖モ、一心ニハ色々サキ穢ラハ敷キ非ヲ密シ、濁心計リ有リ、剣術ハ本ヨリ何レノ諸芸其外常々取扱フ事モ、誠ナクテハ正利ヲ不得、天地ニ孕マレタル人間性ニ背ケハ、無_ニ利運利根抄少智ノ人ハ彌仁義礼智ノ四徳ヲ考ヘ、用ユヘキ事ト雖モ、如此人ニ限り、利根時ノ威勢權威ヲ以テ取行ヒ、四徳ニ闕ル事多キ也、常々吾身ヲ省ミ一心ヲ非切スヘシ⁴¹⁷（読点筆者）

この記述においては剣術の勝負はただ一心によって決まるものであるとし、自身の心を直心という理想的な状態にすることが大切であり、非は汚らしい心情として記されている。そのために自身を省み、「一心を非切しろ」という。また、同書には「業モ、両眼モ、手足モ、只一心ニ有リ、依之、無敵無我、己カ非ヲ第一切執行ス⁴¹⁸」（下線部、読点筆者）

⁴¹⁶ 『兵法雑記』東京長沼正兵衛家蔵。

⁴¹⁷ 『軍法非切書并入唐目録』写、寛文3年、熊本県立図書館蔵。

⁴¹⁸ 『軍法非切書并入唐目録』写、寛文3年、熊本県立図書館蔵。

という記述もみられ、この汚らわしい心情とされる「非」を「切る」ことが求められている。

さらに本書において「非切」という語が述べられている記述をみると、「其氣質之稟タル性ヲ尽シ、理ヲ究メ、心ヲ正シ、己ヲ修メ、人ヲ治メ、身ヲタダシ、一心ヲ磋キ、道可知所ニヨリ、極意著明法一心無別法一心ヨリ、外ニ法ハナシ、誠ヲ以テ、一心ヲ顧ミ、非切可致事⁴¹⁹」「欲ハ我鬼、愚癡ハ畜生、勝負ハ修羅、天理仏法ヲ能々考エ、日々ニ我一心ト非切ス⁴²⁰」「太刀組ニ勝負ハナシ、勝身ハ皆心ニ有リ、一心治リタルヲ能々見考、一心之非切ヲ可致者也⁴²¹」「己ヲ己トセス、日ニ月ニ、己カ一心ヲ非切シ、自然ト本末先後ヲ知、明德ヨリ利運ヲ見出シ、直心流義ト立ル也⁴²²」「己カ非ヲ平生非切シ、心ト心ヲ仕相ス⁴²³」（すべて下線部、読点筆者）と全ての記述において、心に関連して用いられていることが窺える。

以上の点を踏まえると、「非切」とは理想的な心の状態に至るために、自身の心の中から「非」という心情を取り去ることであるといえよう。

この「非」の具体的な記述については、『兵法雑記』に次のような説明がなされている。

十悪十非 ガマン ガシン トンヨク イカリ ウタガヒ マヨイ ヲソレ アヤブ
ミ アナズリ マンシン

此ノ十ヲ十悪ト云、伝云、十悪十非ニ_レ不_レ成_ヲ則十善也、十悪ニウバワレ子バ勝負明
カナリ

至_ニル_ト上手名人_ニ云ハ、件ノ十悪ニ離ル事ナリ、無我ノ本心ナレバ、邪念雑念悉ク滅
スト云々⁴²⁴（読点筆者）

この文では列記した 10 種類の心情を「十悪」または「十非」と呼称しており、具体的には「傲慢」「我心」「貪欲」「怒り」「疑い」「迷い」「恐れ」「危ぶみ」「侮り」「慢心」である。そしてこれらの感情に心を奪われなければ勝負は明らかであるといい、上手や名人という段階に達するにはこれらの感情を去ることが必要であるという。これらの心情が勝負に影響を及ぼすと考えられていたことが窺え、去るべき対象であったといえる。

419 『軍法非切書并入唐目録』写,寛文 3 年,熊本県立図書館蔵.

420 『軍法非切書并入唐目録』写,寛文 3 年,熊本県立図書館蔵.

421 『軍法非切書并入唐目録』写,寛文 3 年,熊本県立図書館蔵.

422 『軍法非切書并入唐目録』写,寛文 3 年,熊本県立図書館蔵.

423 『軍法非切書并入唐目録』写,寛文 3 年,熊本県立図書館蔵.

424 『兵法雑記』東京長沼正兵衛家蔵.

まず、非切を行う際には「ヒキリトハ、ケイコ修行ヲ、能ツトメ、非ヲ知ル時ゾ、非切ナリケリ⁴²⁵」（読点筆者）と述べられているように、自身の心の中に上記のような非の心情が存在することを認識する必要があると考えられる。つまり、去るべき対象をはっきりと自覚することが重要であるということである。

そして、その「非」の心情を「非ヲ改、木刀ニテ、ツブシヲ云⁴²⁶」（読点筆者）と形の中で木刀を振ることによって非を去っていたようである。この記述において「非切」が「非を切る」ではなく、「非を潰す」と述べられているのは、法定が木刀を用いた形であるためになされた表現上の違いであると思われるが、木刀を振ることによって非を去る、ということとは確かである。

法定において「非切」とは、心の中にある「非」という雑念を、木刀を振ることによって去る修行であったと考えられる。

2. 法定にみる非切

それでは具体的に非切が法定の中でどのように行われていたかみていくこととする。

△亦曰横三段ノ行アリ、端ノカ子、中ノカ子、奥ノカ子、此三段也
之ハ師太刀ヨリ八相ニテ出ルヲ切ルニ、仕方ノ左ノ方ヨリケサニキルヲ、端ノカ子ト云、次ニハ太刀ヲ直ニ天ヘン割、シンニ切レハ中ノカ子ト云、次ニハソレヨリ奥ヘヨセテ、直ニキレハ仕太刀ノ右ヲ肩先ヨリ、道具ヲ懸テ切ルヲ奥ノカ子ト云ナリ、伝云、法定ニテ非切之行如此三ツ習アリ、奥ノカ子ニテ非切ヲ受ルハ巧者也⁴²⁷（読点筆者）

法定には「横三段」という三つの斬り方があるという。まず、「師太刀」と記されているが、文脈よりこの語を解釈すると、これは「仕方」と同義で用いられていると考えられるため、「仕太刀」のことであると捉えられる。そして、この横三段の行は仕太刀が八相に構えて出てくるところを斬るとされている。仕太刀が八相に構えて打つのは、一本目「八相_発破」のときである。したがって、この横三段の行は一本目「八相_発破」において行われていることが確認できる。

この横三段の行においては、仕太刀の左側から袈裟懸けに斬ることを「端のかね」、太刀を真直ぐにして天辺を割り、中心を斬ることを「中のかね」、中のかねよりも奥によせて仕

⁴²⁵ 『兵法雑記』東京長沼正兵衛家蔵。

⁴²⁶ 『兵法雑記』東京長沼正兵衛家蔵。

⁴²⁷ 『兵法雑記』東京長沼正兵衛家蔵。

太刀の右側を肩先から斬ることを「奥のかね」とそれぞれ呼んでいる。これらは仕太刀を斬る、とされていることから打太刀が行っていることがわかる。そして「奥ノカ子ニテ非切ヲ受ルハ巧者也」と「奥のかね」で非切を受けるのが熟達した者であるという。つまり、実際にこの場面で非切を行っているのは仕太刀であり、打太刀はそれを受ける役割を担っていたと考えられる。非切は「八相発破」のはじめに行われる、八相に構えてからの打ちで仕太刀が行っていたと考えられる。しかし、記述からは二本目以降で非切が行われていたかを窺うことは出来ない。

法定の中では、仕太刀が「非切」を行っており、打太刀はそれを受ける役目を担っていたと考えられる。

第二項 仕懸

1. 仕懸について

次に『兵法雑記』において、「非切」と並んで心行の一つとして記されている「仕懸」についてみていくこととしたい。

『兵法雑記』では「仕懸」について次のように述べられている。

仕懸 註曰、口上極意ヲ以立合テ、勝負ヲ決スルニ、己ヨリ仕懸テ行フ云也
或ハ、相懸ニテ中程ニテ合スルコトモ有、或ハ責ルコトナク敵ヨリ懸リ来ルヲ、其俣ニテ乍レ居勝モアリ、畢竟勝負ヲ発スルノ言ナリ、亦云、修行ニハ心行ニ取入、及ニ目録ニ格位ノ則専ラ仕懸ヲ以糺ス虚実ヲ⁴²⁸（読点筆者）

この「仕懸」とは立合って勝負を決するとき、自ら仕掛けていくことをいう。また、自ら懸っていき、勝利を得るだけではなく、互いに掛かっていき、中心あたりで合わせることや、自ら攻めることなく敵より懸ってきたところをそのままいながら勝つこともあったようである。そして、つまるところ、「仕懸」とは勝負を発する語であり、この「仕懸」によって虚実を明らかにするという。記述全部を踏まえて解釈すると、「仕懸」とは、自ら仕掛けていくことで敵の虚実を察知し、打ち込む機会を見極めることであると考えられる。先述の通り、『兵法雑記』において仕懸が心行の一つに位置付けられていることを踏まえると、「仕懸」は相手との関係下で行われる精神面を中心とした機会を見極めるための駆引きであったと考えられる。

⁴²⁸ 『兵法雑記』東京長沼正兵衛家蔵。

2. 法定における仕懸

法定において仕懸を行う際には、「仕掛之次第口伝条々略スレ之ヲ法定ニモ仕懸アリ 三世ノ勝ニテ行習⁴²⁹」というように「三世」という習が関連しているようだ。これについて『兵法雑記』からみていくこととしたい。

△増補云三世習 仕太刀四ノ切組ヲ始メ構ヘタル所ヲ過去ト云也、諸ノ出歩ノ前ヲ号ニ過去ト云、此過去ヲ切ヲ本ヲ切ルト云也、次ニ仕太刀出歩ヲ現在ト号ス、フミ出タル所也、打太刀ヨリ此現ト出タル所ヲ打ヲ中ヲ切ルト云也、亦曰其次ハ未来ト云テ、打太刀ノ方ヘ行付ヲ引受テ打ヲ、末ヲ切ルトモ未来トモ云也、依レ功右三段ニ打太刀ヨリ先ヲ懸テキル也、依レ去初心ヲ出ル、本ヲ切レハ、ツカヘテ凶シ、出氣ヲユルシテ現在ヲ合テ誘ソ⁴³⁰（読点筆者）

この三世は打太刀の習であり、過去・現在・未来と分けられている。まず仕太刀が構え、足を出す前を「過去」と称し、ここに斬りかかることを「本を切る」という。次に仕太刀が足を出すところを「現在」と称し、ここを打つことを「中を切る」と称している。最後に「未来ト云テ、打太刀ノ方ヘ行付ヲ引受テ打ヲ、末ヲ切ルトモ未来トモ云也」とあるが、これまでの「過去」「現在」の記述を踏まえると、仕太刀が打太刀の方へ向かって来る時を「未来」と称し、そこで仕太刀を引き出し、打つことを「末を切る」と称すると考えられる。そして、これらはすべて打太刀から先を懸けて打つ修練である。また、相手の構えたところを打つことは悪く、相手と出足を合せ、相手を誘うように説いている。法定の修行において「仕懸」は打太刀が行っていたと考えられる。しかし、先にみた記述に「仕掛之次第口伝条々略スレ之ヲ法定ニモ仕懸アリ」とあり、仕懸は法定以外においても行われていた修行であったようである。ここで明らかになったのは法定における場合のみであり、それ以外の場合も打太刀が行っていたかどうかは不明である。

本節においては中学の段階における法定の修行として、「心行」と呼ばれる精神面を中心とした修行の考察を行ってきた。第二節において触れた通り、この「心行」という語は『稽古法定序并理歌』にみることができ、「然而後心行号心ノロクヲ貞ナリ」と「心が正しい状態であるかどうかを確認する」という意味の修行であったと考えられる。

また、『兵法雑記』の中で、具体的な心行の例として「非切」「仕懸」の二つが挙げら

⁴²⁹ 『兵法雑記』東京長沼正兵衛家蔵.

⁴³⁰ 『兵法雑記』東京長沼正兵衛家蔵.

れている。これら二つの心行について『兵法雑記』における記述を中心に考察を行った。

まず「非切」という語自体は直心流の神谷伝心斎が著した『軍法非切書并入唐目録』から確認することができる。『軍法非切書并入唐目録』においては、自身の心を「直心」という理想的な状態にするために、心の中から去るべき心情である「非」を去ることが求められている。「非」については『兵法雑記』において10種類の感情が具体的に述べられており、これらの心情は勝負に影響を及ぼすと考えられていたようである。

そして法定においては、その「非」と呼ばれる雑念を、木刀を振ることによって去ることが求められていたようである。また、「横三段の行」という打太刀の斬り方を述べた記述から、法定の中では一本目「八相発破」の中で行われていたことが確認できる。その際、仕太刀が非切を行い、打太刀は非切を受ける役割であったと考えられる。

「仕懸」については、相手との関係下で行われる、精神面を中心とした打つべき機会を見極めるための駆引きであったと考えられる。法定における仕懸は「三世」という打太刀の習が関連しており、打太刀から先を懸けて打つように説かれている。法定の修練において、仕懸は打太刀が行う修行であったと捉えられる。しかし、仕懸は法定の修練以外においても行われていたと考えられ、法定以外の場合にどのように修練されていたかは不明である。

結節

本章においては、直心影流の基本の形とされる法定について考察を進めてきた。

法定は4本の形から構成されており、この4本の形を「法定」と称しはじめたのは直心正統流からである。したがって直心正統流に法定の成立をみることができる。本章の第二節以降は山田平左衛門光徳が著した直心正統流の伝書『兵法雑記』を中心に、初期の法定の修行過程について考察を行った。ここでは、その修行過程について、直心正統流全体の修行過程も踏まえつつ、再度述べておきたい。

以下の図 2-7 が全体の修行過程及び法定の修行過程を示したものである。

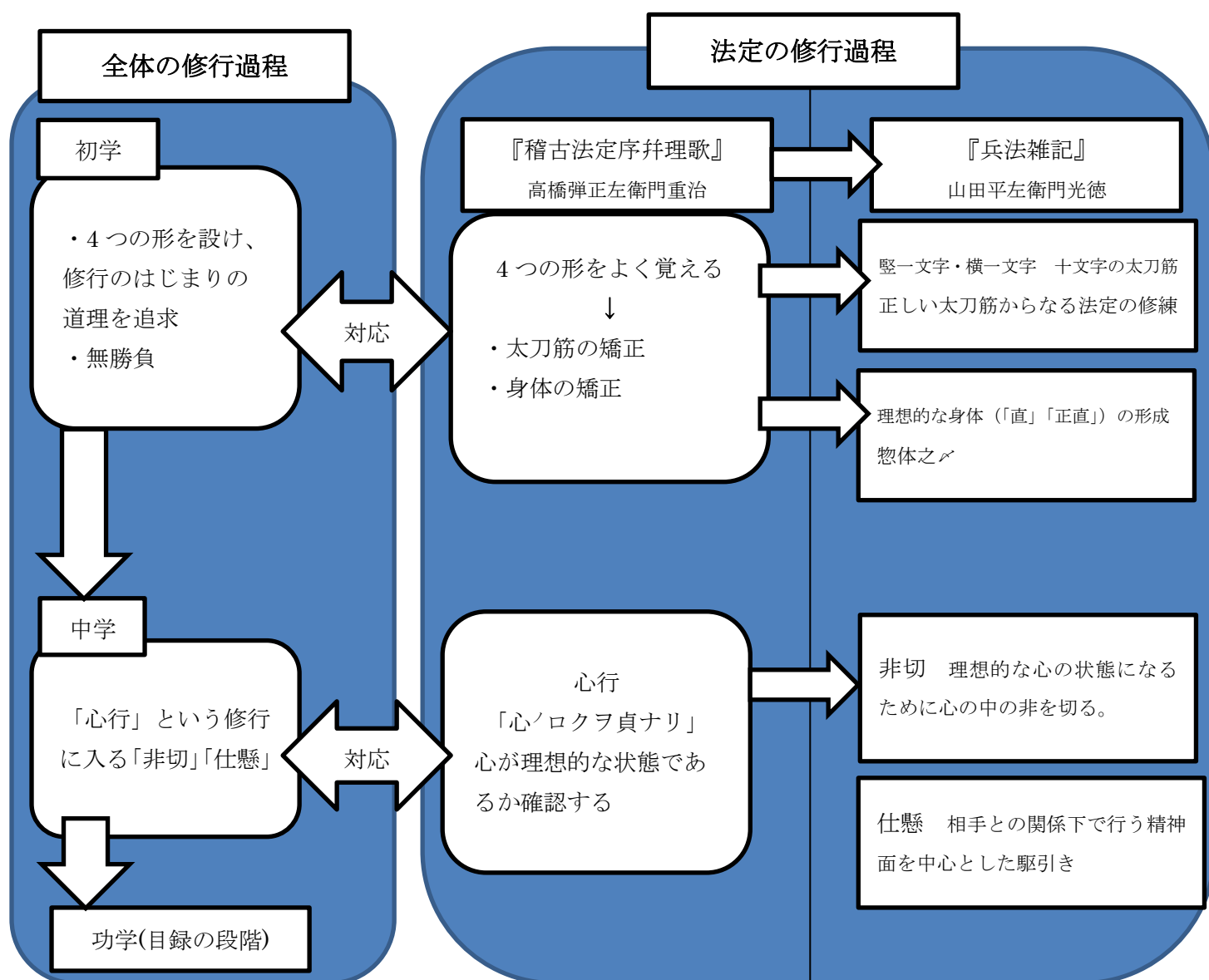


図 2-7 全体の修行過程と法定の修行過程

以上の図に基づき、全体の修行過程と法定の修行を照合させながら述べていきたい。
全体の修行過程については『兵法雑記』に2箇所ほど記述を確認することができた。ここでは、3段階に分けて記される修行過程（初学・中学・功学）の記述に注目する。法定の修行過程については『稽古法定序并理歌』に記されており、その詳細な修行内容は『兵法雑記』にみることができるため、これら二つの書を中心に述べておきたい。

＜初学の段階＞

全体の修行過程における初学の段階では法定を修練することが説かれている。この段階で注目すべきは、勝負を行うことを禁止するという点である。これは初心の頃から勝負に重きを置いて、氣勢を張り、木刀を強く打つことなどに励んでしまうと、その結果、形や所作が崩れ、修行が混乱してしまうためである。この勝負の禁止は高橋弾正左衛門重治が定めたということである。

この初学の段階は法定の修行過程のうち、前半部分に対応している。『稽古法定序并理歌』における法定修行の第一段階は「四ツノ形ヲ仕太刀打太刀共ニ能覚体ノ曲ヲ直シ太刀ノ巡逆豎一横一ノ矩ヲ真直ニイタシ体ノ前後左右ニカタヨラス地ニ不_レ居付_レ又カルカラスシテ可_レ勤_レ之」と記されており、まず、四つの形を打太刀・仕太刀ともによく覚えるように説かれている。そして身体と太刀筋を矯正していくことが求められている。ここでは太刀筋・身体の矯正に専念すると考えられるため、勝負という概念が度外視されていると考えてよい。

この太刀筋・身体については『兵法雑記』において具体的に説かれている。まず、太刀筋に関する習として「豎一文字」「横一文字」が説かれており、太刀をどのように振ったとしても十文字の理に適わなければならないという。この十文字というのは8通りの太刀の軌道を指しており、この八つに突きを加えて太刀の軌道は全てで9通りであるという。そして『兵法雑記』における法定の動作の記述には、「スグニ」「真スグニ」「十文字ニ応ス」などの語が散見され、法定の動作が正しい太刀筋によって形成されていることがわかる。この法定を修練することで自然と太刀筋が矯正されていくと考えられる。

身体の矯正については、『稽古法定序并理歌』において、法定をよく覚え、身体の曲がりを直すように説かれている。この法定の修練によって形成される身体は『兵法雑記』において「直」「正直」などと表現されている。また、理想的な身体を形成するための「惣体之メ」という習の記述には、自身の身体を正しく、真直ぐな状態にすることで、自然と相手の虚実を察知できると述べられており、「臍」「背中」「眼」の3箇所を要点として自身の身体を気でみだし、引き締めることが求められている。このように正しく真直ぐな身体を形成するために、『稽古法定序并理歌』においては、前後左右いずれの方

向にも片寄ることがなく、居ついたり、動作が軽々しいものにならないように行えと法定を修行する際の留意点を挙げている。

＜中学の段階＞

全体の修行過程における中学の段階では、「心行」という修行に入ることが求められており、その具体例として「非切」「仕懸」という二つが挙げられている。法定の修行段階においても『稽古法定序并理歌』の中に「然而後心行号心ノロクヲ貞ナリ」という記述がみられることから、「心行」の語が用いられており、全体の修行過程と対応していることが窺える。『稽古法定序并理歌』における「心行」は「心が理想的な状態であるかどうか確認する」といった意味であると考えられ、法定の修練により、自身の心を理想的な状態に整えていたようである。

『兵法雑記』において心行として記されている非切と仕懸に注目すると、非切とは理想的な心の状態（直心）に至るために、心の中の去るべき雑念である「非」を取り去る修行であり、法定の中では木刀を振ることによって非を去っていたと考えられる。この非については、「傲慢」「我心」「貪欲」「怒り」「疑い」「迷い」「恐れ」「危ぶみ」「侮り」「慢心」という具体的な10種類の心情が挙げられており、これらを去ることが勝負に影響を及ぼすと考えられていた。また、『兵法雑記』の記述から、法定では、一本目「八相発破」においてこの修行が行われていたようである。その際、打太刀は非切を受ける役割を務め、仕太刀は八相から打ち込むことにより非切を行っていたことが窺える。

仕懸は、自ら仕掛けていくことで敵の虚実を察知し、打ち込む機会を見極めることであり、精神面を中心とする駆引きのことを指していると考えられる。そして法定においては「三世」という習のもと、打太刀が仕懸を行っていたと考えられる。

また、非切と仕懸を『稽古法定序并理歌』における心行の内容と照らし合わせてみると、仕懸についてはその内容に違いがあるといえる。『稽古法定序并理歌』における心行は、自身の心を有るべき状態に昇華させる修行を指していると考えられる。したがって非切は『稽古法定序并理歌』における心行と同義であると考えられ、非切は『稽古法定序并理歌』の頃から行われており、そのまま『兵法雑記』にまで継承されていったと推察できる。一方、仕懸は相手との関係下においてなされる修行であるため、『稽古法定序并理歌』において述べられる心行ではないと考えられる。仕懸は『稽古法定序并理歌』の頃において、心行としてみなされておらず、流儀が山田平左衛門光徳に継承されてから、心行の一つに位置付けられるようになったといえよう。

また非切について、非を去ることが勝負に好影響を及ぼすと述べられていること、そし

て仕懸という相手との精神的な駆引きが行われていることから、この中学の段階では、勝負をすることが解禁されていると考えてよいだろう。

以上、法定の修行段階としては、初学の段階において、太刀筋・身体の矯正という目的のもと稽古され、中学の段階に進むと、形の修練の中で自身の心を理想的な状態に高めていく修練ならびに相手との関係下における精神的な駆け引きを行うという修行段階があったと考えられる。

第 三 章

十之形としない打ち込み稽古

第一節 十之形

本章においては、「十之形としない打ち込み稽古」と題し、直心影流のしない打ち込み稽古の基本的技術とされる形である「十之形」と、実際のしない打ち込み稽古の特徴ならびにその様相について論じていくこととする。

本節では、その手はじめとして、十之形を考察の対象とし、その概要と特徴について論じていくこととしたい。

第一章で述べた通り、直心影流の伝承において、十之形は真新陰流・小笠原源信斎が創始した形であるとされている。その経緯としては、小笠原源信斎が中国に渡り、張良の戈の秘術「八寸の延鉄」を得て帰朝後、自身の剣術と融合して十之形を考案したという伝承が存在している。

しかし、実際に十之形の技法名は、真新陰流『真之心陰兵法目録』、直心流『軍法非切書并入唐目録』（寛文3年、1663）に確認することができず、直心正統流『直心正統流兵法目録』（延宝7年、1679⁴³¹）『兵法雜記』（宝永年間⁴³²、1704 - 1711）には14本目「圓連_{刀連}体連」の名称のみがみられる。管見の限り、関係史料においてはじめて十之形14本が出揃うのは、『直心影流目録口伝書』（宝暦14年、1764）である。そのため、この形の考察は『直心影流目録口伝書』以降の伝書によって行うことを予め断っておきたい。

第一項 十之形について

本項でははじめに十之形の概要として名称の由来ならびに修練の用具について把握していくこととしたい。

1. 十之形の名称

まず、十之形の名称について考察していくこととしたい。この形は「十之形」または「韜之形」という表記がなされる。はじめにこの形の初出である『直心影流目録口伝書』の記述からみていくこととしたい。

⁴³¹ この年号は、高橋弾正左衛門重治が山田平左衛門光徳に与えたときのものである。この後、元禄7年（1694）に光徳から山田甚之助に与えたことを示す奥書がみられる。

⁴³² 『兵法雜記』については詳細な成立年代は不明であるが、巻末に宝永5年（1708）、光徳が70歳の時に、『直心正統流免状裏書』を国郷に伝授したことが記されているため、この頃に成立したと考えられる。ここでは宝永年間ということにしておきたい。

十ノ形十干十二支ヲ表シテ左右十二アリ法定ノ形ヲクツシテシナヘノ形ト云⁴³³

この記述によれば、十之形は十干⁴³⁴・十二支⁴³⁵を表すもので、左右あわせて 12 本あるという。14 本から成る十之形がここで 12 本と述べられている理由について、同書では「是ヨリ十形ノ名也平日勤ル形十四本ナレトモ鉄破ノ四本ヲ進退ニテ二本取ユヘ十二本ノ形トナル即チ十二支ニ表スルナリ十二支ハ十干ノ枚ナル故本ノ十干ノ字ヲ用テ十ノ形ト云也⁴³⁶」と述べられている。「鉄破_{進退}」は形としては 4 本であるが、「進」と「退」の二つの場面における修練であるため、実質的には 2 本であるということのようだ。十之形の名称をこのように説明する記述は『直心影流秘書一』『直心影流秘書二』にみることができる⁴³⁷。

次に、この形を「韜之形」と表記する伝書についてみておきたい。藤川派の斎藤明信『直心影流剣術極意図解』の目次においては「^{シナヒ}韜之形⁴³⁸」と、山田次朗吉『鹿島神伝直心影流』においては「^{フクロシナイ}韜之形⁴³⁹」と記されている。また、『直心影流伝書集』にはこの形の解説を記した箇所があり、そこには「袋韜之形⁴⁴⁰」と記されている。これらの書は、すべて明治以降に著されたものであり、明治以降に「韜」の文字が多く用いられたと解して良いであろう。さらに、男谷派の人物である石垣辰雄の著書『鹿島神伝直心影流極意』には「是より韜の形也是を十の形と云、天地十に備るそれ故陰陽こもりつかふ形故数々不拘十の形と云也⁴⁴¹」と記されている。この記述の意味を解釈すると、「韜の形」は本来の意味からすれば、「十之形」という表記が正しい、と捉えることができる。

433 『直心影流目録口伝書』^写、鈴鹿家文書、全日本剣道連盟蔵。

434 「十干」とは、甲・乙・丙・丁・戊・己・庚・辛・壬・癸の総称である（『旺文社 古語辞典』第十版、旺文社 p.647,2008,参照）。

435 「十二支」とは陰陽道で、子・丑・寅・卯・辰・巳・午・未・申・酉・戌・亥の称である（『旺文社 古語辞典』第十版、旺文社 p.660,2008,参照）。

436 『直心影流目録口伝書』^写、鈴鹿家文書、全日本剣道連盟蔵。

437 「右撓ノ形都合十四本ナレトモ鉄破進退四本カ二本ニナル故ニ此形ハ十二本也ト知ヘシ此十二本ハ十二支ニ象リタル也サテ十二支ト云モノニハ十干ヲ配スルモノ故ニ此形ヲサシテ十ノ形ト称ス必シモ刀ノ形ト云事ニハ非ス」（『直心影流秘書一』^写、鈴鹿家文書、全日本剣道連盟蔵.）、「曰十幹ト云事ヨリ出タ物ナリ全体十二支ノ形ト云事也云ニクヒカラ十ト云タモノナリシカシナガラ十幹ト云ハ幹ハ本ノ事也枝ハ支ノ事也故ニ十ト云ヘハ枝ハソノ内ニコモル也是カ正説ナリ段々説モアリ左ニ記ス」（『直心影流秘書二』^写、鈴鹿家文書、全日本剣道連盟蔵.）と記されている。また『直心影流秘書二』においては名称の由来について別伝も載せているが、上記の説が正しいと述べている。

438 斎藤明信『直心影流剣道極意教授図解』井口魁真書楼、目次、1901。

439 山田次朗吉『鹿島神伝直心影流』一橋剣友会、p.198,1927。

440 『直心影流伝書集』^写、鈴鹿家文書、全日本剣道連盟蔵。

441 石垣辰雄『鹿島神伝直心影流極意』直心影流振興会、p.126,1935。

この形は、初出である『直心影流目録口伝書』の頃から「十之形」と表記されてきたが、後世に至って「韜之形」という表記がなされるようになったと解釈できる。

2. 十之形の用具

前にも触れた通り、十之形はしない打ち込み稽古の基本的技術の形である。それ故に、しないを用いて形を行う。ここでは、そのしないについて把握しておくこととしたい。

十之形の修練で用いるしないは、袋しないである。山田次朗吉『鹿島神伝直心影流』によれば、しないの全長は3尺3寸で、柄の長さが9寸である。したがって、刀身にあたる部分は2尺4寸である。また、しないの先から被せた革の袋は1尺6寸の長さであるという。そして袋の部分と柄を結ぶ弦の長さが8寸となっている。

以下にその図を掲げておきたい。

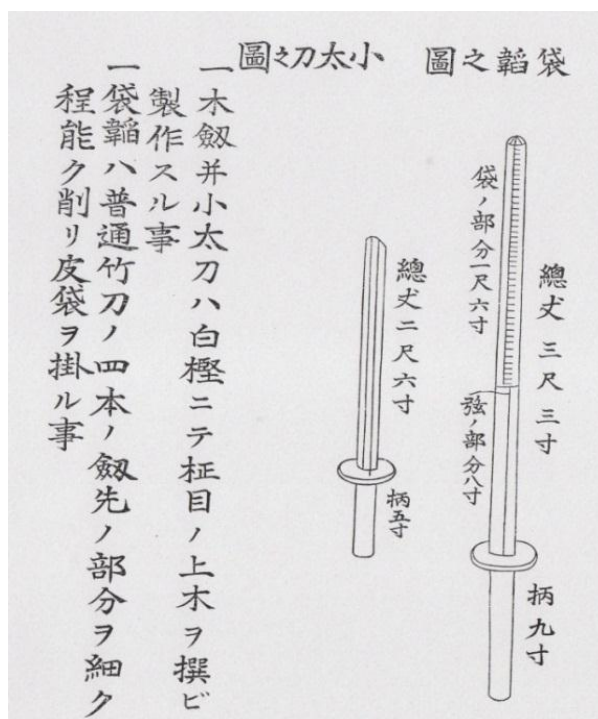


図3-1 『鹿島神伝直心影流』にみられる袋しない（右）

また、斎藤明信『直心影流剣道極意教授図解』にも袋しないについて記されており、全長が3尺3寸5分、柄9寸5分と記されている⁴⁴²。したがって刀身は2尺4寸である。これについても以下に図示しておきたい。

⁴⁴² 斎藤明信『直心影流剣道極意教授図解』井口魁真書楼,p.134,1901,参照。

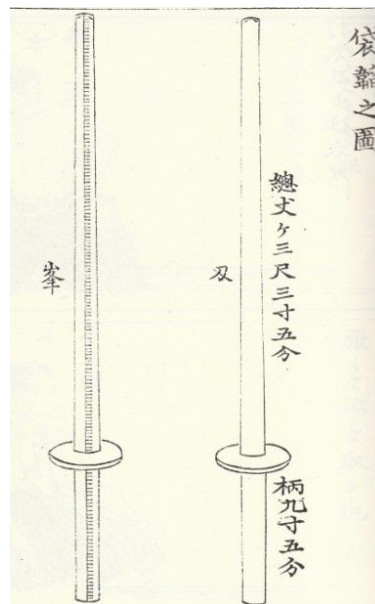


図 3-2 『直心影流剣道極意教授図解』にみられる袋しない

この図においては、革袋の長さについて記されておらず、さらに、弦が記されていない。この図を見る限り、しないの全長にわたって革袋がかぶせられているとみてとれ、前掲の山田次朗吉『鹿島神伝直心影流』に記されている袋しないとは形態が異なっていると推測できる。

袋しないの長さが異なることについては先に触れたが、他の派ではどうであろうか。『長沼国郷先生小伝』においては「国郷亦韜刀ヲ改造シ、竹刀ヲ製ス、而シテ其長サ、人々帶ブル所ノ剣長ニ準ジ概ネ三尺四寸ヲ以テ定規トス⁴⁴³」と、国郷が 3 尺 4 寸を定尺としたとされている。一方、男谷派の石垣安造はしないの長さは 3 尺 3 寸であると言及している⁴⁴⁴。

十之形に用いるしないについては、長さについて諸説あるようだが、おおよそ 3 尺 3 寸から 3 尺 4 寸の長さであったと考えて良い。

⁴⁴³ 『長沼国郷先生小伝』（渡辺一郎編『武道伝書聚英 第十二集』所収）, 宇都宮大学教育学部, p.45, 1990.

⁴⁴⁴ 石垣安造『直心影流極意伝開』島津書房, p.301, 2001. 参照.

第二項 十之形の特徴

1. 十之形の構成

本項では、十之形の特徴について論じる。はじめに十之形 14 本の構成について考察を行う。十之形の構成は、直心影流の形の中でも特異である。それ故に、構成自体が十之形の大きな特徴になっているともいえる。はじめに、十之形全体の構成について把握し、次にその特徴について考察していくこととしたい。

(1) 十之形 14 本の構成

前述の通り、十之形は 14 本から成る。ここではまず 1 本目から技法名を見て、その構成を俯瞰していくこととする。以下の表 3-1 が十之形の構成を表にしたものである。

表 3-1 十之形の構成

形名	龍尾		面影		鉄破 _{進退}				松風		早船		曲尺	圓連 _{刀連体連}
	左	右	左	右					左	右	左	右		
本目	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14

上の表から、十之形の 14 本は三つの種類に分類することができる。

まず、「龍尾」「面影」「松風」「早船」はそれぞれ「左」「右」二つの形が存在しており、それらが対になっているようである。つまり 1 本目「龍尾_左」と 2 本目「龍尾_右」が対応していると考えられ、これら二つの形をもって「龍尾」の形が成立しているということである。同様に 3 本目と 4 本目、9 本目と 10 本目、11 本目と 12 本目がそれぞれ対応していると捉えられる。

次に「鉄破_{進退}」は、5 本目、6 本目、7 本目、8 本目の 4 本によって構成されている。さらにこの 4 本の形については、「左」「右」などの語によって区別されておらず、すべて「鉄破_{進退}」と呼称するようである。

そして 13 本目「曲尺」と 14 本目「圓連_{刀連体連}」は 1 本の形として独立しており、対になっている形は存在しないようである。

以上のように、十之形 14 本は①「左」「右」で対になっている形（「龍尾」「面影」「松風」「早船」）、②4 本の形をもって構成される形（「鉄破_{進退}」）、③1 本で独立して構成される形（「曲尺」「圓連_{刀連体連}」）、の三つの種類に分類することができる。

(2) 対になっている形の特徴

次に先に分類した三つの種類のうち、「左」「右」で対になっている形について検討を行う。前に述べてきたように、この種類には「龍尾」(1・2 本目)、「面影」(3・4 本目)、「松風」(9・10 本目) 早船(11・12 本目)の形が含まれる。

これらの形の動作が「左」と「右」でいかに異なっているのか考察をしていく。史料は十之形の動作が写真付きで最も詳細に記されている、山田次朗吉『鹿島神伝直心影流』を基とし、記述ならびに写真から解釈を行った。

はじめに1・2 本目「龍尾」の形についてみていく。次の表 3-2 が、「龍尾_左」と「龍尾_右」の動作を比較したものである。なお、下線部は同様の動作を、太字は同様の動作でありながら「左」と「右」が反対になっている部分を示している。

表 3-2 「龍尾_左」と「龍尾_右」の比較

通し 番号	龍尾 左 (1 本目)		龍尾 右 (2 本目)	
	打太刀	仕太刀	打太刀	仕太刀
1	<u>左斜の構え</u>	<u>左斜の構え</u>	<u>右斜の構え</u>	<u>右斜の構え</u>
2	<u>左足を踏み込み上段</u>	<u>左足を踏み込み上段</u>	<u>右足を踏み込み上段</u>	<u>右足を踏み込み上段</u>
3	<u>右足を踏み込み左面を打つ</u>	<u>右足を踏み込み打太刀の左面打ちを止め、切り返す</u>	<u>左足を踏み込み右面を打つ</u>	<u>左足を踏み込み打太刀の右面打ちを止め、切り返す</u>
4	<u>右足を引くと共に仕太刀の右面打ちを止める</u>	<u>切り返して、左足を踏み込み右面を打つ</u>	<u>左足を引くと共に仕太刀の左面打ちを止める</u>	<u>切り返して、右足を踏み込み左面を打つ</u>
5	<u>左足を引き、左斜の構え</u>	<u>右足を踏み込み正上段</u>	<u>右足を引き、右斜の構え</u>	<u>左足を踏み込み正上段</u>
6	<u>左足を出し右足に揃えと</u> <u>共に右足を打つ</u>	<u>右足を左足まで引き揃え直立上段の構え</u>	<u>右足を出し左足に揃えと</u> <u>共に左足を打つ</u>	<u>左足を右足まで引き揃え直立上段の構え</u>
7	<u>剣先を返し、左斜の構え</u>	<u>そのまま直立上段</u>	<u>剣先を返し、左斜の構え</u>	<u>そのまま直立上段</u>
8	<u>左足を踏み出すとともに左手を切り上げる</u>	<u>打太刀の剣を打ち落とす</u>	<u>左足を踏み出すとともに左手を切り上げる</u>	<u>打太刀の剣を打ち落とす</u>
9	<u>左斜の構え</u>	<u>打ち落とした姿勢を保持</u>	<u>左斜の構え</u>	<u>打ち落とした姿勢を保持</u>
10	<u>右足を踏み込むと共に左小手を打つ</u>	<u>小手打を打ち落としその氣勢のまま十分に後方へ飛び正上段に構える</u>	<u>右足を踏み込むと共に左小手を打つ</u>	<u>小手打を打ち落としその氣勢のまま十分に後方へ飛び正上段に構える</u>
11	<u>精眼</u>	<u>精眼</u>	<u>精眼</u>	<u>精眼</u>

上記の表から分かるように、通し番号 7 以降である後半の動作は「龍尾_左」「龍尾_右」ともに全く同様であるが、通し番号 1 から 6 までの動作に注目すると、構えや踏み込む足、打つ部位などが左右反対になっている。したがって、1 から 6 までの動作は左右対称になっているといえる。

次に 3 本目「面影_左」と 4 本目「面影_右」を比較してみたい。次の表 3-3 が「面影_左」と「面影_右」の動作を列記したものである。なお、表記方法は「龍尾」と同様である。

表 3-3 「面影_左」と「面影_右」の比較

通し番号	面影 左 (3 本目)		面影 右 (4 本目)	
	打太刀	仕太刀	打太刀	仕太刀
1	左斜の構え	左斜の構え	右斜の構え	右斜の構え
2	左足を踏み出し正上段	左足を踏み出し正上段	右足を踏み出し正上段	右足を踏み出し正上段
3	左足を引き正面を打つ	右足を踏み込み正面を打つ	右足を引き正面裏を打つ	左足を踏み込み正面裏を打つ
4	左足を引き、左斜の構え	右足を踏み込み正上段	裏より誘い、打ち返す	誘いに応じ上段に構
5	右足を左足に踏み揃えると共に左足を打つ	左足を右足まで引き付け直立上段の構え	正面打ちを止める	正面を打つ
6	剣先を返し、左斜の構え	そのまま直立上段	左手に切りこみ、精眼に付ける	後方へ充分に飛び抜くと共に上段に冠る
7	左足を踏み出すとともに左手を切り上げる	打太刀の剣を打ち落とす	精眼	精眼
8	左斜の構え	打ち落とした姿勢を保持		
9	右足を踏み込むと共に左小手を打つ	小手打を打ち落としその氣勢のまま十分に後方へ飛び正上段に構える		
10	精眼	精眼		

「面影_左」と「面影_右」において共通する箇所は少ない。通し番号 1 から 3 において同様の動作が左右対称に行われ、その後は全く異なる動作となっている。この中で特に注目しておきたいのは「面影_左」では正面打ちを行うのに対し、「面影_右」で正面裏を打つ点（通し

番号 3) である。つまり相互に正面を打ち、しないが交差した時、「面影_左」では相手のしないが自身のしないの左側に位置し、「面影_右」では相手のしないが右側に位置するようになるということである。その後、「面影_左」では打太刀は左斜に構え直すが、「面影_右」では打太刀が裏から誘うという動作を行っている。そのため、その後の動作が全く違うものとなり、それに応じる仕太刀の動作も必然的に変化すると考えられる。「面影」では相互の正面打ちの後、しないの交差位置によって変わる打太刀の動作に対応する修練であると考えられる。

次に 9 本目「松風_左」・10 本目「松風_右」の動作を比較する。

表 3-4 「松風_左」と「松風_右」の比較

通し 番号	松風 左 (9 本目)		松風 右 (10 本目)	
	打太刀	仕太刀	打太刀	仕太刀
1	右向単身の円快の構え	直立上段	右向単身の円快の構え	直立上段
2	円快の構え	上段のまま <u>右左右</u> と踏み出す	円快の構え	上段のまま <u>左右左</u> と踏み出す
3	円快の構え	打太刀を窺いつつ、油断なく静かに下段に下す	円快の構え	打太刀を窺いつつ、油断なく静かに下段に下す
4	円快の構え	左斜の構え	円快の構え	右斜の構え
5	円快の構えを回転し左足を右足に引き付け、右足を引きながら正面裏打ち	左足を踏み込み、正面裏打ち	円快の構えを回転し右足を出し左足に揃え、左足を引きながら正面打ち	右足を踏み込み、正面打ち
6	剣先を廻し左斜の構え	右足を踏み込み上段に冠る	剣先を廻し右斜の構え	左足を踏み込み上段に冠る
7	左足を右足に揃えながら右足を打つ	右足を引き、直立上段	右足を左足に揃えながら左足を打つ	左足を引き、直立上段
8	剣を左斜めに返す	直立上段のまま	剣を左斜めに返す	直立上段のまま
9	左斜から仕太刀の左手を切り上げる	打太刀の打ち上げる剣を打ち落とす	左斜から仕太刀の左手を切り上げる	打太刀の打ち上げる剣を打ち落とす
10	打ち落とされ、直立の左斜の構え	打ち落としたままの姿勢	打ち落とされ、直立の左斜の構え	打ち落としたままの姿勢
11	左斜めの構えから左手を打ち精眼に付ける	打太刀の剣を打ち落とし左足を引くと共に後方に飛抜く	左斜めの構えから左手を打ち精眼に付ける	打太刀の剣を打ち落とし左足を引くと共に後方に飛抜く
12	精眼	精眼	精眼	精眼

「松風_左」と「松風_右」は、ほぼ同じ動作で構成されている。左右対称の動作がみられるのは通し番号 1 から 7 までである。打太刀は、はじめの円快の構えは「松風_左」「松風_右」ともに右向の単身であるが、相互に正面打ちを行う際（通し番号 5）の、円快の構えから正面打ちに移行する動作が異なっていることが分かる。そして、相互の正面打ちを行うが、「面影」同様、「松風_左」と「松風_右」でしないの交差位置が左右逆となる。その後、打太刀は「松風_左」においては左斜、「松風_右」においては右斜の構え、というように左右対称の構えをとっている。それに従い、仕太刀は踏み込む足を変えていることが窺える。「松風」においても相互の正面打ちにおける、しないの交差位置によって動作が変化していると考えられる。

最後に 11 本目「早船_左」・12 本目の「早船_右」を比較したい。

表 3-5 「早船_左」と「早船_右」の比較

通し 番号	早船 左 (11 本目)		早船 右 (12 本目)	
	打太刀	仕太刀	打太刀	仕太刀
1	<u>左足を踏出し右斜の構え</u>	<u>直立上段</u>	<u>左足を踏出し右斜の構え</u>	<u>直立上段</u>
2	<u>右斜の構え</u>	<u>上段のまま右左右と踏み出す</u>	<u>右斜の構え</u>	<u>上段のまま左右左と踏み出す</u>
3	<u>右斜の構え</u>	<u>三步進み打太刀を窺いつつ、油断なく静かに下段に下す</u>	<u>右斜の構え</u>	<u>三步進み打太刀を窺いつつ、油断なく静かに下段に下す</u>
4	<u>右斜の構え</u>	<u>下段から剣先を少し右に傾け打太刀の気合を窺う</u>	<u>右斜の構え</u>	<u>下段から剣先を少し左に傾け打太刀の気合を窺う</u>
5	<u>右足を踏み込み正面打ち</u>	<u>下段の剣を頭上に上げ（剣先は右方向）正面を止める</u>	<u>右足を踏み込み正面打ち</u>	<u>下段の剣を頭上に上げ（剣先は左方向）正面を止める</u>
6	<u>右足を引き、正面を止める</u>	<u>止めた剣を回転（剣先は右方向）し打太刀の正面に切返し打つ</u>	<u>右足を引き、正面を止める</u>	<u>止めた剣を回転（剣先は左方向）し打太刀の正面に切返し打つ</u>
7	<u>剣先を回転しすぐに仕太刀の左小手を右足を出しながら打ち精眼に付ける</u>	<u>左足を引き、後方へ十分に飛び抜く</u>	<u>剣先を回転しすぐに仕太刀の左小手を左足を出しながら打ち精眼に付ける</u>	<u>右足を引き、後方へ十分に飛び抜く</u>
8	<u>精眼</u>	<u>精眼</u>	<u>精眼</u>	<u>精眼</u>

「早船」については、打太刀は左右関係なく全く同じ動作を行っている。仕太刀の動作で特徴的なのは、剣先を下げて打太刀の気合を窺う動作である。「早船_左」では、剣先を右に傾けるため、その後の正面打ちを止める動作ならびにしないを回す動作は、剣先が右を向いている。反対に「早船_右」は剣先が左向きのまま、正面打ちを止め、しないを回転させている。したがって、剣先を左へ向けたまま、しないを回している。このように「早船」では、打太刀の同じ動作に左右二方向の対応方法を学んでいると考えられる。

以上、「龍尾」「面影」「松風」「早船」の形について左右それぞれの動作を検討してきたが、左右の形の違いによって、踏み込む足、打つ箇所、構えなどが左右反対になっている部分が多くみられる。「龍尾」「松風」「早船」は動作としては基本的に同様であり、その中で左右対称に動作が行われている。「面影」においては、「左」の形では「正面打ち」を行うのに対し、「右」の形においては「正面裏打ち」が行われ、これらの後の動作が「左」「右」の形で全く異なっていることが分かる。

(3)「鉄破_{進退}」の特徴

次に、4本の形（5本目から8本目まで）によって構成されている「鉄破_{進退}」について4本の形を比較してみたい。次の表3-6が「鉄破_{進退}」4本の形を比較したものである。

表 3-6 「鉄破_{進退}」4本の形の比較

通し 番号	鉄破 _{進退}			
	5 本目	6 本目	7 本目	8 本目
1	打：左向単身 仕：右足を踏み出し正上段	打：左足、右足と踏み出し、直立 精眼 仕：直立正上段	打：直立精眼 仕：上段に構え、右左右と 三歩踏み出す	打：直立精眼 仕：直立正上段
2	打：右足を後方に蹴り上げ 右左右と三歩踏み出す 仕：正上段	打：精眼のまま右足を踏み出す 仕：正上段のまま右足を踏み出す	打：精眼のまま右足を踏み 出す 仕：右左右と三歩踏み出 し、静かに精眼	打：直立精眼のまま 仕：正上段のまま右足を 踏み出す
3	打：腹部を突く 仕：右足を斜め後方に引き、 打太刀の突きを打ち落と し、しっかりと押さえる	打：精眼のまま左足を踏み出す 仕：そのまま上段の構え	打：正面に突っ込む 仕：応じて振りかぶる	打：精眼のまま左足を踏 み出す 仕：上段に構え、右左右 と三歩踏み出す
4	打：左足、右足と引きなが	打：右足から三歩進み、左小手	打：正面打ちを止める	打：右足を踏み出し精眼

	ら左斜の構え 仕 ：右足を踏み込み正上段	を押さえようとする 仕 ：打太刀の押さえようとする 太刀を払い、右足を左側に踏み、 体を捻り剣先を左に回転する	仕 ：正面を打つ	に構える 仕 ：精眼
5	打 ：左足を踏み出しながら 右足を打つ 仕 ：右足を左足に引揃え直 立上段	打 ：払われるのに応じ左手を頭 上に上げ剣先を右に下げる 仕 ：太刀を水平にした左斜の構 え	打 ：小手を打ち正眼に付け る 仕 ：後方に飛ぶ	打 ：上段に上げようとす る 仕 ：剣の起こりを押さえ 正面に突っ込む
6	打 ：左足、右足と引き、左 斜の構え 仕 ：直立正上段を保持	打 ：太刀を縦に体の右側に付け、 胴を止める 仕 ：左足を踏み込み胴を打つ	打 ：精眼 仕 ：精眼	打 ：仕太刀が突きだし押 さえてくるのに応じ左手 を頭上に上げ剣を体の右 側に付ける 仕 ：右足を踏み込み太刀 を押さえる
7	打 ：左足を踏み込み、左小 手を打つ 仕 ：打太刀の小手の打ち上 げを打ち落とす	打 ：胴を止めた太刀を回転し左 足を踏み出し正面を打つ 仕 ：胴を打った姿勢のまま正面 打ちを止める		打 ：体を捻り、右側に付 けた剣を回転し正面を打 つ 仕 ：太刀を押さえこんだ 姿勢で正面を止める
8	打 ：左足を引き揃え、直立 左斜の構え 仕 ：小手を打ち落とした時 の姿勢を保持	打 ：正面打ちを止める 仕 ：切り返し、右足を踏み込み 正面を打つ		打 ：正面打ちを止める 仕 ：切り返し正面を打つ
9	打 ：右足を踏み込み、左手 を打ち、精眼に付ける 仕 ：小手に打ち上げる太刀 を打ち落とし、その勢いで 後方に飛び、上段に構える	打 ：右足を踏み込み、左手を打 ち、精眼に付ける 仕 ：正面を打った勢いで後方に 飛び、上段に構える		打 ：右足を踏み込み、左 手を打ち、精眼に付ける 仕 ：正面を打った勢いで 後方に飛び、上段に構える
10	打 ：精眼 仕 ：精眼	打 ：精眼 仕 ：精眼		打 ：精眼 仕 ：精眼


表から明らかなように、この4本の形は動作としての共通点は非常に少ない。6本目と8本目の通し番号1から3における構えが同様であるとみてとれるが、これまでみてきた形のように左右対称の動作となっているわけではない。この4本の形が「鉄破_{進退}」という一つの形としてまとめられている理由について考察したい。


まず『直心影流目録口伝書』においては、「鉄破_{進退}」の「進退」という語について「進退ハ待ト懸ルトナリ⁴⁴⁵」と述べられている。また、『直心影流秘書一』においては、「形ハ四本アレトモ、向ヨリ進來二本ヲ一本トシ、又退テ待ヲ一本トナス故、四本ニテ二本トスルナリ⁴⁴⁶」（読点筆者）と記されており、この形が4本あるものの、相手が進んで来る2本と相手が退き、待っている2本に大別できるという。

この点を踏まえて「鉄破_{進退}」の4本をみていくと、5・7本目は相手が突いてくるところに対応をする点が共通している。これに対し、6・8本目は仕太刀から打つ技である。6・8本目のように仕太刀から技を出す形は十之形14本において、この2本の他にない（「龍尾」「早船」「曲尺」「圓連_{刀連体連}」は打太刀から仕掛けていく形であり、「松風」「面影」は打太刀・仕太刀同時に正面打ちを行う形である）。

「鉄破_{進退}」の4本は、相手が突いてくるところを待ち受けて対応する場面と、相手に自ら仕掛けていく場面、という二つの局面における対応を修練する形であるといえよう。これまでみてきたように、左右2本または4本を一組として、形が構成される理由としては、十之形が自由な打ち合いをするしない打ち込み稽古の基本技術であるからだと考えられる。実際に相手としないで打ち合うとなると、相手が左右どちらから打ってくるのか、また、相手が先に仕掛けてくるのか、それともこちらが仕掛けるのを待っているのかなど、相手の動作によって、対応を変えなければならない。十之形では、相手の動作によって変化することが求められるしない打ち込み稽古を想定しているといえよう。

山田次朗吉『鹿島神伝直心影流』においては「韜之形ハ直心影流四代小笠原源信斎先生ノ創定セラレタル形ニシテ破軍星ノ七曜ニ象リ奇正変化ノ業ヲ教ユルモノナリ⁴⁴⁷」と奇正変化の業を教える、とある。つまり正道と権道の正反対の二つの技の変化を身につけるためにこの形が学ばれるということである。「左」「右」の形で構成される「龍尾」「面影」「松風」「早船」、4本の形で構成される「鉄破_{進退}」はこの変化という点が顕著に現れていると考えられる。

⁴⁴⁵ 『直心影流目録口伝書』, 鈴鹿家文書, 全日本剣道連盟蔵。

⁴⁴⁶ 『直心影流秘書一』, 鈴鹿家文書, 全日本剣道連盟蔵。

⁴⁴⁷ 山田次朗吉『鹿島神伝直心影流』一橋剣友会, p.198, 1927.

2. 「曲尺」にみる十之形の特徴

それでは、なぜ 13 本目「曲尺」と 14 本目「圓連_{刀連体連}」は 1 本の形によって構成されているのか。この点については『直心影流秘書二』において「曲尺円連ノミ左右ナキハ、曲尺円連ハ何レノ形ニモナクテハナラヌ也、夫故外ト同ジカラズ⁴⁴⁸」と述べられている。つまり、これらの形で学ぶ要素はどの形にもなくてはならないということであると考えられる。ここからは、13 本目「曲尺」14 本目「圓連_{刀連体連}」から十之形の特徴を考察していくこととしたい。


まず、ここでは「曲尺」について考察をしておきたい。はじめに国郷が著した『直心影流目録口伝書』の記述をみておきたい。


スヘテ勝負ハ曲尺ナリ、規矩準繩ノカ子也、心ノカ子モ同シ、目ニ明ハ是也、勝負肝要也


○心規曲尺又心觀尺心ヲモツテ、尺ヲミルナリ、此形ハ敵ヨリ打込太刀ノヒサル故、ヌイテ打ナリ⁴⁴⁹（読点、下線部筆者）


ここでは、すべて勝負というのは曲尺によるものであると述べ、心の中に曲尺を觀念し、相手との距離を測ることが求められている。また、下線部にあるように、この形では敵の打ち込みが伸びず、浅いために、その打ちを抜き、打つという技術が修練されていると考えられる。

他の伝書においても、この「曲尺」について「上段ニカフリ待テ居ル処ヲ、向ヨリ我ヲワツテ来ルトキ、曲尺遠キ故、アトヘ下飛ビサガツテ、向ノ太刀ヲハツシ、ソレヨリソロソロトツメテ、向ヒキク引タル処ヲ、体ヲ進テヲク也⁴⁵⁰」「是ハマカリカ子ノ事也、只金ト云事也、打太刀ヨリ面ニ打込ム、ソコヲ抜ク、是カ誠ノカ子アヒノトコロ也、少シ跡エ引キスゴスト跡ノ打カ出ス、引カ子ハ向ノ太刀カコチラノ面ニカゝル、打太刀ノ太刀カ仕太刀ノ面ニツゝコスル位テナクテハナラヌ、誠ノカ子合之処也、夫故曲尺ト云也⁴⁵¹」と述べられており、この形において、間合を測り、相手の攻撃を抜いて避けることが求められている。また、「向ヒキク引タル処ヲ、体ヲ進テヲク也」と相手が退いた時には、自分の身体を進めるように説いている。

⁴⁴⁸ 『直心影流秘書二』 鈴鹿家文書, 全日本剣道連盟蔵.

⁴⁴⁹ 『直心影流目録口伝書』 鈴鹿家文書, 全日本剣道連盟蔵.

⁴⁵⁰ 『直心影流秘書一』 鈴鹿家文書, 全日本剣道連盟蔵.

⁴⁵¹ 『直心影流秘書二』 鈴鹿家文書, 全日本剣道連盟蔵.

それでは、「曲尺」においてどのように相手の太刀を抜いているのか、山田次朗吉『鹿島神伝直心影流』の記述からみておきたい。次は「曲尺」における打太刀が最初に打つ局面の記述である。

打太刀ハ右足ヲ踏出スト共ニ仕太刀ノ左甲手ヲ切ル

仕太刀ハ両手ノ握リヲ頭上ニ引上ゲルト共ニ右足ヲ左足マデ引付ケ直立上段トナル⁴⁵²

打太刀は上段に構えた仕太刀の左小手を打ちにいくが、仕太刀は上段の構えを崩さず、右足を左足に引き付けることで打太刀の攻撃をかわしていることが分かる。この後、「仕太刀ハ打太刀ガ右足ニ切込ムニ応ジテ右足ヲ左足マデ引揃ヘ直立ス⁴⁵³」と再度打太刀の打ち込みを、足を引き揃えることで避ける動作がみられる。この動作が「曲尺」を意味する動作であり、相手との間合を見極めながら行っていると考えられる。また、この足を引き揃えて相手の攻撃をかわす動作は、「龍尾」や「面影」にみることができ、「曲尺」において学ばれる要素が、他の形にも組み込まれているといえる。

3. 「圓連^{刀連体連}」にみる十之形の特徴

次に「圓連^{刀連体連}」の形について考察していきたい。『直心影流伝書集』には「圓連^{刀連体連}」について次のように述べられている。

敵ノ打込延ビテ抜カレザル故、之ニ応シナガラ、マドカニ返スヲ以テ圓連ト云フ、太刀ノ合フ処ヲ名ツテ、刀連体ノ連ナル処ヲ以テ、体連ト云フ⁴⁵⁴(下線部、読点筆者)

つまり、この形では敵の打ちに伸びがあり、深く打ち込まれ、抜いて避けることが出来ないときに、応じるための技術を学ぶと考えられる。

具体的な動作としては、『直心影流秘書一』の記述をみておくこととしたい。

上段ニカマエ待テ居ル処ヲ向ヨリ進テ来リ我頭ヘ打込処ヲ右ヘ応シ体ヲ左ヘカワリ右足ヲ左エヌキ太刀ヲカエシテ上段ヨリ左ヲフミ込ナカラ向ノ頭ヘ打込ナリ

○此形ヲ又刀連体連ト名ク、太刀ガ出ルニ付、体ガ出、体ガ出ルニヨツテ太刀カ出ル、

⁴⁵² 山田次朗吉『鹿島神伝直心影流』一橋剣友会,p.336,1927.

⁴⁵³ 山田次朗吉『鹿島神伝直心影流』一橋剣友会,p.340,1927.

⁴⁵⁴ 『直心影流伝書集』写,鈴鹿家文書,全日本剣道連盟蔵.

タトヘハ右足ヲ左ヘフミヌキタルハ体連ニテ、自然ト太刀カ応スルヤウニナリ、又向
ヘ打込込ハ、太刀ヨリ出テ体ノツイテ出ルカコトシ、是カ連ナリ此体連刀連ヲクルメ
テ、マトカニ、カト、ヒシ、ナク行ク処ヲ、円連ト云也

此打太刀ハ、曲尺トチカイ、フカク打込ユエ、仕太刀ニテ右ノ通りニカワル也⁴⁵⁵（下
線部、読点筆者）

相手が自分の頭へ打ち込んでくるところを、しないを右に出して応じて、身体は左へ移
る。そして右足を左に抜き、しないを回転させて、そのまま上段に振りかぶり、左を踏み
込みながら相手の頭へ打ち込む、という一連の動作が記されている。また、この動作はこ
の形の名称の意味を表しているという。太刀が出ることで身体が出て、身体が出ることで
太刀が出るという、先に挙げた一連の動作に当てはめると、右足を左へ抜くことで、自然
と太刀が相手の打ちにに応じていることになり（「体連」）、こちらから打ち込むときは、太刀
がでるために、身体がついていく（「刀連」）ことであるという。そしてこれらの「体連」「刀
連」をまとめて、角やよどみのないように丸く行うことが「圓連」であるという。この「圓
連」は、相手の打ちを受け止め、その力を利用し、剣先を回して打つ、というこの一連の
技を修練するための形であるといえよう。「圓連_{刀連体連}」ではこの動作を打太刀・仕太刀が連
続して行っている。

また、この一連の動作は、十之形全般を通して多く見ることができる。

『直心影流秘書二』では、この動作を記述の中で「ヒツクリ返シテ打」と記している。
以下の表 3-7 に、『直心影流秘書二』にみられるこの部分の記述を列記しておきたい。


⁴⁵⁵ 『直心影流秘書一』, 鈴鹿家文書, 全日本剣道連盟蔵。

表 3-7『直心影流秘書二』にみる十之形における返し技の記述（読点、下線部筆者）

龍尾	左ヲ少シ出シテ、右ヲオヽキク踏込ム、是ハ左右ヲ分タンガ為也、下ニ取ハ、ツリ合ナリ、古流ニ同ジ、ソコテ打太刀ヨリ面ヲ打、 <u>仕太刀ソノハナヲ打ヒツクリ返シテ打、コレカ勝口也、</u> 尤仕太刀跡ノハ、ハヤク打ナリ、打太刀ニ不 _レ 構打込也
鉄破	向ノ変ヲ見テ、ツクトモ、打トモスルナリ、尤カヨウニ取候構ヘニハ、イツデモ突ク心持ハアルナリ、ソコデ仕太刀ヨリモ、変ヲ見 _ン 為ニツケル也、ソコヲ <u>打太刀ヨリ、ヒツクリ返シテ打、</u> ソノハナヲ、向ノ右ノ手ヲオサヘツケル、是カ勝口也 同四本目 打太刀前ニ同ジ、仕太刀ヨリ変ヲウカゴウ、打太刀ヨリ押込 _ン テ勝ントス、 <u>其ハナヲ仕太刀ヨリヒツクリ返シ打込ム、是勝ナリ</u>
松風	打太刀燕快、手ノ外ヨリ見ル、小太刀斗リ内ヨリ見ルナリ、打左ノ手ハエハニスル也、向ヨリ打ントスルヲ、 <u>ヒツクリ返シテ打ントノ事也</u>
早船	打太刀車ニトル、ソシテ動カスシテ居ル、是カ權ヲコグ心持ナリ、ソレニ乗テ行ケト云ハ、ツリ合テユケト云事ナリ、夫故早船ト云名目ヲツケル也、ソコデ打太刀シヤニトツテ、向ニウテト頭ヲ明ケテ打処ヲヌイテ打ントノ事ナリ、ソコ仕太刀カエツテウテト、頭ヲアケテ見セル、ソコヲ <u>打太刀ヨリ打、ソレヲヒツクリ返シテ打勝口ナリ</u>
円連	体ト太刀一致ニツレルト云意也、心持片ヨラス、居ツカズ、マンマルク、一致ニナル故、円連ト云ナリ、尤打太刀ヨリ面ヘ打込テクルトコロヲ、 <u>ヒツクリ返シテ打、是カ勝口也</u>

以上のように全体を通して、相手の打ちを受けつつ、しないを回転させて打つ、という技術が多用されている。この技術は打太刀・仕太刀ともに散見される。そして「是カ勝口也」と随所で散見されているように、この技術によって勝つ形が多いようである。

本節においては直心影流の基本技術の形である十之形について、考察を行ってきた。はじめに十之形の概要としてその名称の由来と修練に用いるしないについて述べてきた。十之形は 14 本の形によって構成されているが、本来は 12 本であり、十干・十二支に由来することから「十之形」と称されるようになったという。また、明治以降においては「韜」の字を用いて表記されることが多いようである。この形の修練で用いるしないは、刀身に革袋をかぶせた袋しないで、おおよそ 3 尺 3 寸から 3 尺 4 寸の長さである。

次に十之形の特徴について論じてきた。

まず十之形の大きな特徴の一つとして、その 14 本の構成が挙げられる。十之形は「左」「右」2 本で対になっている形（「龍尾」「面影」「松風」「早船」）、4 本の形をもって構成される形（「鉄破_{進退}」）、1 本の形によって単独で構成される形（「曲尺」「圓連_{刀連体連}」）の 3 種類に分類できる。「左」「右」2 本で対になっている形については、打つ部位、足遣い、構えなどが左右対称となっている箇所が多いという点が特徴的である。4 本の形をもって構成される「鉄破_{進退}」は 5・7 本目は打太刀が仕掛けて来たときの対応、6・8 本目は自ら仕掛けていく技である。これら 4 本によって敵が仕掛けてくるのを待ち受ける際と自ら仕掛けていく際、二つの局面の修練がなされていると考えられる。これらの形では、相手の動作によって変化することが求められるしない打ち込み稽古を想定した修練がなされていると考えられる。

1 本の形によって単独で構成される形については、これらの中で学ばれる要素が十之形全体を通してみられるようである。13 本目「曲尺」では、敵の打ち込む太刀が伸びず、浅いために、間合を読み、攻撃を抜いて避けるという技術の修練がなされる。14 本目「圓連_{刀連体連}」においては、特に、相手の打ちを受け止め、その力を利用し、剣先を回して打つ、という一連の技術が修練されることが考えられる。

次節以降は、この十之形の特徴が、直心影流のしない打ち込み稽古にいかにもみられるか、考察を行っていきたい。

第二節 直心影流におけるしない打ち込み稽古の導入と特徴

前節では、直心影流のしない打ち込み稽古における基本技術の形である十之形についてその概要や特徴について考察を行った。

本節以降はしない打ち込み稽古について考察を進めていく。本節では直心影流におけるしない打ち込み稽古の導入と特徴と題し、直心影流の伝系におけるしない打ち込み稽古導入の経緯、そして他流の人物が記した史料から直心影流の特徴について論じていく。

第一項 直心影流の伝系におけるしない打ち込み稽古の導入

直心影流の伝系におけるしない打ち込み稽古の導入をみていくにあたり、まず、当伝系において、いつから道具が使用され始めたのかを把握しておきたい。このあたりのことは先行研究において中村民雄氏も述べているが⁴⁵⁶、直心影流の伝系の中で、どのような経緯で、どのような道具が使用され始めたのかを把握しておく必要があるため、改めて述べておくこととしたい。

1. 伝系における道具の導入


直心影流の伝系における道具の導入については、直心流と直心正統流の間に大きな変化があったようである。

まず、直心流の神谷伝心斎が著した『軍法非切書并入唐目録』から道具に関する記述をみていくこととしたい。

一 他流ニテハ稽古之節、皮具足面顚様々道具ヲタヨリ稽古ス、直心之上ニテハ聊身ヲ防ク道具用ヒ不申候、身ヲ防ク道具一身ニ有、昼夜之執行ニ過去現在未来トタテ置、一円相ヲ磨キ、己カ非ヲ平生非切シ、心ト心ト仕相ス、防ク道具心也防カヌ道具心也、皆一心ニ有、防ク志皆非也、誠ナラサレハ不_レ得_二正理_一⁴⁵⁷（読点筆者）

この記述においては道具の使用を批判している。他流では稽古のときに「皮具足」「面顚」など様々な道具を頼って稽古を行っているが、直心の上では少しも防ぐ道具は用いないと

⁴⁵⁶ 『剣道の歴史』全日本剣道連盟, pp.245 - 247, 2003, 参照.

⁴⁵⁷ 『軍法非切書并入唐目録』, 熊本県立図書館蔵.

し、日頃より直心流では自分の心から非（去るべき感情）を去り、心と心とで試合を行う、という。そして、防ごうとする心は全て非であるという。

つまり、道具を使用することは防ごうとする心の表れであり、批判の対象であったことが窺える。また、同書には、「他流ト仕相セハ木刀也シナヘニテハ堅ク無用之事⁴⁵⁸」と述べられており、他流と試合を行うときは、しないの使用についても禁止されていたようである。

しかし、このような態度は高橋弾正左衛門重治の頃に一新されたと考えられる。高橋弾正左衛門自身が道具について記した記述はみられないが、山田平左衛門光徳についての伝記には、次のように記されている。

一 山田平左衛門藤原光徳一風斎ハ永井伊賀守様ノ仕臣也若年ニシテ伊勢流古実并馬術ニ長シテ江戸四ツ谷ニ居シ門人多シ十八歳ノ時御旗本富田左衛門ニテ大瀬弥五兵衛ト云者木刀ヲ以而仕合シニタカイニ怪我アリ其后剣術ハ中絶アリシニ三十二歳ノ時当流ノ仕合ヲ見ラレ候ニ面手袋アリ而怪我ナキヤウニ身ヲシトミ稽古スル故直翁ニ随心シテ四十六ノ時免許アリシ也⁴⁵⁹

光徳は 18 歳の頃、大瀬弥五兵衛なる人物と木刀による試合を行い、互いに怪我をしたため、しばらくの間、剣術を中断したという。その後 32 歳で剣術を再開するが、再開する契機となったのは、高橋弾正左衛門重治の直心正統流が、怪我のないように「面」「手袋」を身につけ、試合をしていた様子をみたことが大きいようである。この経緯から、光徳は直心正統流に入門することになり、46 歳で免許を受けたということである。

直心流においては、道具は批判され、使用されていなかったが、直心正統流の高橋弾正左衛門重治が導入に踏み切り、はじめの頃は「面」「手袋」という道具が使用されていたようである。

2. 『兵法雑記』にみるしない打ち込み稽古

直心影流の伝系にみられる人物の伝書の中ではじめにしない打ち込み稽古の記述がみられるのは山田平左衛門光徳が著した『兵法雑記』である。

『兵法雑記』の末尾には「▲兵法稽古之次第」という記述がみられ、次のように記されている。

⁴⁵⁸ 『軍法非切書并入唐目録』[写], 熊本県立図書館蔵。

⁴⁵⁹ 『剪紙口授書』[写], 鈴鹿家文書, 全日本剣道連盟所蔵。

吟味乱レ之事 尤シナイニテ見合入乱テ勝負ヲ争ウヲ云

右真勝負ニ至テハ面手袋小具足ヲ堅メ互イニ遠慮ナク勇氣一盃ヲ尽シ入乱テ勝負ヲ争フヲ云⁴⁶⁰

この記述から、しないをもって相手と向き合い、入り乱れて勝負を争うという稽古法があったことが確認できる。そしてこのような真剣勝負においては、道具で身を固め、お互いに遠慮なく勇氣を持って入り乱れて勝負を争うという。

この記述で、前述の光徳の伝記と異なるのは「面手袋小具足ヲ堅メ」と述べられているところであり、新たに「小具足」が加えられていることがわかる。この「小具足」について辞書的解釈をすると、『広辞苑』においては、武装の際の付属具で、鎧では、臙当・脇楯・籠手・喉輪などを指し、また、後世では、脇引・籠手・頬当・臙当・佩楯などを指しているという⁴⁶¹。上記の記述において、小具足は「面」「手袋」と別に記されていることから、頭部及び腕部を守る道具ではないことが考えられ、『広辞苑』の定義においてみられたものでは、臙当、脇楯、喉輪、脇引、佩楯が該当するといえよう。それぞれについて辞書的解釈を行うと、喉輪は喉にかけて頸部から胸上部を覆うもの⁴⁶²、脇楯は胴の右脇の空隙に当ててふさぐもの⁴⁶³、脇引は両脇下を防御する小具足⁴⁶⁴、佩楯は股と膝を覆う防具⁴⁶⁵、臙当は膝からくるぶしまでを覆うものであり⁴⁶⁶、頸部から脚部を守る道具であったことがわかる。以上のことから、ここで述べられる「小具足」とは胴体及び脚部を守る道具であったと考えて差し支えないであろう。しかし、この小具足がどのような形態を成していたかは不明である。

上の『兵法雑記』の記述では相手と入り乱れて、しないで勝負を争う、ということが述べられているが、その一方で光徳は同書の中で次の様にも述べている。

○一風斎工夫曰 古人ハ兵法修行何ンゾ云バ只々能ク負ヲ尽ス事ヲ全体ニ立テ思ウサ

⁴⁶⁰ 『兵法雑記』東京長沼正兵衛家蔵。

⁴⁶¹ 新村出『広辞苑^{第六版}』岩波書店,p.988,2008,参照。

⁴⁶² 新村出『広辞苑^{第六版}』岩波書店,p.2199,2008,参照。

⁴⁶³ 新村出『広辞苑^{第六版}』岩波書店,p.3018,2008,参照。

⁴⁶⁴ 新村出『広辞苑^{第六版}』岩波書店,p.3024,2008,参照。

⁴⁶⁵ 新村出『広辞苑^{第六版}』岩波書店,p.2211,2008,参照。

⁴⁶⁶ 新村出『広辞苑^{第六版}』岩波書店,p.1514,2008,参照。

マ打タレテ心見度候タトヘハ其心行ヲ図ニナサバ無_レ手人形造り度候立柱ノ如ナル人形ヲ敵方ヨリハアクマテ征シ打セテ内心ニハ金剛ノ正体ヲ然モ明カニ建置テ見習度候言ハ人モ打吾モ打相互ニ征シ打度ト計ナレハ真ノ修行ニナラズ異端ト同智ニ打合タ_ヽキアイニナリテ我慢心ノ根ト成乎⁴⁶⁷

兵法の修行とは何かというと、よく負けることを修行の全体として立て、思うがままに打たれてみることであるという。例えばその心行を図にすると、自身を手がない柱のような人形にみたてることであると述べ、敵の方からはあくまでも攻めて打たせるが、その内心には金剛石のような真の姿をしっかりと立てておくことが重要であると述べている。また、相手も自分も打ち合い、互いに攻めて打ちたいというばかりでは本当の修行にはならず、異端な剣術と同じで単なる打ち合い・叩き合いになり、傲慢な心のもとになるという。

つまり、道具をつけて単に相手を打つという修行のみをしていては、傲慢な心になるということであり、道具をつけているからこそ、相手に打たれなければならないという。そうすることで心が金剛石のように堅固で強くなっていくということであろう。

『兵法雑記』においては、道具で身を守り、しないによって相手と勝負を争うというしない打ち込み稽古の描写が記されているが、その一方で、光徳は相手を打つことだけに拘ることを懸念しており、しない打ち込み稽古において、数多く打たれることにより、精神を鍛練すべきと考えていたことが窺える。

第二項 他流からみた直心影流の特徴

本項においては、他流の人物が記した直心影流の記述をみていき、直心影流の剣術がどのような様相で、また他流からどのように評価されていたのか論じていく。

1. 『神道無念流剣術心得書』からみた直心影流

はじめに神道無念流の剣士・武藤七之介が著した『神道無念流剣術心得書』から直心影流についての記述をみていくこととする。

(1) 神道無念流と『神道無念流剣術心得書』について

まず、神道無念流という流派と『神道無念流剣術心得書』について把握しておきたい。

<神道無念流について>

⁴⁶⁷ 『兵法雑記』東京長沼正兵衛家蔵。

神道無念流は福井兵右衛門嘉平が興した流派である。福井兵右衛門嘉平は下野国都賀郡藤葉村の出身で元禄 15 年（1702）の生まれである。はじめ、兵右衛門は一円流二代目の野中権内の門人であったようである⁴⁶⁸。その後、諸流を学び、諸国を修行したが、未だ奥儀に達しなかったため、信州戸隠山の飯綱権現に 50 日祈願し、剣術の蘊奥を悟り、神道無念流を立てたという⁴⁶⁹。

神道無念流が世に知られるようになったのは高弟である戸賀崎熊太郎暉芳からであるという。戸賀崎熊太郎は延享元年（1744）生まれで、清久村（現在の埼玉県久喜市）の出身である。21 歳にて免許を授かり、帰郷し道場を開いたが、安永 7 年（1778）35 歳のときに再び江戸に出て、麴町に道場を開いたという⁴⁷⁰。戸賀崎の後は、戸賀崎熊太郎胤芳（2 代目）—岡田十松吉利—斎藤弥九郎善道へと伝わり、この斎藤弥九郎のとき、神道無念流は隆盛を極めたという。

斎藤弥九郎善道は寛政 10 年（1798）越中国の生まれで文化 9 年（1812）に江戸に上り、神道無念流の岡田十松に入門した。文政 9 年（1826）、29 歳のとき練兵館を開き、門弟教育をはじめた。この練兵館は北辰一刀流・千葉周作の玄武館、鏡新明智流・桃井春蔵の士学館と併せて、江戸三大道場と称され、天保年間から安政年間にかけて、非常に栄えたという。これら三大道場は俗に「技は千葉、力は斎藤、位は桃井」と称されたという⁴⁷¹。

<『神道無念流剣術心得書』と著者・武藤七之介について>

次に、『神道無念流剣術心得書』とその著者である武藤七之介についてみていくこととしたい。武藤七之介は、常陸国多賀郡助川村（現在の茨城県日立市）の郷士であり、水戸藩家老山野辺義親が天保 8 年（1837）、家中子弟教育のために助川に創設した「養正館」の剣術指南役を務めた人物である。ただし、生没年や、どこで誰に神道無念流を学んだのかは不明である。『神道無念流剣術心得書』には成立年月日が記載されていないが、天保 4 年（1833）の藩主斉昭公覧試合に、神道無念流を代表する師範家として召し出されるなど、七之助の剣術家としての盛期が天保期前半であったと思われること、弘化期以降の流派の技術的特徴の喪失（剣術技術の統一化）がまだみられず、各流派の個性を遺していることを踏まえると、本史料は遅くとも天保期頃までに書かれたものと推定されると長尾氏は述べている⁴⁷²。

⁴⁶⁸ 綿谷雪・山田忠文『武芸流派大辞典』東京コピー,p.427,1978,参照.

⁴⁶⁹ 富永堅吾『剣道五百年史』（復刻新版）島津書房,p.342,1996,参照.

⁴⁷⁰ 綿谷雪・山田忠文『武芸流派大辞典』東京コピー,p.428,1978,参照.

⁴⁷¹ 中村民雄『剣道事典—技術と文化の歴史—』島津書房,p.145,1994,参照.

⁴⁷² 長尾進「試合剣術の発展過程に関する研究—『神道無念流剣術心得書』の分析—」（『武道学研究』第 29 巻 1 号所収）日本武道学会,pp.17—18,1996,参照.

(2)『神道無念流剣術心得書』にみられる直心影流の記述について

それでは、『神道無念流剣術心得書』にみられる直心影流の特徴を記した記述を検討していくこととしたい。

直真陰流試合口

其様子身堅め面小手竹具足竹刀は中きれ上段専ら足の立様は両足ともにつまさきを立浪の浮足といふて殊の外身体かるし当流とあはせば、身体かるきだけ、わざもはやしと雖も、たをれやすし、此所専一と心得、試合べき事、初め一礼するよりはやく、上段にとる所を、はやく小手を打べし、必、つくべからず、相打に成る、小手を打ながら、勢いつよくおしたをすべし。敵に打ちをださせべからず、其打のはげしき事、電光の如くなれば、必敵より打ちの出ざる先に、此方よりうちをだすべし、此方胴に而身をかため、敵にも存分うたすべし、試合中、敵近寄節は、早く組打にすべし、敵上段になる所をしげく小手を打ば、敵勢眼になる、其時此方上段になる、敵の頭小手胴きらひなくうつべし、敵は必後をかけるなれば、此方も少々の前後は論せず打たすべし、敵は大体こたへなき人沢山なれば、此方にもうたへなしに可 試合、此方勢眼の小手のうらより胴をさすり、後にぬけていかにもといふ事あり、すべて他流は竹刀さきあがらざる様にすべし、又、左右の膝をおり、左の胴も右の胴も打事あり、其節は此方にてにぎりをさげ、さしとめにして、其まもおしたをす、たをれる所をつづけうちぬすべし、此旨にて試合べし⁴⁷³

はじめに「直真陰流」とあるが、この流派は記述の内容からみて直心影流であるようだ⁴⁷⁴。

ここではまず、直心影流の特徴として、面・小手・竹具足で身を堅め、しないは中きれ⁴⁷⁵であること、専ら上段に構えること、足の立ち方は、両足ともにつま先立ちで「浪の浮足」という非常に軽快な足遣いであることを挙げている。

⁴⁷³ 『神道無念流剣術心得書』国立国会図書館蔵。

⁴⁷⁴ (長尾進「試合剣術の発展過程に関する研究—『神道無念流剣術心得書』の分析—」(『武道学研究』第29巻1号所収)日本武道学会,p.19,1996,参照.)。

⁴⁷⁵ ここでは竹刀について中きれと記されているが、本書においては一刀流・直心影流・柳剛流・義経流の用いる竹刀が「中きれ」と記され、鏡新明智流・新陰流・浅山一伝流については、記述がないという。また、長尾氏は「中切れ」という記述のない新陰流が袋竹刀を使用していたと仮定すると、「中切れ」は袋竹刀以外のものと思われ、天保期に柳河藩剣術槍術師範大石進の江戸出府を契機として四つ割りの長竹刀が流行したことから考えても、当時普及しつつあった「四つ割り竹刀」のことを常陸地方ではこのように呼んだのかもしれない、と述べている(長尾進「試合剣術の発展過程に関する研究—『神道無念流剣術心得書』の分析—」(『武道学研究』第29巻1号所収)日本武道学会,p.21,1996,参照.)。

次にこのような特徴を持つ直心影流の剣士と試合をする際の要点について記されている。

まず、直心影流の剣士の弱点として、身のこなしが軽く、技が早い分、倒れやすいと指摘している。直心影流に対する戦法としては、はじめに一礼し、直心影流の剣士が上段に構える所を素早く小手を打つように記されている。このとき、突きは相打ちになるため、出さないように述べられている。そして小手を打ちながらも強く押し倒すようにし、打ちを出させてはいけないという。この理由として、直心影流の剣士の打ちの激しさを挙げており、その打ちを「電光の如く」とたとえている。また「此方胴に而身をかため、敵にも存分うたすべし」とあることから直心影流の剣士が胴打ちも遣ったことが窺える。このことは、後ろの記述に「又、左右の膝をおり、左の胴も右の胴も打事あり」と述べられていることから窺えよう。このように胴を打ってきたときは自身の握りを下げて胴打ちを止め、そのまま押し倒すように述べられている。

直心影流の剣士が近寄ってきたときは、組打ちをするように説かれている。これは先に述べられているように、身のこなしが軽く、技が速いためであると考えられる。また、直心影流の剣士が上段を専一にすることから、上段に構えるその瞬間に小手を数多く打てと記されている。そうすることで、小手打ちを嫌がり、精眼になるという。精眼になったら、今度はこちらが上段に構え、頭・小手・胴を区別することなく打つように述べられている。

『神道無念流剣術心得書』においては、直心影流の剣士に対して、実に詳細な戦法が記されている。それ程、直心影流の剣術が特徴的であったということであり、その特徴を記述から解釈すると、上段の構え、素早い足遣い、鋭く速い打ち、などが挙げられる。

2. 千葉周作『剣法秘訣』からみた直心影流

次に北辰一刀流の千葉周作が著した『剣法秘訣』の記述から直心影流の剣術をみていくこととしたい。はじめに北辰一刀流と千葉周作について把握しておくこととしたい。

(1) 千葉周作と北辰一刀流について

北辰一刀流は千葉周作成政が興し、近世後期に隆盛を極めた剣術流派である。千葉周作は寛政6年(1794)、陸前栗原郡花山村荒谷に生まれた。祖父の千葉吉之丞常成は磐城国相馬藩の剣術師範で、その流名を北辰夢想流と称したが、故あって浪人し、安永末に栗原郡花山村に移った。吉之丞の娘婿になったのが幸右衛門成勝で、その二男が後の周作・三男が小千葉といわれた定吉である。周作・定吉兄弟は父から北辰夢想流を学び、父と共に江戸近郊の松戸に移住した。その後、周作は小野派一刀流の浅利又七郎義信に入門、さらに浅利の師であった中西派一刀流の中西子正について学び、やがて見込まれて浅利家の養子

になった。しかし、剣の術技について養父又七郎と意見が食い違うようになったため、浅利家を去り、関東を廻国修行した後、日本橋品川町に道場を開き、北辰一刀流を名乗った。その後、道場を神田お玉が池に移し、玄武館と称した⁴⁷⁶。周作は従来の中西派一刀流における八段の伝授次第を初目録・中目録・大目録皆伝の三段に改変した。その結果、免許皆伝にまで要する費用が安く済むようになり、道場は非常に栄えたという⁴⁷⁷。また、「剣術六十八手」というしない打ち込み稽古法そのものの技の体系を確立し、子弟教育を行った⁴⁷⁸。天保6年（1835）から水戸藩に出張教授し、16人扶持を給せられ、天保12年（1841）水戸藩校弘道館師範に任じられ、馬廻役100石に昇進した。弘化2年（1846）には、斎藤弥九郎篤信、桃井春蔵直正とともに与力格200俵で幕士にとりたてられた。そして、安政2年（1856）に62歳で死去した⁴⁷⁹。

門弟として教えを受けたものは五、六千人に上るといふ。幕末の志士として名高い坂本竜馬や清川八郎などがこの流派から出ている⁴⁸⁰。

（2）千葉周作『剣法秘訣』にみる直心影流の特徴

それでは、千葉周作の言から、直心影流の記述をみていき、その特徴について考察していく。次は『剣法秘訣』の記述である。

直心影と云ふ流派は、至極の剣術にて、一と勝負ごとに居り敷き、又は箕居して、はつはつと大息をつき、扱立合へば、上段に取り、直ぐに打つ気合ひになり、始終先々と廻り居るなり、又足は空に居らず、地に居らずと云ふて、浮き足にて構え、向の透き間次第に飛び込み勝つを、先の勝ちと云、又後の先と云うて、向ふより此の方へ飛び込み打たんとする其の籠手を、引き切りに打つを、懸け剣と云うて、専ら致したることなり、然るに此の頃に至り、其の事すたれて、上段にさへ取る者も稀にして、一刀流の下段星眼となり、開祖たる人が千辛万苦の労を積みて發明せし構へを打ち捨て、他流を真似るは、誠に嘆息の至りなり、又立ち合ふとき、相手早く立ち上らんとすれば、まだまだと声を掛け、始終相撲の立ち合ひの如くす、右はつはつと大息をつくは、動気を早く納めんが為なり⁴⁸¹

⁴⁷⁶ 綿谷雪・山田忠文『武芸流派大辞典』東京コピー,pp.759-760,1978,参照.

⁴⁷⁷ 中村民雄『剣道事典—技術と文化の歴史—』島津書房,pp.146 - 147,1994,参照.

⁴⁷⁸ 全日本剣道連盟編『剣道の歴史』財団法人全日本剣道連盟,p.266,2003,参照.

⁴⁷⁹ 綿谷雪・山田忠文『武芸流派大辞典』東京コピー,p.760,1978,参照.

⁴⁸⁰ 富永堅吾『剣道五百年史』（復刻新版）島津書房,pp.353 - 355,1996,参照

⁴⁸¹ 千葉栄一郎編『千葉周作遺稿』櫻華社,pp.23 - 24,1942.

まず、千葉周作は直心影流について「至極の剣術」と述べており、彼が直心影流という流派自体を非常に高く評価していることが窺える。

まず、技術的な特徴としては、上段に構えることを挙げている。そして、即座に打てる気合いになり、先に先にと廻っているという。足さばきについては、浮き足という足遣いで、相手の隙を見つけ次第、飛込んで勝つことを「先の勝」としていたという。また、「後の先」として、相手からこちらへ飛び込んで打ってくる時、その小手を引きながら打つ技を多く遣ったといい、この技を「懸け剣」と称するようである。

このような技術を使っていた直心影流であるが、この頃はこのような遣い方が廃れて、上段に構える者は珍しく、一刀流の下段や正眼に構える者が多いという。そしてこのような状況について、流祖が辛苦を積み作り上げてきた構えを捨て、他流を真似るとは本当に嘆かわしいと非難している。さらにこの記述では立合における作法についても記されている。その特徴としては、一試合ごとに居り敷き、または両足を投げ出してすわり、大息をついたことが述べられている。大息をつくのは早く呼吸を鎮めようとするためであるという。また、相手が早く立ち上がろうとすると「まだだ」と声を掛け、相撲の立合のようにしていたという。

千葉周作の言においても、先にみてきた『神道無念流剣術心得書』の記述と同様に上段の構え、素早い足遣いなどが確認される。また、仕掛け技に加え、相手が飛び込んでくる場所の小手を引きながら打つ「懸け剣」という技術も併用していたと考えられる。また立合における作法の記述も見られ、一試合ごとに居り敷くか、または両足を投げ出して座り、呼吸を早く鎮めるために大息をついていたという。しかし、このような流派の特徴が近頃見られなくなったと指摘しており、周作がこの『剣法秘訣』を著した当時、流派の特徴が薄れていたと考えられる。

以上の『剣法秘訣』にみられる直心影流の特徴は、先にみてきた『神道無念流剣術心得書』と一致する点が多いといえよう。

本節においては直心影流におけるしない打ち込み稽古の導入と特徴について考察を行ってきた。まず、直心影流の伝系における道具の導入について考察を行った。直心流においては、道具の使用が批判されているものの、直心正統流の頃より道具が用いられていたことが明らかである。山田平左衛門光徳の『兵法雑記』の記述から、この頃、すでに「面」「手袋」「小具足」という道具が存在していたことが窺える。そして光徳は道具をつける意義について、打たれることで精神を鍛えていこうと考えていたようである。

また、他流の人物からみた直心影流について検討し、その記述から直心影流のしない打ち込み稽古の特徴について考察を行ってきた。まず『神道無念流剣術心得書』に記された、直心影流の特徴としては、上段の構え、「浪の浮足」という素早い足遣い、鋭く速い打ち、などが挙げられる。また膝を曲げて、左右の胴を打つことも述べられている。『神道無念流剣術心得書』には、このような特徴を持つ直心影流に対して詳細な戦法が記されている。

千葉周作『剣法秘訣』においては、上段の構え、「浮き足」という足遣い、仕掛け技や引いて打つ「懸け剣」という技を駆使していたことが挙げられる。千葉周作は近年、このような特徴が見られなくなってきたことも指摘している。また、同書には立合における作法についても述べられている。

これら二書における直心影流の特徴はおおよそ一致しているということができ、これらが直心影流のしない打ち込み剣術の特徴であったといえよう。

次節においては、直心影流の剣士たちの他流試合の様相について具体的に検討していく。

第三節 直心影流の他流試合

第一項『大禾一件』にみる鏡新明智流との試合

第一節では、しない打ち込み稽古の基本技術の形である十之形について考察してきたが、この形の特徴として、相手の自在な動きに対応するための修練がなされること、さらに相手の打ちを抜く動作、相手の打ちに対してしないを回し、返して打つ技術などが挙げられる。また、第二節で取り扱った、千葉周作『剣法秘訣』の記述から、上段の構え、仕掛け技、相手が飛び込んできたところを引きながら打つという技が用いられていることが確認できた。これらの知見を踏まえると、他流試合においても、上段に構え、仕掛け技、応じ技を駆使して戦っていたことが予想される。

本節では、このような特徴を持つ直心影流が他流派との試合をいかに行っていたか、その様相について考察していきたい。したがって、試合でどのような技を打っていたか、という点を中心に考察を進めることとする。

まず、本項では『大禾一件⁴⁸²』と題された記録から、鏡新明智流と長沼正兵衛一門との試合について考察をしていくこととしたい。

1. 大禾伴山・桃井春蔵親子と鏡新明智流

はじめに、鏡新明智流とその祖である桃井八郎左衛門直由について簡潔に触れておきたい。鏡新明智流は、安永年間に桃井八郎左衛門直由が創始した。この人物の別名を、大禾伴山というようである⁴⁸³。はじめは「鏡心明智流」と名乗っていたが、後に「鏡新」の字に改めたという。桃井八郎左衛門直由は、大和郡山藩、柳沢家の家臣であった。宝暦 7 年（1757）に致仕し、諸国を武者修行して、無辺流槍術・戸田流・一刀流・柳生流・堀内流などの剣術を学び、安永 2 年（1773）、江戸に出て日本橋南茅場町に道場「士学館」を開い

⁴⁸²本史料は、長沼正兵衛一門と鏡新明智流を創始した大禾伴山・桃井春蔵父子により行われた安永 2 年（1773）の試合について記されたものである。このときの正兵衛は綱郷の後を継いだ忠郷である。試合の記述に加え、試合に至った経緯、長沼正兵衛と大禾伴山の書簡なども載せられている。巻末に「宇成之謹識」と記されており、宇成之なる人物が作者のようであるが、この人物の詳細については不明である。東京長沼正兵衛家蔵。

⁴⁸³ 富永堅吾『剣道五百年史』（復刻新版）島津書房,p.361,1996,参照。

た。2代目は養子の桃井春蔵直一が継ぎ、道場を南八丁堀アサリ河岸に移した⁴⁸⁴。そして前節でも述べたように、4代目桃井春蔵直由のときに、北辰一刀流の玄武館、神道無念流の練兵館とともに江戸の三大道場と称されたという。

次に本項でみていく長沼正兵衛一門と大禾・桃井親子との試合が行われた経緯について触れておきたい。

安永2年の3月頃、大禾伴山は愛宕山に次のような額を掲げたという。

剣術修行 多年願望漸今日隆然不知明日

一 吾星霜五拾歳を積て兵術数流見学するといへ共心に足れりとせず其中に鑢術は山本無邊組立置れたる理を万法に合て勝負は一理萬通なる事を悟又剣術技流の中に柳生一刀戸田堀内右四流の奥儀に予か工夫を助術して以て号鏡心明智流一流を案立す於茲技流為合を試に今日に至迄一度の其劣をとらず雖然予いま勝事を知らず只不負事は決定せりと思ふ也爰に海内の廣に人才ははかりなし猶東都は武術群集の地なれば今偶居を求めて茲に住す妙術の人来て我劣をとらは其席其人を師として数年の愚術を忽破ん事本願也右三年を待て不得其人時は多年工夫の流儀夫道に相叶仏神の擁護を以て万人得門家^ヲは其中に秀者は奥儀を傳え末世に流儀を残さん事を願ふもの也

安永二^{癸巳}三月 大禾源直由入道士流軒伴山

又曰此道を志願すれとも或は貧にして習学を得ざる輩ならば縦一紙の助力ならずとも敢て不厭此道に志を厚く問来ん事を

所書南茅場町裏通千川屋敷 桃井春蔵と御尋可被下候⁴⁸⁵

この額のおおよその内容は次の通りである。

私は50年かけて兵法を数流見て、学んだが心に満足することがなく、諸流の奥儀に自身の工夫を加えて、鏡心明智流という流儀を興した。今日まで試合を行って来て、未だ勝つ事は知らないものの、これまでに負けたことはない。この江戸は多くの武術家が集まる地であるから、今この地に住み、達人が来て、私が負ければ、その人を師として学ぶ一方で、自身の愚かな流儀はすぐに潰す、というのが本来の願いである。しかし、もし三年待ってそのような師を得ることができなければ、長年工夫した自身の流儀がその道に適っていたものとして万人に教え、その中に優れた者がいれば奥儀を伝え、後世に流儀を残すことを願う。またこの道を志願する者で貧しいために習うことが難しい者でも一向に受け入れる。

⁴⁸⁴ 綿谷雪・山田岳史『武芸流派大辞典』東京コピー,p.225,1978, 参照.

⁴⁸⁵ 『大禾一件』東京長沼正兵衛家蔵.

このような額を記し、大禾伴山は対戦者及び門人を募ったようである。しかし、この愛宕山の下の田村小路には長沼正兵衛の道場があった。直心影流の者たちは、「西ノ久保田村小路すべて此邊は御流儀充滿たる事なるに所こそあれ此愛宕山にかゝる額を其分にて差置事こそ安^{アツ}からね他流試は遠慮いたすべきのよし被仰渡しことなれとも後日の御^{トガメ}咎は兎も角も義を見てせざるは勇^{イサミ}なき也といふ本文もあればいかにもして此額をおろさせ^{アツハレ}適當流の眉目になさばや⁴⁸⁶」と、大禾・桃井がいる千川屋敷へ、直心影流の長沼正兵衛の門人である宇野三蔵、菊池伝次、大野喜亦が向かい、試合を行ったようである。

2. 長沼正兵衛一門 対 大禾・桃井親子の試合

直心影流の3名は千川屋敷で大禾伴山・桃井春蔵父子と面会した。宇野三蔵は「某等は赤坂黒鍬谷に居住仕るもの共也足下愛宕山へ獻せられたる額面を拝見致し乍憚頼母敷御事に存る間今日態々参たり趣意は某に幼年の一子有此ものをも御世話に預り度又同道いたしたる兩人は遠国の人にて某と同居致候か元より武芸修行のために出府被致候へとも不知案内の事なればいまだ師匠を求め得ず是等も御世話になりたきよし⁴⁸⁷」と、自身の子を入門させたいこと、また菊池伝次、大野喜亦も入門したいという旨を伴山に述べ、その剣術の実力を見せてほしいと伴山に頼んだ。つまり、入門するかどうかを見極めたいという口実のもと、試合を申し込んだということである。これは先に挙げた記述にあるように「他流試は遠慮いたすべきのよし」と正兵衛に申し付けられていたからであると考えられる。このような経緯で・菊池伝次・大野喜亦の両名は桃井春蔵と試合を行った。

(1) 道具着用の試合

＜菊池伝次 対 桃井春蔵の試合＞

はじめに菊池伝次と桃井春蔵が立合った。以下がその試合内容である。なお、この試合は「但面小手撓共に先方にて借用す⁴⁸⁸」と大禾道場のしない、道具を借用して行ったようである。

⁴⁸⁶ 『大禾一件』東京長沼正兵衛家蔵.

⁴⁸⁷ 『大禾一件』東京長沼正兵衛家蔵.

⁴⁸⁸ 『大禾一件』東京長沼正兵衛家蔵.

表 3-8 菊池伝次 対 桃井春蔵の試合

記述	解釈	勝敗と打った部位
相寸也、春蔵は八相にかまへ、傳次は上段にとりて、互にしばしつり合しが傳次がすゝんで春蔵が左の小手を打ち、返す太刀に右の小手を打たり、参たと声をかくれば、春蔵いかにも参たる由申す、此勝負此方式本のかち也	同じ長さのしないで、桃井春蔵が八相に構え、伝次は上段に構えた。しばらく均衡を保っていたが、伝次が間を詰め、春蔵の左の小手を打ち、さらに返す太刀で右の小手を打った。	伝次の勝ち 伝次：左小手・右小手
伴山小撓にて致すへきよし申すにより、此度は春蔵短刀也、春蔵小撓を立青眼にとる、傳次かまへ前の如し、春蔵入んとす処を左の小手を打たり、	大禾伴山が春蔵に短いしないで用いるように言ったため、春蔵は短いしないで用いた。春蔵はしなを立て正眼になり、伝次は上段。春蔵が入ろうとしたところを伝次が左小手を打ち、勝った。	伝次の勝ち 伝次：左小手
其後は春蔵が左右の小手足などを打たり、皆此方の先にて有けれ共、春蔵うたれなから入込みたりされ共、入りたる斗りにて組留せず、突もいたさざるゆへ、皆無勝負のよし	伝次は左右の小手、足などを打ったが、すべてこちらから仕掛けて打った技であった。春蔵は打たれながらも間を詰めていったが、ただ入るばかりで、伝次の勢いを止めるまでには至らず、突きも出さなかったようである。	決着つかず 伝次：左右の小手・足

この試合の結果としては「都合此方より三本あたり春蔵までは一本も不参⁴⁸⁹」と、伝次が小手を 3 本打ち、勝ったという。伝次が打った技をみると、すべて、自ら仕掛けた技である。右小手については、返す太刀によって打った技であると述べられているが、これは、左小手を打った勢いでそのまま右小手を打ったと解することができ、相手の打突を返して打った技ではないと考えられる。

<大野喜亦 対 桃井春蔵の試合>

次に大野喜亦が春蔵と立ち合った。以下が試合の記述である。

⁴⁸⁹ 『大禾一件』東京長沼正兵衛家蔵。

表 3-9 大野喜亦 対 桃井春蔵の試合

記述	解釈	勝敗と打った部位
次は喜亦立合也、喜亦上段春蔵八相、喜亦すゝんで春蔵が左の小手を打	喜亦は上段に構え、春蔵は八相に構えた。喜亦は間合を詰めて春蔵の左小手を打った。	喜亦の勝ち 喜亦：左小手
構同前、此かたより春蔵が小手を打たれ共、打れながら入らんとす、先は参りしと詞をかけしが無勝負になりたり	構えは前と同じ。喜亦が春蔵の小手を打ったが、春蔵は打たれながらも入ろうとした。	決着つかず 喜亦：小手
同断、此度は暫く釣合、喜亦すゝんで、春蔵が真向を打	構えは前と同じ。しばらく均衡していたが、その後喜亦が春蔵の真正面を打った。	喜亦の勝ち 喜亦：正面
同断、春蔵入んとする所を、喜亦左より右のかたへかけ、剣の如くはらいしゆへ、すゝみ得ず退んとする所を割付たり	構えは前と同じ。春蔵が入ろうとしたところを喜亦が左から右の肩にかけ、まるで太刀を払うかのように打ち、春蔵が進めなくなり、引いたところを喜亦が割るように打った。	喜亦の勝ち 喜亦：部位不明
春蔵切先青眼、喜亦上段 又喜亦春蔵が真向を割付たりが都合四本ノ勝也、兩人にて七本打たり	春蔵が「切先青眼」に構え、喜亦が上段であった。喜亦が真正面を割るように打った。	喜亦の勝ち 喜亦：正面

5 回行われた立合いのうち、4 回喜亦が勝利している。結果、伝次と喜亦二人で、伝次と合せて 7 本春蔵から勝ちを得たということである。

喜亦が打った技についてみると、このときもすべて仕掛け技によって勝利している。打った部位については正面と小手が確認できる。

このとき行われた、菊池伝次対桃井春蔵、大野喜亦対桃井春蔵の試合は春蔵に 1 本も勝ちを与えることなく、直心影流の両者が勝ったようである。

(2) 素面・素小手での試合

後日、庄田伴左衛門、荻谷官左衛門、大野喜亦、井口弥吉、宇野三蔵の 5 名で再び、大禾の道場に向かい、今度は他流試合という形式で試合を挑むこととなる。これらの試合は「他流の事なれば素面素小手⁴⁹⁰」と伴山が望んだため、以下の試合は道具なしで行われたようである。

⁴⁹⁰ 『大禾一件』東京長沼正兵衛家蔵。

＜大野喜亦 対 桃井春蔵の試合＞

はじめに、前回の試合同様、大野喜亦と桃井春蔵の試合が行われた。この試合については、勝負の結果について記されていないため、打った部位をそれぞれ記しておきたい。

表 3-10 大野喜亦 対 桃井春蔵の試合

記述	解釈	打った部位
喜亦上段、春蔵両刀 春蔵左に長撓の身を握り、右に短撓をとり青眼にとり、両刀打ちがへて立向ふ、喜亦すゝんて、春蔵が真向へ打込む所を春蔵うけ留めて、入んとするを喜亦返す太刀にて春蔵が右の小手を打つ、うたれながら其撓にとり付、喜亦が首を打たり	喜亦は上段に構え、春蔵は左手に長いしない、右に短いしないを持ち青眼に構えた。喜亦が真正面に打込む所を春蔵が受け止め、入ろうとするところを、喜亦は返す太刀で春蔵の小手を打った。春蔵は打たれながら、そのしないにしがみ付き、喜亦の首を打った。	喜亦：真正面・返す太刀で小手 春蔵：首
構同前、喜亦進んで、春蔵が首を挟剣にて左右の横面を四手肥もはさみ付たるゆへ、春蔵耳より血流る、され共又喜亦が撓にとり付しを、喜亦突倒して打たるを、春蔵応して起上り、喜亦が首を打	喜亦が春蔵の首を挟んだ後、左右の面をはさんだところ春蔵は耳から流血したが、春蔵が喜亦の竹刀にすがりつく。喜亦はそれを突き倒して打つが、春蔵はそれに応じて喜亦の首を打った。	喜亦：首を挟み、その後、左右の面を挟む 春蔵：首
相寸喜亦上段 春蔵八相 春蔵すゝんて、喜亦が右のかたへ打太刀を、喜亦応して春蔵か右の腹へ打込んだり、春蔵打れながら撓をとらへて、喜亦が首を打たり	春蔵は進んで右の肩を打つ、喜亦はその打ちに応じて右の腹に打ち込む。春蔵は打たれながらも喜亦の首を打つ。	喜亦：春蔵の打ちに応じて右腹 春蔵：首

この試合において喜亦が打った技に着目すると、はじめに春蔵の真正面に打ち込んでいゝる。その打ちを春蔵が受け止め、間合に入り込もうとするが、そのときに喜亦はしないを返し、小手を打っている。この技についても相手の打ちを返した技ではなく、自ら手の内を返し、打った技であると考えられる。しかし、最後の立合において、喜亦は春蔵の攻撃に応じて右腹を打っている。この技については相手に対して応じた技であると考えて良い。

また、喜亦は相手の首、左右の面を挟むという攻撃を行っているが、これがどういった技であるかは不明である。

＜庄田伴左衛門 対 桃井春蔵の試合＞

次に庄田伴左衛門と桃井春蔵の試合についてみていくこととする。この試合の記述・解釈をまとめたものが次の表 3-11 である。

表 3-11 庄田伴左衛門 対 桃井春蔵の試合

記述	解釈	打った部位
伴左衛門上段、春蔵八相、相寸也、伴左衛門春蔵が右の肩を打、三寸ほど赤く腫たり	庄田は上段、春蔵は八相に構え、しないは同じ長さのものである。庄田が春蔵の右肩を打ち、3 寸ほど赤く腫れた。	庄田：右肩
同じばしつり合伴左衛門春蔵が真向を打参たかと詞をかくれは春蔵いかにも参りしと答ふ	構えは同じでしばらく均衡していたが、庄田が春蔵の真正面を打った。	庄田：真正面
同伴左衛門春蔵が真向へ打込を春蔵応して入んとす所を突倒せしゆへ春蔵庭へ落たり	構えは同じ。庄田が春蔵の真正面へ打ち込むのを春蔵が応じて入ろうとするところ、突き倒し、春蔵は庭に落ちた。	庄田：真正面・突（部位不明）
同此度は春蔵血眼になり猪牛の怒りたる如く入ん入んとすゝみ寄る所を伴左衛門ぢりぢりと引しさりてえいと声をかけて春蔵が真向を割付けたり	構えは同じ。春蔵は血眼になり、猪や牛が怒ったかのように入ろうとして進んで来るところを庄田はじりじりと引いて「えい」と声を掛け、春蔵の真正面を割るように打った。	庄田：引いて真正面

この試合はすべて庄田が打っており、打った部位としては、右肩、真正面が確認できる。また、庄田は春蔵が間合に入ろうとしたところを突いている（部位は不明）。

特に注目しておくべきは、春蔵が怒り、入ってきたところを引いて、面を打った技である。

＜庄田伴左衛門 対 大禾伴山の試合＞

最後に庄田伴左衛門と大禾伴山との試合をみておきたい。この試合の記述・解釈をまとめたものが次の表 3-12 である。

表 3-12 庄田伴左衛門 対 大禾伴山の試合

記述	解釈	打った部位
庄田上段 大禾小撓、相寸にて可致由、庄田氏度々申候へ共、重而相寸にて立合可申、拙者小撓の方得手に候へば、今日は何分御用捨可被下のよし申により、かくの如し、大禾右手に小撓をとり、左足を先立左の手を差出し、偏身にかまふ、庄田大禾が左の腕を打たり、打れながら、庄田が頭へ打込むを応して返す太刀に大禾が左の脇腹へ打込たり、大禾打れながら、撓をとらへて、庄田が肩を少し打たり	庄田は上段に構え、大禾は短いしないで立合った（庄田は相寸のしないで立合うように述べたが、大禾は短いしないの方が得意だということを取り合わなかった）。 大禾は右手にしないを持ち、左足を前に出し、左手を差出し、単身に構えた。庄田は大禾の左腕を打った。大禾は打たれながら庄田の頭へ打ち込むが、庄田はその打ちを返し、大禾の脇腹を打った。大禾は脇腹を打たれながらもしないを押さえて庄田の肩を少し打った。	庄田：左腕を打った。 大禾の打ちを返し、脇腹を打った。 大禾：庄田のしないを掴み、肩を打った
同 庄田進んで大禾が真向へ打込を大禾応して庄田が撓の刃の所をとらへ頭を打んとするを庄田右へひらく此時かすり剣少々庄田が横こびんへあたる軽しと声をかけて大禾が頭へ打込む	構えは前と同じ。庄田が進んで大禾の真正面へ打ち込むのを大禾が応じて庄田のしないの刃部をとらえて頭に打ち込もうとするところを庄田は右へ開いた。この時しないがかすり、庄田の横のもみあげのあたりに当たったが、庄田は軽いと言い大禾の頭へ打ち込んだ	庄田：頭 大禾：頭へ打ち込んだが、かすった。
同 庄田大禾が眉間 ^{ママ} へ打込を大禾応しながら亦撓の刃に取付んとすこと声をかけて大禾が右の脇腹へ打込み体をつめんとする所を撓にとり付庄田か首を打たり	構えは前と同じ。庄田は大禾の眉間へ打ち込み、大禾は応じながら庄田のしないの刃部にすがりつこうとした。庄田は声をかけて大禾の右の脇腹に打ち込み、体を寄せようとしたが、大禾がしないにしがみ付き庄田の首を打った。	庄田：眉間に打ち込む 右脇腹を打った 大禾：首

庄田が打った部位としては、左腕、脇腹、頭、真正面、眉間、右脇腹などの記述が確認できる。また、はじめの立合で、庄田は大禾の打ちを返し、脇腹を打っており、相手の動きへ対応していることが窺える。

以上、長沼正兵衛一門と大禾伴山・桃井春蔵親子の試合の記述を検討してきたが、直心影流の剣士の打った技をみると、全体的に仕掛け技が多いものの、相手の打ちを返して打つ技や、相手が進んできたところを引いて打つ技などの応じ技もみられ、これらの技を駆使し、試合を行っていたと考えられる。また、打つ部位としては、頭部・腕部が多い

が、その他にも腹部、足、肩などの記述も確認できる。

そして特に特筆しておくべきは、直心影流の剣士の構えが全て上段であることである。『大禾一件』の記述からも、前節で取り扱った『神道無念流剣術心得書』『剣法秘訣』にみられたように、直心影流が上段の構えを主体としていたことが窺える。

第二項 藤川弥司郎右衛門近義の試合

次に藤川派の祖とされている藤川弥司郎右衛門近義の試合の記述を検討していくこととしたい。

1. 鈴木弥藤次について

まず、はじめに近義の試合相手であった鈴木弥藤次の人物像について『三州遺芳 卷四』からみていくこととしたい。

鈴木弥藤次藤賢

鈴木弥藤次藤賢ハ、野州烏山ノ産也、諱藤賢、通称弥藤次、初メ江戸ニ住ス、後チ薩州鹿児島ニ移ル、父ハ理左衛門ト号ス、理左衛門二男一女アリ、長子十次郎、次男ハ弥藤次也、(中略)藤賢ハ、始メ武州ニ住スル時、永井伊賀守ノ家臣、長沼四郎左衛門国郷、江戸西久^(ツマ)ニ住ムノ門ニ入り、直心影流ノ剣法ヲ学ビ、幼ヨリ関口流心流ノ拳法ヲ壺川圓蔵教心ニ学ビタル人ナリ⁴⁹¹

鈴木弥藤次は野州烏山に生まれ、後に鹿児島に移り住んだという。父は理左衛門といい、弥藤次はこの人物の次男である。弥藤次は「藩主島津重豪公ノ時ニ、定府ト為リ事ヘテ守邸属吏勤務タリ、夫^レヨリ供目附役ヲ拜命ス、時ニ安永二年、己六月廿五日ナリ⁴⁹²」とあるように、藩主が島津重豪のとき、江戸に定住することになり、屋敷警護の役人となった。その後安永2年(1773)には供目附役になったという。弥藤次は、武州に住んでいるときに長沼四郎左衛門国郷に就き、剣術を学んだという。

次に、弥藤次が直心影流の長沼四郎左衛門国郷に入門した経緯について考察しておきた

⁴⁹¹ 『三州遺芳 卷四』(渡辺一郎編『武道伝書聚英 第十二集』所収) 宇都宮大学教育学部,p.60,1990.

⁴⁹² 『三州遺芳 卷四』(渡辺一郎編『武道伝書聚英 第十二集』所収) 宇都宮大学教育学部,p.62,1990.

い。

藤賢始メ、諸流義ノ立合ニ薄ラレ、意ノ如ク勝チタル事アリキ、長沼国郷ノ所ニ抵リシニ、偶々出会セシ門人ト仕合セシ処、門人ヨリ撃タレシヲ感心セシニ因テ入門シテ、昼夜演武ヲ研精ス、門人三千許アリ然トモ、内三千人ハ、上手ニテ、其内僅カ三年間修行ヲ歴テ蘊奥ヲ悟リ、年三十三ニシテ遂ニ皆伝ヲ受ケタリ、先ニ、入門セシ達芸ノ藤川弥司郎右衛門ハ、藤賢ヨリ年少ノ人ニテ、藤賢ヲ打タル人ハ、盡藤川也ト弥司郎右衛門ハ土岐美濃守家臣ニテ、小男ニテ、剣術ノ上手ナリ⁴⁹³

弥藤次は、はじめ諸流と立ち合いをすることを求め、思いのままに勝ち続けたが、長沼四郎左衛門国郷の道場に訪れた際、偶然出会った門弟と試合をし、打たれたという。これに感心し、国郷の道場に入門したということである。弥藤次は昼夜修行に励み、33歳にして免許皆伝となったようである。そして弥藤次を打ったこの人物が藤川弥司郎右衛門であったということである。したがって、本項で取り扱う記述は、弥藤次が直心影流に入門する契機となった試合である。

2. 藤川弥司郎右衛門近義 対 鈴木弥藤次の試合

それでは、両者の試合の記述を検討していくこととしたい。この試合については藤川整斎が著したとされる『整斎随筆』にみられる。

弥司郎右衛門は小男なり、弥藤治者大兵、剛気成、強^レ体成人にて、中々およぶべき有様とも見へず、然れ^{しか}と多年修行此所^{(ど) たねん このところ}に有^まと思ひ、上段より真向^{まっこう}へ打込^{うちこみ}、太刀違はず、弥藤治^(が)が頭上に当たりたり、弥藤治も上段より打出て、太刀先^(い)と^(ず)かすして、下まで打落したりも、太刀直に己^{すぐ おのれ}の方まで打込みたる、太刀当^{あた}んとせしに、彼小男故^{うち}、打込^こ太刀、と度に体つまり、とめかたき、終に打負たりと弥藤治か打おろしたる太刀、弥司郎右衛門か股合に抜けれ^{またあい (ば)}は、其振上る勢ひと一^{みとり}とうに見取、其上まで横十^{よことお}まに飛びたるとや、此業^{このわざ}にて感心したく、自分は云ふに不及^{およばず}、我、門人百四五十^{いそど}雖も、百連^{つれ}きて四郎左衛門か門人としてなりぬ、後日、其時之勝負の物語りせしとき、弥藤次打おろしているや真向を打つ其俥^{そのまみとり}見取にて飛上りたるとそ奇業といふ、弥司郎右衛門か云

493 『三州遺芳 卷四』（渡辺一郎編『武道伝書聚英 第十二集』所収）宇都宮大学教育学部, pp.60 - 61, 1990.

横に飛ひたるは、全く足元の^{とうさき}鞆先を、振上たる勢ひに乗りて飛ひたりと語る⁴⁹⁴（読点、
返り点、ルビ筆者）

この記述について「^{このことかねて}此事兼而弥司郎右衛門直話とて高弟の赤石郡司兵衛孚祐といふもの
聞伝へたるとて物語りたるを記し⁴⁹⁵」（ルビ筆者）と整斎は述べており、この話は整斎の後
見役で近義の高弟であった赤石郡司兵衛孚祐から聞いたものであることが窺える。

まず、近義と弥藤次二人の体格差について記されており、近義は小さい男であったが、弥
藤次は非常に大男で気性が猛々しく、身体も丈夫であったという。同書では、弥藤次の力
の強さを、「弥藤治は八人力ある剛の者⁴⁹⁶」と述べており、その力の強さを「其八人力いか
にといふに水溜桶の取替之節人夫八人にてこぶしつるを只一人にて取扱するとかや⁴⁹⁷」と
述べている。さらに、「中々およぶべき有様とも見へず」と記されていることから、身体
面においては弥藤次が非常に優位であったことが窺えよう。

さて、試合は近義が上段から真正面に打ち込むところからはじまる。この打ちは弥藤次
の頭に当たったという。打たれた弥藤次も反撃に出て上段から打って出るが、太刀先が届か
ず、下まで打ち下ろしてしまう。しかしそのしないをすぐに戻し、再び近義に向かって打
ち込んだ。彼は小柄であったため、打ち込まれる太刀によって隅に追い詰められていき、
止める事が出来なくなった。しかし、「ついに打ち負かした」と弥藤次が打ち下ろしたしな
いは近義の股の間に抜け、弥藤次がしないを振り上げる勢いを見定め、横に跳んだという。

そして、弥藤次はこの技に感心し、自身の未熟さを自覚し、門人約 150 人と共に国郷に
入門したということである。

弥藤次は近義の素早い身のこなしを非常に称赞したようである。このことは、『三州遺芳』
に「演撃場ノ隅ニ追イ詰メラレタル時ハ、業至テ宜ク然トモ先ヲ打事不得手ニテ是レガー
ツノ疵ナレトモ、先ヲ受テモ中々打損スル事鮮クト云フ、藤賢如此讚称ス⁴⁹⁸」と述べられ
ていることから窺えよう。弥藤次は近義について、道場の隅に追い詰められてから、出
ず技は非常に素晴らしいが、自ら仕掛けて打つことが不得意であると分析していたよう
である。これは、同書に「藤川ハ初太刀先ヲ合セテ打人ニテ、兼テ藤川ヨリ自分ニハ先ヲ受
ケテ打チシ事ガ得手ニテ仕付、然トモ自分程ニ仕得レトモ、是ハ宜シカラスニ付必ス門弟

494 『整斎随筆』国立公文書館蔵。

495 『整斎随筆』国立公文書館蔵。

496 『整斎随筆』国立公文書館蔵。

497 『整斎随筆』国立公文書館蔵。

498 『三州遺芳 卷四』（渡辺一郎編『武道伝書聚英 第十二集』所収）宇都宮大学教育学
部,p.60,1990.

中ニハ先ヲ受ケス、先ヲ第一ト打タルベキ先ヲ請ケル義ハ屑トセザル事ニテ最モ流儀ノ本意ニ有アラスト毎ニ口陳スル処也⁴⁹⁹」と記されていることから、近義自身も自覚していたと考えられる。この記述によれば、近義は相手が仕掛けて来るところに打つことは得意であるが、これは流儀の本意ではないとし、自身の門弟には相手の技を受けるのではなく、みずから仕掛けて打つように説いていたようである。

前項で見てきた長沼正兵衛一門の記述から、直心影流では仕掛け技を多用していたと考えられるが、藤川弥司郎右衛門近義は相手が仕掛けて来るところに合わせて戦うことが得意であったと考えられる。

本項では藤川弥司郎右衛門近義の試合について考察を行ってきたが、藤川弥司郎右衛門近義も上段に構え、試合に臨んでいる。また、その身体的身軽さは、立合った鈴木弥藤次が感心するほどであったという。ここでも直心影流の特徴である、上段の構え、素早い身のこなしが確認できる。

第三項 『加藤田平八郎東遊日記抄』にみる男谷派の試合

本項では、加藤田平八郎一門と直心影流・男谷精一郎一門の試合をみていくこととする。まず、加藤田平八郎とその廻国修行について簡潔に触れておきたい。

1. 加藤田平八郎とその廻国修行

加藤田家は父祖以来代々久留米藩の剣術師範の家である。平八郎は重秀といい、加藤田十内の次男であり、久留米藩剣道師範加藤田新八の門に 11 歳の時に入り、修行を重ね、16 歳で新八の養子となった。天保 8 年（1837）頃家督を相続し、養父没後、長い間子弟の教育に努めたという。

平八郎は文政 12 年（1829）22 歳の時、筑前秋月藩を初めとして豊前・豊後・西国・中国・畿内・近江・伊勢等 20 か国を廻国修行し、998 人と試合を行い、藩に帰ったという。さらに天保 9 年（1838）31 歳の時には、門弟の中山倉次郎と立石市蔵を伴い、江戸に出て窪田助太郎・男谷精一郎その他数十人と試合を重ね、九州にこの人ありと知られた。本節で取り扱う記述は、この天保 9 年の廻国修行における他流試合の記述である。彼の門弟と

⁴⁹⁹ 『三州遺芳 巻四』（渡辺一郎編『武道伝書聚英 第十二集』所収）宇都宮大学教育学部,p.60,1990.

しては園田圓齋・武藤為吉・松崎浪四郎・梅崎弥一郎などがいる⁵⁰⁰。

2. 男谷精一郎一門 対 加藤田平八郎一門 の試合

それでは、『加藤田平八郎東遊日記抄』の記述より、男谷精一郎一門と加藤田平八郎一門の試合の記述をみていくこととしたい。

(1) 男谷精一郎 対 加藤田平八郎一門

はじめに、男谷精一郎と加藤田平八郎の試合をみていくこととしたい。

同月八日、男谷参り、鳥取文吉、真里谷太郎者試合見物に参出、出席凡百二三十人、玄関上り口より群居門人之膝之上を跨り、先に通、精一郎殿へ面会、挨拶終り、直に支度致候処、精一郎殿真先に支度、加藤田さん御支度済候口願ひまじやうと被申候に付、直ちに支度立合候処、惣丈四尺に不足、丈夫成撓に而、下段之構に而、予を被遣候故、無心に而突を入候処、下面に睨⁵当候に付、参たと被申、又矢張同様に而、面を明け突処を刎、跡之面をと心掛られ候処、三本目迄同様突候に付、直に四本目高誓眼に直り、間合に而、籠手を被懸候処を抜て、面之垂を突候得者、体板張に而留申候、四本迄は無疵に而勝を付、五本目より勝負出入も無之凡十本に而相済候⁵⁰¹

男谷精一郎との試合は 120～130 人程の見物人がいる中で行われたようである。

男谷は全長 4 尺に満たない丈夫なしないを持ち、下段に構えたという。このような様子の男谷に対し、加藤田は無心で突きを放ったところ、男谷の面の下部にしっかりと当たったため、男谷は「参った」と述べたという。次の立合においても男谷は面を空けて構えている。加藤田は、男谷がこのような様子であったのは「面を明け突処を刎、跡之面をと心掛られ候」と、面を空けておき、加藤田が突いてきたら、しないを弾き飛ばして、そのあと面を打とうという目論見であったと分析している。このような男谷に対し、加藤田は 3 本目まで同様に突いたということである。その後、4 本目に入ると、男谷は高精眼（誓眼）に構え直したようである。そして男谷が小手を打ってきたところを加藤田が抜いてかわし、男谷の面の垂を突いたという。男谷はその突きをうけ、身体が板張についたという。加藤田は 4 本目まで無傷で勝ったと述べており、その後 5 本目以降は勝負が着かなかったという。本数としては、おおよそ 10 本程試合を行ったという。

⁵⁰⁰ 富永堅吾『剣道五百年史』（復刻新版）島津書房,p.371,1996,参照.

⁵⁰¹ 『加藤田平八郎東遊日記抄』写，鈴鹿家文書,全日本剣道連盟蔵.

次に、男谷精一郎と加藤田の門弟である中山倉次郎の立合の描写についてみていく。この立合は先に挙げた男谷と加藤田の試合に続いて行われたものである。

倉次郎⁵⁰²試合の節は、初より待に而、調子下り候に付、一本も留り不申候、板張江幾遍か突付く処、よいとこよいとこと被申、竟に待に而相済候、倉次郎若輩故見当違に而過ち也候⁵⁰²

倉次郎との試合では、男谷は始めから倉次郎が仕掛けてくるのを待ち受けており、倉次郎は一本も当てることができなかったという。倉次郎が板張りに向かって男谷を突いたところ、男谷は「良い所、良い所」と述べて、遂に一本も打たずに終わってしまったという。

この試合では男谷は倉次郎に対して一本も打突しておらず、また倉次郎の突きに対して「良い所」と称賛をしている。試合というよりも倉次郎の技量を見極めるために立ち合ったようである。

（2）島田虎之助 対 加藤田平八郎一門

次に島田虎之助と加藤田平八郎一門の試合についてみていくこととする。

はじめに7月1日の記述から島田虎之助と加藤田平八郎の面会の様子からみていきたい。

七月朔日中津島田虎之助参、同藩長沼武三右衛門門人一刀流ニ而、九州筋二遍も回歴致し、其末只今男谷精一郎殿塾長也、剣術達者に而、至強情者ニ而、諸師家大ニ恐怖致、試合断候所多有之由、虎之助挨拶頃日上総^江取建に罷越頃日帰候処、御出府之義承不取敢御尋申上候、予ニ挨拶久振ニ御面会致候喜、扱近年格別御上達之由承申候、我輩昨今不察ニ付、御引廻御依頼申候、挨拶終り^{きて}諸兄は只今撓長さ何程と尋候処、僕は唯今鏢先二尺八寸に定丁度宜御座候、先生は如何、野生は鏢先三尺貴兄より二寸程長く然る時は格別御上達感心候、兎も角も久振御手合申候而は如何、虎之助至極御同意、然は明三日ニ可然出^与致約束引取候⁵⁰³

まず、虎之助について「只今男谷精一郎殿塾長也」と述べていることから、この当時、島田虎之助が男谷精一郎道場の塾頭を務めていたことがわかる。加藤田は虎之助について、剣術が達者で、強情な者であったため、虎之助を恐れ、試合を断る流派が多かったと述べ

502 『加藤田平八郎東遊日記抄』^写，鈴鹿家文書，全日本剣道連盟蔵。

503 『加藤田平八郎東遊日記抄』^写，鈴鹿家文書，全日本剣道連盟蔵。

ている。また、「予ニ挨拶久振ニ御面会致候喜」「兎も角も久振御手合申候而は如何」（下線部筆者）などの記述から、両者は以前から面識があり、立合も行っていたようである。

この時、加藤田は虎之助にしないの長さについて質問をしている。島田虎之助は鐔先が 2 尺 8 寸であると答え、加藤田に問い返すと、加藤田は鐔先 3 尺で、虎之助より 2 寸長いと述べ、その後、後日立合を行う約束を取り交わしている。

それでは、島田虎之助と加藤田平八郎の試合からみていくこととしたい。

七月三日島田虎之助上総生耆人、道具為持参候ニ付、直に稽古場へ連行、一番に予立合申候、全体此虎之助は至而強情、手荒遣手故、予は又至而手軽く遣、初太刀籠手を軽く撃引揚候処、軽しと云て両手に而予胸を烈敷突候故、土間に被突落候得共、^{たお}殞れは不致、静々本の坐に直り、帋サン後ハ、御免当り所に寄恠我するよと云成りに、構へ、さあ爰而は如何様に強突ニ而も苦しからすと云は、例之癰に障り、咬付を為し、素咽坎脇腹坎強剣一本と進み来処を、愈々気を清し軽く切て引揚、二間計跡へ引、後は御免と声掛候故、一間計追懸来り、致方なく後に引、本の座へ附、顔色打変、咬付弥勁敷八本迄遣候処、幸耆本も當り不申候に付、同人極不平に而交睫数して、如何にも残念之様子也⁵⁰⁴

まず、虎之助は強情で手荒な遣い手であったために、加藤田は素早い動きで立合ったという。初太刀、小手を軽く打ち、引上げたところ、虎之助は「軽い」と言い、諸手で加藤田の胸を激しく突いたという。加藤田は土間に落ちたが、倒れはしなかったようである。静かに元の位置に戻ると、虎之助が「御免、当たり所によっては怪我をするよ」と言ったため、加藤田は構えて、「どのように強く突いても問題ない」と言い返したところ、虎之助は腹を立て、くっつかかり、喉、脇腹を強く打とうと進んできたという。加藤田は気を澄ませ、軽く打って引上げ、2 間ほど後へ引き、「後は御免」と声を掛けたところ、1 間ほど追いかけてきたため、仕方なく、後に引いて元の位置に戻ったという。虎之助の顔色は変わり、くっつかかり、その後 8 本ほど立合ったが、虎之助の攻撃は一本も当らなかったようである。虎之助は極めて不満そうで数回瞬きをし、いかにも残念そうであったという。

このあとに、虎之助は加藤田の門弟の中山倉次郎・立石市蔵と試合を行っている。

次に倉次郎立会候処、一旦気障挫け候故、是又歩合極悪敷、此試合中に上総より召連

⁵⁰⁴ 『加藤田平八郎東遊日記抄』^写、鈴鹿家文書、全日本剣道連盟蔵。

候者、大に致驚駭、阿之御方は御歳は幾つと尋ね候故、廿二と答候得バ、誠に珍敷御遣手^与大に感服之模様、帋之助は江戸第一と申評判ニ而、大に信仰致せし故也、次に市蔵立会候処、是も同四五本遣候処、一本も当り不申候、虎之助予か前に参り、撓を貸呉候様申聞候に付、予云、一旦撓之寸尺定、今日勝負之悪敷迎、寸延之撓被借候は、甚鄙見識也^与戒め、是は戯也との、撓に而も宜候間、御遣可被成^与二本差出候得者、二本共ニ素振して是を借用^与堤行立会候処、差而相変義も無之、極不出来也、三試合ニ而相済⁵⁰⁵

まず、虎之助は倉次郎と立ち合う。しかし、先の加藤田との試合で一度気が挫けていたため、歩合は悪かったという。次に市蔵と 4、5 本試合を行つたが、虎之助の攻撃は一本も当らなかったという。虎之助は加藤田の前に出て、しないを貸してくれるように頼んだ。これに対して加藤田は、しないの長さを決めたにも関わらず、本日の勝負の歩合が悪いからといって、長いしないを借りるというのは極めて卑しい見識だと批判し、ここからは遊びだと言い、しないを 2 本差し出した。虎之助は 2 本のしないで素振りをして、そのうちの 1 本を借りて立合ったが、大して変わらず、極めて不出来であつたという。

(3) 男谷精一郎一門 対 加藤田平八郎一門

虎之助との試合から 4 ヶ月後、加藤田平八郎一門は、再び男谷精一郎の門弟と試合を行っている。以下がその記述である。

十一月五日男谷門人、江州膳所藩、小野源太次郎、波多野左馬助、塚越軍治同道ニ而、申込候ニ付、密ニ姓名録開見候処、源太郎男谷導場ニ而立会候者ニ候得共、何々日に当り候程之事も無之候間、並下通之人^与相心得立会候処、左右より劇敷片手突を入、其突能延而速成候故、三四本被突、甚手際也、市蔵倉次郎も出来悪敷、三人共残念ニ存候得共、頓^与致方無之、其後男谷門人ニ源太次郎先日参候節、散々被突大弱りと話候得共、十手茂左様之義は有之間敷、併同人義は極執心ニ而元来ニ男ニ而御座候処、格別出精之御廉を以肥前候より別家ニ被取立候人ニ御座候由相話候⁵⁰⁶

はじめに小野源太次郎⁵⁰⁷という人物が、以前、男谷道場において立合った男谷の門弟で

⁵⁰⁵ 『加藤田平八郎東遊日記抄』^写、鈴鹿家文書、全日本剣道連盟蔵。

⁵⁰⁶ 『加藤田平八郎東遊日記抄』^写、鈴鹿家文書、全日本剣道連盟蔵。

⁵⁰⁷ はじめに「小野源太次郎」と、その後に「源太郎」と記されている。本書巻末に「剣術師家並ニ上等之門人大略」と題し、有名な剣士とその門弟について名前が記載されている。

あるということに注目しておきたい。そして加藤田は、源太次郎を大したことの無い人物だと思い、立ち合ったという。源太次郎は左右から激しく片手突きを打ち、その突きがよく伸び、そして速いものであったため、加藤田は3、4本突かれたという。平八郎だけでなく、弟子の市蔵と倉次郎も立合ったようであるが、二人の試合の出来栄も悪かったようである。

男谷精一郎一門と加藤田平八郎一門の試合は以上の通りである。記述から男谷が下段や精眼に構え、加藤田の突きをかわそうとしている様子、島田虎之助や男谷門下の小野源太次郎が突き技を多用している様子が窺える。これらの記述から、男谷精一郎一門の試合剣術は第一項でみてきた長沼正兵衛一門の試合、第二項でみてきた藤川弥司郎右衛門近義の試合と相当に異なった様相であったことが窺える。これは、第二節において取り扱った千葉周作の言説において、当時の直心影流が、流派で元来構えられてきた上段をとらなくなり、一刀流の下段や正眼に構える者が多くなったことを指摘しているが、男谷派の試合の様相からは、まさにこのことが窺えよう。また、この天保期は諸先行研究において、長竹刀が流行したため、突き技が流行したことが指摘されているが⁵⁰⁸、直心影流の剣士も突き技を多用していたようである。

本節においては、直心影流の他流試合に関する記述を検討し、いかに他流試合が行われていたか、考察を行った。

まず、長沼正兵衛一門と大禾伴山・桃井春蔵親子の試合において、直心影流の剣士は、仕掛け技を多く遣いながらも、相手の打ちを返して打つ技や、相手が進んできたところを引いて打つ技などの応じ技も行っている。打つ部位としては、頭部・腕部が多いが、その他にも腹部、足、肩などの記述も確認できる。この試合の記述で特に特筆しておくべきは、すべての試合において直心影流の剣士の構えが上段であることである。

藤川弥司郎右衛門近義の試合については、近義が上段に構えていることが確認できる。また、立合った相手が感心するほど、身軽であったようである。この試合においても直心影流の特徴である、上段の構え、素早い身のこなしが確認できる。

上記二つの試合においては、はじめに予想した通り、上段に構え、仕掛け技、応じ技を駆

この記述における男谷精一郎の門弟名の中に「小野源太次郎」という人物名が見られることから、「源太郎」は誤記で、「小野源太次郎」が正しい名前であろう。また、この門弟名の中に波多野左馬助の名前も見られる（『加藤田平八郎東遊日記抄』^写、鈴鹿家文書、全日本剣道連盟蔵、参照。）。

⁵⁰⁸ 富永堅吾『剣道五百年史』（復刻新版）p.307 - p.308,1996, 参照。

使して試合を行っていたといえよう。

しかし、男谷精一郎一門と加藤田平八郎一門の試合では試合の様相が大きく変化している。男谷精一郎については試合の中で、下段や精眼に構え、加藤田の突きをかわそうとしている様子が窺える。門弟の島田虎之助や小野源太次郎については、試合の中で突き技を多用している。これは、第二節において取り扱った千葉周作の言説において、当時の直心影流が、流派で元来構えられてきた上段をとらなくなり、一刀流の下段や正眼に構える者が多くなった、という指摘と一致しているといえる。

結節

本章においては、「十之形としない打ち込み稽古」と題し、直心影流のしない打ち込み稽古における基本技術の形である十之形の特徴、直心影流におけるしない打ち込み稽古の導入と特徴、直心影流の他流試合、という観点に基づき、考察を行ってきた。

ここでは、これまで考察を行ってきた中から技術的な点に焦点を絞り、十之形、他流から見た直心影流の特徴を「直心影流におけるしない打ち込み稽古の技術的特徴」とし、これらが他流試合においていかにみられるか、検討していく。

以下の図 3-13 は、直心影流におけるしない打ち込み稽古の技術的特徴が他流試合にいかにか現れているかを示したものである。

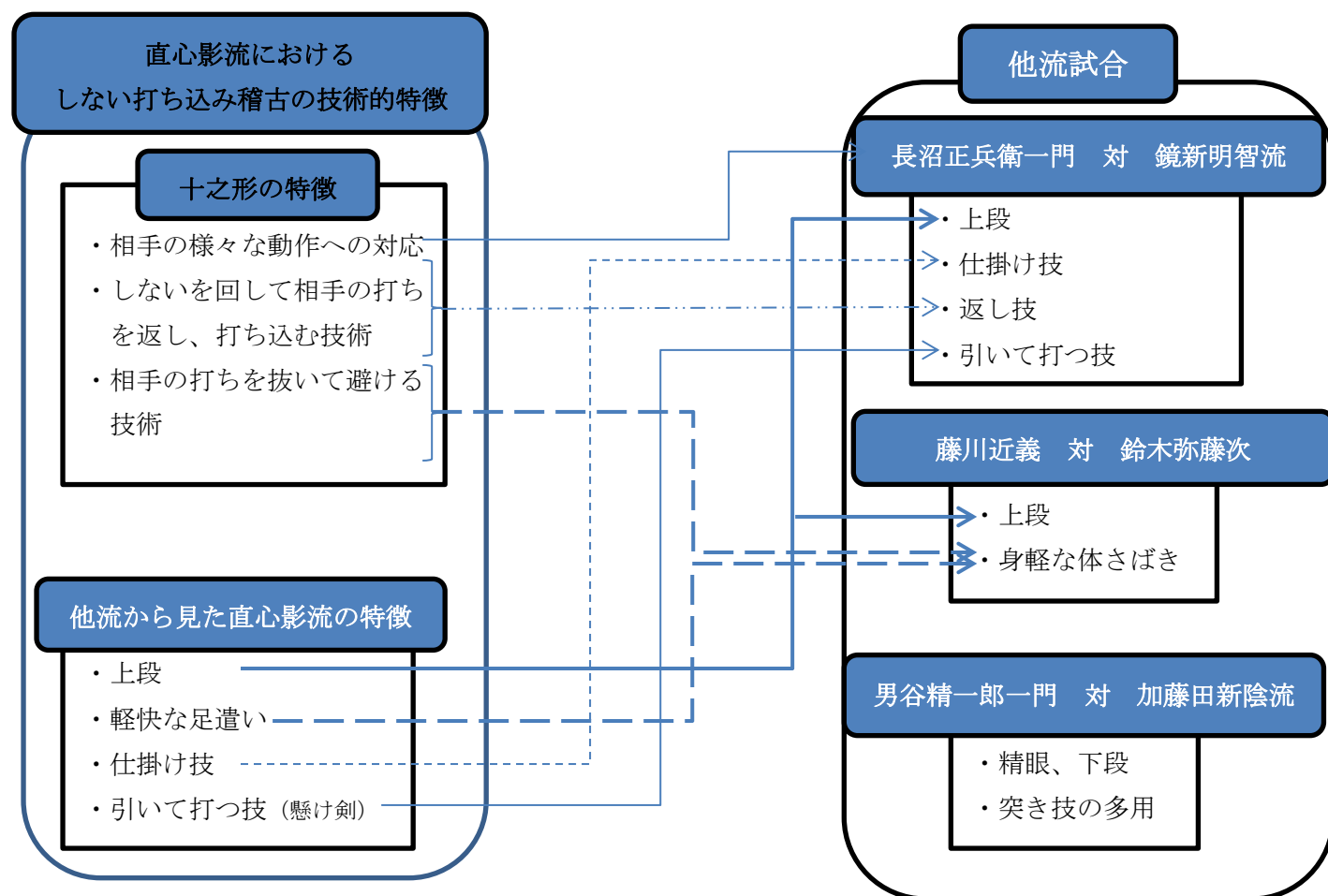


図 3-3 直心影流のしない打ち込み稽古の技術的特徴

以下、「十之形」と「他流から見た直心影流の特徴」に分けて述べていきたい。

＜十之形の特徴＞

十之形の技術的な特徴としては、①相手の様々な動作への対応、②しないを回して相手の打ちを返し、打ち込む技術、③相手の打ちを抜いて避ける技術、の三つが挙げられる。

①相手の様々な動作への対応は、十之形の中に左右で対になっている形や、4本で構成される形がみられることから明らかである。左右で対になっている形は、足遣い、打ち込む部位、構えなどが左右対称となっている箇所が多くみられる。また、4本で構成される「鉄破_{進退}」では、相手が仕掛けてきたとき、こちらが仕掛けていくとき、という二つの状況における修練が2本ずつなされる。このように、一つの形が複数本によって構成されており、これらの形を修練することで、しなない打ち込み稽古における相手の自由な動作に対応する力を養っていたと考えられる。この技術は長沼正兵衛一門と鏡新明智流との試合にみられる。この試合においては、鏡新明智流の大禾伴山・桃井春蔵父子がしなないの長短を使い分けながら、様々な構えをしている。このような大禾・桃井に対し、長沼正兵衛一門の剣士たちは、ほとんど打たれることなく、大禾・桃井を打っている。このことから、直心影流の剣士たちが、相手の様々な動作に対応できているといえよう。

②しないを回して相手の打ちを返し、打ち込む技術は、相手が深く打ち込んできた時に用いられる。これは、相手の攻撃を自分のしないによって受け止めつつ、相手の打ちの勢いを利用して、しないを回し、そのまま打ち込む、という技術である。この技術も長沼正兵衛一門と鏡新明智流の試合にみられ、直心影流の剣士である庄田伴左衛門が大禾伴山の攻撃を返して、脇腹に打ち込んでいる描写がみられる。

③相手の打ちを抜いて避ける技術は、相手の打ち込みが浅いときに用いられる。十之形の13本目「曲尺」では、相手の浅い打ちを上段に構えたまま、足を引くことで外している。この技術は藤川弥司郎右衛門近義と鈴木弥藤次の試合に現れていると考えられる。この試合では弥藤次の打ち込んだしないが近義の股の間に抜けるという描写をみることができる。これは近義の体さばきによってかわされたと考えられ、相手の攻撃を体さばきによって抜くという十之形の特徴が現れていると考えられる。

＜他流から見た直心影流の特徴＞

他流からみた直心影流の特徴としては、①上段の構え、②軽快な足遣い、③仕掛け技、④引いて打つ技、の四つが挙げられる。この中で、①②の上段の構え、軽快な足遣いは、本章で取り扱った『剣法秘訣』『神道無念流剣術心得書』の両書に確認でき、③④は『剣法秘訣』にみることができる。

①の上段の構えについては、長沼正兵衛一門と鏡新明智流、藤川近義と鈴木弥藤次の両試合にみられる。これらの試合において、直心影流の剣士は全員上段に構えている。直心影流においては上段の構えを中心として試合が行われており、この構えが当流の技術的特徴の一つであったことが窺える。

②の軽快な足遣いについては、他流試合に明確な記述をみることが出来ない。しかし、藤川近義と鈴木弥藤次の試合にみられる近義の身軽な体さばきは、このような足遣いによって可能であると考えられ、ここに直心影流の特徴が現れているといえよう。

③④の仕掛け技・引いて打つ技については長沼正兵衛一門と鏡新明智流の試合に多くみられる。この試合では仕掛け技が最も多くみられるが、相手が入ってきたところを引いて打つという描写も確認できる。このことから、直心影流の剣士は仕掛け技と引いて打つ技、さらに前述した相手の技を返して打つ技術を駆使し、試合を行っていたと考えられる。

以上、直心影流におけるしない打ち込み稽古の技術的特徴がいかに他流試合に現れているかを考察してきたが、男谷精一郎一門と加藤田新陰流の試合において、これらの特徴は全く見ることができない。この試合において、直心影流の剣士は一人も上段に構えておらず、下段および精眼に構えている。また、彼らが出した技で確認できるのは全て突き技である。これは、直心影流の流儀が廃れている、という千葉周作の指摘と一致しているといえる。この理由については、次章において考察していくこととしたい。

第 四 章

分派による修練形態の分化と対立

第一節 長沼派

本章においては、長沼四郎左衛門国郷以降の主な分派である、長沼派・藤川派・男谷派を考察の対象とする。

第一章第五節第二項において長沼派の伝播について述べたが、その中で特に注目すべきは新発田藩における直心影流の動向である。近世後期における新発田藩においては、長沼派と男谷派二つの派が別流派であるかのように別々に教授されていたという。そして、長沼派は上段、男谷派は精眼中心のしない打ち込み剣術をそれぞれ行っており、長沼派は長竹刀を用いたり、試合に有利な小手先の技法を専らとした勝敗を争うための他流試合を行わなかったようである⁵⁰⁹。新発田藩の事例からは、長沼派・男谷派が異なる修練形態を有していたことが窺える。

また、藤川派も男谷派と対立していたようである。山田次朗吉『日本剣道史』によれば、文政末から天保にかけて大石進により長竹刀が流行したとき、藤川整斎は一向にしないの寸法を改めなかったという。その理由として、整斎が、剣術は勝敗を争う道具ではなく、精神の修養のためにあると考えていたことを指摘している⁵¹⁰。また、男谷精一郎が講武所においてしないの長さを3尺8寸に定めたことにより、藤川派と衝突し、当流が分離する原因になったと述べている⁵¹¹。そして山田氏は長沼派も含めて直心影流の三派がこの時代に分離していたことを指摘している⁵¹²。

以上のことから、近世後期において長沼派・藤川派・男谷派が分離し、それぞれ剣術の修練ならびに試合を行っていたと考えられる。そして、この相違は各派の剣術に対する考え方、すなわち剣術観によって発生していると考えられる。つまり、各派の剣術観について考察することで、試合・修練形態⁵¹³の背景を明らかにすることができるといえよう。

⁵⁰⁹ 佐藤泰彦・酒井一也「新発田藩における直心影流について」(『新発田郷土史』第37号所収)新発田郷土研究会,pp.8-11,2009,参照。

⁵¹⁰ 山田次朗吉『日本剣道史』一橋剣友会,pp.322-324,1927,参照。

⁵¹¹ 山田次朗吉『日本剣道史』一橋剣友会,pp.324-327,1927,参照。

⁵¹² 山田次朗吉『日本剣道史』一橋剣友会,p.327,1927,参照。

⁵¹³ 本章で取り扱うしない打ち込み稽古の記述の中は他流試合についてのものもみられる。しない打ち込み稽古は身心や技能の修練を目的とするのに対し、試合は勝敗を争うためのものであり、その目的は異なっている。しかし、『剣道の歴史』に、当初は形稽古を補完するものとしてとらえられていたしない打ち込み稽古によって他流試合が可能になったと述べられているように(全日本剣道連盟編『剣道の歴史』財団法人全日本剣道連盟,p.15,2003,参照。)、両者の形態自体は同様であったと考えられ、他流試合の記述から、しない打ち込み稽古の様相を考察することが可能であると考えられる。したがって、試合としない打ち込

本章では近世後期における直心影流の各分派における試合・修練形態の相違を考察し、当流の分離の様相について考察していくこととする。まず、本節では長沼派の試合・修練形態ならびにその剣術観について考察を進めていく。

第一項 長沼派のしない打ち込み稽古

本項においては、長沼派のしない打ち込み稽古について考察をしていくこととしたい。

長沼派のしない打ち込み稽古については、前述の新発田藩における事例からも窺えるように、上段の構えによって行われていたと考えられる。

前章の第三節で取り扱った『大禾一件』には、安永2年（1773）における、長沼正兵衛一門の試合の描写が記されていたが、その試合においても、直心影流の剣士は全員、すべての試合において上段に構えている。一方、この試合の相手であった鏡新明智流の大禾伴山・桃井春蔵の構えに注目すると、八相・正眼・二刀の正眼、短刀による単身の構えなど多岐にわたっている。具体的な試合の記述を一箇所挙げておきたい。

庄田上段 大禾小撓、相寸にて可致由、庄田氏度々申候へ共、重而相寸にて立合可申、拙者小撓の方得手に候へば、今日は何分御用捨可被下のよし申により、かくの如し、大禾右手に小撓をとり、左足を先立左の手を差出し、偏身にかまふ、庄田大禾が左の腕を打たり、打れながら、庄田が頭へ打込むを応して返す太刀に大禾が左の脇腹へ打込み、大禾打れながら、撓をとらへて、庄田が肩を少し打たり⁵¹⁴

長沼派の庄田伴左衛門が上段に構え、まず大禾の左腕を打ったという。これに対して大禾は打たれながらも庄田の頭へ打ち込むが、庄田はこの打ちに応じ、返して脇腹を打ったという。このように多彩な大禾・桃井の剣技に対して、長沼派の剣士たちは上段の構えのみで対応したということである。長沼派において、上段を中心に試合が行われていたことは間違いないであろう。

しかし、前章第三項で取り扱った千葉周作『剣法秘訣』においては、この頃、直心影流の剣士たちが上段に構えなくなったことを指摘している。『剣法秘訣』の成立年代は弘化年間（1845 - 1848）以降であると考えられるため⁵¹⁵、『大禾一件』にみられる試合の頃から

み稽古を同様のものとして取り扱う。

⁵¹⁴ 『大禾一件』東京長沼正兵衛家蔵。

⁵¹⁵ 千葉周作は『剣法秘訣』において「当流初心の者には、一ヶ年余も打ち込み計りの稽古

少なくとも 70 年近く経過している。ここでは、長沼派も近世後期において、上段に構えなくなっていたのか、検討してみたい。

安政 4 年（1858）の『新発田藩月番日記』12 月 26 日付の記述に、次のような文がみられる。

嶋村三九郎

其方儀御趣意有^レ之、御流儀之方をも遣方被^ニ仰付^ニ候^ニ処、上段ニ精眼、両方ニ而^テハ
存分之修行も出来兼候^ニ付、上段之方計修行いたし度旨申立之趣御聞届、尤此上江
戸表罷^ニ登^ニ長沼正兵衛始高名之者方江罷出、修行いたし候^ニハ、別而熟達いたし御
用便^ニも可^ニ相成^ニ二付、明午年より来ル申年まで三ヶ年出府修行被^ニ仰付^ニ御勝手向御
繰遣御六ヶ敷御時節には候得共、三人扶持壹ヶ年、金拾両つゝ被^ニ下置^ニ 516（読点、
返り点、ルビ筆者）

嶋村三九郎とは、新発田藩の長沼派直心影流の剣術師範であった嶋村外也の長男である。

この記述の 2 ヶ月前である安政 4 年 10 月に藩は男谷派を普及させるために、長沼派の門弟たちも男谷の流儀を行うように命じている⁵¹⁷。そのような中で、三九郎は上段と精眼、両方の修行では十分な修行が出来ないことを理由に、上段のみを修行したいと進言し、長沼正兵衛の道場に入門することになったという。つまり、三九郎は上段の修行をするために長沼正兵衛の道場に入門したということであり、幕末期も上段の構えが長沼派の剣術の特徴として認識されていたといえる。長沼派では直心影流の特徴であった上段からの打ち込みを得意とする剣術が幕末期においても守られていたと考えられる。したがって、千葉周作の指摘は長沼派以外の直心影流であったと考えて良い。しかし、最終的には「子孫正兵衛、可笑ニ至リ、始テ剣ヲ中段ニ下ダシ、長刀ヲ以テ教授ス⁵¹⁸」と、正兵衛称郷のときに上段から構えを下し、しないも長大化していったという⁵¹⁹。

にて、試合ひを禁ぜしものなり、其後弘化年間の頃は、最初一ヶ年ほどは、試合ひの前後に打ち込み為すこと計稽古する事となせしも」（下線部筆者）と弘化年間の事を回想している（千葉栄一郎編『千葉周作遺稿』櫻華社、p.20,1942.）。

⁵¹⁶ 『新発田藩月番日記』安政 4 年（1858）、新発田市立図書館蔵。

⁵¹⁷ 綿谷雪、山田忠文『武芸流派大辞典』東京コピー、p.480,1978,参照。

⁵¹⁸ 『長沼国郷先生小傳』（『武道伝書聚英 第十二集』所収）宇都宮大学教育学部、p.46,1990。

⁵¹⁹ このことは佐藤泰彦・酒井一也も指摘している（佐藤泰彦・酒井一也「新発田藩における直心影流について」（『新発田郷土史』第 37 号所収）新発田郷土研究会、p.13,2009,参照.）。

第二項 長沼派の形稽古

1. 長沼派の形

次に長沼派の形稽古についてみていきたい。まず、『直心影流秘書一』⁵²⁰を取扱い、長沼派にどのような形が存在していたか、検証していくこととする。

『直心影流秘書一』には、法定、十之形、古流、刃引、小太刀、円橋、鞘之内という7種類の形について記されている。このうち、刃引については「別ニ形ナシ右ノ五本ノ形ヲ勤ルナリ⁵²¹」と述べられている。この記述における「右ノ五本ノ形」というのは、古流の形のことを指しており、刃引の形と古流の形は動作そのものが同様であると考えられる。しかし、用具に違いがあり、古流の形は「シナヘニテ勤ル形也⁵²²」としないを用いるのに対し、刃引はその名称の通り刃引を用いる。つまり、この2種の形は、動作は同様であるものの、用いる道具の違いによって別の形として捉えられていたということである。鞘之内については「鞘ノ内三ツノ習脇指ノ抜打ニアリ、一ツニハ抜ナリニ敵ノ両ノ手ヲ切り、二ツニハ首ヲハラウ、三ツニハ眼ヲ払フ右ハ鞘ノ内ノ傳ナリ⁵²³」（読点筆者）と記述が少なく、『直心影流秘書一』にはこれ以上の記述をみることができない。鞘之内については『鞘之内秘伝書⁵²⁴』という伝書があり、本書によると、鞘之内は全部で54本からなる居合の形であるようだ。

これらの記述に加えて文政2年（1819）11月28日付の『新発田藩月番日記』をみてみたい。ここには「一 島村外也、相門弟剣術遣方、於御稽古所ニ見分致候ニ付、八時案内有之、拙者共御用人中罷越、遣方左之通之事⁵²⁵」（読点、ルビ筆者）と剣術検分の記録があり、この記述の後に、法定、十之形、相仕合、古流之形、霞之形、小太刀の組合

⁵²⁰ 本書は全日本剣道連盟所蔵の写本である鈴鹿家文書のもので、原本の所在は不明である。また、奥書がみられず、成立年代、著者ともに不明である。鈴鹿家文書を解説した『全日本剣道連盟所蔵（写）鈴鹿家文書解説（四）』によれば、本書は「鎌倉長沼四郎左衛門家蔵」とされており（『全日本剣道連盟所蔵（写）鈴鹿家文書解説（四）』全日本剣道連盟、p.169,2006,参照.）、長沼派に伝承されてきた史料であることがわかる。長沼派に伝わる多くの形についての解説に加え、修練で用いる道具の説明や国郷の理歌についても記されている。

⁵²¹ 『直心影流秘書一』写、鈴鹿家文書、全日本剣道連盟蔵。

⁵²² 『直心影流秘書一』写、鈴鹿家文書、全日本剣道連盟蔵。

⁵²³ 『直心影流秘書一』写、鈴鹿家文書、全日本剣道連盟蔵。

⁵²⁴ 本書は「鞘之内」の解説書であり、鈴鹿家文書である。巻末をみると、河崎藤之丞義追と記されている。この人物は、豊後臼杵の稲葉家家臣で長沼四郎左衛門国郷直右衛門義房の孫である。寛政元年（1789）正兵衛忠郷から免状を得たという（中村民雄「幕末関東剣術流派伝播形態の研究（2）」『福島大学教育学部論集社会科学部門』第66号所収、p.68,1999,参照.）。また本書の巻末に「右江戸見坂正兵衛先生へ添削頼申サルゝ処宜シキ由ニテ加筆モ無之由」と記されており、長沼正兵衛が本書を添削したという。

⁵²⁵ 『新発田藩月番日記』文政2年（1819）、新発田市立図書館蔵。

せが記されている。「相仕合」は試合稽古のことであると考えられるが、その他はすべて形の検分であり、この時は5種類の形が行われたようである。また『直心影流秘書一』には確認できない「霞之形」という形が行われている点も注目できる。長沼派においては法定、十之形、古流、刃引、霞之形、鞘之内、小太刀、円橋と多種の形が存在し、実際に修練されていたと考えられる。

2. 長沼派の形の特徴

それでは、『直心影流秘書一』などの書から存在が明らかとなった上記の形についてそれぞれ検討していくこととしたい。なお、前掲の文政2年の『新発田月番日記』における剣術検分の記述にみられた「霞之形」については、これ以外の記述がみられず、考察が不可能であるため、考察の対象外とする。

(1) 小太刀

はじめに小太刀の形について検討していくこととしたい。小太刀の形は、打太刀が太刀、仕太刀が小太刀を用いて行う形である。長沼派におけるこの形を考察するにあたっては、『直心影流秘書一』『直心影流秘書三』を取り扱う⁵²⁶。この二書における小太刀の記述として特に注目すべきは、同じ長沼家の伝書でありながらも小太刀の形の本数が異なっていることである。ここでは、この点について検討し、長沼派における小太刀の形の全体像を把握していきたい。『直心影流秘書一』『直心影流秘書三』にみられる小太刀の形の太刀名は以下の表4-1の通りである。

⁵²⁶ これらの書は鈴鹿家文書であり（全日本剣道連盟所蔵写本）であり、『全日本剣道連盟所蔵（写）鈴鹿家文書解説（四）』（財団法人全日本剣道連盟,2006.）の巻末に記載されている「鈴鹿家文書総目録」には、二書ともに「鎌倉長沼四郎左衛門家蔵」とされており、長沼家の史料であったことが窺える（『全日本剣道連盟所蔵（写）鈴鹿家文書解説（四）』（財団法人全日本剣道連盟,pp.169 - 170,2006,参照.））。


表 4-1 『直心影流秘書一』『直心影流秘書三』にみる小太刀の形の構成

本目	『直心影流秘書一』	『直心影流秘書三』
1	風勢	風勢
2	水勢	水勢
3	(形名なし)	切先返シ
4	茶巾服紗（鐔ドリ）	茶巾服紗（鐔ドリ）
5	突非押非	突非押非
6		円快
7	円快	

『直心影流秘書一』においては3本目の形名は記されていないが、『直心影流秘書三』では「切先返シ」とされている。両書の3本目の記述を比較してみると、『直心影流秘書一』では「是ハ円快ニトリ、左手ニテ、ハカマヲチョツト、ツカミ、スラスラト進ミ、行向ヨリ、打込処ヲ左足ヲ出シ、体ヲ左ヘヒ子リテ、太刀ハ向ヘワリコムナリ、太刀先ニ氣ヲカクヘシ、向ニ引込ヲ円快ニトリテ、跡ヲツメル又左手ニテ、向ノ小手ヲ押テ、片手円快ニテモヨシ⁵²⁷」（読点筆者）と記されており、『直心影流秘書三』においては「打太刀前ニ同、仕太刀ヲ先ニシテ、左ノ手ハ身ニ引ソヘ、片身ニナリ、円快ニ取、スラスラト進ミ行キ、向ヨリ此方ノ頭ニ打込ムヲ、切込ムヲ切トメ、向ヘ引キ、八相ニ取ル処ヲ、向ノ左手ヲ取、本ノ円快ニカヘル也⁵²⁸」（読点筆者）と記されている。両書ともに、円快到構え、左の手を自分の身に添えて進んでいき、相手が打ってくる所に入り込み、止め、また相手が下がるところで相手の手を押さえる、という動作を表していると考えられ、同様の形を表していると解釈できる。したがって『直心影流秘書一』の3本目は「切先返シ」とであると考えて良いだろう。

次に「突非押非」という形について考察していきたい。この形は『直心影流秘書一』においては5本目、6本目に該当し、『直心影流秘書三』では5本目の形のことを指している。『直心影流秘書三』における「突非押非」の記述をみると、「打太刀左足ヲ先ニナシ、槍ヲ取如ク左手ヲソヘ、仕太刀ハ左手ヲ太刀ニソヘ円快ニトル、長手ノ間ヨリ向ヲ見ル三角ニナリ扣ヘ居ヲ、向ヨリ此方ノム子ヲ突ク、夫ヲ此方ノ左リ手ニテ向ノ太刀ヲ此方ノ太刀ヲ握リソヘ、向ノ太刀ヲ此方ノ右ノ方ニアラセ、此方ノ頭ノ上ヨリ左ノ方ニ引付ケ、足

⁵²⁷ 『直心影流秘書一』, 鈴鹿家文書, 全日本剣道連盟蔵。

⁵²⁸ 『直心影流秘書三』, 鈴鹿家文書, 全日本剣道連盟蔵。

ハ最前ノ俣ナリ、此方ノ右足ヲ出シナカラ左首ヲ切ル、其俣左足ヲ折敷テ、右足ハ屋ハリイカシテヲクコト一本ナリ⁵²⁹」（下線部筆者）と記されている。この後「突非押非」の記述がさらに続くが、下線部により、ここでこの形が一端区切られており、この記述までで1本とされていることが窺える。つまり、この形は『直心影流秘書三』において、1本の形として記されていないながらも、本来2本の形であったことが窺える。したがって、長沼派における小太刀の形は元来、7本で構成されていたと考えられる。

（2）古流と刃引

次に古流と刃引についてみていくこととする。この古流の形については、長沼派のみにみられる形である。

まず、古流の形について述べておきたいのは、この形の記述が『直心影流秘書一』において2種類みられるということである。はじめにみられる記述は、前述したように「シナヘニテ勤ル形也⁵³⁰」と述べられるもので、5本の形によって構成されている。しかし、もう一方の記述における古流は4本から成る形として記されている。一方、『直心影流秘書三』には、4本の「古流」とは別に「大古流」という4本の形がみられ、さらに「右八本ノ形ヲ古流ト言、始之四本ヲ大古流ト言ナリ、大古流ヨリ古流ヲ生シ、古流ヨリ木刀之形ヲ生ス⁵³¹」（読点筆者）と記されている。つまり、古流の形は全部で8本存在し、「大古流」という4本の形から「古流」4本の形が形成されたということである。『直心影流秘書三』の記述を踏まえると、『直心影流秘書一』にみられる2種類の「古流」は、いずれかが「大古流」であり、もう一方が「古流」であると推測できる。これらについて特定するために、両書の記述から動作の比較を行っておきたい。以下の表4-2は『直心影流秘書一』『直心影流秘書三』にみられる古流の記述を比較したものである。ここでは、特に仕太刀の動作の記述に注目して比較することとしたい（仕太刀の動作を示している記述は網掛けにし、他の形の記述と共通していると考えられる箇所の下線を付した。なお、下線は一本線と二重線の2種類に分け、同じ下線を引いた動作が共通していると考えられる）。

⁵²⁹ 『直心影流秘書三』写, 鈴鹿家文書, 全日本剣道連盟蔵。

⁵³⁰ 『直心影流秘書一』写, 鈴鹿家文書, 全日本剣道連盟蔵。

⁵³¹ 『直心影流秘書三』写, 鈴鹿家文書, 全日本剣道連盟蔵。

表 4-2 『直心影流秘書一』『直心影流秘書三』にみられる古流の記述（下線部筆者）

	『直心影流秘書一』		『直心影流秘書三』	
	古流（5本）	古流（4本）	大古流	古流
1	<p>両方トモ右足ヲ出シ打太刀^{シヤ}下ニ 取タル寸左足ヲフミ出シ八相ニ 取ウテウテトシカケテ右足ニテ 向ノ頭ニ真直ニ打込打太刀ハ向 ノ太刀ノ平ヲクルヤウニ打ハナ シサテ下エ出ル太刀ヲ木刀四本 目ノ下ニテアワスヤウニ合セテ 右足ヲ引向ノ左ノ小手ノ内ヘノ リ、左ヘ太刀先ヲ廻シ上段ニカ フリ真直ニ打込下エ出ス太刀ヲ 向ヘ初出タルナリニテ衡ヲ以テ 打、右足ヲ高クアケテヲルナリ</p>	<p>八相ニ取テ横ヘムク打太刀ハシ ヤニ取、右足ヲ入テ左ノ方ヘ首通 リヲナクリ、右ヘカヘシテナグリ 又ヒキク右ヨリ左ノ方ヘ足ヲナ クリテ其手ヲ吾カラタニツケテ スコシスゝム心ナリ、扱仕太刀ハ 向ヨリハラウ寸右足ヲイレテ向 ヘ打出スト向ノ太刀ニテウツユ ヘスクニ応シテ上段ヨリ向ヘ太 刀ヲ出ス寸左足ヲイレテ右足ヲ 少シ引右足向ヨリ左ヘハラウ寸 其ナリニ応シテ左足ヲ引右足を イレテ打出ス其処ヲ向ヨリ足を 払フユエ上段ノヤウニ太刀先ヲ 右ヘフリカラタニツケテカフリ ミギアシヲ高クアケテ向ヨリ出 ントスル処ヲ右足ヲスゝミ小手 ヲヲサヘル也</p>	<p>仕太刀八相ニトリ右足ヲ引き向ヘ ハ背キ己ノ右ノ方ニ向キ気分ヲ修 メテ、向ノ頭ニ打込ム打太刀ハ車 ニトリソレ^{マツ}右足ヲ踏込ム右ヨ リ左ヘ払ウ仕太刀ヒツクリ返シテ 又打込ム夫ヲ又打太刀左ヨリ右ヘ 払ウソノ成ニテ足ヲ払フ仕太刀右 足ヲアゲテ右ノ方ニカタヨリカブ リ打太刀左八相ヨリ打チ込ム、ソ ノ頭ヲ仕太刀ヨリ向ノ右ノ小手ヲ オサヘルコレニテ一本也</p>	<p>打太刀車ニ取此方八相ニ取左足ヲフ ミ出シ打太刀車ヨリ上段ニカブリナ ガラ此方ノ頭ニ打込ム此方向ノ打込 ム頭ニ右足ヲ出シ打込ム打太刀其ナ リニテ此方ノ腰ノ通りヲ払此方ヨリ 木刀四本目ト同様ニ応ス向ヨリ其ナ リにて左リ足ヲ入レ突ク此方右足ヲ 引ク其ニ乗ル尤切先敵ニ向ルナリ打 太刀其儘ニテ左ノ方ニフリ込ミ、上 段ニ取ル仕太刀モ左リヘフリ込ミ上 段ニ取、両方トモニ右足ヲ踏込テ向 ノ起ル頭ヲ打、打太刀小手ニカケル コゝロニテ木刀同様出ス夫ヲ此方ヨ リ太刀ノ平ニテエヒト答フ</p>
2	<p>中段ニ持テ直ニ上段ニ取テ後左 足ヲ出シ右足ニテ眉間通りニ真 直ニ打込（但シ初ノ処ハ足ヲフ ミソロヘテヲル也）テ向ノ右ノ 小手ノ内ヘ乗、左足ヲイレテ向 ノ左ノ小手ノ内ヘノリ、其ナリ ニテ木刀ノ二本目ノ如クカスミ 向ヨリ左ノ小手ヘ打コム処ヲ足 ヲ動サスニ体ヲ子ガテ太刀ヲ胸 ヘ取此トキ肘ト体ヲ離レヌ様ニ</p>	<p>右足ヲ出シ太刀ヲ提ケテ切先ヲ タカクセスト下タンニナシテ向 ヘスラスラト進ミ打太刀ヨリ我 首ヲ打トキ右ヘ応シテ左足ヲ入、 向ノ首ヲ切也打太刀ヨリ我左足 ヲ払フ処ヲ足ヲアケテ右足ニテ 引、又向ノ眉間ヘ衡セイカンニシ テ進テユキ我頭ヲ打太刀ヨリ打 トキ左ヘ応シテ向ノ首ヲ切也此 トキノセイカンハ左足ヲ出シ我</p>	<p>ソシテ仕太刀精眼ニ取打太刀八相 ニトル両方ヘスラスラト引き仕太 刀右足ヲ先ニシ互イニ進ミ向ヨリ 此方ノ頭ヘ打チ込ムノヲ右ニ応ジ テ返シテ向ウノ右ノ首ヲ切ル打太 刀此方ノ足ヲ払ウ此方足ヲ揚げ左 リ精眼ニテ後ヘ引ク、打、八相ニ テ後ヘ引ク前同様進ミ此方ノ頭ニ 打込ム左ノ方ニ応ジ返シ向ノ左首 ヲ切ルコレニテ二本也</p>	<p>両方切先ヲム子ノ通りニ当テ引合、 何レモ足フミ揃、両方上段ニカブル 打太刀ヨリ此方ノ頭ニ右足ヲ踏込ミ テ打込ム其起リハナヲ此方ヨリ右足 ヲ踏込テ打向フ下段ニワロス此方足 ハ最前ノ俣ニテ向ノ右手ニノル向フ 右足ヲ引ク此方左リ足ヲフミ出シ向 ノ左リノウ手ニノル其ナリニテ両方 カスム木刀二本目同様ニテ眉間ニ付 ル其ナリニテ向ヨリ左リヘフリ込ミ</p>

	<p><u>スヘシ</u>扱打太刀ハ仕太刀に准ス ル内向ヨリ小手ノ内へ乗トキハ 右足ヲ引向ニカスミタルトキハ 八相ニ取向ノ左ノ小手へ打込ナ リ向ニ応スルト直ニ太刀ヲハナ ス是迄二本目也</p>	<p>右ノ方へ柄ヲ出シテ進ユクナリ</p>		<p>上段ニ取此方ノ頭ニ右足ヲフミ出シ 打込ム、</p>
3	<p>サテ右ノ如ク胸ニテ応シタル処 ニテ向ニテシナヘヲハナシ、又 ツケテ来ルトキ<u>手ヲ向へ延シ同</u> <u>クアトへ引テ足ノソロイタル処</u> <u>ニテ</u>打太刀ノ方ニテ右足ヲ引キ シヤニ取トキ<u>此方ハ左足ヲフミ</u> <u>ユミ下ニ取</u>ソレヨリ上段ニカフ リナリニ<u>右足ヲ入向ノ眉間通り</u> <u>へ打込</u>、打太刀モ少シ右足ヲ入 レテ打テハナシ、直ニ右ヘマワ シテ吾眉間通りへ打込ヲ<u>吾ハ右</u> <u>足ヲ引テ</u>応シ左ヘカフリ<u>右足ヲ</u> <u>入テ真直ニ打込</u>、下エ打太刀ヨ リ出スヲヒラニテ打、<u>ソレヨリ</u> 右足ヲフミコミ、太刀ヲヒラ精 眼ノヤウニシテ向ノ喉ノ処へ乗 リ、直ニ左足ヲ引アワセテ右ヘ カフリ<u>左足ヲ入テ打込</u>又、左エ 廻シテカフリ<u>右足ヲ入テ打込ナ</u> <u>リ</u></p>	<p>是は両方<u>シヤニ取テ</u>向ヨリハ右 足ヲ丈夫ニフミコミ、右ノ方ヨリ 左ノ方へ払フ寸、<u>我ハ左足ヲ引テ</u> <u>右ノ方ヨリ太刀ヲ打コミ直ニ</u><u>応</u> <u>シテ向ノ眉間へ出ス</u>、此寸左足ヲ 出シ、右足トフミカエル、向ヨリ 又左ヨリ右へ払フトコロヲ<u>直ニ</u> 応シテ左足ヲスコン引右足ヲフ ミカヘテ入レル足ヲ払フ処ヲ<u>右</u> <u>ヘフリテ初本ノ如カフリ</u>、向ヨリ 出ントスル処ヲ<u>右足ヲスミ小</u> <u>手ヲ押ヘテ</u>此処デ<u>互ニ</u>氣ヲハナ サスチリチリト引合テ、打太刀ハ 左八相ニテ来ルヲヒラセイ眼ニ ナシテ手ヲ左ヘソムケテ進ミユ キ、我頭ヲ打寸<u>右へ</u>応シテ向ノ首 ヲ切足ヲ払フ処ヲ<u>左足ヲ挙テ右</u> <u>足ニテ</u>引合セ、<u>太刀先ヲ向ノ眉間</u> <u>へツケ</u>、右ノ方へ手ヲ出シ左足ヲ 出シテススミユキ我頭ヲ打寸<u>左</u> <u>へ</u>応シテ向ノ首ヲ切ナリ此寸モ 右足ハフミ出ス也<u>眉間へツケテ</u> <u>進ムハヒラセイカンナリ</u></p>	<p>二本ヨリ直ニ三本ニ移ル、二本済 テ、打太刀ヨリ仕太刀ノ太刀ニツ ケ此時ハ両方向キ合押テクル<u>仕太</u> <u>刀後へ引ク</u>両方足踏ソロヘ打太刀 右足ヲ引キ車ニ取<u>仕太刀左足ヲフ</u> <u>ミ込ミ車ニ取直ニ仕太刀ヨリ右足</u> <u>ヲ踏込ミ</u>打太刀ノ頭ニ初本同様打 込ム打太刀モ初本同様ニ払フテ仕 太刀ノ足ヲハラウ<u>仕太刀モ初本ノ</u> <u>仕様ニ同ジ</u>打太刀左リ八相仕太刀 己ノ左リニ向平精眼ニテ両方スラ スラト引キ両方起リ合向ヨリ此方 ノ頭ニ打込ムヲ<u>右ニ</u>応ジ向ノ右首 ヲ切ル打太刀左足ヲ先キニシ此方 ノ左ヲ払フ<u>此方左リ足ヲ揚ケ互ニ</u> 引キ打太刀ハ八相右足先キニ出シ 仕太刀ハ右ノ方ニ向左リ足先精眼 ニテ<u>互ニ</u>出合、向ヨリ此方ノ頭ニ 此方左リニ応シ向ノ左首ヲ切ルナ リ</p>	<p>二本目済テ向ヨリ此方ノ太刀ニ付テ 押テクル其時、<u>此ヨリ手ヲノハシ真</u> <u>向キニナリ後ニ引ク</u>両方足踏ソロヘ 打太刀右足ヲ引テ車ニ取<u>仕太刀モ左</u> <u>リ足ヲフミ込テ車ニ取</u>向ヨリ此方ノ 頭ニ少シ右足ヲ出シ打込ム、<u>此方ヨ</u> <u>リ</u>其起リハナニ右足ヲ出シ打込ム向 ヨリ此方ノ右ノ方ヨリ頭ニ打込ム、 <u>此方右足ヲ引切留ム</u>又向ヨリ此方ノ 左リノ頭ニ引打込<u>此方右足ヲフミ</u> <u>込</u>、其起リハナニ打込ム其ナリニテ、 向ヨリ此方ノ小手ニカケル心ニテイ タス夫ヲ此方ノ右ノ方ヨリ後へ太刀 ノ平ニテ打払フ、其ナリニテ向ノ首 ニ横ニ持ユクソシテ両方右足ヲ先ニ 出シ引合、打太刀右足を引打、仕太 刀左リ足ヲ出シ打又打太刀左足ヲ引 キ打仕太刀<u>右足ヲ出シ打上段ニ取打</u> <u>也</u></p>
4	<p><u>下段ニ持テ</u>ソレヨリ<u>上段ニカフ</u> <u>リ</u>、左足ヲ出右足ヲスミミテ、</p>	<p>向ハ上段ニ取テ我頭ヲ割テ来ル ナリ我下段ニトリ、太刀先ヲ波ノ</p>	<p>打太刀上段ニカブリ右足ヲ先キ<u>仕</u> <u>太刀精眼ノ様ニ下段ニ取是ヲ金輪</u></p>	<p>両方引合前ニ同シ<u>下段ニテ</u>引合ナ リ、両方<u>上段ニ取</u>何レモ<u>右足ヲイタ</u></p>

	<p>向ノ眉間へ打込下ニテ刃ヲ左ノ方へムケテ応シ右足ヲ引テ刃ヲ右へムケテ応シ左へマワシテ上段ニカフリ向ノ眉間へ打込也下ニテ右足ヲ引応スル寸ハ四本ノ木刀トチカイ手先ニテチカクカヘス也</p>	<p>ウ子ル如くユツテ進ミ、我頭ヲ打トキニ左へ応シテ向ノ首ヲ切、向ヨリ下へ太刀先ヲサケ、出ストキ初ノ古流ノ四本目ノ如ク左足ヲ引テ右ノ方ニテ応シ又右足ヲ引テ太刀ヲ小ク返シテ右ノ方ニテ応シ、ソレヨリ互ニ引ハナシ我ハヒラ精眼ニナシテ手ヲ右ノ方へ出シ進ミユキ我頭ヲ向ヨリ打トキ左へ応シ首ヲ切ナリ</p> <p>○初下段ニテ太刀ヲユリユリ進行ヲ金輪ト云木刀四本目ノユル処是ヲウツシタルナルベシ</p>	<p>ト言、太刀ヲ動カシテスラストラト進ム打太刀ヨリ此方ノ頭ニ打チ込ムヲ左へ応シ向ノ左首ヲ切ル向ヨリ木刀四本目ノ様ニ右足ヲ出シ下ヲ払フ此方モ木刀形ノ様ニ右足ヲ先キニシテ応ス向ヨリ左足ヲ出シ下ヲ払フ此方右足ヲ引キ応ス其ナリニテ両方引キ仕太刀ハ己ノ右ノ方ニ向キ左足先ニテ平精眼向八相左足先キ互ニ起リ合仕太刀ノ頭ニ打込ムヲ左リニ応シ向ノ左首ヲ切ル也</p>	<p>シ打、打太刀ヨリ起リハナヲ仕太刀ヨリ打也木刀四本目ト同シ打太刀ヨリ其ナリニテ此方ノ左リノ方ヨリ腰ニ当ル又此方ノ右ノ方へ左足ヲ出シアタル此方左足ヲ引ソレニ応ス、両方共ナリニテ上段ニ取打太刀ヨリ此方ノ頭ニ右足ヲ出シ打込ム其起リハナヲ此方右足ヲ進メ打チ込ム</p>
5	<p>太刀ヲ中段ニ持テヒトエ身ニナリスラストラト両方ヨリスミ、打太刀ヨリ突出ス処ヲ氣ヲ以テ向テ太刀ノ上へ乗ル也但是ハ四本ノ外ナリ</p>			

上記の表から分かるように、『直心影流秘書一』の5本で構成される古流のうち、はじめの4本が『直心影流秘書三』の「古流」の記述と非常に類似している。一方、『直心影流秘書一』の4本で構成される古流は、『直心影流秘書三』の「大古流」と記述の類似性が確認できる。これらの記述は、完全に一致しているわけではないが（この理由としては、①記述する際に動作の記述漏れが生じた、②両書の成立年代に差があり、動作に若干の改変が加えられている、ということが考えられる）、その大部分が類似しているといえるため、同じ形を示していると解釈して良い。したがって、『直心影流秘書一』における5本の形は「古流」、4本の形は「大古流」と考えられる。それでは、この5本目の形は一体、何であるのか。この形の記述をみると「但是ハ四本ノ外ナリ⁵³²」と記されている。この記述から、この5本目が本来古流の形には存在していなかったものであり、何らかの意図をもって付け加えられたものであると考えられる。そして、この5本の古流を刃引で行うのが「刃

⁵³² 『直心影流秘書一』写, 鈴鹿家文書, 全日本剣道連盟蔵。

引」の形であり、古流とは別に修練されていたと考えられる。

長沼派における古流の形は「古流」と「大古流」の 2 種類に分類されている。この 2 種の形の関係は『直心影流秘書三』から、大古流を基として古流が考案されたということである。さらに『直心影流秘書一』において、古流の形 4 本に 1 本の形が付加されている。そして、刃引を用いて、この 5 本の古流を行うとき、この形を「刃引」と呼ぶようである。

(3) 鞘之内

次に「鞘之内」について考察していく。これについても長沼派のみに記述が確認できるものである。これは「太刀ヲ拔ノ法ヲ他流多クハ居合ト云当流ニテハ鞘之内ト云⁵³³」とあるように、直心影流における居合のことを指しているという。この鞘之内は「鞘之内ハ切紙目録或ハ免状授与ノ上、之ヲ伝ルト云、一格ノ定メ有ル事ヲ聞ス⁵³⁴」「鞘之内ハ何レノ書ノ中ニモ加ラス、故ニ修行ノ格ヲ立テ、授与スルノ定法ナシ⁵³⁵」（読点筆者）などと記されており、伝授方法に一定の決まりがなく、修行過程において修行者全員に与えられる伝書の中に記されることがないようである。そのためか、「既ニ許シヲ授リテ師範ヲナス人スラ此鞘ノ内ノ伝ヲ受サル者多シ⁵³⁶」と、すでに免許皆伝で、師範をしている者ですら鞘之内の伝を受けていない者が多いという。この鞘之内は長沼派の中においても伝を得ている人物が少なかったようである。

鞘之内は 54 本によって構成されているという。これについては「古ヨリ伝来九十余本有リシソ、然ルヲ長與先生五十四本ニテ、コト足リトノ玉ヒテ、今ハ五十四本ノ外伝来ナシトナリ⁵³⁷」（読点筆者）とあるように本来 90 本以上あったようであるが、国郷が 54 本で十分とし、現在に至るということである。この 54 本の構成を以下に表 4-3 に挙げておきたい。

⁵³³ 『鞘之内秘伝書』写, 鈴鹿家文書, 全日本剣道連盟蔵.

⁵³⁴ 『鞘之内秘伝書』写, 鈴鹿家文書, 全日本剣道連盟蔵.

⁵³⁵ 『鞘之内秘伝書』写, 鈴鹿家文書, 全日本剣道連盟蔵.

⁵³⁶ 『鞘之内秘伝書』写, 鈴鹿家文書, 全日本剣道連盟蔵.

⁵³⁷ 『鞘之内秘伝書』写, 鈴鹿家文書, 全日本剣道連盟蔵.

表 4-3 鞘之内の構成

技法名		本数
五位五段	毛抜合	5
	切付	5
	もぎ 扱	5
	打払	5
	抜打	5
前後左右		4
ハコビ（漢字表記なし）		5
むなとり 胸取		1
三方切		1
かくし 陰鞘手		5
立合五段向		5
小尻返		1
闇夜月		1
立合後抱 ^{だき}		1
つかもぎ 柄扱		5

まず、はじめの 25 本によって構成されている「五位五段」について述べていきたい。「五位五段」は「毛抜合」「切付」「扱^{もぎ}」「打払」「抜打」という「鞘之内」における基本的な五つの技術からなる。「毛抜合」は、「毛抜合トハ太刀ヲ抜トキ敵ノ小手ヲ切付ルト切付ヌノアワイヲ毛抜合ニスルヲ以テ云ナラン⁵³⁸」、「切付」は「太刀ヲ抜クナリニ下ヨリ敵ノ小手ニ切付ルヲ以テ切付ト云ナラン⁵³⁹」、「扱」は「木ニナリタル梨材ノヤウナルモノヲツクノ処ヨリホキトモグヤウニ太刀ヲ抜寸手ヲノバサスシテ己レカ体ニ太刀ヲ付テヌクヲ以テモキト云ナラン⁵⁴⁰」、「打払」は「打払トハ抜ナリニ横一文字ノカ子ニテ打払ヲ以テ云ナラン⁵⁴¹」、とそれぞれの抜き方・斬り方について記されている。しかし、「抜打」については、記述が欠落しているため、こういった技術であったか把握することができない。

⁵³⁸ 『鞘之内秘伝書』写, 鈴鹿家文書, 全日本剣道連盟蔵.

⁵³⁹ 『鞘之内秘伝書』写, 鈴鹿家文書, 全日本剣道連盟蔵.

⁵⁴⁰ 『鞘之内秘伝書』写, 鈴鹿家文書, 全日本剣道連盟蔵.

⁵⁴¹ 『鞘之内秘伝書』写, 鈴鹿家文書, 全日本剣道連盟蔵.

これらは各 5 本で成り立っており、1 本 1 本に動作に若干の違いがあったようである。ここでは、具体例として「毛抜合」の 5 本について検討しておきたい。

表 4-4 「毛抜合」の記述

本目	記述
1	初本刀ヲ帶シカシコマリ居テ両手ヲヒサノ上ニ置抜時左ノ手ヲ鞘ニカケテソリヲ打ツヤイナヤ右ノ手ヲ柄ニカケテ腰ニカケテ腰ヲ立右ノ足ヲ前へ蹴出シテヌク切先敵ノ小手ニ当ルヤ当ラサルヤアワイニテ上段ニトリ其時左ノ手ヲモ添テ両手ニテ敵ヲ真二ツニ切断シテ直ニ刀ヲ鞘ニヲサム寸半アクラニナリ左ノ手ヲ刀ノ身ノヒラニチツトソヘテ右ノ手ニテ握リタル柄ヲサカテニトリ直シ又左ノ手ニテ鞘ヲ子シマワシクリカタヲ下ニナシテヲサムヘシ鞘ノナヲリタツトナヲラサルハクリカタニ心付テ知ルヘシ半アクラトハイシキヲ地ニツケテ左足ヲハカシコマリタル如クニテ右ノヒサヲハ右ノ方ニヒラキ足ノウラ左ノフト股ニアタル心ナリ左足ハカシコマリ右足ハアクラヲカク心ナリ
2	二本目半アクラニ居テ両手ヲヒサノ上ニヲキ上ニヲキ抜寸ソリヲ打腰ヲ立テ右ノ足ヲ前ヘケタシテ敵ノ小手ニ当ルヤ当ラサルノアワイニテ上段ニトリ左ノ手ヲモソヘテ切付ル鞘ニヲサムル寸ハ前ニ同
3	三本目半アクラニイテ両手ヲヒサノ上ニ置立サマニソリヲ打抜テ敵ノ小手ニ当ルヤ当ラサルアワイニ上段ニトリ左ノ手ヲモ添テ切付ル但シ半アクラニテ立時カ足ハ別ニススマサレトモ立タルマヽニテ右ノ足進ンテヲルソレナリニ切込鞘ニヲサムル寸ハ前ニ同ジ
4	四本目半アクラニ居テ両手ヲ膝ノ上ニヲキソリヲキソリヲ打立トキニ足ヲフミ違テ左ヲ前ニススミテ抜向フノ小手ニ当ルヤ当ラサルノアワイニテ上段ニトリ左ノ手ヲモソヘ足ハ其俣ニテ切込ナリ鞘ニヲサムル寸ハ上ニ同シ
5	五本目半アクラニ居テ両手ヲ膝ノ上ニ置ソリヲ打否ヤニ立左ノ足ヲ踏込テ敵ノ小手ニ切先ノ当ルヤ当ラサルノ堺ニテ上段ニ取りナタ右ノ足ヲ踏コンテ敵ヲ切断スルナリ鞘ニヲサムル寸ハ上ニ同ジ

上記の表から記述を比較すると、「切先敵ノ小手ニ当ルヤ当ラサルヤアワイニテ上段ニトリ其時左ノ手ヲモ添テ両手ニテ敵ヲ真二ツニ切断シテ」とあるように、抜刀した太刀が相手の小手に当るか当たらないかのところで上段に構え、左の手を添え、諸手で相手を斬る、という抜刀後の斬る動作自体は全て同様である。1 本目から 5 本目で異なっているのは、座り方および立ち方である。1 本目は正座で座り、そこから腰を立てて、立て膝の状態になり、右足を蹴り出して抜刀する。2 本目から 5 本目は半胡坐で座るのは共通しており、そこから 2 本目は腰を立てて、立て膝の状態になり、右足を蹴り出して抜刀、3 本目は立ってそのまま抜刀、4 本目は立って足を踏み違え、左足を前に出して抜刀、5 本目は立って左足を踏み

込んで抜刀、とそれぞれ立ち方が異なっている。これは「五位五段」に属する「毛抜合」以外の「切付」「扱」「打払」においても同様に、「其余ハ足トリ上段ニ取テノ切込カタトウ 5 本トモ毛抜合ニ同シ⁵⁴²」とあるように、座り方、立ち方によって 5 本の区別をつけているようである。前述の通り、「抜打」については記述が欠落しているが、前の 4 本が全て同様の变化をすることから、これについても同様の变化をしていたと推測できる。

五位五段以外で、複数本により構成されているものは「前後左右」(4 本)「ハコビ」(5 本)「陰鞘手」(5 本)「立合五段向」(5 本)「柄扱」(5 本)である。前後左右については、「前後左右トハ前へ後ロ、左リ、右ニ敵アルヲ切断スルヲ以テ云ナラン⁵⁴³」とあるように、一本目は前、二本目は後、三本目は左、四本目は右に、敵がいることを想定して行うという。その他のハコビ、陰鞘手、立合五段向、柄扱は 5 本になっており、1 本目には「毛抜合ニ抜キ⁵⁴⁴」とあることから毛抜合の技術を用い、二本目以降は「二本目ハ抜寸、切付ニヌク、三本目ハ扱ニ抜キ、四本目ハ打払ニ抜、五本目ハ抜打ニヌク也⁵⁴⁵」と先に挙げた五位五段の技術をそれぞれ用いることで変化をつけていたようである。

以上のように鞘之内は、54 本から成る、直心影流における居合の形であり、複数の形により構成される技法は、動作に若干の変化が加えられている。


(4) 円橋


最後に「円橋」について『直心影流秘書一』『直心影流秘書三』からみていくこととする。


まず、この円橋の形は 5 本で構成されており、打太刀が太刀、仕太刀が小太刀を用いる。その名称は 1 本目「八相」、2 本目「円快」、3 本目「堤」、4 本目「水車」、5 本目「真円橋」となっている。


まず、この形の名称の由来について『直心影流秘書一』では次のように述べられている。

此形ヲ円橋ト云ワケハ昔杉本氏兵法ノ奥儀ヲ極メントシテ百日詣ノ事有ントキ種々サ
マサマノ共アリシ中ニ或時小キ川ヘユキカヽリタルトキ其川ニ円キ木ノ橋一本カヽリ
テアリケル処ヘ盲人来リ杖ヲ持テチヨト其橋ヲサグリソレヨリハツエヲ横ニシテスラ
スラト気バカリニテ橋ヲ渡リタル処ノ気分ヲ見感慨シテアノ処コソ真ノ気分ノ処也ト
考ヘテ此形ヲ作リタルト云故ニ我ヲステ切テ一気ニテ勤ル処ハ此形ホト能キハ有ヘカ

⁵⁴² 『鞘之内秘伝書』 写, 鈴鹿家文書, 全日本剣道連盟蔵.

⁵⁴³ 『鞘之内秘伝書』 写, 鈴鹿家文書, 全日本剣道連盟蔵.

⁵⁴⁴ 『鞘之内秘伝書』 写, 鈴鹿家文書, 全日本剣道連盟蔵.

⁵⁴⁵ 『鞘之内秘伝書』 写, 鈴鹿家文書, 全日本剣道連盟蔵.

ラスシカシナカラ未熟ニシテハ勤メカタカルヘシ真ノ円橋ノ処ニテ考ヘテ工夫モアルヘシスラスラト進行テ小太刀ノ先ヲ向ノ太刀ヘチヨト当ルハ橋ニ杖ヲアテタル心ニテアトノ処別シテ一氣ニテ勤テ渡ル事大事ナルヘシ⁵⁴⁶

流祖である松本（原文は杉本）備前守は兵法の奥儀を極めようとして、百日参詣していたときに、ある時、丸太の橋が一本かかっている小川に行き着いたという。そこへ盲人があらわれ、橋の場所を少し杖で探り、その後は杖を横に持ち、すらすらと橋を渡ってしまったという。この光景を見た備前守は、あれこそが真の気分だと考え、この形を作ったという⁵⁴⁷。己を捨て切って一氣に行うという点において、この形ほど優れたものはないと述べ、未熟ではこの形を打つことができないという。また、この形を行うときの留意点として、滞りなく進んで小太刀の先を少し相手の太刀に当て、その後は一氣に行うことを説いている。この小太刀を太刀に少し当てるという動作が円橋の特徴であると考えられる。例えば 1 本目「八相」では「仕太刀ハ両手ニテ八相ニ取、我ヲステ切テスラスラト進ミ、向ノ太刀ノ当ルコロ、其太刀ヲ打ヲトス⁵⁴⁸」（読点、下線部筆者）と、2 本目「円快」においては「是ハ向フ身ニナリ、片手ニテ円快ニトリ、スラスラト進ミ行、向ノ太刀ヲ打⁵⁴⁹」（読点、下線部筆者）と記されているように、仕太刀が相手の太刀を自分の小太刀によって打ち落としている動作を窺うことができる。

以上、長沼派においては多彩な形の修練がなされていたと考えられ、その形の数から修練における形稽古の割合も高かったと考えられる。

第三項 長沼派の剣術観

前項までは、長沼派の試合・修練形態について、しない打ち込み稽古・形稽古の観点から考察を行ってきた。本項では、試合・修練形態を形成する一要因であると考えられる剣術観について考察をしていきたい。

長沼派の試合では、他にも多くの構えがありながらも上段を主体にしていることから、上段に対して、他の構え以上に特別な意識をもっていたと考えられる。次は天保期に著さ

⁵⁴⁶ 『直心影流秘書一』写、鈴鹿家文書,全日本剣道連盟蔵。

⁵⁴⁷ この伝承は「右円橋五本ノ形其故ヲ求ムレハ盲者ノ杖ヲ以テ円橋ヲ無難ニ渡ルヲ見テ先師ノ作レルト言伝」と『直心影流秘書三』にも記されている（『直心影流秘書三』写、鈴鹿家文書,全日本剣道連盟蔵。）。

⁵⁴⁸ 『直心影流秘書一』写、鈴鹿家文書,全日本剣道連盟蔵。

⁵⁴⁹ 『直心影流秘書一』写、鈴鹿家文書,全日本剣道連盟蔵。

れた長沼派の伝書『直心影流究理之卷注解秘書』の冒頭文である。

兵ト云ハ、本ハ五兵ト云テ矛戟弓劍戈此五品ヲ持ツ兵ト云、亦義兵応兵忿兵貪兵驕兵此ヲ五兵ト云、甲冑ヲ着シ劍ヲ帶タル形則兵也、士也、軍兵士卒トモ云、当流ニテ刀術ヲ兵法ト云ハ、兵ノ字形ハ頭上ヘ太刀ヲ上段ニ持タル形則兵ノ字也、故兵ト云又武士ノ平日ノ法ト云意ニテ兵法ト云也、武士ノ常ノ法也⁵⁵⁰（下線部、読点筆者）


この文は兵法という語の由来について述べられたものであるが、ここで注目すべきは、当流において剣術を兵法と呼称する理由を「兵」の字の由来から説明していることである。この記述では、「兵」という文字は太刀を頭上にとり、上段に構えた姿をあらわしているとされている。そして、この解釈は「当流ニテ刀術ヲ兵法ト云ハ」と自流に限定したものであるようだ。つまり、剣術を兵法と称する理由として上段を述べるのは直心影流における解釈の仕方ということであり、ここには上段を特別視する観念が存在していたと考えられる。

しかし、このような観念があったために上段に構えるようになったとは考えにくい。むしろ、上段を多用するという実状があり、その結果こういった観念が生まれたという解釈が妥当であろう。ここでは、直心影流において上段が多用された理由を考察していきたい。『直心影流秘書二』には「精眼ハ守ル形ノ物也、八相上段ハチコウ也、譬へハ精眼ハ籠城シタヨウナモノ、八相上段ハ寄手ノヤウナモノ、仕掛ルシヤウ也⁵⁵¹」（読点筆者）とそれぞれの構えの性質について述べられている。この記述によれば、精眼は守るための構えであるが、上段や八相は仕掛けるための仕様であるという。前章で取り扱った『大禾一件』の記述からも、当流において仕掛け技が多く遣われていたことが窺える。仕掛け技を多用することが上段に構える理由の一つであったと考えられる。

しかし、仕掛け技を打つという理由のみであれば、八相でも条件を満たしており、上段にこだわる必要はない。上段に構える理由は他にもあるはずである。このことについては、前章第一節において取り扱ったしない打ち込み稽古の基本技術である十之形から考察したい。『直心影流目録口伝書』には、十之形について「スヘテ十之形ハ、一刀ヲ以テ上段ニトリテ、敵ハ色々ニ構テ変化スルヲ、相手トリテスル事ナリ⁵⁵²」（読点筆者）と記されている。十之形は上段に構え、相手の動きや変化に対応する修練を行うという。実際に十之形の動

⁵⁵⁰ 田代正容『直心影流究理之卷注解秘書』天保9年（1838）、中京大学附属豊田図書館蔵。

⁵⁵¹ 『直心影流秘書二』、鈴鹿家文書、全日本剣道連盟蔵。

⁵⁵² 『直心影流目録口伝書』、宝暦14年（1764）、鈴鹿家文書。

作について確認してみると、打太刀は『直心影流目録口伝書』に述べられている通り、様々に変化する。打太刀の構えに注目すると上段、精眼、太刀を脇にとる「斜」の構え、半身になり太刀を頭上にとる「円快」、半身でしないを水平に相手に向ける構えなど多くの構えが用いられている。これらの構えから、真下への打ち下ろし、斜め方向への打ち下ろし、下からの打ち上げ、突き、相手の打突を返しての打ちなど、様々な攻撃がなされる。一方、仕太刀は上段の構えを中心とした動作であり、十之形 14 本の全てにおいて、最初に打ち合いの間合に入ったとき、仕太刀は必ず上段に構えている。そして、上段から、相手の起りを狙っての打ち、打太刀の打突を返しての打ち、相手の下からの打ちに対しての打ち落とし、そして後方に跳び下がりながら上段になり、相手の打ちを避ける動作などが行われる。打太刀の変則的な技に対し、仕太刀はほとんど上段からの技のみで対応しており、上段が相手の変化に対応しやすい構えであることが窺える。

長沼派において上段が多用されているのは、仕掛け技を主体に遣いながらも相手の動きに対応するということを考えたとき、最も適しているからであると考えられる。

また、前項で考察してきた通り、長沼派においては多種類の形がしない打ち込み稽古と併行して修練されていた。直心影流は、江戸中期、遊芸化した形剣術の行き詰まりを打開するため、形の修練とともにしない打ち込み稽古を行うようになったとされている⁵⁵³。その後、近世後期の剣術界全体で他流試合が中心となっていくが⁵⁵⁴、『直心影流究理之巻注解秘書』においては、次のように記されている。

勝負ノミニナルト、当リノ強弱、太刀ノ刃、ム子、^(横)一氣ノ^{あたり}当^{ごうじゆう}ノ剛柔ニモカゝワラス、
^{ただむこう}只向ヘ数サヘアタレハヨヒト思フハ、前句ニ示ス如ク、真勝負ト常ノ稽古カ別ニナル
ヘシ、法定ハ形也、是ヲヨク吟味ヲシ、^{ずいぶん}随分一氣ヲ練リ立ル事、第一ニ修行スヘキ事
也、形ト云ハ流儀ノ根本ナリ、^{それ}夫ヲ吟味セス不^{つと}レ^{めざる}務ハ、^{もと}元ヲ忘ルゝ云者ニテ^{ほんい}本意ニ違
ヒ候也、故ニ肝要ニ勤ヘシ、形ニテ氣当リ、太刀当リノ強弱、剛柔ヲヨク吟味シ、^{しょうぶあい}勝負相
ノ時、自然ト^{そのつよきこと}其強事出ル^{よう}様ニスル事也、^{かならず}必 形勤ヘキ事第一ナリ⁵⁵⁵ (読点、ルビ筆者)

この記述においては勝負のみに傾倒し、形稽古を疎かにしないように警告を発している。このことは長沼派が多種類に及ぶ形を修練していたことから窺えよう。また、本書では「兵法修行モ其如ク、法定、十之形ヲ学テ、而ベ後、勝負相ヲシ、事ヲ励ミ、其後段々ト

⁵⁵³ 全日本剣道連盟編『剣道の歴史』全日本剣道連盟,pp.9,2003,参照.

⁵⁵⁴ 富永堅吾『剣道五百年史』(復刻新版)島津書房,pp.290-291,1996,参照.

⁵⁵⁵ 田代正容『直心影流究理之巻注解秘書』天保9年(1838),中京大学附属豊田図書館蔵.

理ヲ以テ兵法大道ヲ磨キ立ルヲ積ニ切琢之功ニ⁵⁵⁶ト云⁵⁵⁶」(読点、返り点筆者)と修行の段階について記されている。初めの段階では法定や十之形などの形を学び、次の段階では試合による勝負を行う。そして最後に理によって兵法の道を磨くという過程である。最後の段階に到達するためには、形稽古、試合、両方の段階を経る必要があり、どちらも欠けてはならない過程であるといえる。長沼派では、形稽古と試合を併行して学ぶことを重視していたようである。

従来、直心影流が二つの修練法を併行して学んでいたこと、上段の構えを中心に修練していたことを考えると、長沼派では受け継がれてきた伝統を保守しようとする態度をとっていたと考えられる。このことは先行研究で指摘されているように、新発田藩の嶋村外也が上段方式の稽古法を遵守し、精眼方式の稽古を受け入れなかった点、長竹刀を用いなかった点、勝敗を争うことに執着した他流試合を行わなかった点からも考えられよう。

本節では、長沼派の試合・修練形態および剣術観について考察を行ってきた。

試合・修練形態については、しない打ち込み稽古と形稽古に分類し、それぞれ検討した。まず、しない打ち込み稽古については、上段に構える剣術が長沼派の特徴の一つであったと考えられる。また、『剣法秘訣』では近世後期においてこの特徴が崩れていたと述べられているが、安政年間の『新発田藩月番日記』の記述から、近世後期に至っても、長沼派では上段の剣術が守られていたと考えられる。

形稽古については法定、十之形、古流、刃引、霞之形、鞘之内、小太刀、円橋と多種類の形が修練されていたと考えられる。これらの形の中で小太刀、古流・刃引、鞘之内、円橋について検討を行った。

小太刀の形については『直心影流秘書一』においては7本、『直心影流秘書三』においては6本と本数に違いがみられたが、「突非押非」という形が本来2本であったと考えられ、当派における小太刀は本来7本からなる形であったようである。

古流の形については、大古流と古流の2種類が存在し、『直心影流秘書三』の記述によれば、大古流から古流が生まれたという。また、『直心影流秘書一』において古流は5本とされているが、この5本目は後に付加されたもののようである。そして、この『直心影流秘書一』における古流の形5本を刃引によって行うとき、この形は「刃引」と呼ばれ、古流と区別されていたようである。

鞘之内は54本から成る居合の形であり、復数本により構成される形は、動作に若干の変

⁵⁵⁶ 田代正容『直心影流究理之巻注解秘書』天保9年(1838),中京大学附属豊田図書館蔵。

化が加えられている。

円橋の形は 5 本で構成され、打太刀が太刀、仕太刀が小太刀を用いて行う形であり、仕太刀が相手の太刀を自分の小太刀によって打ち落とす動作が特徴的である。

長沼派の剣術観については、上段を中心に遣うことから、上段に対して、他の構え以上に特別な意識をもっていたと考えられる。当流の伝書では、剣術を「兵法」と称する理由として、上段を述べており、ここに上段の構えを特別視する観念が窺える。また、こういった観念が生まれたのは仕掛け技を中心に遣いながらも、相手の動きに対応するために、上段を多用するという実状があったからであると考えられる。

また、長沼派では、形稽古と試合を併行して学ぶことを重視していたようである。特に伝書の中において、勝負に傾倒し形稽古をおろそかにすることがないように説かれている。

第二節 藤川派

第一項 藤川派のしない打ち込み稽古

本節においては、藤川派の試合・修練形態ならびに剣術観について考察を進めていく。はじめに、藤川派のしない打ち込み稽古の様相についてみていくこととしたい。

藤川派のしない打ち込み稽古をみていくにあたり、前章において取り扱った藤川整斎の書『整斎随筆』にみられる藤川弥司郎右衛門近義と鈴木弥藤次の試合について、再度、把握しておきたい。『整斎随筆』においては、「多年修行此所に有りと思ひ、上段より真向へ打込、太刀違はず、弥籐治か頭上に当たりたり⁵⁵⁷」（読点筆者）と記されているように、この試合の中で、近義が上段から相手に打ち込んでいることが窺える。

また、清水礫洲が著した『ありやなしや⁵⁵⁸』においても藤川派の剣士である酒井良佐の試合の記述がみられる。この記述についてもみておくこととしたい。

酒井良佐(1792 - 1838)は、藤川弥司郎右衛門に学んだ人物であるという⁵⁵⁹。これについては、『ありやなしや』に「これは今の藤川弥^(ママ)二郎右衛門がいまだ鵬八郎といへる頃の弟子にて⁵⁶⁰」とあることから、近義ではなく、整斎に師事したことが窺える。

次の記述は、酒井良佐が秋山要介なる人物と立ち合ったときの描写である。

良佑要介初対面の礼終り、要介曰、貴兄には壮年、拙氏は老輩、数本の勝負は逆も出来ず、五本を以て限りとすべし。良佑これを快諾し、仮面を被り竹刀を執る。良祐身の丈六尺、力人を兼ね。其剣を揮ふに及んでは鬼神の如し。要介八九分の懸念あれが、精神^{いどける}萎靡して逡巡す。良佑大喝して上段より頭上を一打す。これを請留るといへども、割つけられて参りたりと云。其次は左の小手を打ち、其次は腹を打つ。三本つづけて打込たれば、要介気力精神共衰へて、跡二本は分なしになして事果つ。要介実に甘心し、近日貴兄の如きの巧手出会へる事なし。年若しといへ共 5 分の勝負は覚束なし、

⁵⁵⁷ 『整斎随筆』国立公文書館蔵。

⁵⁵⁸ 本書は清水礫洲がその幼少時から晩年にいたる数十年の検分を記し、幕末の世態の推移を移したものである。礫洲は父・赤城とともに兵法を家学としていたためか、本書には武芸に関わる記事が多い。安政4年成立（『続日本随筆大成 8』吉川弘文館、pp.8-9, 1980, 参照）。

⁵⁵⁹ 富永堅吾『剣道五百年史』,復刻新版,島津書房,p.327,1996,参照。

⁵⁶⁰ 清水礫洲『ありやなしや』（『続日本随筆大成 8』所収）吉川弘文館,p.277,1980。

況や此老境に及んでをやとて、大に賞嘆す⁵⁶¹

良佐⁵⁶²は大きな声を張り上げ、上段の構えから秋山の頭上を打ったという。秋山はこの打ちを受け止めたものの、そのまま割るように打たれたため、「参った」と述べたという。良佐はこの後、左小手、腹部と、3本立て続けに打ったようであり、そのため秋山は気力・精神とも弱ってしまったという。

この試合においても上段からの打ち込みがなされていることがわかる。藤川派も上段からの打ち込みを主体とした剣術であり、長沼派の形態と同様であったと考えられる。

第二項 藤川派の形稽古

1. 藤川派の形

次に藤川派の形稽古についてみていきたい。斎藤明信は師である藤川整斎について⁵⁶³、「此先生の代に至り、当流元祖よりの伝書等に、若し不明なる処有れば、精はしく是を調べ、法定及び種々の形の手気相等を悉く究理し、是を試合に懸けて活用することを教へ、子弟を集めて説明し、只管戦場実地の利害をおしへられたり⁵⁶⁴」（読点筆者）と述べている。つまり、藤川整斎により、当派において形稽古が重視されるようになったということである。

藤川派の人物である斎藤明信が著した『直心影流極意教授図解』には、法定、十之形（韜之形）、小太刀（小韜）、刃引の4種の形について詳細な解説がなされている。斎藤の後には山田次朗吉⁵⁶⁵がこれら4種の形に丸橋を加え『鹿島神伝直心影流』を著している。山田

⁵⁶¹ 清水礫洲『ありやなしや』（『続日本随筆大成8』所収）吉川弘文館、p.277,1980.

⁵⁶² 原文では「良佑」となっているが、『剣道五百年史』においては「良佐」と記されている（富永堅吾『剣道五百年史』復刻新版、島津書房、pp.327 - 328,1996,参照.）。本論では「良佐」と表記することとする。

⁵⁶³ 斎藤明信は嘉永2年（1849）に藤川整斎に入門したが（斎藤明信『直心影流剣術極意教授図解』井口魁真書楼、p.30,参照.）、整斎と斎藤明信の間に整斎の子である藤川太郎憲の名前がみられることから（斎藤明信『直心影流剣術極意教授図解』井口魁真書楼、pp.27-28,参照.）、藤川太郎から流儀を継承したようである。

⁵⁶⁴ 斎藤明信『直心影流剣術極意教授図解』井口魁真書楼、pp.20-21,1901.

⁵⁶⁵ 山田次朗吉は『一徳斎山田次朗吉伝』によれば山田次朗吉は男谷派の榊原鍵吉に師事していたが、榊原鍵吉が形を全く行わない人物であったため、藤川派の山田八郎という人物に学んだという（島田宏『一徳斎山田次朗吉伝』一橋剣友会、pp.19-21,1931,参照.）。一方、石垣安造によれば、山田次朗吉に形を指導したのが斎藤明信であったという（石垣安造『撃劔会始末』島津書房、p.45,2000,参照.）。つまり、山田次朗吉は形稽古については藤川派の系統を継いでいると捉えられる。本論では、『鹿島神伝直心影流』を藤川派の形についての考察史料として取り扱う。

は『鹿島神伝直心影流』の緒言において「直心影流諸形全部ヲ図解シ之ヲ公ニセント決ス⁵⁶⁶」と述べている。つまり、山田次朗吉が師から伝授された形はこの 5 種の形で全てということである。『直心影流剣術極意教授図解』と併せて考えると、斎藤明信以降の藤川派においては、長沼派で修行されていた古流の形・鞘之内などが修行されていないと考えられる。藤川派においては法定・十之形・小太刀・刃引・丸橋という五つの形が伝承されていたと考えられる。

2. 藤川派の形の独自性

次に藤川派において伝承されていた五つの形のうち、小太刀・刃引・丸橋について考察する。これらの形については、長沼派に存在する形であるが、相違点がみられるため、長沼派のものと比較することで、藤川派におけるこれらの形の独自性を明らかにしていきたい。

(1) 小太刀

はじめに、小太刀について考察を行う。ここでは、その構成について検討していくこととしたい。

長沼派における小太刀の形は 7 本で構成されているが、藤川派においてはいかに構成されているのであろうか。次の表 4-5 が、長沼派と藤川派の小太刀の形の構成について示したものである。

表 4-5 長沼派と藤川派の小太刀の形の構成

	長沼派	藤川派
1	風勢	風勢
2	水勢	水勢
3	切先返シ	切先返シ
4	茶巾服紗（鏝ドリ）	鏝取
5	突非押非	突非押非
6		円快
7	円快	

この表から明らかなように、長沼派においては「突非押非」が 5・6 本目にあたり、全 7

⁵⁶⁶ 山田次朗吉『鹿島神伝直心影流』一橋剣友会,p.2,1927.

本で構成されているのに対し、藤川派においては5本目が「突非押非」となっており、全6本で構成されている。この藤川派の構成は、長沼派の考察において取り扱った『直心影流秘書三』と同様であるとも考えられるが、前節で述べた通り、『直心影流秘書三』における「突非押非」の解説には、この形が本来、2本の形であることを窺わせる記述がみられる。しかし、藤川派の形の解説書である斎藤明信『直心影流剣術極意教授図解』、山田次郎吉『鹿島神伝直心影流』における「突非押非」の記述をみる限り、この形が本来2本の形であることを述べた記述は確認できない。したがって、藤川派において、この「突非押非」の形は、2本の形としてではなく、1本として捉えられていると考えられる。

また、藤川派において4本目は「鰐取」と称されており、長沼派の4本目「茶巾服紗」の別名を用いているようである。

(2) 刃引

次に藤川派における刃引の形について考察を行う。

まず、斎藤明信『直心影流剣術極意教授図解』においては、刃引の形について次のように記されている。

此形は四本なれども法定の裏の手の形なるが故に名所は法定に同じ二本目三本目とつづけて打つ故に他見する時は三本の形の様に見へるものなり⁵⁶⁷

この形は4本から成り、法定の裏の形であるという。したがって、それぞれの形の名称は法定と同様であるという。また、この形は2本目と3本目を続けて打つために、一見3本に見えるということである。

それではこの藤川派の刃引の形が長沼派のものといかに異なるか、動作の比較を行いたい。前節で述べた通り、長沼派の刃引の形は、古流の形5本を刃引によって行う形であるため、古流の記述を挙げることにする。また、藤川派の刃引においては2本目3本目が区切られずに記されており、どの動作から3本目に入るか不明瞭であるため、区切ることなく示すことにする。また、同様の動作を表していると考えられる記述には、下線及び通し番号を付した。

⁵⁶⁷ 斎藤明信『直心影流剣術極意教授図解』井口魁真書楼, pp.12-13, 1901.

表 4-6 長沼派における刃引の形と藤川派における刃引の形の動作

	長沼派 刃引（古流）		藤川派 刃引	
	打太刀	仕太刀	打太刀	仕太刀
1	右足を出し、斜の構え	左足を出し、八相の構え	左、右と足を踏出し、揃えて上段	左、右と足を出し、八相
			右足を蹴りあげ、正面を切る	右足を蹴りあげ、正面を切る ^①
	仕太刀の太刀の平を送るよう に打ち放す	右足で向の頭へ真直ぐに 打ち込む ^①	右足を踏み込み、左足を切る ^①	左足を引き、左足への切り込みを止める
		下で打ち合わせる右足を 引き、向の左の小手の内 へ乗る		
		左へ太刀先を回し、上段 に冠り、真直ぐに打ち込 む	左足を右足まで踏み揃え下段で詰める	下段の構えのまま右足を左足に引付ける
			右足左足と引き揃え、正上段に冠る	右足左足と大股に引揃え正上段
	下に出す（仕太刀の小 手を大きく横にかけ る）	はじめに出たように平で 打ち、右足を高く上げる	左足を踏み出す	左足を踏み出す
			右足を蹴り上げ正面を切る	右足を蹴り上げ正面を切る
			剣先を左に回転し、刃を仕太刀に向け水平に し、柄の中央を蹴り上げた股の上に寄せ左足 で直立する	剣先を右に向け水平にし柄の中央を蹴り上 げた股の上に寄せ左足で直立する
			相精眼	相精眼
2		中段からすぐに上段（足 を揃える） 左足を出し右足で眉間に 真直ぐ打ち込む ^②	精眼から左、右と足を踏出し、揃えて上段 左足を出し、右足を蹴り上げ正面を切る	精眼から左、右と足を踏出し、揃えて上段 左足を出し、右足を蹴り上げ正面を切る ^②
	右足を引く	向こうの右の小手の内へ のり、左足を入れて向こ うの左の小手の内への り、そのまま霞 ^③	右足を下ろし、踏み揃え、左足を引く	精眼になり、蹴り上げた右足を大股に一歩 踏出す
			右足、左足、右足と引き、右八相 ^② 右足を踏み込み、正面を切る	左足を一歩踏み出し、右霞の構え ^③ 剣先の峰にて巻き落とす

	八相に取り ^② 、左小手に打ち込む	足を動かさずに身体を捻って太刀を胸に取る ^④ (このとき肘と身体が離れないようにする)		
	しないを離す		巻き落とされ、右足を引き、右斜	体を捻り、正面を巻き落としたら、左に回転、足を要のように組み、柄を両乳の部分に当てて、水平に剣を付ける ^④
3	しないを放し、また付けて来る	手を打太刀の方へ伸ばし、後に引いて、足を揃える		
	右足を引き、斜に取る ^③	左足を引いて斜にとる ^⑤	直立精眼に構え、左足から4歩出る	直立精眼に構え、右足から4歩引く
	少し右足を入れて打って放す	上段に冠り、右足を入れ、眉間に打ち込む ^⑥		
	すぐに右にまわして眉間の辺りに打ち込む	右足を引いて応じる	右足を引き、右斜の構え ^③	左足を出し、右斜の構え ^⑤
		左へ冠り、右足を出し、真直ぐに打ち込む ^⑦	右足を蹴り上げ正面を表から切る	右足を蹴り上げ正面を表から切る ^⑥
	下に出す	平にて打つ	剣先を左に廻し、左足を十分に蹴り上げ、裏から正面を打つ	剣先を左に廻し、左足を十分に蹴り上げ、裏から正面を打つ
		右足を出し、太刀を平精眼のようにして向の喉の所へのる ^⑧	剣先を右に廻し、右足を十分に蹴り上げ、表から正面を打つ	剣先を右に廻し、右足を十分に蹴り上げ、表から正面を打つ ^⑦
		直ぐに左足を引き揃えて右にかぶり、左足を入れて打ち込む	仕太刀の小手を切る	右足を左方向に蹴り上げ、体を捻りながら峰で小手に切ってくるのを払い落す、剣先は右に向く
		左へ回して冠り、右足を	払われて、左斜	

		入れて打ち込む	左足を伴いながら右足を出し、刃の中央を仕 太刀の喉の前に水平に付け間隔を詰め、その 後、左斜め後に一歩開く	左足を伴いつつ右足を出し、刃の中央を打 太刀の喉の前に水平に付け間隔を詰め⑧、 左斜め後に大股に引く
			上段から右足を一歩踏み出す	上段から右足を一歩踏み出す
			左足を上げて裏から正面を打ち、下段 上段から左足を出す	左足を上げ裏から正面を打ち、下段 上段から左足を出す
			右足を上げ、正面を切り、精眼	右足を上げ、正面を切り、精眼
4		下段から上段に冠り、左 足を出す⑨	下段から上段になり左足を出す	下段から上段になり左足を出す⑨
		右足を上げ、正面を切る	右足を上げ、正面を切る	右足を上げ、正面を切る⑩
		右足を出し、向こうの眉 間へ打ちこむ⑩	右足を踏み込み左足を切る	左足を引き、左足への攻撃を止める⑩
		下にて刃を左の方に向け て応じる⑪	剣先を回し左足を踏み込、右足を切る	右足を引き、右足への攻撃を止める⑪
		右足を引き、刃を右に向 けて手元近くで応じる⑫	右足を左足に引き揃え下段	左足を右足に引き揃え下段
		左にまわして上段に冠り 眉間に打ち込む	上段から左足を出す	上段から左足を出す
			右足を上げて正面を切り、精眼	右足を上げて正面を切り、精眼
5		中段で单身		
	進む	進む		
	打太刀から突き出す	気をもって向かい太刀の 上にのる		

表から、長沼派と藤川派の比較を行うと、共通する動作が若干みられる。2・3本目の「足を要のように組み、柄を両乳の部分に当てて、水平に剣を付ける」（仕太刀下線部④）「左足を伴いつつ右足を出し、刃の中央を打太刀の喉の前に水平に付け間隔を詰め」（仕太刀下線部⑧）などの特徴的な動作が共通していること、4本目の動作において共通点が多いことから（仕太刀下線部⑨ - ⑫）、二つの形は全く無関係なものではなかったと考えられる。しかし、1本目の形における構えについてみると、長沼派では打太刀が斜に構えているのに対し、藤川派においては打太刀が上段に構えている。このように相違点が共通点以上に

多くみられるため、これら二つの形が同様の形であるとはいえない。藤川派の刃引の形は伝承されていく中で、長沼派の刃引とは異なる独自の変化を遂げたと考えられる。

(3) 丸橋

最後に藤川派における「丸橋」の形について考察を行う。藤川派の形を解説した書の中で、この形について記されているものは、管見の限り、山田次朗吉『鹿島神伝直心影流』のみであるため、本書を考察の対象としていく。

はじめに、長沼派における円橋の形の構成と比較していくこととする。以下の表 4-7 に両派の丸（円）橋の構成について示した。

表 4-7 長沼派・藤川派の丸（円）橋の構成

	円橋（長沼派）	丸橋（藤川派）
1	八相	八相
2	円快	堤
3	堤	水車
4	水車	円快
5	真円橋	円橋


まず、これら 5 本の形の総合名称が、長沼派では「円橋」と、藤川派では「丸橋」と異なる字によって表記されている。

次に 2、3、4 本目の順番が異なっている。長沼派においては 2 本目から「円快」「堤」「水車」となっているのに対し、藤川派では「堤」「水車」「円快」の順に記されている。さらに 5 本目は長沼派において、「真丸橋」と称されているのに対し、藤川派では「円橋」と称されている。これら丸橋の形については順序や名称が長沼派のものと異なっているといえよう。

また、技術的な相違点としては、特に二つ挙げられる。

一つ目は、打太刀と仕太刀の動作が反対になっていることである。長沼派においては、「仕太刀短刀打太刀長刀⁵⁶⁸」と仕太刀が小太刀を用いて形を行うが、藤川派においては、打太刀が小太刀、仕太刀が太刀を用いている。したがって、長沼派と藤川派とでは、打太刀と仕太刀の役割が反対になっていると考えられる。

二つ目は、小太刀によって相手の太刀を落とす動作である。長沼派では仕太刀が自身の

⁵⁶⁸ 『直心影流秘書三』, 鈴鹿家文書, 全日本剣道連盟蔵。

小太刀で打太刀の太刀を打ち落とすという動作が特徴的であるということは、前節においてすでに述べたところである。しかし、藤川派ではこの動作の様子が異なっている。まず、打太刀は「打太刀ハ間隔ニ応ジテ劍先ヲ左向水平トナシ気合ニテ仕太刀ノ精眼ヲ抑ヘ劍先ヲ落ス⁵⁶⁹」と仕太刀の精眼を抑えるために劍先を落としていくようであるが、これは気合をもって行うという。仕太刀は「仕太刀ハ無想ノ感ズル処打太刀ノ押ヘニ応ジテ過不及ナク劍先ヲ降ス⁵⁷⁰」と打太刀が太刀を押さえて来るのに対し過不及なく、劍先を下げていくことを説いている。つまり、仕太刀は太刀を打ち落とされるのではなく、自身で劍先を下げていることがわかる。これらの一連の動作は、打太刀が気合をもって太刀を降ろしていくことで、仕太刀はその気合により、自然と劍先を下げてしまう、という動作であると解釈できる。これは先にも述べた通り、長沼派の小太刀で太刀を打ち落とす動作とは異なると考えて良い。丸橋の形についても長沼派のものと異なる点が見受けられ、独自性を確認することができる。

藤川派においては、法定・十之形の他に、小太刀・刃引・丸橋についての記述が確認でき、これらの形は、長沼派のものと相違する点が散見される。

第三項 藤川派の剣術観

これまで藤川派の試合・修練形態について考察を行ってきた。本項においては、この試合・修練形態を形成する一要因であると考えられる当派の剣術観について考察していくこととする。

第一項でみてきたように、藤川近義・酒井良佐が試合において上段を用いていることから、当派では長沼派と同様に上段を特別視していると考えられる。次は『靈劍伝解』の一文である。

一 当流の修行は、さ右仕方切掛^(左右)によらず、天理自然に^(ず)随^{したが}、己々^{おのおの}か性^(が)に任せて千変万化の業^{みがく}を磨^(ば)の修行なれば、太刀の構は人之心次第なり、然^{しかれども}共当に執行なすには、まつは相上段なり、相^(先ずは)構^{あいかまえ}、相^{あいしやく}尺^{むつかしき}は勝負六ヶ敷ものなり、依^{よつ}て平日の修行上^{しばらく}へ且^{かつ}右の肩にとるを有発の八相と云、是陰^{いん}の構なり、陰は物にふくするの理なり、頭上にとるは打^{うち}をふくするの理なり⁵⁷¹ (読点、ルビ筆者)

⁵⁶⁹ 山田次朗吉『鹿島神伝直心影流』一橋剣友会,p.537,1927.

⁵⁷⁰ 山田次朗吉『鹿島神伝直心影流』一橋剣友会, p.537,1927.

⁵⁷¹ 佐藤郡兵衛『靈劍傳解』文政2年(1819),熊本県立図書館蔵.

ここでは、構えは心次第であると述べながらも、実際の修行についてはまず相上段で行うように説いている。その理由として相手と同じ構えをとり、同寸のしないで稽古することは勝負が難しいものになり、修行に適していることを述べている。相手と同じ構えならば、どの構えでもこの条件を満たしていると考えられるが、ここでは第一に上段を修行するように説いており、長沼派と同様、上段が重要視されていたことが窺えよう。

さて、斎藤明信は、藤川整斎によって当派が形稽古を重要視するようになったことを述べているが、ここからは整斎の見解をみていくことで整斎が形稽古を重要視した理由について考察したい。次は整斎が著した『靈劍略解』の記述である。

聊^{いささ}モ刀劍ニ不^{かぎ}限^{らず}、惣テ槍矛或ハ弓鉄砲其他ノ武器^{ことごと}悉^しク死物ナレトモ、人、之^{これ}ヲ運用活動スルトキハ、自^{おのずか}ラ活物トナル訳ナレトモ、人、之ヲ活物ニ為^な子^{さね}ハ如何ナル名刀良弓ト雖モ死物也、然^{しか}レバ之ヲ活物ニ為サンニハ他事無シ、只我ガ精神ノ其兵器ニ移シテ使用運転セザレバ、却^{かえつ}テ其兵器ノ用ヲ失テ害アリ（中略）故ニ氣ハ氣ニ移ルモノナレバ、我ガ氣ヲ其太刀ニ移シテ修行セザレバ、実地ノ用ニハ立チ難カルヘシ、先ツ平日我ガ精神ヲ練リ、勇氣ヲ養フガ本ナリ、唐遜思邈ノ説ニ、胆ハ大ナランコトヲ欲シ、心ハ小ナラン事ヲ欲ストテ、精神縮小ナレハ、踏切テ行フベキ事ヲ果シ得ズ、勇氣不足ナレバ、実地ヘ進ミ出ル事^{かい}甲^が斐々々シカラズ、是レ樵夫ノ喬木ニ登セ樵夫ヲシテ高浪ニ乗セテハ、悉^{ことごと}ク恐レテ用ヲ為ス事能ハズ、士タル者今日劍術修行ヲ為セドモ、唯^{なぐりあい}擲合ノミ修行ニテハ用ニ立ツ事難シ、故ニ我ガ精神ヲ其太刀ニ移シ、死物ヲシテ活物ト為ス事ノ道理ヲ研究スベキコト肝要也⁵⁷²（読点、返り点、ルビ筆者）

この記述において整斎は、本来死物である太刀に自らの精神を移し込み、活物にすることを説いており、また、そのようにして修行しなければ実際には役に立たないと指摘している。そして、そのために精神を練り、勇氣を養うことが肝要であると述べている。この記述から、山田次朗吉『日本剣道史』に述べられているように、整斎が精神の鍛練を重要視していたことは間違いない⁵⁷³。

⁵⁷² 藤川整斎『靈劍略解』安政4年（1857）、東京国立博物館蔵。

⁵⁷³ この点については山田次朗吉が『日本剣道史』において既に述べているが、山田は史料を基にして述べていなかった（山田次朗吉『日本剣道史』一橋剣友会、p.322－324, 1925.）。この考察により、山田の言説が証明されたといえる。

また、今日、剣術修行をするとしても単に叩き合いのみをしていては役に立たないと、勝負のみに傾倒した剣術を批判する。整斎がこのような述べるのは、本書が記された安政期頃の剣術が勝負に拘泥しており、精神を練るということをないがしろにしていたという実状があったからであると考えられる。そしてこのような勝負に傾倒した剣術に陥ることがないようにするためにも、精神を太刀に移し、活物とする道理を研究するように説いている。

太刀に移す精神については、整斎は次のように述べている。

扱^{きて}勝負ニ^(ママ)望ムトキハ、勝敗ノ念起ル故ニ、心胆ヲ臍下ニ納ム、其収ムト云ハ至^{いう}テ難^{いたつ}キ事也、因^{よつ}テ常ニ修行セスンハ有ヘカラス、無念無想ト成リ、我モナク敵モナキ処ヨリ一気決断スルナリ、喜怒^(ママ)愛^{あく}楽^{よく}悪^{じょう}欲^{ねん}ノ常^す念ヲ弃ツルヨリ天然ト活物生スルナリ、其自然タル処ノ精神ヲ劔ニ移シ使用ス⁵⁷⁴（読点、ルビ筆者）

勝負のとき、勝ち負けにとらわれる念が起こるために、心を丹田に納めることが難しく、それ故に常の修行が必要であると整斎は述べる。そして、このような雑念を去り無念無想の状態となった精神を太刀に移すことを説いている。整斎が述べる精神の鍛練とは、雑念を捨て、無念無想となった心を臍下丹田に納めることであると解釈できる。

そして整斎以降の藤川派では、このことを形稽古で実践している記述がみられる。例えば、斎藤明信は小太刀の形について「小竹刀は、手足の業の、しけき故、なほこゝろをば、丹田におけ⁵⁷⁵」「あせりなは、打も、^(止)とむるも、蹴もならず、こゝろを^(標)すへよ、自在なるべし⁵⁷⁶」（ルビ、読点筆者）と形の中で心を臍下丹田に納めるように説く。また、山田次朗吉は「此法定ヲ勤メルニハ、必ズ喜怒哀楽愛悪欲ノ七情ヲ捨テ、無念無想ニシテ可勤也、然時ハ精神活気ノ昇降、千変万化、臨機応変、変動無常、進退自在、神変不思議ノ神道ヲ、自得了解スルニ至ルベキ者也⁵⁷⁷」（読点筆者）「丹田ニ心ヲ能^{よく}落付テ、気分ハ三焦ヲ通ジ、気海丹田ヲ一貫シテ、手足ノ指先マデ順還シ、滞ルコトナク勤メザレバ、熟スル処ニ至ラザル也、一平日非常共ニ丹田ニ有時ハ萬事ニ恐レ迷フ事無ク、決断臨機応変ノ自由ヲナス者也⁵⁷⁸」（読点筆者）と法定を行う際に心を無念無想の状態にし、臍下丹田にその心を納めることを強調している。

⁵⁷⁴ 藤川整斎『霊剣略解』安政4年（1857）、東京国立博物館蔵。

⁵⁷⁵ 斎藤明信『直心影流剣術極意教授図解』井口魁真書楼、p.47,1901.

⁵⁷⁶ 斎藤明信『直心影流剣術極意教授図解』井口魁真書楼、p.47,1901.

⁵⁷⁷ 山田次朗吉『鹿島神伝直心影流』一橋剣友会、p.613,1927.

⁵⁷⁸ 山田次朗吉『鹿島神伝直心影流』一橋剣友会、p.613,1927.

整斎は精神を練ることを重要視しており、勝負に傾倒した試合では精神鍛練が出来ないと考えたため、形稽古を重要視したと考えられる。

本節においては、藤川派の試合・修練形態ならびに剣術観について考察を行ってきた。

しない打ち込み稽古については、長沼派と同様、上段に構えて行われていたと考えられる。このことは、藤川弥司郎右衛門近義と酒井良佐の試合から窺うことができる。

形稽古については、当派において藤川整斎の頃より形稽古を重視するようになったようである。斎藤明信、山田次朗吉という藤川派の形を継承した両者の伝書から、法定・十之形・小太刀・刃引・丸橋の五つの形が伝承されていたことが窺える。これらのうち、小太刀・刃引・丸橋の形について個別に検討を行った。

小太刀の形については、長沼派において、2本から成る「突非押非」の形が、1本で構成されていると捉えられているため、小太刀の形全体としては、6本の形から成り立っている。

刃引については、長沼派の形と若干共通した動作がみられるものの、同様の形とはいえない。藤川派における刃引の形は継承される間に独自の変化を遂げたと考えられる。

丸橋については、形の順序や名称が長沼派のものと異なっている。また、打太刀と仕太刀の役割が長沼派と反対であること、小太刀によって相手の太刀を落とす動作が気合によって行われることが藤川派における丸橋の独自性である。

剣術観については、当派においても上段を特別視する観念がみられる。当派の伝書では、修行の際に相手と同じ構えで行うように説いているが、その中でも上段を第一に稽古すべきであると述べている。このあたりから、藤川派においても上段を特別視していることが確認できる。

また、藤川整斎の見解から、彼が形稽古に重点を置いた理由について考察を行った。

藤川整斎は勝負のみに拘泥した当時の剣術を批判していた。そして修行によって雑念を去り、無念無想の心を臍下に納めることを重要視している。整斎以降の藤川派では、この「心を臍下に納める」「無念無想になる」ということが形の記述に多く述べられており、藤川派が形稽古を重視した背景には整斎の見解があったと考えられる。

第三節 男谷派

第一項 男谷派のしない打ち込み稽古

本節では男谷派の試合・修練形態ならびに剣術観について考察していくこととする。

はじめに男谷派のしない打ち込み稽古について考察していくが、まずは前章第三節で取り扱った『加藤田平八郎東遊日記抄』から得られた知見を再度整理していくことからはじめたい。

前章第三節で取り扱った『加藤田平八郎東遊日記抄』においては、男谷精一郎一門（男谷派）と加藤田新陰流の試合の描写がみられた。前節で取り扱った男谷派の試合の中で、構えに着目すると、男谷精一郎と加藤田平八郎の試合において描写をみることができる。

この立合において男谷はまず「惣丈四尺ニ不^{そうだけよんしゃく}足^{たら}丈夫成^{ざるじょうぶなる}構^しニ而^{つか}、下段之構^{して}ニ而^{つか}、予ヲ被^{われ}遣^は候⁵⁷⁹」とあるように下段に構えている。そして、3本目まで加藤田に突かれた後、「直^{じき}ニ四本目高^{（精）}誓^{ちか}眼に直^{ちか}り⁵⁸⁰」と高精眼に構えている。この試合において、男谷は下段と高精（精）眼の構えを用いており、上段に構えた様子は窺えない。

更に同書には、男谷の試合の記述がもう一箇所みられる。この試合は加藤田新陰流の人物との試合ではなく、加藤田平八郎が男谷の試合を見物したときに記したものである。以下がその記述である。

同廿日、藤田吉蔵、吉川十兵衛、立石中山同道ニ而、男谷道場に参、吉蔵男谷殿^と試合候処、精一郎殿下段之構之俣ニ而、面計動し、左右へ突を抜き、入込而被遣候模様、実ニ高年ニ而、致感心候、吉蔵事親仲よりも、諸師家へ引廻呉候様、頼越候得共、着砌より吉蔵病気に而、稽古出来不申頃日全快に付、我輩孰も帰国之期も相迫候間一度成共同伴致置候得者後日之為ニも宜速吉蔵同道致候同人と帰候兼而上手^と及聞候得共ヶ様には有之間敷存候処珍敷上手^と感服致候⁵⁸¹（読点、下線部筆者）

この記述で男谷は藤田吉蔵⁵⁸²なる人物と立ち合っている。下線部においては、男谷が下

579 『加藤田平八郎東遊日記抄』^写, 鈴鹿家文書, 全日本剣道連盟蔵。

580 『加藤田平八郎東遊日記抄』^写, 鈴鹿家文書, 全日本剣道連盟蔵。

581 『加藤田平八郎東遊日記抄』^写, 鈴鹿家文書, 全日本剣道連盟蔵。

582 この人物については、この描写以外に同書の中に名前が確認できず、詳細は不明である。

段に構えて、自らの面を差出しながら間を詰め、左右へ面を動かし、相手の突きを避けている様子が窺える。そして、加藤田はこのような男谷に対し、「実ニ高年ニ而、致感心候」と評価している。

本書において、男谷派の人物の構えが確認できるのは以上であり、下段、精眼の構えを用いていることが窺える。

先行研究においては、新発田藩で栄えた男谷派が精眼の構えを専らとし、他流試合を盛んに行ったと述べられている⁵⁸³。本論で取り扱った男谷の試合についての記述と併せて考えると、男谷派では従来の上段の構えをとることはほとんどなく、長沼派や藤川派とはその特徴が大きく異なっていたと考えられる。

第二項 男谷派の形稽古

次に男谷派の形稽古について考察していきたい。男谷は文政9年（1826）に法定・十之形の形名が記された『直心影流兵法目録』を新発田藩の堀源三郎に授与している。しかし、男谷は『武術雑話』の中で「已前より常の指料の竹刀にて日々試合の稽古のみ致し候⁵⁸⁴」と、自身が試合形式の稽古のみを修練してきたと述べていることから、実際に形稽古が行われなかったとも考えられる。実際に形の伝授が行われていたか確認するためには、男谷自身が形について記した史料にあたる必要があるが、管見の限り未見である。ここでは男谷派の後世の人物にあたる石垣辰雄ならびに石垣安造⁵⁸⁵の言説を参考に、当派における形の修練形態を考察していきたい。

まず、法定について、考察をしていく。石垣安造は「直心影流の剣士と称する人々の間で、初心者の中から法定四本之形を稽古している者がいると聞く。法定が直心影流を代表する形だからといって、初心者の中から形を学ばせているらしいが、流儀の何たるかも知らないで法定の形だけをおぼえても、それは魂の抜けた棒振りに他ならない⁵⁸⁶」と法定を初心者から学ばせても意味がないと述べ、法定は免許を授ける際になければ伝授しないという⁵⁸⁷。法定はその成立初期から流派全体の修行過程の中でも特に、初級・中級において修練されてきたことは第二章においてすでに述べた通りである。後世に至っても、藤

⁵⁸³ 綿谷雪・山田忠文編『武芸流派大辞典』東京コピイ,p.480,1978,参照。

⁵⁸⁴ 『武術雑話』（渡邊一郎編『武芸伝書聚英 第十二集』所収）宇都宮大学教育学部,pp.128-129,1990。

⁵⁸⁵ 石垣辰雄・石垣安造は榊原鍵吉の弟子である野見鋌次郎の子孫にあたる。

⁵⁸⁶ 石垣安造『直心影流極意伝開』島津書房,p.303,2001。

⁵⁸⁷ 石垣安造『直心影流極意伝開』島津書房,p.305,2001,参照。

川派の形を継承した山田次朗吉の系統では法定は特に初心者が行うものであるとされ⁵⁸⁸、長沼派においても基本の形として稽古されているようである⁵⁸⁹。したがって、法定を奥儀とし、免許を得るまで授けないというこの伝授形態は男谷派独自のものであると考えられる。しかし、これが男谷精一郎の頃から続いているかは不明である。

また、石垣安造はこの法定が奥義であるとともに儀式としての意味も併せ持っており、一挙手一投足に流儀の秘奥が含まれていると述べている⁵⁹⁰。つまり、法定は剣術の形として伝授されていただけでなく、儀式としても重要視されていたと考えられる。このことは石垣辰雄の著書『鹿島神伝直心影流極意』からも窺える。例えば、はじめに互いに木刀を置く所作について「治世を表するが故也⁵⁹¹」とその動作が治世を表現していると述べている。また、「夫より互に手を開く是軽く清めたる物は上りて天となり、重く濁りたる物、下りて地となり、乾坤定りたる形⁵⁹²」と手を開く動作によって天地が定まることを表現している。この記述は、第二章で考察した上半円・下半円のことを指していると考えられ、この上半円・下半円が天地を表現するということが男谷派にも伝わっているといえる。さらに形の終わりにおいて、再び精眼に構えることについて、「是万物一より出て一に帰する也⁵⁹³」と述べている。

これらの動作は相手と斬り合うための剣術の技術とは違った意味を有する動作であるといえる。このように法定は剣術の形でありながらも、儀式としての性質を併せ持っていたと考えられる。男谷派では法定を剣術の形というよりも儀式として捉えていたとも考えられるが、男谷自身が法定をいかに捉えていたかは不明である。しかし、この形が後世の男谷派において修練されていることは確かである。

十之形は、石垣安造によると、「長沼国郷の代になって道具が考案され、実用化してからは、竹刀業の稽古が容易になり、これ以後、韜の形は単なる形にとどまり、^{これら}之等の形や業は道具を着用した試合稽古に活かされ、実用的業として伝授されるようになった⁵⁹⁴」とい

⁵⁸⁸ 山田次朗吉の系統である岩佐勝『鹿島神伝直心影流』によると、初心の段階で当流の稽古方法や礼法などを心得、そして法定の仕太刀の動きから基本の構え、呼吸、手の内、足運びを習得していくということである。（岩佐勝『鹿島神伝直心影流』武道振興會, pp.65-67, 2005, 参照。）

⁵⁸⁹ 佐藤泰彦『城下町新発田の剣道史 上巻』刊行人発起人会, p.91, 2007, 参照。

⁵⁹⁰ 石垣安造『直心影流極意伝開』島津書房, p.296, 2001, 参照。

⁵⁹¹ 石垣辰雄『鹿島神伝直心影流極意』鹿島神伝直心影流振興会, p.120, 1935。

⁵⁹² 石垣辰雄『鹿島神伝直心影流極意』鹿島神伝直心影流振興会, p.121, 1935。

⁵⁹³ 石垣辰雄『鹿島神伝直心影流極意』鹿島神伝直心影流振興会, p.121, 1935。

⁵⁹⁴ 石垣安造『直心影流極意伝開』島津書房, p.223, 2001。

うことであり、男谷派の中ではこの形は用いていないと述べている⁵⁹⁵。つまり、十之形はしない打ち込み剣術の技術として試合稽古の中で学ばれていたということであり、形稽古という形式で学ばれていなかったと解釈できる。しかし、このような修練形態が男谷の頃から成立していたかどうかは不明であり、考察に慎重を要する。

男谷自身の形の修練がいかに行われていたかは明らかでないが、後世の男谷派においては、法定は伝授されており、十之形は形という形式ではなく、しない打ち込み稽古の中に取り込まれ、伝承されているようである。

第三項 男谷派の剣術観

これまで男谷派の試合・修練形態について述べてきたが、この形成には男谷精一郎の剣術観が深く関わっていると考えられる。男谷については、榎本鐘司氏がその剣術観について考察を行っている。ここでは、氏の先行研究の知見を参考にしながら、男谷の剣術観が試合・修練形態の形成にいかに関与を及ぼしたのかを考察したい。

主な考察の史料としては、男谷精一郎が著したとされる『武術雑話』、男谷の人物について記された『男谷先生行状録』を取り扱う。『武術雑話』は天保14年（1844）に著された男谷精一郎の著作である。榎本氏によれば、男谷の著作は本書以外に不明であり、男谷の修練の実態や剣術観を知る上で重要であるという⁵⁹⁶。『男谷先生行状録』については著者、成立年代ともに不明であるが、冒頭に「男谷先生は予が撃剣の師なり⁵⁹⁷」とあり、この著者が男谷の門弟であったことが窺える。また、この人物は男谷の寵遇を受けていたようである⁵⁹⁸。男谷の剣術に関してだけでなく、人物や性格、日常の言動などにわたり、非常に委細に記されており⁵⁹⁹、男谷精一郎を考察するにあたり、欠くことのできない史料であると考えられる。

まず、男谷が『武術雑話』を著した天保期に流行していた剣術に対してどのような見解をもっていたか把握しておきたい。男谷は、長竹刀について「是実事と^{これじつじ} 甚^{はなはだ} 懸隔致し候ことにて、真剣にては目方も重く中々竹刀の所作の如く、隻手の突撃共に相成不^{あいな}し^{なりもう}申、且佩刀^{さず}

⁵⁹⁵ 石垣安造『直心影流極意伝開』島津書房,pp.295-296,2001,参照。

⁵⁹⁶ 榎本鐘司「幕末剣術の変質過程に関する研究—とくに窪田清音・男谷信友関係資料および一刀流剣術伝書類にみられる剣術の一変質傾向について—」（『武道学研究』第13巻第1号所収）日本武道学会,p.49,1980,参照。

⁵⁹⁷ 『男谷先生行状録』熊本県立図書館蔵。

⁵⁹⁸ 富永堅吾『剣道五百年史』（復刻新版）島津書房,p.331,1996,参照。

⁵⁹⁹ 富永堅吾『剣道五百年史』（復刻新版）島津書房,p.331,1996,参照。

にて三尺余にては抜口も速かに出来不_レ申事故、格別大兵多力にて長寸にての稽古は、唯今日稽古場中の勝口を専らと致し候迄にて、武辺の吟味とは更に申されまじく候⁶⁰⁰」と述べ、実戦とかけ離れていることを指摘する。その理由として、片手による技は重量の関係で真剣では不可能な技術であることや、3尺以上ある真剣は素早く抜刀が出来ないことなどの例を挙げている。そしてこのような技術は稽古において勝つためのみの技術であると批判している。ここから男谷が真剣の操作を想定した修練をすべきと考えていたことが窺える。このことは男谷が自身の修練について「諸方より誠に訪れ候壮士と相手致し候節、如何程寸延たる竹刀にても、いつも予が常の腰刀同寸にて相手いたし⁶⁰¹」と述べていることから窺える。

上記の見解からは、短寸のしないで修行すべきと男谷が考えていたように思えるが、一方で、ある一定の長さにこだわることも否定する。「諸流共に定寸と云事ありて、何流は何尺何寸と定め、夫に色々の弁を附け候も、是又一偏に泥みたる説にて其流義の元祖と申す人々の用ひ候劔の寸法を定寸と定め申事と見へたり⁶⁰²」と諸流に見られる定寸は、流祖の刀の長さを定寸としただけであり、偏った見解の表れであるという。男谷は、これにこだわることを「何れも偏固の論と申すべし⁶⁰³」と批判している。そして「指料も軽重、長短ともに差別あるべし⁶⁰⁴」「^{すべ}都て一偏に心得ず長短軽重ともに用捨あるべし⁶⁰⁵」と状況によって太刀の重さや長さを使い分けることが肝要であると主張している。榎本氏は、男谷が講武所においてしないの長さを3尺8寸に定めるまでに、いくつかの前段階があったことを指摘し、安政3年(1856)の「3尺8寸以内」という規定について、真剣と同寸の短めのしないで使い実戦向きの修練をするのも、ある程度の長さで重さのしないで使用して体練的な効果を期待するのも、いずれも実用的であり、多元的なレベルで実用的な剣術の修練ができることを目的としたものであると述べている⁶⁰⁶。これらのことから、修練の目的に

⁶⁰⁰ 『武術雑話』(渡邊一郎編『武芸伝書聚英 第十二集』所収) 宇都宮大学教育学部, p.126, 1990.

⁶⁰¹ 『武術雑話』(渡邊一郎編『武芸伝書聚英 第十二集』所収) 宇都宮大学教育学部, p.129, 1990.

⁶⁰² 『武術雑話』(渡邊一郎編『武芸伝書聚英 第十二集』所収) 宇都宮大学教育学部, p.126, 1990.

⁶⁰³ 『武術雑話』(渡邊一郎編『武芸伝書聚英 第十二集』所収) 宇都宮大学教育学部, p.127, 1990.

⁶⁰⁴ 『武術雑話』(渡邊一郎編『武芸伝書聚英 第十二集』所収) 宇都宮大学教育学部, p.127, 1990.

⁶⁰⁵ 『武術雑話』(渡邊一郎編『武芸伝書聚英 第十二集』所収) 宇都宮大学教育学部, p.127, 1990.

⁶⁰⁶ 全日本剣道連盟編『剣道の歴史』全日本剣道連盟, p.294, 2003, 参照.

よってしないの長さを変えるべきであると男谷が考えていたことが窺える。榎本氏の指摘のように、男谷のしないの長短論からは彼の合理的な思考と実用性を追求する態度が窺える。

このような合理的思考と実用性を追求する態度は『男谷先生行状録』からも窺うことができる。同書には「尚又各流名を唱ふる事有るまじき事なり、槍は槍術、剣は剣術にてよろしく、何流何流とわかるるより甚狭小偏辟に成り行きし事嘆くべきのよし、常に仰せられし⁶⁰⁷」(読点筆者)とあり、男谷が流名を名乗ることを狭く偏った見解であると批判し、剣術を流派によって区分すべきでないと考えていたことが窺える。このような見解を持っていたことから、男谷は自流の特徴であった上段からの打ち込みを主体とする剣術にこだわるのがなかったと考えられる。さらに、「先生の^{こころざ}志^{もとも}しは、素^{もと}ト忠孝の為にして、勝劣を争ふの^{わざ}業^{わざ}にあらず、互に長短を試み会ひ、我^{わがたん}短^{すて}を捨、彼^か長^{(が)ちよう}をとり、聊^{いささ}かにても我に増^{ます}る者を益友^{えきゆう}とし、成丈仕口^{なるたけつかいぐち}のしら^(ざ)さる他流と試合ふ事、此道^{このみち}の大道^{たいどう}なり⁶⁰⁸」(読点、ルビ筆者)と男谷が他流試合によって自分の短所を補い、他者の長所を取り入れるという考えの持ち主であったことから、他流試合の中で自身の剣術を改良していこうと考えていたようである。このような見解を持つ男谷は状況や相手に最も有効な技術を用いたはずであり、反対に弱点となる技術を用いることは避けたと考えられる。本節冒頭で触れた男谷精一郎と加藤田平八郎の試合において、男谷ははじめ下段に構え、何本か加藤田に突かれた後、精眼に構え直している。つまり、男谷はこの試合において精眼の構えが最適であると判断したととらえられる。

しかし、本章第一節の長沼派の考察で述べたように、上段は仕掛け技に適した構えであることに加え、相手の動作に自在に対応し得るために、直心影流において多用されていたようである。このような特徴を有していたにもかかわらず男谷派において上段が構えられていないということは、この構えをとることに何か不都合な点が生じていたのではないだろうか。

男谷が活躍した近世後期の剣術界は、用具・技術の点から大きな変革期を迎えていたようである。男谷は先に挙げた長竹刀についての言説において「近頃は突之業専らに相なりては、猶更寸延たるに益ある事ゆえ、我人少々づゝ寸長きを用ひしより、次第に長寸に相なりしなり⁶⁰⁹」と昨今、突き技の増加によって、長寸がより有利になり、少しずつしない

⁶⁰⁷ 『男谷先生行状録』 熊本県立図書館蔵。

⁶⁰⁸ 『男谷先生行状録』 熊本県立図書館蔵。

⁶⁰⁹ 『武術雑話』(渡邊一郎編『武芸伝書聚英 第十二集』所収) 宇都宮大学教育学部, p.126, 1990.

が長くなっていったと述べている。突き技の増加については堀正平も「短い竹刀を持つ者は双手突を行ひ、長竹刀を遣ふ者は片手突を主とした⁶¹⁰」と指摘している。『加藤田平八郎東遊日記抄』の試合においても加藤田平八郎は3尺8寸の長竹刀を用いていたようであり⁶¹¹、突きが非常に多い。これに対し、従来の剣術では、長沼派・藤川派の試合の記述からもわかるように、突きがほとんどみられない。また、直心影流のしないの定寸は元来3尺4寸である⁶¹²。近世後期の剣術は技術・用具の面において、それまでの剣術から相当に変化したといえる。

実用性を重視する男谷が上段を用いなかったことから、上段の構えは長竹刀や突き技が流行する以前の剣術への対応には適していたが、長竹刀による突き技には対応することが難しかったと考えられる。

以上より、突き技の流行によって男谷は上段から精眼に下ろしたと考えてよいであろう。

本節においては、男谷派の試合・修練形態ならびに剣術観について考察を行ってきた。

試合・修練形態については、しない打ち込み稽古、形稽古と個別に検討を行った。

まず、しない打ち込み稽古については、これまでみてきた長沼派や藤川派と異なり、上段に構えなかったようである。『加藤田平八郎東遊日記抄』には、男谷精一郎が精眼と下段に構えている様子が記されている。

形稽古については、男谷精一郎が与えた目録にみられる法定と十之形について注目し、後世の男谷派の書から考察を行った。

法定は後世の男谷派において奥儀とされており、免許を授ける際になければ伝授しないという。これは他の派にみることができない、男谷派独自の伝授形態である。また、法定は剣術の形でありながら、儀式としての性質も併せ持っており、当派では儀式としての面が強調されていると考えられる。

十之形についてはしない打ち込み稽古における技術として、試合稽古の中で学ばれていたということであり、形稽古として学ばれていなかったようである。

男谷派の剣術観については、その中心人物である男谷精一郎の剣術観について考察した。

まず、男谷は、しないの長さについて、法外に長いしないを実戦とかけ離れていると批判する一方で、ある一定の長さにこだわることも偏った考えであるとしている。男谷は修

⁶¹⁰ 堀正平『大日本剣道史』剣道書刊行会,p.153,1934.

⁶¹¹ 全日本剣道連盟編『剣道の歴史』全日本剣道連盟,p.290,2003,参照.

⁶¹² 『長沼国郷先生小傳』には「国郷又鞆刀ヲ改造シ、竹刀ヲ製ス、而シテ其長サ、人々帶ブル所ノ劍長ニ準ジ、概ネ三尺四寸ヲ以テ定規トス」とある（『長沼国郷先生小傳』、『武道伝書聚英 第十二集』所収,宇都宮大学教育学部,p.45,1990.）。

練の目的によって、しないの長さを変えるべきであると考えていたことが窺え、この辺りから男谷の合理的な思考と実用性を追求する態度が窺える。

このような男谷の合理的な思考と実用性を追求する態度は、『男谷先生行状録』からも窺うことができる。

男谷は流名を名乗ることを狭く偏った見解であると批判し、剣術を流派によって区分すべきでないと考えていたことが窺える。このような見解を持っていたことから、男谷は自流の特徴であった上段からの打ち込みを主体とする剣術にこだわることはなかったと考えられる。また、男谷は他流試合によって自分の長所を補い、他者の長所を取り入れるという考えの持ち主であったことから、他流試合の中で自身の剣術を改良していこうと考えていたようである。

このような見解に加え、近世後期の剣術界における長竹刀の流行及びそれに伴う突き技の増加から、男谷は上段の構えを下し、精眼中心の稽古を行うようになったと考えられる。

結節

本章においては、長沼四郎左衛門国郷以降の主な分派である長沼派・藤川派・男谷派を対象とし、各派の試合・修練形態ならびにその形成の一要因であると考えられる剣術観について考察を行ってきた。

以下、各派ごとに試合・修練形態および剣術観について簡潔に整理しておきたい。

<長沼派>

しない打ち込み稽古…上段の構えから打ち込む剣術が中心であった。また、幕末においても上段に構える剣術が長沼派の特徴として認識されていたと考えられる。

形稽古…法定・十之形・小太刀・古流・刃引・鞘之内・円橋・霞之形と多種類の形の存在が確認でき、実際にそれらが修練されていたと考えられる。

剣術観…上段の構えを特別視する観念がみられる。これは、上段が仕掛け技を主体に遣いながらも相手の動きに対応できるとみなされ、実際に多用されていたという実状から生まれたと観念であると考えられる。また、しない打ち込み稽古と形稽古の兼修を重要視しており、特に勝負に傾倒し、形稽古を疎かにしないことを説いている。

<藤川派>

しない打ち込み稽古…長沼派と同様、上段からの打ち込みを中心としていた。

形稽古…法定・十之形・小太刀・刃引・丸橋の形が伝承されていた。また、藤川整斎によって形稽古が重視されるようになったと考えられる。

剣術観…長沼派同様、上段を特別視する観念がみられる。また、整斎は当時の剣術が勝負に拘泥していることを指摘しており、剣術修行により、精神を鍛練することの重要性を説いている。整斎のいう精神の鍛練とは、雑念を去り無念無想の心を臍下に納めることであり、整斎以降の藤川派ではこの精神の鍛練を形稽古によって行っていたと考えられる。

<男谷派>

しない打ち込み稽古…長沼派・藤川派と異なっており、上段に構えなかったようである。試合の描写では精眼と下段の構えが確認できる。

形稽古…法定のみが伝承されていたと考えられる。後世の男谷派においては、法定は奥儀とされており、免許を得るまで伝授されないようである。また、法定を儀式としても捉えており、この点が強調されている。十之形については、しない打ち込み稽古の技術として、しない打ち込み稽古の中に取り込まれ、形稽古という形式では学ばれていなかったようである。

剣術観…男谷精一郎はしないの長さについて法外な長さとそれを駆使しての剣術を批判する一方で、一定の長さにこだわることも否定しており、合理性・実用性を追求する思考を有していたと考えられる。このような男谷は、流名を名乗ることを狭く偏った考えであると批判し、流名によって剣術を区別すべきでないと考えていた。したがって、自流の流義にこだわるようなことがなかったと考えられる。また、他流試合によって自らの短所を補い、他流の長所を取り入れることを説いていた。

このように三派の試合・修練形態をみると、法定が伝承されていることが共通点として挙げられる。形稽古にあまり重点を置かず、十之形をしない打ち込み稽古に取り込んだ男谷派でさえ、法定を伝承していることから、この形はしない打ち込み稽古で代用できないと考えられており、重要視されていたことが窺えよう。

相違点としては二つ挙げられる。一つ目は、伝承されている形の数異なることである。特に長沼派に最も多くの形が伝承されており、次に藤川派が多い。

二つ目は、しない打ち込み稽古において、長沼派・藤川派では、上段に構えられていたのに対し、男谷派においては下段・精眼に構えられていることである。この点については男谷精一郎が上記のように流儀にこだわらず、かつ他流試合により自らの剣術を改良していくことを説いていたことに加え、近世後期の剣術界における長竹刀の流行を要因とする剣術の変化が関わっていることは第三節においてすでに述べた通りである。つまり、男谷派が構えを変えたのは、当時の剣術界の変容に対する対応策であったと考えられる。

この長竹刀の流行による剣術界の変容に際し、長沼派・藤川派の二派がいかに対応したのかを最後に考察しておきたい。

まず、この長竹刀がもたらした当時の剣術界への影響を簡単に整理しておきたい。

この長竹刀の流行に最も関わっている人物は柳川藩剣術・槍術師範であった大石進である。大石進は天保4（1833）年と天保10年（1839）の二度にわたり江戸に滞在し、5尺3寸余りの長竹刀で江戸の多くの剣士を打ち破ったという⁶¹³。これにより、江戸の剣術家たちも長竹刀を使用する者が増え、突き技が増えたということである⁶¹⁴。このことから、天保年間が剣術界において大きな転換点であったと考えられる。

これまでの考察結果を踏まえ、この転換点の前後における二派の様相を図にすると次のようになる。

⁶¹³ 中村民雄『剣道事典—技術と文化の歴史—』島津書房,p.100,1994,参照。

⁶¹⁴ 堀正平『大日本剣道史』剣道書刊行会,pp.151—153,1934,参照。

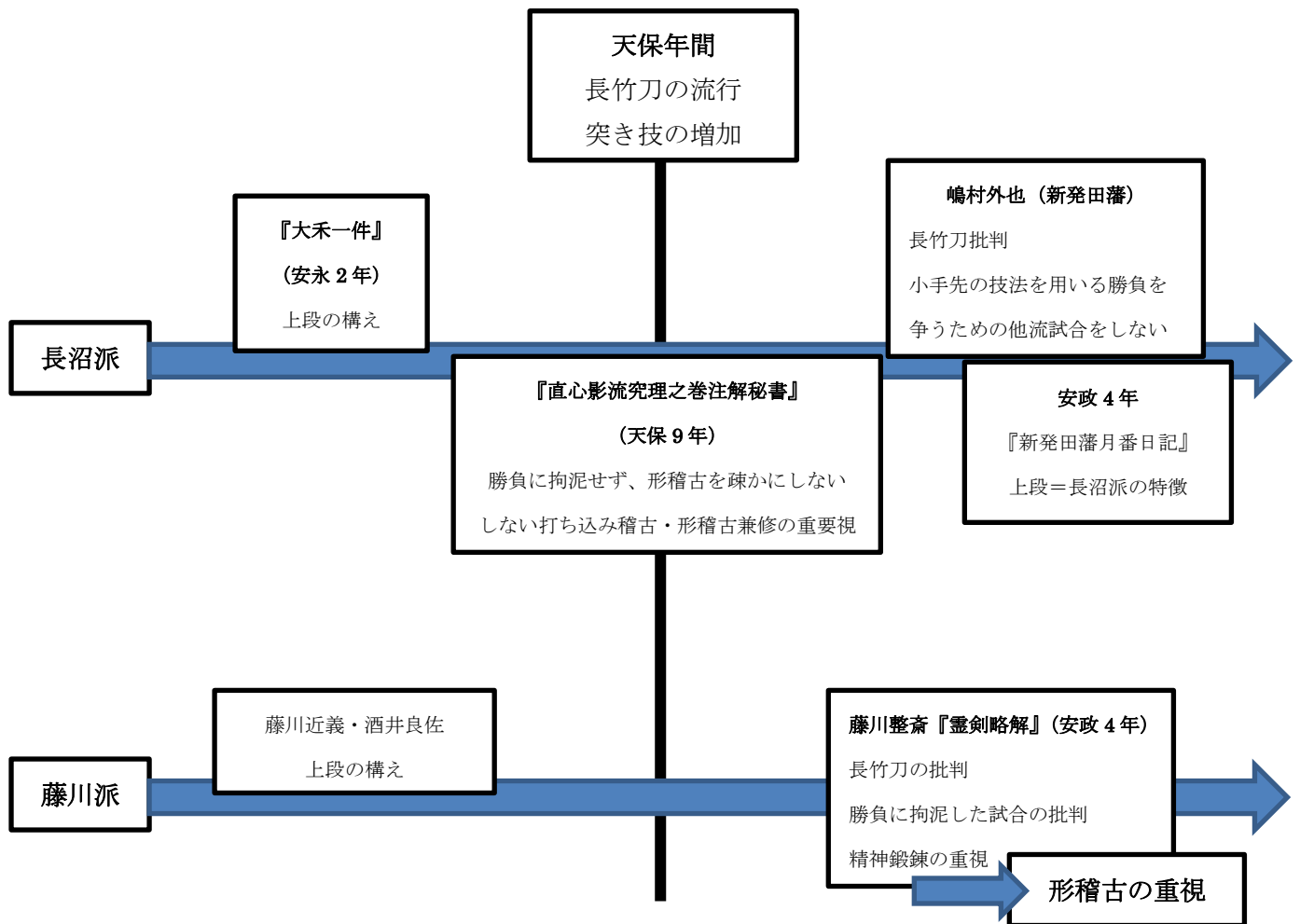


図 4-1 天保年間前後における長沼派・藤川派の様相

まず、長沼派においては安永年間に行われた、鏡新明智流との試合において上段がとられており (『大禾一件』)、その後、安政年間においても上段の構えが長沼派の特徴として記されている (『新発田藩月番日記』)。つまり、天保年間を挟んでも、しない打ち込み剣術に変化はみられないといえる。天保年間における長沼派の伝書に『直心影流究理之巻注解秘書』がある。そこでは、しない打ち込み稽古・形稽古の兼修の重要性を説くとともに、勝負に拘泥し、形稽古を疎かにすることがないように戒められている。天保年間においても長沼派の中でこのような剣術観が展開されていることから、長沼派はこの当時の剣術の変容に際して、勝負に拘泥し流儀を変えることを良しとしなかったと考えられ、上段の構え

を変更することはなかったようである。このことは先行研究において述べられている、新発田藩の長沼派を率いていた嶋村外也が長竹刀を批判し、小手先の技法を用いる勝負を争うための他流試合を行わなかったという点にも現れていると考えられる⁶¹⁵。長沼派では天保以前からの流派の伝統を保守したと考えられる。

藤川派においては、藤川近義・酒井良佐の試合の描写から上段に構えていることが確認できる。しかし、これらは天保年間以前の試合であったと考えられる（この理由として、藤川近義については寛政 10 年（1798）で亡くなっていること⁶¹⁶、酒井良佐については天保 8 年（1837）に 46 歳で死去したものの、この試合は若年の頃とされていることが挙げられる⁶¹⁷）。

天保年間以降における藤川派の試合の様相が窺える史料は管見の限り未見である。しかし、藤川整斎は長竹刀を批判し、頑なに古習を守り、全く時流に迎合しなかったという⁶¹⁸。また、安政 4 年（1857）に著した『靈剣略解』において、整斎は勝負に拘泥した試合を批判している。このような剣術観をもつ整斎が長竹刀に対抗するために自流の剣術を変えたとは考えにくい。このことに加え、山田次朗吉『日本剣道史』において述べられている通り、整斎は剣術で精神を鍛練することの重要性を説いている。これらのことを鑑みると、藤川整斎は天保年間以降の試合剣術に迎合せず、形稽古を重視することで自身が重要視する精神鍛練を行ったと考えられる。

以上、長沼派・藤川派の二派は天保期における剣術の変容に際し、自らの流儀を変えて対応することはしなかったと考えて良いだろう。

⁶¹⁵ 佐藤泰彦・酒井一也「新発田藩における直心影流について」（『新発田藩郷土史』第 37 号所収）新発田郷土研究会, pp.8－11, 2009, 参照.

⁶¹⁶ 中村民雄「幕末関東剣術流派伝播形態の研究(2)」（『福島大学教育学部論集社会科学部門』第 66 号所収）福島大学教育学部, p.69, 1999, 参照.

⁶¹⁷ 富永堅吾『剣道五百年史』（復刻新盤）島津書房, p.328, 1996, 参照.

⁶¹⁸ 山田次朗吉『日本剣道史』一橋剣友会, pp.322 - 324, 1925, 参照.

結 章

一、各章における結果の要点

本論においては、芸道という文化の中でも、武芸の一つである剣術に着目し、修練形態という点で現代剣道の礎を築いたともいえる直心影流をその一例として取り上げ、①成立過程、②修練実態、という観点から、その伝承について考察を行ってきた。はじめに各章における考察の結果の要点のみを簡潔にまとめておきたい。

<第一章 直心影流の成立過程と分派>

(1) 直心影流の伝系に登場する人物である上泉伊勢守・奥山休賀斎・小笠原源信斎・神谷伝心斎・山田平左衛門光徳がそれぞれ名乗っていた流名ならびにその意味については、本人が伝書で記しているものと後世における直心影流の伝承の間で違いがみられる。

(2) 伝系の中で実際に松本備前守が流祖とみなされはじめるのは、長沼四郎左衛門国郷以降である。

(3) タケミカヅチを流派の起源として捉える観念は国郷の頃より定着した。また、奥書の「鹿島神伝」も国郷から使用され始めている。

(4) 陰流の形の名称が上泉の新陰流を経て小笠原源信斎の真新陰流にまで伝わっていることが確認され、直心影流の伝系も愛洲移香の影響を受けていることが明らかである。

(5) 直心流は神谷伝心斎がこれまで学んできた流派を否定し、兵法の根元を改め創始した流派であることから、これまでの流派から大きく変化していると考えられる。

(6) 国郷は光徳から直心影流ではなく、直心正統流を継承している。したがって流名が直心影流となったのは国郷以降である。

<第二章 法定とその修行過程>

(1) 法定の原型とみられる4本の形は直心流の頃に成立していた。

(2) 法定は直心正統流のときには成立していたと考えられる。さらに、直心正統流の頃から4本の総合名称として「法定」という語が用いられ始めている。

(3) 法定という語は構えや所作を定式として定めたという意味である。この名称は高橋弾正左衛門重治が名付けたと考えられる。

(4) 流派全体の修行過程の中で、初学では法定の修練により、真直ぐで正しい身体を形成することが求められており、勝負を行うことが禁止されている。中学においては心行と呼ばれる修行に入ることが求められている。

(5) 法定の修行過程は二つに分けられている。

(6) 初学における法定の修行では太刀筋・身体の矯正が求められており、身体面に重点

が置かれているといえる。

(7) 中学の段階における法定の修行では、「心行」と呼ばれる精神面を中心とした修行が行われる。具体的な例としては「非切」「仕懸」の二つが挙げられる。

＜第三章 十之形としない打ち込み稽古＞

(1) 十之形では、相手の動作によって変化することが求められるしない打ち込み稽古を想定した修練がなされている。

(2) 十之形では相手の打ちによって異なる技術が修練される。相手の打ちが伸びてくるときは相手の打ちを受け止め、その力を利用し剣先を回して打つ技術が用いられ、敵の打ちが伸びないときは、間合を読み、抜いて避けるという技術が修練される。

(3) 直心正統流・山田平左衛門光徳の頃、すでに「面」「手袋」「小具足」という道具が存在していた。

(4) 他流の人物からみた直心影流のしない打ち込み稽古の特徴としては、上段の構え、素早い足遣い、仕掛け技や引いて打つ技を駆使していたことが挙げられる。

(5) 長沼正兵衛一門と鏡新明智流の試合において、直心影流の剣士は、上段に構え、仕掛け技、相手の打ちを返して打つ技、引いて打つ技などを駆使して戦っている。

(6) 藤川弥司郎右衛門近義の試合については、直心影流の特徴である、上段の構え、素早い身のこなしが確認できる。

(7) 男谷精一郎一門と加藤田平八郎一門の試合では、男谷精一郎が下段や精眼に構えている。また、男谷の門弟については、試合の中で突き技を多用している。

＜第四章 分派による修練形態の分化と対立＞

(1) 上段に構える剣術が長沼派のしない打ち込み稽古の特徴であり、幕末まで継承されていた。

(2) 長沼派においては、法定・十之形・古流・刃引・霞之形・鞘之内・小太刀・円橋と多種類の形が修練されていた。

(3) 長沼派の剣術観としては、上段を特別視する観念、形稽古としない打ち込み稽古の兼修の重視などが挙げられる。特に勝負に傾倒し形稽古をおろそかにすることがないように説かれている。

(4) 藤川派のしない打ち込み稽古は、長沼派と同様、上段に構えて行われていた。

(5) 藤川派においては、法定・十之形・小太刀・刃引・丸橋の五つの形が伝承されていた。また、藤川整斎の頃より形稽古を重視するようになった。

(6) 藤川派においても長沼派同様、上段を特別視する観念がみられる。

(7) 藤川整斎は勝負のみに拘泥した当時の剣術を批判していた。整斎は修行によって雑念を去り、無念無想の心を臍下に納めることを重要視しており、整斎以降の藤川派では、このことを形稽古の中で修練しようとしていたと考えられる。

(8) 男谷派のしない打ち込み稽古は、長沼派や藤川派と異なり、上段に構えなかった。

(9) 後世の男谷派において、法定のみ修練されていることが確認できる。十之形についてはしない打ち込み稽古に取り込まれ、形稽古として学ばれていなかったようである。

(10) 男谷は、流名を名乗ることを狭く偏った見解であると批判し、剣術を流派によって区分すべきでないと考えていた。また、他流試合によって自身の剣術を改良していこうと考えていた。

次に、成立過程と修練実態、二つの観点から、本論によって明らかとなった知見をみていきたい。

二、直心影流の成立過程について

本論では、直心影流の成立過程について考察を進めてきたが、結論を端的に述べると、後世の伝書に記述される伝承と実際の成立過程の間に相違がみられ、後世において伝系・伝承の部分的な書き換えがなされているといえる。この相違点については p.276 に図1として表した。

考察の結果、明らかとなったこの書き換えに関する主な知見は次の通りである。

①流祖・松本備前守の付加

直心影流成立以降の伝書において流祖とされている松本備前守は、後世における書き換えによって新たに付加された人物であり、実際の成立過程とは関係がない。松本備前守の名が初めて記されるのは国郷の著した『直心影流目録口伝書』である。また、当流の起源とされる国譲り神話、タケミカヅチから流儀を授かったことを意味する奥書「鹿島神伝」についても同書が初見であり、これらの伝承が同時に付け加えられたといえる。

なお、後世の直心影流の伝書は、上泉伊勢守が愛洲移香に学んだことを否定しているが、実際には愛洲移香の陰流の形の名称が小笠原源信斎の真新陰流にみられ、真新陰流は新陰流を介して陰流の影響を受けているといえる。

②伝系を書き換えた意図

まず、本来、成立に関係がなかったにも関わらず、後世に流祖として伝書の中に書き加えられた松本備前守は「神陰流」と名乗ったとされている。この流名は鹿島の神であるタケミカツチから授かったという意味づけが後世になされていた。

上泉伊勢守は、この松本備前守から神陰流を継承したとされているが、これも後世における書き換えである。この流名を説明するに際しては、あえて上泉が「神」の字を恐れ多く感じたため、表記を変え、「新陰流」と名乗ったという説明がなされている。ここに、神つまりタケミカツチとの関係を確保しようとする意図があることは明らかである。

また、神谷伝心斎は、実際には「直心流」と名乗っていたが、後世の伝承では「新陰直心流」と名乗ったとされ、流名が書き換えられている。そして、この書き換えられた流名の「心」の文字が神を意味するという説明がなされており、松本備前守が神（タケミカツチ）から授かった流儀が神谷にまで継承されていることを主張するために書き換えられたといえる。

以上のように、直心影流の伝系が書き換えられた意図は鹿島の神タケミカツチとの関係を確保し、流派を権威づけるためであったといえる。

③伝系の転換点としての直心流

いくつかの形の名称が継承されていることから、陰流—新陰流—真新陰流という流れが直心流の前に存在していたといえるが、神谷伝心斎は直心流を興すにあたり、これまで自身の学んできた流派を否定しており、神谷がこれらの流派を継承しているという意識を持っていたとはいえない。神谷の流儀を継承し、直心正統流を創始した高橋弾正左衛門重治とその弟子である山田平左衛門光徳は、流祖として神谷の名を挙げ、直心流以前の流派の系譜については言及していない。したがって、直心流が伝系の中で大きな転換点となっており、流派として大きく変容したといえる。また、法定の原型の形 4 本が直心流の時点で成立している点からも流派の中で大きな変化があったことが明らかである。

④「直心影流」への流名の変更

後世の伝承においては、直心影流という流名は山田平左衛門光徳が名乗り始めたものであるとされている。しかし、実際に光徳本人は直心正統流二代と名乗っており、子の長沼四郎左衛門国郷に流儀を伝承するまでこの呼称を変更していない。国郷自身は直心影流を名乗っていることから、国郷が直心影流を名乗り始めたとみて間違いない。

三、直心影流の修練実態について

修練形態については、当伝系において形稽古としない打ち込み稽古の兼修がはじまった直心正統流から近世後期の三派までを対象とし、考察を進めてきた。以下、本論において明らかとなった主な知見を説明しておきたい。

①直心影流のしない打ち込み稽古導入による兼修方式の確立

直心正統流の頃に華法化の弊害から脱却するため、しない打ち込み稽古が導入され、形稽古との兼修が行われるようになったが、ここで特筆すべきこととして、初学（初級）の段階においては、形稽古のみが行われていたことが挙げられる。

直心正統流の形稽古は法定によってなされており、この形は初学と中学を主に修練されていた。このことに加え、直心正統流では初学において勝負が禁止されているため、この段階でしない打ち込み稽古が行われることはなかったといえる。中学以降は形稽古としない打ち込み稽古の兼修がなされたといえる。

②直心影流における十之形の成立

後世の伝承において、この形は真新陰流の小笠原源信斎が考案したとされ、しない打ち込み稽古の導入以前に存在していたとされている。しかし、実際に14本全ての形が確認できるのは、国郷の著した『直心影流目録口伝書』が最初である。したがって、当伝系においては、しない打ち込み稽古の導入後、その基本技術として十之形が考案されたといえる。つまり、直心正統流から継承されてきたしない打ち込み稽古が十之形の発生を誘引したといえる。十之形は、しない打ち込み稽古における基本的技術を習得するために考案されたものであり、この形によって、しない打ち込み稽古の特徴が保持・継承されていったといえる。

③後世の直心影流における法定と松本備前守の伝承の結合

成立初期の法定修行においては、初学の段階で身体と太刀筋の矯正に主眼が置かれ、中学の段階で精神面に重点が置かれた稽古がなされていた。

この法定は直心影流成立以降、書き加えられた流祖である松本備前守の伝承と結びつき、松本備前守が鹿島神宮において祈願をした結果、霊夢を介して武神タケミカヅチから一卷の巻物（史料によって「霊剣の妙術」とするものもある）を授かり、これを基に法定を考案した、という伝承が後世なされるようになる。つまり、この伝承は法定がタケミカヅチとの接触の結果、創られた形であることを説明するものであり、流儀が鹿島の神から脈々と継承されてきていることを主張する伝承であるといえる。この伝承は直心影流初期の伝

書『直心影流目録口伝書』などにはみることができず、どの時点で法定と結びついたのかは不明であるが、後世の三派すべてに伝承されている。

元来、基本の形であったものが、流派を権威化するための伝承と結合し、流派の正統性を伝える精神的な支柱として機能し始めたということである。

④近世後期の三つの分派における、伝承されている形の数とその発展

長沼派においては 8 種類の形（法定・十之形・小太刀・刃引・円橋・古流・鞘之内・霞之形）、藤川派においては 5 種類の形（法定・十之形・小太刀・刃引・丸橋）、男谷派においては 2 種類の形（法定・十之形）がそれぞれ伝承されていた（ただし、後世の男谷派において十之形は、しない打ち込み稽古の中に技術として取り込まれたということである）。長沼派と藤川派には、法定と十之形以外に小太刀・刃引・円（丸）橋という同じ名称の形が伝わっているが、構成本数や形の動作そのものに違いがあり、それぞれの派において独自の発展を遂げていたことが明らかである。この変化については、芸道における「再創造」がなされたと考えられる。流派における複数の形が、ある人物によって継承され、その人物により工夫や再解釈がなされ、各派の形が独自性を帯びていく。つまり、各派の形の差異は、それぞれの形が各派の継承者によって再創造がされてきた証であるといえる。

⑤男谷派によるしない打ち込み稽古の特徴の変容

直心影流のしない打ち込み稽古においては伝統的に上段の構えが用いられていた。この理由としては、当流において、上段の構えが仕掛けて打つための構えでありながらも、相手の動作への対応も十分可能であるとされていたことが挙げられる。

長沼派・藤川派では近世後期においてもこの特徴が保持されていた。一方、男谷派では他流試合において精眼や下段に構え、突き技を多く用いており、上記の特徴を大きく変容させたといえる。これについては、天保期における剣術界全体の技術的な変革（長竹刀の流行による突き技の増加）が影響している。

この男谷派におけるしない打ち込み稽古の特徴の変化は、男谷の流儀に捉われず、他流試合により自身の剣術を改良していこうとする態度によって、可能になったと考えられる。また、このような合理的思考をもつ男谷が構えを上段から精眼・下段に変えたことから、当時流行していた長竹刀による突き技に対しては、上段の構えが不利であったといえる。

最後に、本論の内容を日本文化論として捉え、結論としたい。

剣術は、流派の中で師から弟子へと継承されてきたが、直心影流ではその系譜を部分的

に書き換え、さらに流派の起源として神話を付加し、松本備前守を流祖とした。流派の起源として記される国譲り神話に登場するタケミカヅチは剣神であり、また武神である。必然的にタケミカヅチを祀る鹿島神宮は古来より武芸者の信仰の対象となっていたという⁶¹⁹。鹿島の地との関係を有することは、剣術流派にとって一つの権威を表徴することであったといえる。そして、この鹿島の地と関係が深かったのが松本備前守である。松本備前守は常陸国鹿島氏の四家老のうちの一人でありながら、鹿島神宮の祝部でもあった。さらに鹿島神宮の神官によって伝えられていた「鹿島の太刀」を学んでいたとされる⁶²⁰。したがって、松本備前守を流祖とすることで、鹿島の地ひいてはタケミカヅチとの関係を確保しようとしたと考えて間違いない。このように直心影流の伝系・伝承の改変には神道の思想が大きく影響しており、ここには武神タケミカヅチの活躍する神話を精神的な拠り所としようとした意図がある。

この神道⁶²¹の思想は日本文化の底層に存在しており⁶²²、この神道的底層から上昇する力の強さが日本文化の一つの特性であるという⁶²³。つまり、直心影流という文化は神道的底層の上に成り立っており、当流における伝系・伝承の改変にはこの底層の力がはたらいているということである。そして、この底層の力は伝系・伝承が改変された後もはたらいている。後世において、法定の出自が松本備前守と関連して語られるようになるのは、このはたらきの現れであり、自流の技術にも正統性を持たせようとするためである。ここにおいて、本来関係のなかった修練形態と精神的な支柱である流派の伝承が結合したといえ、神道的底層から上昇する力が影響を及ぼしているといえる⁶²⁴。

⁶¹⁹ 今村嘉雄『日本武道大系第三巻』同朋舎出版,p.5,1982,参照。

⁶²⁰ 富永堅吾『剣道五百年史』（復刻新版）島津書房,p.34,1996,参照。

⁶²¹ ここで、神道について辞書的に解釈しておきたい。神道とは、『広辞苑』によると、「日本に発生した民俗信仰。祖先神や自然神への尊崇を中心とする古来の民俗信仰が、外来思想である仏教・儒教などの影響を受けつつ理論化されたもの。平安時代には神仏習合・本地垂迹があらわれ、両部神道・山王神道が成立、中世には伊勢神道・吉田神道、江戸時代には垂加神道・吉川神道などが流行した。明治以降は神社神道と教派神道（神道十三派）とに分かれ、前者は太平洋戦争終了まで政府の大きな保護を受けた」とある（新村出『広辞苑』第六版,岩波書店 p.1459,2008.）。

⁶²² 湯浅泰雄氏は、近代以前の日本の伝統文化の特性と存在様式は社会の底層に流れていた神道的習俗と表層を支配した仏教的観念が互いに交流し、変容してゆく過程を通じて形成されてきたことを述べている。（湯浅泰雄『日本人の宗教意識』講談社,p.52,1999,参照。）

⁶²³ 湯浅泰雄『日本古代の精神世界』名著刊行会,p.335,1990,参照。

⁶²⁴ このように、重なった文化の各層が有機的に連繋していることについては、酒井利信氏の研究に影響を受けた部分が非常に大きい。氏は、剣術の文化的独自性としての日本精神史が日本社会の中で刀剣観という形でいかに表に現れてきたかを明らかにしている。

氏によれば、日本刀剣観の体系は三層構造になっているという。最下層は人々が意識の

また、剣術の修得は、他の芸道と同様、形稽古によってなされてきた。直心影流の伝系においても、直心流の頃までは、形稽古のみでその文化を継承してきたといえる。その後、直心影流の前身である直心正統流の頃にしない打ち込み稽古が導入され、二つの修練方法を兼修する修練形態が生まれる。ここで注目しておきたいのは、これ以降、どちらの修練方法も消滅することなく、後世まで続いていくという点である。日本文化の存在様態というのは、既存の文化をそのままにしておき、別の新しいものを取り入れることによって形成されてきたという⁶²⁵。換言すれば、古い文化が滅びないまま、新しい文化と共存していくということである⁶²⁶。形の種類の増減はあるものの、従来の形稽古のみの修練形態から新しくしない打ち込み稽古を導入し、これらを兼修することで継承されてきた直心影流は、この日本文化の存在様態をよく表しているといえる。

底層で刀剣の超越性を感じ神聖なものとするレベルの層であり、神や仏といった超越者との結び付きによって認識されるとし、氏はこの層を「潜在意識の層」と呼んでいる。さらに、その一つ上の層を、社会的精神性が発露されるレベルで、特定の時代、地域、社会集団にみられる「共通理解の層」、最上層を、下の二層を前提として自己の現実の活動に深く関わる現象として現れる「現実活動の層」としている。そして、この三層は古代から存在するもの、中世期以降に顕現したもの、近世になって表れたものと様々で、その時代限りで消滅したものはほとんどなく、それぞれが存続しながら重層性をなして近世期に完成されたという。各々の層における象徴構造は個別に存在するのではなく、下の層に依拠するかたちで成立し、有機的につながっていると述べ、この各層の連繫を保っているものは、古代神話であり、神話的イメージがこれら各層を有機的に関係づけると論じている。

また、神話的イメージの始点である古代神話への依存性には、剣術流派によって差異があるとし、単なる根拠付け程度の扱いをしている流派があるのに対して、神道流系統は強く古代神話に依存する傾向があると指摘する。(酒井利信『日本精神史としての刀剣観』第一書房,pp.372 - 376,2005.)。

⁶²⁵ 西山松之助『芸道と伝統』吉川弘文館,p.465,1984,参照。

⁶²⁶ 芸道においては、古代のもの、中世のもの、近世のものが互いに並行して行われてきたという(西山松之助『芸の世界—その秘伝伝授—』講談社,p.115,1980,参照.)。

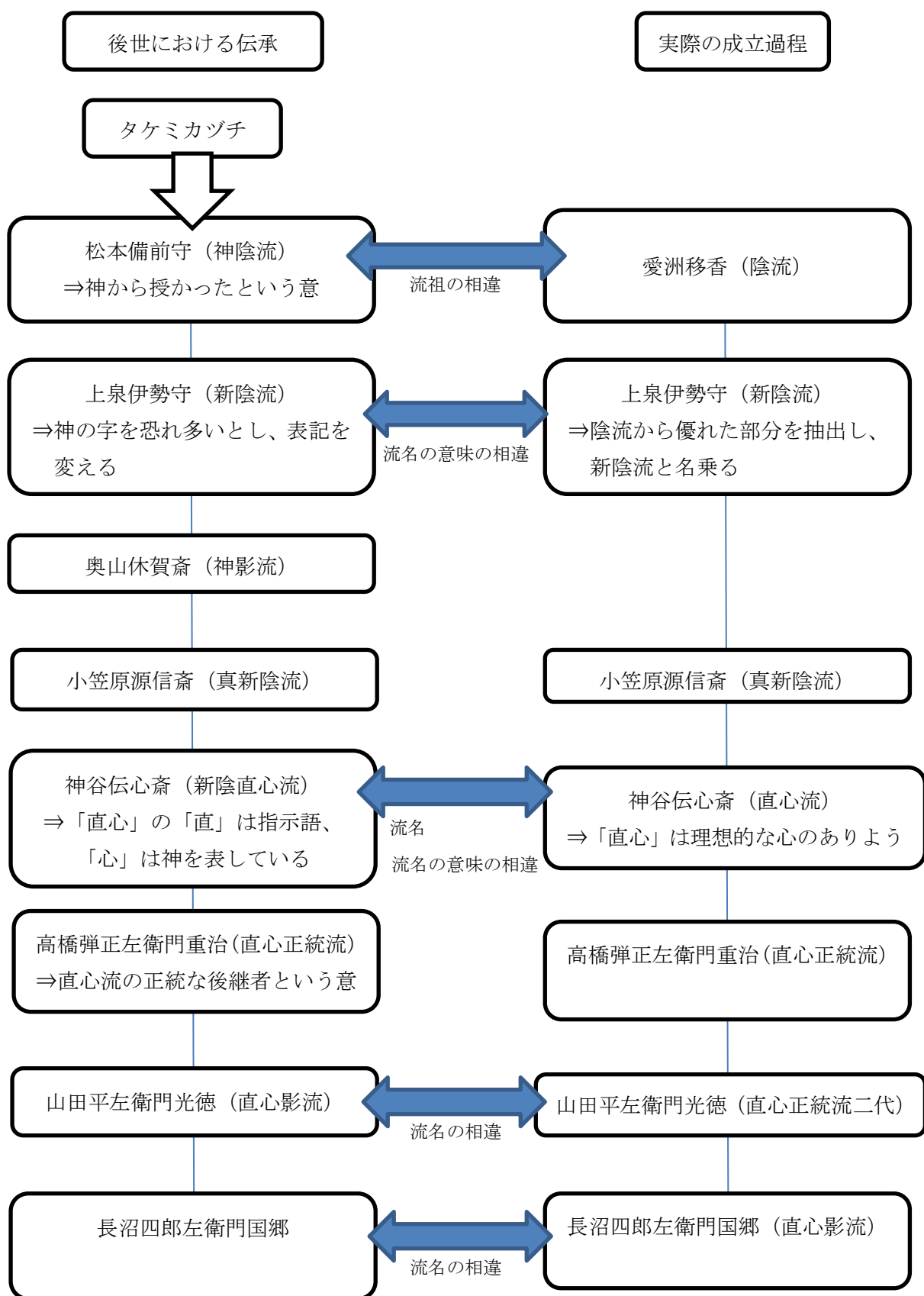


図1 後世における伝承と実際の成立過程の相違

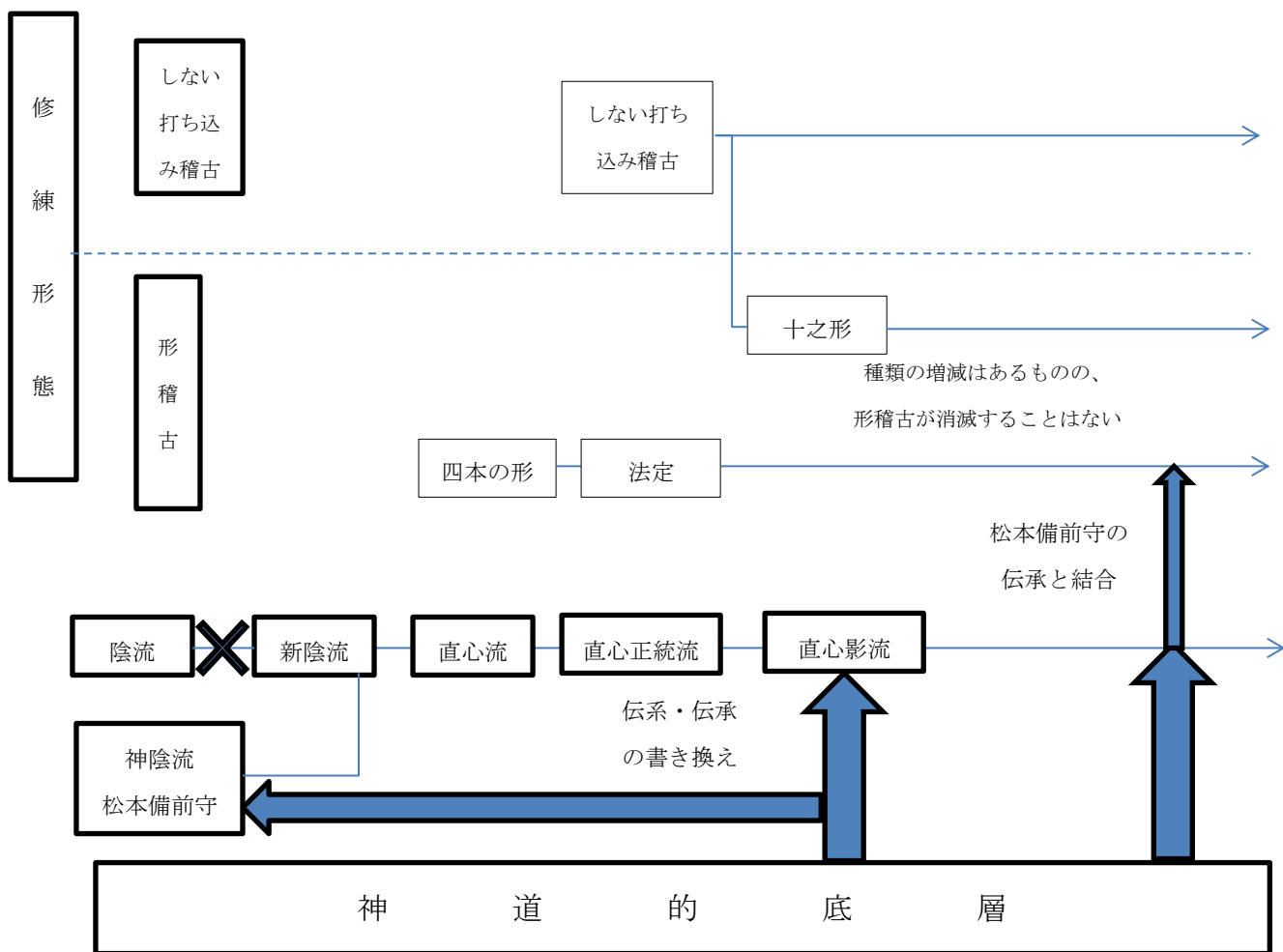


図2 直心影流の伝承

【参考引用文献】

- 石垣安造『直心影流極意伝開』島津書房,2001年。
- 石田一良「前期幕藩体制のイデオロギーと朱子学派の思想」『藤原惺窩 林羅山 日本思想大系 23』岩波書店,1975年。
- 今村嘉雄『日本武道大系 第三卷』同朋舎出版,1982年。
- 岩佐勝『鹿島神伝直心影流』武道振興會,2005年。
- 榎本鐘司「幕末剣術の変質過程に関する研究—とくに窪田清音・男谷信友関係資料および一刀流剣術伝書類にみられる剣術の一変質傾向について—」『武道学研究』第13巻第一号所収,日本武道学会,1980年。
- 『旺文社古語辞典』旺文社,1960年。
- 太田順康「鳥取藩における雖井蛙流に関する研究」『日本武道学研究 渡邊一郎教授退官記念論集』所収,渡邊一郎教授退官記念会,1988年。
- 大保木輝雄『武の素描 気を中心にした体験的武道論』日本武道館,2000年。
- 大森宣昌『武術伝書の研究 近世武道史へのアプローチ』地人館,1991年。
- 岡田一男「江戸時代初期における儒学者の剣術観」『武道学研究』第9巻2号所収,日本武道学会,1976年。
- 笹間良彦『図説日本武道辞典』柏書房,2003年。
- 数馬広二「幕末関東における不二心流についての研究—その特徴と社会的役割—」(『武道学研究』第21巻第3号所収,日本武道学会,1989年。
- 数馬広二「八王子千人同心における甲源一刀流」『武道文化の研究』所収,渡邊一郎先生古稀記念論集刊行会,1995年。
- 数馬広二「武州における禅心無形流と相州大山信仰についての一研究」『武道学研究』第28巻第3号所収,日本武道学会,1996年。
- 加藤純一『柳生新陰流の研究』文理,2003年。
- 加藤純一『兵法家伝書に学ぶ』日本武道館,2003年。
- 菊本智之「松平定信の武芸観とその政策」『武と知の新しい地平—体系的武道学研究をめざして—』所収,昭和堂,1998年。
- 酒井利信『日本精神史としての刀剣観』第一書房,2004年。
- 佐藤泰彦『城下町新発田の剣道史 上巻』刊行発起人会,2007年。
- 佐藤泰彦・酒井一也「新発田藩における直心影流について」『新発田郷土史』第37号所収,新発田郷土研究会,2009年。
- 『三百藩藩主人名事典 第二巻』新人物往来社,1986年。

『三百藩藩主人名事典 第三卷』新人物往来社,1987 年。

『三百藩藩主人名事典 第四卷』新人物往来社,1986 年。

島田梅仙『剣豪 島田虎之助直親』硯山会,1972 年。

下川潮『剣道の発達』大日本武徳会,1925 年。

下中邦彦『日本架空伝承人名事典』平凡社,1986 年。

新村出『広辞苑第六版』岩波書店,2008 年。

須加野征博「近世後期における水戸藩の剣術に関する研究—水府流剣術の成立—」平成 5 年度筑波大学大学院修士課程体育研究科体育方法学専攻修士論文,1993 年。

須加野征博「水戸藩における一刀流についての研究—水府流剣術への合併との関係から—」『武道文化の研究』所収,渡邊一郎先生古稀記念論集刊行会, 1995 年。

杉江正敏「近世における養生思想と身体運動の関連について—松平定信の武芸観を中心として—」『日本武道学研究渡邊一郎教授退官記念論集』所収, 渡邊一郎教授退官記念会,1988 年。

『戦国人名辞典』吉川弘文館,2006 年。

全日本剣道連盟編『剣道の歴史』財団法人全日本剣道連盟,2003 年。

全日本剣道連盟編『全日本剣道連盟所蔵（写）鈴鹿家文書解説（一）』財団法人全日本剣道連盟,2004 年。

全日本剣道連盟編『全日本剣道連盟所蔵（写）鈴鹿家文書解説（四）』財団法人全日本剣道連盟, 2006 年。

高橋進「気思想と歴史」,湯浅泰雄編『気と人間科学』所収,平河出版社,p.77,1990 年。

高山基紀「平山行蔵の武芸観に関する一考察」『武道文化の研究』所収,渡邊一郎先生古稀記念論集刊行会, 1995 年。

『中学校学習指導要領解説 保健体育編』東山書房, 2008 年。

戸川芳郎「気一元論」『東京大学公開講座 50 気の世界』所収,東京大学出版会,p.34,1990 年。

富永堅吾『剣道五百年史』（復刻新版）島津書房,1996 年。

友枝龍太郎「熊沢蕃山と中国思想」『熊沢蕃山 日本思想体系 30』所収,岩波書店,1971 年。

長尾進「熊本における雲弘流に関する研究」『武道学研究』第 21 巻第 3 号所収,日本武道学会,1989 年。

長尾進「試合剣術の発展過程に関する研究—『神道無念流剣術心得書』の分析—」『武道学研究』第 29 巻第 1 号所収,日本武道学会,1996 年。

中林信二『武道のすすめ』中林信二先生遺作集刊行会,1987 年。

中林信二『武道論考』中林信二先生遺作集刊行会,1988年。

中村孝也『新訂 徳川家康文書の研究上巻』日本学術振興会,1958年。

中村民雄『剣道事典—技術と文化の歴史—』島津書房,1994年。

中村民雄「幕末関東剣術流派伝播形態の研究(2)」『福島大学教育学部論集社会科学部門』第66号所収,福島大学教育学部,1999年。

西山松之助『家元制の展開』吉川弘文館,1982年。

西山松之助『家元の研究』吉川弘文館,1982年。

西山松之助『芸道と伝統』吉川弘文館,1984年。

西山松之助『芸の世界—その秘伝伝授—』講談社,1980年。

『沼田市史 資料編2 近世』沼田市,1997年。

堀正平『大日本剣道史』剣道書刊行会,1934年。

前林清和『近世日本武芸思想の研究』人文書院,2006年。

前林清和・佐藤貢悦・小林寛『<気>の比較文化—中国・韓国・日本』昭和堂,2000年。

前村幸芳「天流に関する史的研究—その成立と伝播及び変容を中心に—」平成6年度筑波大学大学院修士課程体育研究科体育方法学専攻修士論文,1994年。

丸山敏秋『気—論語からニューサイエンスまで』東京美術,1986年。

源了圓『型』創文社,1989年。

源了圓『型と日本文化』創文社,1992年。

源了圓『徳川思想小史』中央公論社,1993年。

『村上郷土史』歴史図書社,1974年。

諸橋轍次著『大漢和辞典 卷十』大修館書店,1957年。

柳生巖長『正伝・新陰流』講談社,1957年。

山井湧「陽明学の要点」『中江藤樹 日本思想体系29』所収,岩波書店,1974年。

山下素治『明治の剣術—鉄舟・警視庁・榊原』新人物往来社,1980年。

山根幸恵『鳥取藩剣道史』溪水社,1982年。

山田次朗吉『日本剣道史』一橋剣友会,1925年。

湯浅晃『武芸伝書を読む』日本武道館,2001年。

湯浅泰雄『気・修行・身体』平河出版社,1986年。

湯浅泰雄『日本古代の精神世界』名著刊行会,1990年。

湯浅泰雄『日本人の宗教意識』講談社,1999年。

吉谷修「剣術型の構造と機能に関する研究—武道の文化的特性に関する研究の試論—」『日本武道学研究 渡邊一郎教授退官記念論集』所収,渡邊一郎教授退官記念会,1988年。

綿谷雪・山田忠文編『武芸流派大事典』東京コピー,1978年。

和田哲也「片山流剣術伝書に関する研究—片山家文書における伝書類について—」『日本武道学研究 渡邊一郎先生教授退官記念論集』所収,渡邊一郎教授退官記念会,1988年。

【史料】

赤石郡司兵衛孚祐『斑龍軒覚書』寛政2年(1790),『武道伝書聚英第十二集』所収,宇都宮大学教育学部,1990年。

石垣辰雄『鹿島神伝直心影流極意』直心影流振興会,昭和10年(1935)。

宇成之『大禾一件』原,安永2年(1773)東京長沼正兵衛家蔵。

小笠原源信斎『真之心陰兵法目録』原,寛文10年(1670),小田原市立図書館蔵。

小笠原源信斎『真之心陰兵法免状』原,寛文11年,(1671),小田原市立図書館蔵。

小川棟吉郎『直心影流兵法目録』原,安政2年(1855),小田原市立図書館蔵。

男谷精一郎『武術雑話』天保14年(1843),安政6年(1859)写,『武道伝書聚英第十二集』所収,宇都宮大学教育学部,1990年。

『男谷先生行状録』原,年代未詳,熊本県立図書館蔵。

加藤田平八郎『加藤田平八郎東遊日記抄』写,天保9年(1838),鈴鹿家文書,全日本剣道連盟蔵。

上泉伊勢守信綱『燕飛序』永禄9年(1566),『渡邊一郎先生自筆 近世武術史研究資料集』所収,渡邊一郎先生を偲ぶ会,2012年。

神谷伝心斎『軍法非切書并入唐目録』写,寛文3年(1663),天保5年(1834)写,熊本県立図書館蔵。

河崎藤之丞義追『鞘之内秘伝書』写,年代未詳,鈴鹿家文書,全日本剣道連盟蔵。

川村弥五兵衛秀束『無住心剣辞足為経法集』享保10年(1725)『武道伝書集成・第二集剣術諸流心法論集 上巻』所収,筑波大学武道文化研究会,1988年。

『切紙聞書之辨書』写,文化3年(1806)鈴鹿家文書,全日本剣道連盟蔵。

『剪紙口授書』写,年代未詳,鈴鹿家文書,全日本剣道連盟蔵。

久須美順三郎『直心流伝書剪紙許状』嘉永4年(1851)『武道伝書聚英 第十二集』所収,宇都宮大学教育学部,1990年。

窪田鏐三郎『兵法伝記』原,慶応3年(1867),佐藤泰彦氏蔵。

熊沢蕃山『集義和書』『熊沢蕃山 日本思想体系 30』所収,岩波書店,1971年。

小出切一雲『夕雲流剣術書』貞享3年(1686),『武道伝書集成・第二集剣術諸流心法論集 上巻』所収,筑波大学武道文化研究会,1988年。

斎藤明信『直心影流剣術極意教授図解』井口魁真書楼,明治34年(1901)。

佐藤郡兵衛『靈劍傳解』原, 文政 2 年 (1819), 熊本県立図書館蔵。

『三州遺芳 卷四』年代未詳, 『武道伝書聚英 第十二集』所収, 宇都宮大学教育学部, 1990 年。

『直心影流伝書集』写, 明治 42 年 (1909) 鈴鹿家文書, 全日本剣道連盟蔵。

『直心影流秘書一』写, 年代未詳, 鈴鹿家文書, 全日本剣道連盟蔵。

『直心影流秘書二』写, 嘉永 4 年 (1851) 写本, 鈴鹿家文書, 全日本剣道連盟蔵。

『直心影流秘書三』写, 年代未詳, 鈴鹿家文書, 全日本剣道連盟蔵。

新発田市史編纂委員会『新発田藩史料(1)藩主篇』新発田市史刊行事務局, 1965 年。

『新発田藩月番日記』原, 文政 2 年 (1819), 新発田市立図書館蔵。

『新発田藩月番日記』原, 弘化 2 年, (1845) 新発田市立図書館蔵。

『新発田藩月番日記』原, 安政 4 年, (1857) 新発田市立図書館蔵。

『新発田藩月番日記』原, 慶応 2 年, (1866) 新発田市立図書館蔵。

清水礫洲『ありやなしや』安政 4 年 (1857) 『続日本随筆大成 8』所収, 吉川弘文館, 1980 年。

杉本新次郎『直心影流兵法窮理之卷』原, 文政 3 年 (1820), 小田原市立図書館蔵。

『整斎随筆』原, 年代未詳, 国立公文書館蔵。

高橋弾正左衛門重治『直心正統流兵法免状』写, 天和 3 年 (1683), 『吟味之趣意』所収, 鈴鹿家文書, 全日本剣道連盟蔵。

高橋弾正左衛門重治『稽古法定序并理歌』原, 貞享 3 年 (1686), 東京長沼正兵衛家蔵。

田代正容『直心影流窮理之卷注解秘書』原, 天保 9 年 (1838), 中京大学附属豊田図書館蔵。

千葉周作『剣法秘訣』年代未詳, 千葉栄一郎編『千葉周作遺稿』所収, 櫻華社, 1942 年。

長沼四郎左衛門国郷『直心影流目録口伝書』写, 宝暦 14 年 (1764), 文化 3 年 (1806) 以降写, 鈴鹿家文書, 全日本剣道連盟蔵。

『長沼国郷先生小伝』年代未詳『武道伝書聚英 第十二集』所収, 宇都宮大学教育学部, 1990 年。

『長沼家伝直心影流伝書』写, 享和 2 年 (1802) 以降写, 鈴鹿家文書, 全日本剣道連盟蔵。

『長沼分家伝直心影流伝書』写, 年代未詳, 鈴鹿家文書, 全日本剣道連盟蔵。

長沼秀門武七徳堂『切紙究理秘解弁』写, 天保 4 年 (1833) 写, 熊本県立図書館。

藤川整斎『靈劍略解』原, 安政 4 年 (1857), 東京国立博物館蔵。

武藤七之介『神道無念流剣術心得書』原, 年代未詳, 国立国会図書館蔵。

柳生宗矩『兵法家伝書』寛永 9 年 (1632), 渡辺一郎校注, 岩波文庫, 1985 年。

山崎金兵衛利秀『剣術義論』寛政 3 年 (1791), 渡辺一郎編『武道の名著』所収, 東京コピー 1979 年。

山田次朗吉『鹿島神伝直心影流』一橋剣友会, 昭和 2 年 (1927)。

山田次朗吉『剣道極意義解』一橋剣友会, 昭和 12 年 (1937)。

山田平左衛門光徳『直心正統流兵法目録』写、元禄 7 年（1694）,『吟味之趣意』所収、鈴鹿
家文書、全日本剣道連盟蔵。

山田平左衛門光徳『兵法雜記』原、宝永～正徳年間頃、東京長沼正兵衛家蔵。